信長燃ゆ

下

安部龍太郎

新潮文庫

信長燃ゆ（下）

安部龍太郎

あ35 7

新潮文庫

850

9784101305172

1920193008500

ISBN978-4-10-130517-2

C0193 ¥850E

定価：本体850円（税別）

「王権守護」――甲斐武田家を滅ぼし、さらに勢力を増した織田信長は、いつしか朝廷の禁忌に触れつつあった。ついに信長への離反を決意する前関白・近衛前久。朝廷に身を置きながら、信長と深く結びついてしまった東宮夫人・勧修寺晴子。信長というあまりにも大きい存在に畏怖と動揺を隠せない明智光秀、羽柴秀吉。周到な陰謀が、天下人を追いつめはじめ、すべての意志が本能寺へ結集する。

新潮文庫

安部龍太郎の本

血の日本史
信長燃ゆ（上・下）
蒼き信長（上・下）
下天を謀る（上・下）
冬を待つ城

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

信長燃ゆ

下巻

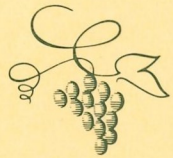
安部龍太郎著

新潮社

信長燃ゆ（下）

安部龍太郎著

新潮文庫



新潮文庫

信長燃ゆ

下巻

安部龍太郎著

新潮社版

7532

目次

第九章　武田氏滅亡……七
第十章　命なりけり……七四
第十一章　恵林寺焼き討ち……一三一
第十二章　富士遊覧……一八〇
第十三章　三職推任……二七〇
第十四章　華麗なる罠……三三五
第十五章　ときは今……三九三
第十六章　見果てぬ夢……四七四
あとがきにかえて……五四四
解説　小和田哲男

〔上巻目次〕

序　章　阿弥陀寺の花
第一章　左義長
第二章　都からの使者
第三章　馬揃え
第四章　晴れの日
第五章　公武相剋
第六章　父と子
第七章　天正伊賀の乱
第八章　余が神である

信長燃ゆ　下巻

第九章　武田氏滅亡

二月三日、織田信長は一門衆や重臣たちを安土城に集めて出陣の下知をした。

「甲斐、信濃への出勢は、以下の通りでございます」

きら星のごとく居並ぶ武将たちの前で、森蘭丸が書状を読み上げた。

「伊那口より中将信忠卿の軍勢五万。飛騨口より金森長近どのの手勢三千。駿河口より徳川家康どのの軍勢三万。関東口より北条氏政どのの軍勢三万。なお上様は諸方の仕置きを終えた後に、七万余騎をひきいてご出馬なされます」

総勢十八万三千余――。

これまで誰も目にしたことのない大軍である。これではいかに精強を誇る武田の騎馬軍団でも太刀打ちできるはずがなかった。

「信忠、近う」

信長は大手の大将に任じた信忠を呼び、秘蔵の一振りを与えた。

「伊賀での信雄の働きぶりは覚えておろう。こたびの戦は、そちの運が開けるかどうかの瀬戸際じゃ」

「重々承知いたしております」

信忠は月代を広々と剃り上げ、豊かなひげをたくわえている。眼光も鋭さを増し、一軍の将にふさわしい気迫に満ちていた。

「敵に数倍する大軍とはいえ、かの国は山深き要害の地じゃ。信玄坊主の遺徳もいまだ生きておろう。くれぐれも侮ってはならぬ」

「ははっ」

「伊那口はまだ雪が深いと聞く。敵が砦を構えてたてこもったなら、無理押しをせず他勢の動きを待て。徳川、北条が甲斐を突けば、信濃の侍どもはかなわぬとみて軍門に下るはずじゃ」

信忠は二十六歳になる。すでに戦の経験も充分に積んでいたが、信長は細々と指示をせずにはいられなかった。

信玄存命の頃におびやかされた記憶が、骨の髄までしみ込んでいるからである。

それに信忠には、この一戦で織田家の後継者たるにふさわしい働きをしてもらわねばならなかった。

「三方から攻め込まれたなら、勝頼は新府城にこもって最期の一戦に及ぶであろう。その時には本隊を諏訪にとどめ、余の到着を待て」

天正三年の長篠の戦いで、武田勝頼は織田、徳川の連合軍に大敗し、名のある重臣たちを数多く討死にさせた。

このために武田氏の勢力は大きく衰えたが、勝頼とて手をこまねいて滅亡の時を待っていたわけではない。

天正五年には北条氏政の妹を後妻に迎え、北条氏との同盟関係を強化した。

天正六年には謙信亡き後の上杉家の相続争いに介入し、上杉景勝に身方することと引き換えに北信濃と東上野をゆずり受けた。

これで甲斐、信濃、駿河の三国と上野、三河にまたがる版図を確保したが、この取り引きには大きな落とし穴があった。

景勝と争った景虎が、北条氏政の弟だったからだ。

勝頼は両者を和解させ、景虎の面目も保つことができると考えていたようだが、翌年三月に景勝が景虎を自刃に追い込んだために、北条氏との同盟が瓦解することになった。

関東口から甲府に攻め込まれる危険に直面した勝頼は、天正九年九月に新府城を築

いて領国防衛の拠点とした。

しかし工事を急ぐあまり、家臣や領民に過重な負担を強いたために、領内には怨嗟の声が渦巻くようになった。

この情勢を見た信長は、調略をもって木曾義昌を身方に引き込み、一気に武田領に攻め入る計略を立てた。

事は思い通りに運び最後の詰めを待つばかりだが、何があるか分らないのが戦の常である。

慎重の上にも慎重を期す必要があった。

「余が越前の朝倉を攻めた時、無二の盟約を結んだ浅井が謀叛し、袋詰めにされそうになったことがあった。また摂津の三好三人衆を攻めた時には、石山本願寺と比叡山延暦寺の謀叛にあい、南北からはさみ撃ちにあった。のう近衛、よもや忘れてはおるまい」

「さようなこともございましたな」

同席していた近衛前久はそ知らぬふりで受け流したが、本願寺と延暦寺を動かして信長を攻め滅ぼす計略を立てたのは前久だった。

都を逃れて本願寺に潜伏していた前久は、法主顕如に働きかけて一向一揆や三好三

人衆、浅井、朝倉、六角まで巻き込んだ信長包囲網を築き上げた。

洛中に孤立した信長は、正親町天皇の勅命をあおいで延暦寺や朝倉義景らと和議を結び、かろうじて虎口を脱したのである。

「ことほどさように人とは表裏あるものじゃ。そちが勝ち戦に乗じて武田の新府城を囲んだ時に、信濃から上杉景勝が、甲府から北条氏政が攻めかかって袋詰めにせぬとも限らぬ。諏訪にとどまって余の到着を待てと申したのは、それに備えてのことじゃ」

「ありがたきおおせ、かたじけのうございます。敵地に馬を進めた後は、早馬をもって日ごとに戦況を伝え、父上のご下知をあおぐ所存にございます」

信忠が深々と頭を下げた。

昨年七月に信長と和解してからは、織田家の世継ぎにふさわしい武将になろうと禁欲的なほど厳重に務めていた。

「すべては伊賀国のごとくせよ。刃向かう者はことごとく斬り捨て、神社仏閣は残らず焼き払え。武田の匂いたりとも、かの国に残してはならぬ」

二人のやり取りを、前久は表情も変えずに聞いている。何を考えているか分らぬのっぺりとした公家面を見ると、信長は次第に腹が立ってきた。

思えば元亀三年の武田信玄の上洛も、この男が陰に回って仕掛けたことだ。

それなのに巧妙に立ち回り、何くわぬ顔でこの場に席を占めている。それをこのまま許しては、己れの沽券にかかわるような気がした。

どうしてくれよう。

こやつの化けの皮を、どうやってひっぺがしてくれようか。

信長の胆はちりちりと煮えてきたが、前久だけにはどうしても手がつけられなかった。

常に本心を見せず、巧妙に立ち回り、つけ入る隙を与えない。

朝廷の権威を一身に背負い、ある時は無害を装い、ある時は思いもよらぬ力を見せつけ、この世のこととは隔絶したような態度を取りつづけている。

たとえ関白になろうと将軍になろうと、朝廷の権威を魔法の杖のようにあやつるこの男の風下に立たされることになる。

それを防ぐためには、朝廷を超えた存在になるしか道はなかった。

「近衛よ、信忠の男ぶりはどうじゃ」

信長は心とは裏腹に快活な声を上げた。

「まことに総大将にふさわしいご器量と拝察いたしております」

「ならば余に同道して甲州に下り、信忠の戦ぶりを見届けるがよい」

「ありがたき幸せに存じまする」

前久はいつものように柳に風と受け流した。

「信忠、近衛公は昨日太政大臣に就任なされた。尊き身でご出馬いただくとあれば、錦の御旗を得たも同じじゃ。武田ごときに遠慮はいらぬぞ」

「まことに、かたじけのうございます」

「内大臣、義満の調べはついたか」

信長は信基に矛先を向けた。

「まだ文書類の確認を終えておりませぬが、おおよそのことは分りました」

信基はこうした質問があることを予想していたのか、懐から一枚の書き付けを取り出した。

「朝廷では白河上皇の頃より院政が始まり、上皇は天皇の上位に立って治政を行なうという先例が確立しました。足利義満どのはこの先例に従って、上皇の座につこうとなされたのでございます」

信基の調査によれば、手順は以下の通りだった。

応永十三年、義満は自分の正妻である日野康子を、帝の仮の母である准母となした。

その二年後には康子の子義嗣を内裏において皇太子と同等の資格で元服させ、皇位

につく道を開いた。

天皇の父となるためのなりふり構わぬやり方だが、廷臣たちに異議をとなえる者はいなかった。

公武の権力を一手に握った義満の力を怖れてのことだが、名分論においても異議をさしはさむ余地はなかった。

というのは南北朝時代の中頃に、室町幕府はこれと同様の策を用いて北朝を維持するという悪しき先例を残していたからだ。

正平七年閏二月、幕府軍に都を追われた南朝方は、北朝の皇族方をことごとく賀名生に拉致して幽閉した。

窮地におちいった幕府は、仏門に入っておられた光厳天皇の末子を還俗させて後光厳天皇としたが、皇位の正統性を保証する三種の神器はなく、上皇から皇位を受禅するための儀式も行なえなかった。

そこで窮余の一策として、後伏見天皇の中宮だった西園寺寧子を仮の上皇となし、後光厳天皇に受禅譲国するという名分をととのえた。

この先例を是とするなら義嗣が皇位につくことを認めるほかはなく、非とするなら北朝の正統性を否定せざるをえなくなる。

それゆえ心ある廷臣たちも、黙り込むしかなかったのだ。

「この先例に照らしても、五の宮さまご即位の後にご尊父さまが上皇となられ、治天の君として朝廷に君臨する名分は立ちましょう。異をとなえる者あらば、この信基がいつでも受けて立ちまする」

信基は一度も前久に目を向けることなく言いきった。

「なるほどさようか。近衛、そちは良き跡継ぎに恵まれおったの」

信長は低く笑うと、全軍に出陣の仕度にかかるように命じた。

本朝で初めて武家政権を打ち立てた源頼朝は、建久四年に富士の裾野で巻き狩りを行なった。

十数万の軍勢で原野を取り巻き、徐々に包囲の輪をちぢめながら獲物を追い込んでいく非情の作戦である。

それから三百八十九年の後、新羅三郎義光以来の源氏の名家である武田氏が、巻き狩りの獲物のように狩り取られようとしていた。

きっかけは木曾義昌の寝返りだった。

朝日将軍義仲の十八代の末孫に当たる義昌は、信玄の代に武田氏に服属するように

なった。

信玄も娘を嫁がせて厚く遇していたが、勝頼の代になると両者の間に隙が生じた。領内の締めつけを強める勝頼に、義昌が反発したからである。

この形勢を察知した信長は、昨年秋から美濃苗木の領主苗木久兵衛に命じて内応工作を進めていた。

武田討伐の後には本領に加えて安曇、筑摩の二郡を与えるという約束を得た義昌は、一月二十五日に弟の上松蔵人を人質に出して織田方に下った。

苗木はこのことを岐阜城の信忠に急報し、信忠は子細を確かめた上で信長に使者を送ったのである。

一方、内通の報は武田家にも達していた。

一月二十七日、義昌の近習茅村左京進が甲州の新府城に駆け込み、事の次第を勝頼の近臣に訴えた。

勝頼はさっそく軍議を開き、翌二十八日に大手の木曾口へ三千騎、からめ手の伊那口に二千騎を向かわせた。

大手の大将は小諸城主武田左馬助信豊、からめ手の大将は勝頼の弟仁科五郎盛信である。

だが信州は冬のさかりだった。

道は馬も通れぬほど深い雪に閉ざされ、弓鉄砲を使うにも手がかじかむほどの寒さである。

これでは進攻はおぼつかないと大手の軍勢が二の足を踏んでいるところに、木曾義昌から弁解の使者が来た。

茅村左京進がどのような讒言をしたか知らないが、当方には武田家に弓引くつもりは毛頭ない、何とぞ穏便の計らいをしていただきたい。

七重の膝を八重に折ってそう訴えた。

これは織田の援軍を待つための時間かせぎだったが、武田信豊はやすやすと信じた。あるいは信じたふりをして体面を保とうとしたのかも知れない。

知らせを受けた勝頼は、二月二日に二万の軍勢をひきいて塩尻まで出陣し、信豊を叱咤して進攻させた。

ところが鳥居峠に待ち伏せた木曾義昌の軍勢に行く手をはばまれ、手痛い打撃を受けて退去せざるをえなくなった。

なす術もなく峠下の村で日を送る間に、織田軍が東山道をひたひたと迫っていた。

下伊那口には織田信忠、滝川一益、河尻秀隆、森長可の軍勢三万、南木曾口には信

長の弟長益、苗木久兵衛らがひきいる二万余騎。

武田の本隊に倍する軍勢が、雪の道をものともせずに信州へと押し寄せて来る。

勝頼はやむなく塩尻から上諏訪の上原城まで退がり、伊那谷を死守する構えを取った。

下伊那口の平谷に小笠原信嶺、下条信氏ら三千余を配し、飯田、大島、高遠の城に人数を込めて後詰めとした。

ところが二月十六日に信忠軍が平谷に迫り、からめ手の清内路峠に回った森長可らの軍勢が退路を断つ構えを見せると、小笠原勢はいち早く降伏した。

飯田城には保科正直を大将とする一千余人がたてこもっていたが、平谷の身方が一戦も交えることなく降伏したと聞き、夜の間に城を捨てて落ちのびた。

大島城には信玄の弟信綱を大将として同じく一千余人が守備についていたが、飯田城が落ちたと知ると足軽、下人たちが武田を見限り、外曲輪に火を放って織田方に寝返った。

このため信忠軍は一兵も損ずることなく十七日に飯田城、翌日には大島城を掌中におさめた。

対する武田軍は、防衛の方針も決められないまま上原城でいたずらに軍議をかさねていた。

勝頼は他の口に敵が迫らないうちに高遠城の盛信と一手になって信忠軍と雌雄を決すると言い、重臣たちは塩尻峠、有賀峠に陣地を築いて敵を待ち受けるべきだと言ってゆずらない。

そうこうするうちに二十七日になり、驚くべき知らせが甲府よりもたらされた。駿河一国を預かる穴山梅雪が、徳川方に寝返ったのである。

穴山梅雪は信玄の甥で娘聟なので、武田一門中でも重きをなし、駿河江尻城にあって一国の差配を任されていた。

ところが、二月二十五日の夜に甲府に人質となっていた妻子を盗み出し、徳川方としての旗幟を鮮明にしたのである。

これを聞いて勝頼も重臣たちも、ただ茫然とするばかりだった。

駿河が敵地となったなら、甲府も新府城も丸裸になったも同じである。日ならずして梅雪を先陣とした徳川軍三万がなだれ込んでくるのは目に見えていた。

かくなる上は新府城にこもって最期の一戦をするしかないと決意し、勝頼は二十八日に上原城を引き払ったが、初めは七千騎ほどもあった軍勢が、新府城に着く頃には千騎ばかりに減っていた。

時に勝頼三十七歳。滅亡の日は目前に迫っていた。

一方、織田信忠は冷静だった。

飯田城、大島城を無血占領し、なだれを打って敗走していく敵を目前にしても、決して深追いしようとしなかった。

すべては信長の指示通りにすべきである。偉大な父の遺訓に背いて滅亡していく勝頼を目前にしているせいか、その思いはひときわ強かった。

こんな時に父ならどうするのか。信忠は常にそう考え、言葉や行動まで信長に似せようと努めた。

鎧や陣羽織も父好みの派手なものを用い、やせて鋭い父の面差しに似せるために食事の量にまで気を配っていた。

そうした努力が実を結んだのか、重臣たちの態度も信長に対するように丁重になったが、信忠の心にはぽっかりと穴があいていた。

父のようになど、なりたくはないのである。

狂ったように人を殺し、家臣たちを平然と使い殺しにするような人生など真似たくはない。

その気持を抑えて外側をつくろえばつくろうほど、空しさはつのるばかりだった。

二月二十九日、高遠城の近くの小原城まで軍勢を進めた信忠は、小笠原信嶺を案内者として敵陣の視察に出た。

高遠城は藤沢川と三峰川にはさまれた高台の上に築かれていた。

川は大地をえぐるように深く、川岸は崖となって切り立っている。攻めるとすれば、月蔵山へとつづく東側の台地に乗り上がるしかなかった。

城の周囲には白壁の築地塀を巡らし、四つ割り菱や風林火山の旗が何十流れとなく押し立ててある。

諏訪大明神の神号を金泥で描いたひときわ大きな旗も、北風に吹かれて鮮やかにはためいていた。

「三峰川の幅はおよそ十二間、深さは四尺と浅うござるが、あの崖を登るのは、なかなか骨が折れましょう」

信嶺が城の南を流れる川を軍扇で指した。

武田方の先鋒を任されながら、織田軍が迫ると一戦も交えることなく降伏した男である。

そのお陰でやすやすと伊那谷に進攻できたのだが、武士らしからぬ節操のなさが、

信忠には面憎く思えて仕方がなかった。

「城は本丸、二の丸、三の丸からなり、曲輪の間には深き空堀をうがっており申す。正面に見えるのが三の丸の追手門で、築地塀から下の曲輪まで五十四間もの高さがござる。ここも容易には攻め込むことはできますまい」

「攻め口は東と見たが」

「さよう。あの月蔵山のふもとから三の丸まで五町ばかりの平地がつづき、侍屋敷となっており申す。あの山に軍勢を押し上げ、高所より攻めかかるのが得策とは存じまするが、敵もこの方面が弱点となることは重々承知しておりますゆえ、三の丸の外に幅十六間、深さ九間もの空堀を巡らし、備えを厳重にしており申す」

「さすがに詳しいな」

「転変常なきが武士の定めなれば、昨日の身方が今日の敵とならぬとも限りませぬ。それゆえ城に招かれた時には、城中の様子を細やかに調べておくのでござる」

信嶺が得意気にひげをなでた。信忠の軍師にでもなったつもりでいるらしい。

「東のほかに攻め口はないか」

「藤沢川を押し渡り、九段木の坂を登ってからめ手門にかかることもできましょうが、ここには逆茂木を植え二重の柵を巡らしておりまする。これを引き倒そうとして敵の

銃撃にさらされれば、身方にもかなりの手負いが出ることでございましょう」

「それほどの切所であれば、そちが先陣となって皆に城攻めの手本を示すがよい」

信忠は冷たく突き放して小原城に戻った。

信嶺を見ていると無性に腹が立つのは、父に気に入られようとして節を曲げた己れを見ている気がするからだ。ところが信忠は、まだそのことをはっきりと意識していなかった。

本陣に重臣たちを集め、城攻めの軍議を開いた。

昨年の伊賀攻めで功のあった滝川一益、蘭丸の兄で武勇の誉れ高い森長可、長可と共に信州攻めの先陣を務めた団忠直らが甲冑姿で席についた。

信忠は老練の一益に軍議を進めさせ、父にならって黙って意見を聞くことにした。

「それでは小笠原どの、城の様子について案内いただきたい」

一益にうながされて信嶺が高遠城の絵図を広げた。

曲輪の配置ばかりか、門ややぐらの構えまで詳細に描き込んだ図面だった。

仁科五郎盛信を大将とする武田勢は、士分の者千余人、足軽、雑兵二千余人である。対する信忠軍は五万にのぼるとはいえ、高遠城は他国にまで聞こえた名城だけに攻め落とすのは容易ではなかった。

「先ほど岐阜中将さまにも申し上げましたが、城の東の台地から攻めるのが常道でございましょう。されど敵がからめ手門の橋を落としてたてこもったなら、九間もの空堀をよじ登らざるをえなくなります。たとえ橋を落とさずとも、からめ手門を破るのは容易ではございますまい」

信嶺は絵図を指しながら説明を終えた。

「この山へ登る道はござろうか」

一益が月蔵山を指してたずねた。

「藤沢川をさかのぼって行くことができまするが、敵の意表を突くには松島から片倉へと迂回し、尾根伝いの道を下がって来るべきと存じまする」

「うむ。まずはこの山に陣取り、敵の出方に備えながら北と南の坂から人数を押し上げるべきと存ずるが、方々の存念をお聞かせいただきたい」

城を攻めるのにそれほどいくつもの策があるわけではない。軍議は一益の提案通りと決し、四半刻のうちに落着した。

問題はどの方面にどれだけの人数を配し、誰に割り当てるかである。

「中将どの、いかが計らいましょうか」

一益が案じ顔で決定を乞うた。

「月蔵山へは長可が行け。軍勢は一万もあればよかろう。南からは滝川、北からは小笠原、団、河尻、毛利が向かえ。西の追手門へは水野をさし向け、余はこの山のふもとに陣を張って後詰めをする」

信忠が三峰川の南に描かれた白山という小山を指した。

さっそく諸将に持ち場につくように命じたが、信忠はあくまで慎重である。

近くの寺の僧を使者として、敵に降伏を呼びかける書状を送った。

「信玄の時より勝頼に至りて、毎度表裏を構へ神慮に背き、信長に対し不義の擬迫唯これに依る。今度退治を加ふべきため、討手として信忠当国に向つて進発せしむる処に、木曾、小笠原、下条以下その外信州一国中の士卒、ことごとく降参せしむ。ことに飯田、大島自落せしむる処に、その城、今に堅固に相拘ゆる段、まことに神妙の至なり。勝頼は昨日諏訪を引き退くの処、小山田屋裏の者どもを初めとして、討つて出すべきの由申し来る。しかればすなはち誰を頼み、いつまで籠城すべきや。早速出仕をとげ、忠節を抽んづるにおいては、所領の儀はよろしく所望に任すべし。まづ当座の褒美として黄金百枚出すべきものなり」

小山田家の者が内通していると告げたのは、敵の結束を乱すための調略である。

たとえ不調に終わったとしても、使僧に城内の様子をさぐらせることができる。そ

う考えながら待っていると、一刻ばかりで返書があった。

「芳札披閲、その意を得候。仰せを蒙むる如く、信玄以来、信長に対し遺恨重畳す。これによつてやうやく雪も融くれば、尾濃の間に勝頼干戈を動かし、鬱憤を散ずべく存じ詰められ候処に、遮りて当国御発向、啐啄同時に候。当籠城衆の儀は、いつたん一命を勝頼の方へ武恩のために報じ候。不当不義の臆病なる輩に準ふべからず。早々御馬を寄せらるべく候。信玄以来鍛錬の武勇の手柄の程、御目にかけるべく候。恐々謹言」

宛名は織田中将ではなく城ノ介である。このことといい文面といい、無礼きわまりない返書だった。

「使いの僧はどうした」

書状を持参した近習にたずねた。

「それが手痛く扱われ、話を聞くこともできませぬ」

不義の使いをした罰として、耳と鼻をそぎ落とされたという。

激怒した信忠は、三月二日早朝を期して城攻めにかかるように全軍に下知した。

三月一日午の刻、織田軍は高遠城包囲の布陣を終えた。

東の月蔵山の中腹には森長可の軍勢一万、西の追手門の正面には水野和泉守の軍勢七千、南の勝間村には滝川一益軍五千、北の藤沢川ぞいには小笠原信嶺を先陣として河尻秀隆、団忠直らの軍勢一万。

都合三万二千の軍勢で隙間なく取り囲み、白山のふもとには信忠が二万の軍勢をひきいて着陣した。

色鮮やかな旗や馬印が十重二十重と連なり、野山に錦を敷き詰めたように華やかである。

明朝を期して総攻撃にかかることは城中からも手に取るように分ったが、仁科五郎盛信は落ち着いたものだった。

小袖の上に熊皮の袖なし羽織を着たままで、愛犬の戸倉とたわむれていた。

伊那富士と呼ばれる戸倉山に狩りに行った時に拾ってきた犬だが、生まれた時から飼われているように盛信になついていた。

拾った時には両手で包み込めるくらい小さかったが、三年たった今では後足で立つと盛信の肩に前足が届くほどの大きさになっていた。

狼の血でも引いているのか、体は灰色で三角形の精悍な顔つきをしている。

「戸倉、今度はこっちだ」

盛信は熊の干肉を高々と放り上げた。

戸倉は瞬時に身をひるがえし、地面に落ちかかる干肉にぱくりと飛びついた。

昨年暮れに戸倉山に人喰い熊が現われた。

土地の者たちが山おやじと呼んで怖れる巨大な熊が手負いとなり、冬眠に入れないまま村を襲うようになった。

人など一撃で倒すほどに狂暴で、山での生き方を熟知しているので追跡の痕跡さえ残さない。地元の猟師たちも何度か山狩りをしたが、まんまと裏をかかれるばかりである。

その話を聞いた盛信は戸倉と共に雪山に分け入り、十日間の追跡の後に仕とめた。

執拗に追いすがる戸倉に焦れた山おやじが、待ち伏せして反撃に出たところを、盛信が十文字槍で倒したのである。

四十貫ちかい巨体を村までかつぎ下ろし、猟師たちに下げ渡したが、毛皮と胸の肉叢だけはもらうことにした。

毛皮で袖なし羽織を作り、肉は干して保存食としたが、もはや明日までの命である。次の狩りで使おうと思っていた干肉も、すべて戸倉に食べさせることにした。

戸倉は盆と正月がいっぺんに来たような喜びようで、盛信の手から干肉が離れると

飛ぶように走っていく。

最初はぺろりと平らげ、尻尾をちぎれんばかりにふって次を催促したが、五、六切れ食べると一度に味わうのはもったいないと思ったらしい。

堀ぎわに植えた桜の根元に穴を掘って埋めるようになった。

「さすがは若殿の相棒でござるな。籠城と知って兵糧を蓄えておるのでござろう」

小山田備中守が本丸御殿の縁側から声をかけた。

盛信が右腕と頼む歴戦の侍大将である。

「そんな知恵があるものか。明日になればどの木の根元に埋めたかさえ忘れているであろう」

盛信は干肉を投げるそぶりをした。

戸倉はぴくりと耳を動かしただけで、走り出しはしなかった。干肉が手を離れていないことを瞬時に見抜いたのだ。

「ほう、聡いな」

盛信は一計を案じ、干肉と茶色の香袋を同時に投げた。

戸倉は地面を蹴って疾走し、香袋に飛びついた。

「ほら、みろ。干肉と香袋の見分けもつかぬ」

盛信は笑ったが、戸倉は肉と間違えたのではなかった。主人に返すために、香袋を先に取ったのである。

「若殿、先ほどの城ノ介の書状のことでござるが」

備中守がかたわらに片膝をついた。

「当家に内通者がいると記しておりましたが、ご詮議なされずともよろしゅうございますか」

「そちは、家臣を疑っておるのか」

盛信が真っ直ぐに備中守を見た。

眉が濃く瞳の大きなふくよかな顔は、父信玄によく似ていた。

「そうではございませぬが、飯田城、大島城とも自落いたしましたゆえ、城中には疑心暗鬼におちいっている者がおりまする。それを払うためにも、ご詮議なされるべきかと」

「不要じゃ。そのようなことをすれば、城ノ介の策に落ちるようなものではないか」

「ただ今、小山田大学さまが着到なされました」

取り次ぎの小姓が告げた。

やぐら門まで出てみると、二の丸の馬場に主従五騎が控えていた。いずれの甲冑も

返り血にぬれ、馬の鞍にはふり分け荷物のように首を二つずつぶら下げていた。

「殿よりの使いで参上いたしました。これは手みやげがわりでござる」

大学が生首二つをどさりと放った。

備中守の弟で、武田勝頼の槍の師範を務めている。

「杖突峠を越えた所で敵の物見と行き合い、血祭りに上げたのでござる」

「よう来た。使いのおもむきを述べよ」

「殿は新府城にて最期の合戦をするとおおせられ、一昨日上原城を引き退かれました。急ぎこの城を引き払い、新府城にて一手になるようにとのご下知でございます」

「それはできぬ」

盛信は即座にこばんだ。

「藤沢筋には敵の旗は見えませぬ。城中にかがり火を灯し、夜の間に城を抜ければ、難なく新府城へ戻れましょう」

「穴山梅雪までが寝返ったとあっては、もはや勝ち戦は望めまい。飯田、大島と敵の旗も見ぬうちに自落し、今またこの城まで明け渡すようでは、武田家末代までの恥じゃ。私がこの城にある間は、藤沢筋へは一兵たりとも敵を通さぬ。敵の旗が杖突峠を越えたなら、この盛信はすでに討死にしたものと思し召すよう兄上に伝えてくれ」

「さすがは五郎どの。よきお覚悟でござる」
大学が膝を打って笑い出した。
かなたにそびえる駒ヶ岳まで届きそうな、からりとした笑い声である。
「ならばそれがしも、この城にてお供をいたしまする」
「そちは使いじゃ。戻らねばならぬ」
「このようなおおせもあろうかと、殿の許しをいただいてまいりました。新府への使いは、この者たちにいたさせまする」
「大学、よう言うた。そちがいてくれれば千人力じゃ」
備中守が感涙に目をうるませている。歴戦の侍大将も、初老にさしかかって涙もろくなっていた。
「早々に戦評定を開く。皆を大広間に集めよ」
盛信は残りの干肉を一度に天に放った。
おとなしくうずくまっていた戸倉が、耳をぴんと立てて飛び出して行った。
大広間には二十人ばかりの重臣たちが集まった。
車座の中には大島城から逃れてきた武田逍遥軒信綱や、木曾口から引き揚げてきた今福民部少輔らの姿もあった。

「今しがた、兄上の使いとして小山田大学がまいった」
盛信は勝頼の口上を皆に伝えるように大学に命じた。
「聞いての通り、兄上は新府城に引けと下知されておる。私はこの城を枕に討死にすると決したが、武田家の厚恩に報いるために兄上と行動を共にしたいと望む者もおろう。遠慮はいらぬゆえ、この場で申し出てもらいたい」
しばらくの沈黙があり、武田信綱が声を上げた。
「わしは当家の墳墓の地を守りたい。新府へ行かせてもらう」
信綱は信玄の弟で武田家の重鎮である。彼に従って新府へ行くという者が五、六人名乗り出た。
麾下の軍勢は五百余。三千しかいない籠城勢にとっては痛い欠落だが、盛信は引き止めようとはしなかった。
「若殿、このようなことをなされては」
「これでよい。残った者はすべて私と共に死ぬ覚悟を定めた者たちだ。心おきなく戦うことができる」
頼もし気に皆を見回し、城の絵図を広げて守備位置の指示をした。
追手門前の殿坂口には小山田大学、諏訪勝右衛門ら二百。

大手にあたる東の口には原隼人佐、小幡因幡守ら精兵五百。
南の法堂院曲輪口には今福民部、渡辺金太夫ら三百。
二の丸、三の丸には残りの千五百余を配し、盛信と小山田備中守が指揮を執ることにした。
兵の配分といい人選といい、現状で考えうる最良の策である。
絵図の上に記された布陣を見て、備中守ははらはらと涙を流した。
「ああ、亡き殿は何ゆえ……」
勝頼ごときを武田家の跡継ぎにしたのか。盛信に家を託していれば、信長に後れを取ることなど絶対になかったはずだ。
そうした無念は重臣たちにもある。だからこそこの城で討死にしたいと望んだのだった。
「敵は明朝攻め寄せて来よう。今宵は酒などくみ交わし、ゆるりと休むがよい」
桜の時期にはまだ早い。今年の花を見られぬことだけが、盛信には心残りだった。

三月二日寅の刻、織田軍が動いた。
勝間村に布陣していた滝川軍の一隊五百人ばかりが、暗闇にまぎれて三峰川を押し

渡り、歳の神坂を登って攻め寄せた。
攻撃開始は卯の刻と定められている。だが、これだけの小城に三万余の軍勢で攻めかかったなら、たちどころに落ちて手柄を立てる暇もあるまい。
そう考えたはやり武者たちが、抜けがけの功名をねらったのである。
ところが城方ではいち早くこの動きを察知していた。
法堂院曲輪の守りについていた渡辺金太夫は、姉川の合戦では徳川方として戦い、信長から直々に感状をたまわるほどの働きをした武辺者である。
敵がこうした動きに出ることを予想し、坂の上に不寝番を置いていた。
その者からの知らせを受けると、百人の家臣に三間半の長槍を持たせ、坂の上に身を伏せて待ち受けた。
歳の神坂は高さ七十間もの断崖に作られた細い道で、一人がやっと通れるほどの幅しかない。
滝川勢はおぼろな月明かりを頼りに、巣穴に向かう蟻のように一列になって登って来た。
金太夫らは敵をぎりぎりまで引きつけ、頭上からいっせいに突きかかったからたまらない。

敵は城中にこもっていると油断しきっていた滝川勢は、長槍に突き立てられ、なす術もなく三峰川に叩き落とされた。

防戦しようにも足場が狭く、退却しようにも後ろの身方が邪魔になって、先陣の五十人ばかりが切り立った崖から次々と転落していった。

歳の神坂で合戦が始まったと知ると、月蔵山のふもとに陣を敷いていた森長可は、後れを取ってはなるまじと三千の軍勢をくり出した。

小勢を相手に戦う時に、敵身方も分明ならぬ暗夜に大軍をくり出すのは愚の骨頂である。

だが二十五歳の長可は、武田勢との初めての合戦に度を失うほどはやり立っていたのだった。

東の口は高遠城の唯一の弱点である。

それを補うために、三の丸の外側には幅十六間、深さ九間の空堀を掘り、鉄砲狭間を開けた堅固な塀を巡らしてあった。

森勢は空堀の橋を渡って一番乗りの功名を上げようと、先を争って殺到した。

この方面の指揮を任された原隼人佐、小幡因幡守らは、堀ぎわまで敵を引きつけ、合図とともにいっせいに鉄砲を撃ちかけた。

織田方の先陣はたまらず退却しようとするが、後方の身方に押されて身動きがとれない。やむなく空堀に飛び込む者が続出したが、身方の槍に貫かれて絶命する者も少なくなかった。

堀ぎわで鉄砲を撃ちかけている間に、後方の城兵たちは火矢を用いた。

火薬をまぶした松脂を矢尻にからめ、火の玉と化した矢を敵の後陣に何百本となく射込んだ。

敵は三千の大軍だけに、当たらぬものは一本もない。鎧に突き立った矢を引き抜いても、松脂がこびりついて燃えつづけるので、蜂の巣をつついたような騒ぎになった。

後陣からくずれることを裏くずれと呼ぶ。先陣を支援するべき後ろの備えがくずれては、組織的な戦闘など望むべくもない。

頃合いやよしと見た原隼人佐ら三百騎は、からめ手門を開いて打って出た。

馬上槍を低く構えた武田の騎馬軍団が、混乱をきわめる敵の真っ只中を切り裂いていく。

織田方の足軽たちは槍に突かれて逃げ回るばかりで、狼に追い立てられる羊も同然である。

「ええい。あれしきの小勢、中に取り込めて討ち取ってしまえ」

森長可は新手の軍勢をくり出すが、身方が邪魔になって思うように動かせない。自慢の鉄砲隊も、混戦の中では有効に使えなかった。

すでに夜は白々と明けている。

森軍の思わぬ苦戦を見た藤沢川ぞいの織田方は、九段木の坂をよじ登って武田方の側面を突こうとした。

逆茂木を植え二重の柵を巡らした坂を、河尻秀隆、団忠直らの軍勢が小笠原信嶺を先陣として攻め登る。

その数一万余人。引き綱をかけて柵を引き倒し、竹束を押し立てて黙々と登って来る。

三の丸からさかんに鉄砲を撃ちかけるが、竹束にはね返されて空しく弾け飛ぶばかりだった。

「門を開けよ。出陣じゃ」

盛信は十文字槍を手に、ひらりと馬にまたがった。

この日の盛信の出立ちたるや、絵巻物から抜け出たように鮮やかだった。

仁科家重代の金小札の鎧をまとい、信濃藤四郎吉光の二尺七寸の太刀をはき、一間半の十文字槍を小脇にたばさんでいた。

十文字槍とは、穂の根元に十文字形に枝をつけたものである。枝は両刃なので、突いても引いても敵を倒すことができる。

だが槍身が重く進退の自由が利きにくいので、よほど膂力のある者でなければ使いこなせなかった。

盛信はこの槍をやすやすとふり回し、小山田備中守ら三百余騎を従えて、九段木坂を登って来る敵に攻めかかった。

先陣は真っ先に織田方に寝返った小笠原信嶺の手勢二千である。

この変節漢どもが敵を下伊那口に引き込まなければ、かくも苦しい立場に追い込まれることはなかった。

その無念を晴らすべく、盛信以下鬼の形相で攻めかかった。

小笠原勢は竹束の隙間から鉄砲を撃ちかけてくるが、足場が悪くねらいが定まらない。盛信らは飛びくる銃弾をものともせずに坂を駆け下り、敵の備えを斬りくずしてさっと引いた。

竹束の楯を失った小笠原勢に、三の丸から息つく間もなく鉄砲を撃ちかける。敵があわてて竹束を押し立てると、盛信らが再び槍を突き立てて攪乱する。

これでは家臣をむざむざ失うばかりだと見た小笠原信嶺は、陣太鼓を打ち鳴らして

先手の陣を左右に分け、五百騎ばかりをひきいて真一文字に坂を駆け登った。

盛信の姿は遠目にもそれと分るほど際立っている。卯の花おどしの鎧をまとった信嶺は、盛信と組み合ってひと息に雌雄を決しようと馬を寄せたが、十文字槍に突き立てられ、かわしきれずに落馬した。

これを見た河尻秀隆は、藤沢川を大きく迂回して台地に押し登り、盛信勢の横手から突きくずそうとした。

東の口で森勢を追い散らしていた原隼人佐は、この形勢にいち早く気付き、わずか五十騎ばかりで敵の中に斬り込んでいった。

白兵戦は消耗戦である。

前線に次々と新手をくり出し、相手の疲れに乗じた方が勝ちを制する。

だが今日を限りと思い定めた武田勢と、勝って当然の戦をしている織田方とでは、一人一人の気構えがちがう。

十倍もの大軍を擁する織田勢は、窮鼠に手こずる猫のように次第に退き色になっていった。

織田信忠の胃はシクシクと痛んでいた。

滝川軍の抜け駆けによって始まった戦は、二刻ちかくたっても何の進展も見られない。武田軍は城から打って出て、一歩も引くことなく戦っている。

十倍もの軍勢に攻められながら、互角どころか押し気味に渡り合っているのである。常識では考えられない光景だった。

(馬鹿な……、こんなことがあってたまるか)

信忠には一瞬一瞬が針のむしろに感じられ、胃が絞り上げられるように痛んだ。

敵は三千と見せかけながら、思いもよらぬ奇策を用いて人数を補充しているのではないか。

高遠城は囮で、今にも武田の本隊が四方から攻め寄せて来るのかも知れぬ。

神業と評された信玄の兵法に対する怖れが、土壇場でそんな幻影を抱かせた。

不安や怖れは将兵の一人一人にもある。

もし今どこかで狼煙が上がり、千か二千ばかりの軍勢が背後から攻めて来たなら、織田軍はなだれを打ってくずれるかも知れなかった。

(落ち着け。落ち着け)

信忠は城の絵図をにらみながら平常心を保とうとした。

これまで戦に出たことは何度もある。だがいずれも織田家の宿老に後見されてのこ

とだ。そんな戦とはくらべものにならない重圧が、ぎりぎりと信忠の肩にのしかかった。

「申し上げます」

赤地に黒の揚羽蝶を描いた旗を背負った兵が、本陣に飛び込んで来た。

揚羽衆と呼ばれる使い番である。

「ただ今東の口で、森長可どのが後詰めの兵二千を出されました」

「団忠直どのの軍勢は、九段木の坂下まで退いております」

「殿坂口の水野勢、苦戦中」

「歳の神坂の滝川軍一千余人、上流より東の口に迂回しております」

次々と入ってくる知らせは、苦戦を告げるものばかりである。

ここは一気に本隊を投入して力押しにするべきか。それとも兵を引いて攻め方を変えた方が得策なのか。

迷った信忠は、滝川一益を本陣に呼び寄せた。

「それがしなら、兵を引いて息をつがせまする」

一益の返答は明快だった。

甲賀忍者を駆使して大名にまで成り上がった五十八歳になる老練の武将である。

戦の駆け引きには、織田家中でも一、二を争うほどたけていた。

「敵は城を枕に討死にと覚悟を定めた者ばかりでございます。このような相手を力攻めにすれば、死にもの狂いで向かってくるゆえに、思わぬ痛手をこうむることがございます。されどいったん間をはずせば、相手も冷静さを取り戻し、荒らぶる憑き物も落ちて、勢いも細るのが戦の常でございます」

敵を死地に追い込んで死にもの狂いにさせないために、必ず逃げ道を開けておくのが兵法の常道である。いったん兵を引いて、城方に生きる道を開けてやってはどうか。

一益はそう進言した。

「何ゆえ敵が討死にと決していると分るのじゃ」

「昨夜城から五百ばかりの兵が抜け、藤沢筋を落ちていきました。仁科五郎どのが、抜けることを許されたのでございましょう。それをこばんで城に残ったからには、死を決しているとしか思えませぬ」

「うむ。確かに……」

人の気力はそれほど長くはつづかない。間をはずせば急に怖気づくこともあるが、死は必定と思い定めているのなら、むざむざ休息を与えることにもなりかねなかった。

（どうする。こんな時に父上ならどうなされる）

信忠はめまぐるしく考えを巡らした。

信長も力押しばかりを用いたわけではない。不利とみると素早く兵を引き、態勢をととのえ直して敵に痛打を与えた。

そうした当意即妙の用兵ができたからこそ、戦国の世を勝ち抜いたのだ。

（やはり、無理押しは禁物かも知れぬ）

心がそちらに傾きかけた時、

「申し上げます」

殿坂口の水野和泉守から使者が来た。

「ただ今、東の口の身方の備えが乱れ、立て直しかねております。敵は小勢ゆえやがて疲れはいたしましょうが、ここはいったん兵を引いて陣容を立て直すべきかと存じまする」

迷いを見透したような注進に、信忠はカッとなった。いったん下した総攻撃の命令を引っ込めては、総大将の面目は保てない。

どんな犠牲を払ってもひと息に攻め落とそうと胆を決めた。

「これしきの小城にかくも手間取るとは何事じゃ。ひと押しに押しつぶせ」

信忠は槍を取って先頭に立ち、三峰川をさかのぼって東の口を目ざした。

漆黒の馬に紅の房をかけ、白地金襴の母衣を背負い、赤地に金泥で木瓜の紋所を描いた旌旗を押し立てて真っ先に駆けていく。

信忠のまわりを馬廻り衆千余人が固め、その後から二万人ちかくがおっ取り刀で後を追った。

幸い滝川軍の別動隊が崖を登って東の口に出る道を切り開いている。その後をたどって、仁科盛信、小山田備中守らが指揮する軍勢の正面に出た。

両軍の総大将がわずか三町ばかりの近さで対峙したのである。

信忠にも盛信にも、互いの顔がはっきりと見えた。

「あれが信玄坊主の小倅じゃ。者どもつづけ」

信忠は愛馬の鐙をひと蹴りし、身方を押し分けて突き進んだ。

「城ノ介めが。目にもの見せてくれる」

盛信も十文字槍をふるって勝負を挑もうとしたが、織田軍に行く手をさえぎられて果たせなかった。

何しろ敵は十数倍である。信忠自ら出陣したと知って勢いづいた織田方に押しまくられ、身方は次々と討ち取られていった。

「若殿、潮時でござる。城中に引かれませ」

小山田備中守が手勢をひきいて殿軍を務めた。

武田軍の退却につけ入って三の丸に攻め込もうとする敵を、橋のたもとに踏みとどまって追い返している。

最後に備中守が三の丸に引いたのを確かめると、五十人ばかりの家臣たちは槍先をそろえて敵の中に駆け込み、さんざん暴れ回った末に討死にした。

三の丸のからめ手門には、箱型の虎口が設けてある。

城門から打ち入った敵を箱の中に封じ込め、四方から弓、鉄砲をあびせるようにしたものだ。

だが小笠原信嶺からこの備えがあることを聞いている織田軍は、梯子をかけて城門の屋根に上り、待ち伏せた武田勢に雨あられと鉄砲を撃ちかけた。

からめ手門を破られては、追手門を固めている意味がない。

殿坂口で水野勢をくい止めていた小山田大学らは、三の丸を捨てて二の丸へと退却した。

同じ頃、法堂院曲輪を守っていた渡辺金太夫らも一人残らず討死にし、残る武田勢はわずか五百ばかりとなっていた。

三の丸が落ちると、二の丸の命運は尽きたも同然である。

仁科盛信以下五百余人は早々と二の丸を放棄し、本丸にたてこもって最後の抵抗を試みた。

本丸は東西二十八間、南北二十六間。

千坪にも満たない狭い曲輪で、中央には三棟からなる本丸御殿が建ち、周囲に白壁の土塀を巡らしてあった。

織田方の追撃は短兵急だった。

数千人が我先にと空堀に飛び込み、用意の梯子を使って次々と塀を乗り越えてくる。

武田勢は弓、鉄砲で防ごうとするが、矢も弾も間に合わないほどの人数である。

そうしている間に信忠自身がひきいる一手が突入し、互いに刀をふるっての乱闘となった。

本丸御殿には、百人ばかりの女や子供がいた。

夫や父と共に戦うことを望んだ者たちで、かなわぬまでも弓や薙刀を取って敵に立ち向かった。

中でも諏訪勝右衛門の妻花子は、紺糸おどしの鎧をまとい、九尺ばかりの薙刀をふるって敵七、八人を斬り倒したが、ついに力尽き、懐剣を喉に突き立てて自害した。

この働きに励まされた武田勢が、死に花咲かせよとばかりに敵中に飛び込み、得具

足を手に狂い回った。

盛信らは一人でも多くの敵を道連れにしようと、主殿の大広間にこもって戦いつづけた。

鎧の草摺を引きちぎって身軽になり、蔀や戸を楯に取って攻め寄せる敵を突き伏せる。

大広間正面の築山に登ってこの形勢を見た信忠は、

「槍では無理だ。刀術にすぐれた者を斬り込ませよ」

声高に命じた。

盛信らの戦いぶりはすさまじく、織田方の斬り込み隊を二度三度と押し返した。

「長可、上から攻めよ。屋根を引き破って鉄砲を撃ちかけるのだ」

家臣たちの不甲斐なさに業を煮やした信忠は、刀を抜いて大広間の縁側に飛び上がった。

自ら蔀を引き落とし、大広間に斬り込んだのだからたまらない。近習たちは血相を変えて信忠を取り巻き、さらうようにして築山まで連れ戻した。

「短慮は禁物でござる。ここは我らにお任せあれ」

そう叫ぶ近習を、信忠は無意識に斬り捨てていた。興奮のあまり、自分でも何をしているのか分らなくなっていた。

盛信は不思議なくらい落ち着いていた。

今朝から次々と討死にしていく家臣たちを見ているうちに、生死を超えた鎮まった境地に達していた。

ここにこうして在ることが無性にありがたい。この世の何もかもが際立って美しい。躍り上がりたくなるような心の弾みを覚えながら、群がる敵と斬り結んでいた。

「若殿、もう充分でござる。雑兵ばらに討ち取られるのもいかがかと存ずるゆえ、奥にて腹を召されるがよい」

備中守の声も愉しげに弾んでいた。

「殺すも仏、殺されるも仏じゃ。私は最後まで戦って死にたい」

「ならば、お供つかまつる」

備中守が盛信の後ろをかばって背中合わせになった。

鎧を結び合わせたようにぴたりとひとつになり、敵の刃を右に左に打ち払い、隙を見ては喉元めがけて突きを出す。

並はずれた強さにたじろぐ織田勢をかき分け、生き残りの身方十数人を集めて一手になった。

その時を待ち構えていたように、頭上で数十挺の鉄砲が火を噴いた。
屋根に上がった森長可らが、瓦や板を引きはがしてねらい撃ちしたのである。
十数人は兜の目庇を下げ、ひしと身を固めて盛信を守ろうとするが、至近距離からの銃撃になす術もなく倒れていく。
「若殿、今のうちにご自害を」
小山田大学が床に槍を突き立てて体を支え、盛信の楯となった。
備中守もその槍に取りすがり、くずれ落ちそうな体を必死に支えている。
「許せ。私は戦って死にたいのだ」
盛信はたった一人で敵の中に斬り込んだ。
大将首を取ろうと色めき立った織田勢が、我先にと斬りかかってくる。一人二人はかわしたが、いつの間にか肩口を深々と斬り割られていた。
とどめとばかりに突きかかる敵を、黒い影がはばんだ。どこにひそんでいたのか、戸倉が敵に飛びかかり、喉笛を喰いちぎったのだ。
だが、すぐに横腹を斬り上げられ、盛信に折り重なるように床に落ちた。
「ありがとう、戸倉。今日の獲物は、山おやじより手強かったな」
盛信は腕を伸ばして戸倉を抱え込んだ。

三月二日辰の刻、惜しむべき若者の命がひとつ、桜の季節を待たずに黄泉の国へと旅立った。
雪の駒ヶ岳が、ひときわ美しく空に映える日のことだった。

つきに見放されるということが人にはある。
やることなすこと裏目に出て、挽回しようと焦れば焦るほど深みにはまっていく。
今の武田勝頼がそうだった。
わずか一月前には二万の大軍をひきいて意気揚々と信濃に出陣したものだが、今では多くの家臣たちが逃げ去り、残っているのは三千にも満たない。
たったこれだけの人数で新府城にたてこもり、織田、徳川、北条の連合軍十八万余を迎え撃たなければならないのである。
（なぜだろう。どうしてこんなことになったのか）
勝頼は何度も自問したが、どうしても理由が分らなかった。
結果を見れば、敗因は歴然としている。
木曾が裏切り、小笠原が寝返り、穴山梅雪までが敵方についたからだが、どうしてあの者たちがこれほどやすやすと節を曲げるのか、勝頼には理解できなかった。

築城なったばかりの新府城での新年の祝いには三人とも顔を出し、生涯忠誠を尽くすと誓ったばかりなのだ。

勝頼も手厚くもてなし、領国経営の方針について充分に説明した。

土屋十兵衛（後の大久保長安）を金掘り奉行に任じ、新しい採掘法によって金を増産する目途も立ったので、来年からはこれまでのように年貢の負担を強いることはない。

そのことを細かい数字を示して説明すると、誰もが称讃の声を上げ、我先にと協力を誓ったものだ。

それなのにこの体たらくはどうしたことか。

勝頼は、本丸御殿の真新しい天井を見つめて悶々としていた。

三月二日の夜のことだ。

二月二十八日に諏訪の上原城を引き払った勝頼は、その日のうちに新府城に入り、大急ぎで籠城の仕度にかかった。

新府城は甲府の西四里ほどの所にある平山城である。西は七里岩と呼ばれる釜無川の絶壁、東は塩川の深い谷に守られ、ふもとから山頂まではおよそ四十丈の高さがある。

勝頼はこの天然の要害に昨年の二月から新しい城を築き始めた。

普請奉行は築城の名手と言われた真田昌幸で、織田、徳川軍の進攻に備えて縄張りを広々と取り、家臣たちの屋敷まで移して長期の籠城戦に耐えられるようにした。

そうせよと進言したのは穴山梅雪なのである。

「駿河一国はそれがしが死守しまするゆえ、殿は信濃方面から攻め入る敵に備えていただきたい」

せき立てるように勧めたのは、自分を甲府から遠ざけて寝返るための布石だったのか……。

勝頼は眠れないまま何度も寝返りを打った。

もう生きる道はないかも知れぬという不安に、胸の鼓動が速くなっている。寝所は冷えきっているのに、べっとりと寝汗をかいていた。

「誰か。誰かある」

宿直の侍女に命じて酒を運ばせ、胸の不安とともにあわただしく飲み込んだ。

まだ策はある。新羅三郎義光以来五百有余年もつづいた源氏の名家が、こんなに呆気なく潰えるはずがないではないか……。

「諏訪を呼べ」

諏訪の局はいつものように足早にやって来た。乳母として勝頼を育て上げた六十ば

かりの侍女で、心を許せる数少ない相手だった。
「北の方はどうしておる」
「床に伏しておられますが、寝つけないご様子でございます」
「ならば」
ここに呼べと言おうとして思い直した。
きっと先の不安に眠れないのだ。こんな夜ふけに身仕度をして来させるよりは、こちらから訪ねたほうがよかった。
「しばし物語などしたい。案内せよ」
諏訪の局が灯りを低くかざして先導した。
闇に包まれた長い廊下が奈落につづく道のように見えて、勝頼はふと足がすくんだ。
北の方の寝所もひっそりと静まっていた。
昨年末に引っ越したばかりなので、調度も充分にはととのっていない。広いばかりの部屋に、北の方は十数人の侍女にかしずかれて暮らしていた。
「よい。そのままでよい」
あわてて起きようとする北の方を制し、勝頼は枕辺にあぐらをかいた。
北の方は体だけを起こし、打掛けを羽織った。北条氏政の妹で、名を貴子という。

武田家と北条家の絆を強めるために、五年前に十四歳で勝頼に嫁した。
その二年後に上杉家の家督相続争いに介入したことが原因となって、勝頼は北条氏政と敵対することになったが、北の方は実家には戻らなかった。
本人が武田家に残りたいと望んだし、勝頼も初々しい若妻を手放したくなかったからである。
「それでは寒かろう」
勝頼は虎の皮の袖なし羽織を脱ぎ、北の方の背中をおおった。大柄な勝頼の羽織は、北の方の体をすっぽりと包んだ。
北の方は思い詰めた目をしてうつむいていた。
北条家の姫として何不自由なく育った身には、この試練は辛過ぎるのだろう。北の方のやつれた姿を見ると、勝頼の胸は申し訳なさにはり裂けそうだった。
「まだ手立てはある。高遠城の盛信が十日ばかりも持ちこたえてくれれば、この城の守りを固めることができる。その間に上杉からの援軍も来よう。さすれば我らも打って出て、織田の軍勢を南と北からはさみ撃ちにするのじゃ」
北の方をなぐさめようと強がりを言ったのではない。上杉の援軍が来るまで持ちこたえれば何とかなると、自分でも信じていた。

「だから何も案ずることはない。安心して休むがよい」
勝頼は実の娘をかばうような手つきで北の方を横たえ、細やかに夜具をかけてやった。
今夜は胸苦しさに眠れそうにない。だから朝まで添い寝してもらいたくてここに来たのだが、それを口にすることはどうしてもできなかった。
時は残酷なほど早く過ぎてゆく。
翌朝、浅いまどろみの中にいた勝頼は、高遠城の急を告げる声で目を覚ました。
赤地に白く百足を描いた旗を背負った使い番が、中庭に片膝をついていた。
「昨日辰の刻、高遠城が落城いたしました」
「ま、まことか」
「仁科五郎さま以下侍五百余名、足軽小者二千余名、すべて討死にした由にございます」
「して、織田の軍勢は」
「森長可らの先陣二万、昨夜のうちに上諏訪に着陣いたしました」
心の臓をわしづかみにされたような痛みが、勝頼の胸を走った。
あの高遠城が、わずか一日で落ちるとは……。

混乱した頭の整理もつかないうちに、次の使い番が飛び込んで来た。
「昨日、穴山梅雪どのの軍勢二万、江尻城を発しました。駿河一国の侍は、すべて穴山どのに従っております」
「申し上げます」
第三の使い番が、織田軍が諏訪大社に放火したことを告げた。
信玄が組織した百足衆と呼ばれる使い番たちが、まるでわざとのように悪い知らせばかりを持ってやって来る。
「評定を開く。皆を大広間に集めよ」
百畳もある大広間に集まった重臣は、たった八名だった。
城内に残る兵がわずか五百とあっては、新府城では戦えない。もっと堅固な山城にこもって敵を迎え撃つべきだと衆議一決した。
「それがしの城にまいられよ」
そう申し出たのは、上州沼田城主の真田昌幸である。
沼田城なら兵糧、弾薬も充分な上に、越後にも近いので上杉軍の救援を期待できる。
昌幸はそう説いたが、勝頼は二の足を踏んだ。
頭の切れ過ぎる男だけに、いまひとつ信用できない。それに武田家の当主ともあろ

う者が、裸同然で上州まで逃げ落ちたとあっては、いかにも外聞が悪かった。

勝頼の沈黙によって評定の場が気まずい空気に包まれた時、

「岩殿城はいかがでござろうか」

秋山摂津守が申し出た。

岩殿城は都留郡大月にある小山田出羽守信茂の居城である。

「かの城は渓谷険阻の地にあり、大敵を防ぐには絶好の場所と存じまする。それがしの所領にも近く、山伝いに兵糧、弾薬を送ることも可能でござる。のう小山田どの、いかがでござろうか」

「それがしの城にお移りいただくとあらば、当家末代までの誉れとは存じまするが……」

何か気がかりがあるのか、信茂の歯切れは悪かった。

諏訪の局の子で、勝頼とは乳兄弟に当たる。年は七つ上の四十四歳だった。

「武田家譜代の臣として、これ以上の誉れはござるまい。なろうことならそれがしの城にお移りいただきたいが、山中の小城ゆえかなわぬのが無念でござる」

摂津守がこの機を逃すまいと無理押しした。

「あいや、待たれよ」

真田昌幸が気色ばんで異をとなえた。

「確かにかの地は大軍をもって攻め入ることはできませぬが、甲州の織田、武州の北条に東西から攻められては、袋詰めにされたも同然でござる。援軍の当てもなく、糧道も断たれては、とても籠城などできるものではござらぬ」

昌幸の意見に理があるとは思いながら、勝頼の心は岩殿城に傾いていた。

あの城なら甲府からも近いし、信茂なら気心も知れている。それに万一滅びることになったとしても、北の方を北条家に送り返すことだけはできよう。

そうすることが、幸せ薄い妻に対するせめてもの償いだと思った。

「信茂、当家の命運をそなたに託す。よろしく計らってくれ」

勝頼は愛用の脇差を引出物として与えた。

「ならばこれより所領に戻り、仕度をととのえてお迎えに上がりまする」

信茂は深々と頭を下げ、あわただしく退席した。

翌日の早朝、勝頼主従五百余騎、女房衆二百人ばかりは、新府城を捨てて岩殿城へ向かった。

敵に無傷で城を開け渡すのは口惜しいので、新築なったばかりの御殿や屋敷にことごとく火を放った。

城には諸国の領主の妻子三百人ばかりが人質としてとどめ置かれていたが、その大半は武田家に背いた科によって焼き殺された。

その頃――。

内裏では雛祭りが行なわれていた。

古代の中国では、三月の初めの巳の日に水辺に出て禊を行ない、酒を飲んで災厄を祓う行事があった。

この風俗がいつの頃か本朝に伝わり、人形に体の汚れを移して海や川に流す巳の日の祓となって定着した。

人形はやがておもちゃの雛として発展し、雛飾りをする風習が生じたが、祭りが華美に流れることを危惧された聖徳太子が、

「この遊びは大夫の遊びにあらず。向後は幼女の遊びとなせ」

とお命じになったので、幼女の無病息災を願う祭りに変じた。

それゆえ雛祭りを祝うのは奥の女房衆ばかりで、主上は陰陽寮から献じた人形で祓いを終えて清涼殿にお出ましになると、公卿たちに桃酒をふるまわれた。

中国では桃は邪気をはらう仙木とされているので、本朝でも桃の花を浮かべた酒を

用いるようになったのである。

近衛前久もこの酒宴に連なっていた。

御帳台におつきになった主上から盃が回され、公卿たちがかしこまって頂戴する。

希有なことに、この日は闘鶏まで催された。

黒と茶の羽根の混じった軍鶏と、銀と青のもう一羽が南庭に引き出され、径五尺ほどの丸い囲いの中に入れられた。

唐の玄宗皇帝が闘鶏の愛好者だったことはよく知られているが、本朝でも古くから三月三日に鶏合が行なわれ、占いや賭け事の具とされてきた。

だが、正親町天皇はこのような残酷な遊びを好まれない。巳の日の祓に鶏合を行なわれたことは、ご即位以来一度もなかった。

（それを、何ゆえ急に……）

前久には勝負の行方よりそちらの方が気になった。

二羽の軍鶏は懸命だった。

短い羽根を羽ばたいて一尺ばかりも飛び上がり、相手の頭に痛打を与えようとする。

鋭いくちばしでこめかみをえぐろうとする。

黒茶の方が体がひと回り大きいが、銀青は動きが速く跳躍力に優れている。

黒茶は体力を生かして相手を押し込もうとするが、銀青は高々と飛んで黒茶の頭をはさみ込むような蹴りを出す。

互いに休むことなく攻めつづけ、長い首をからめ合い押し合いながら荒い息をつく。二羽ともとさかを喰い破られ、頭は血まみれである。それでもぎろりとむいた目には敵を倒そうという闘志がみなぎっていた。

それは戦場における武士の姿そのものだった。

前久ははっと胸をつかれて主上をあおいだ。

御帳の奥の表情をうかがうことはできなかったが、お怒りになっておられることは気配で分った。

信州、甲州での戦に心を痛めておられる。

だが天上の神々に仕えることを本分としておられる主上のお立場としては、公の場で天下の事変に口をさしはさむことははばかられる。

そこで、このような形でご不満をあらわになされたのだ。

そのお心をくみ取ることができなければ廷臣とは言えない。だが今の前久には、暴走の度合いを強める織田信長を抑える手立てはなかった。

武力を持たない朝廷には、主上に対する庶民の敬慕や尊崇の念しか頼るべきものはない。

そうした心情をこの国に扶植するために、朝廷は宗教、文芸、芸能などあらゆる分野を主導し、庶民に範を示してきた。

それが功を奏したために、武家政権を打ち立てた者たちも、朝権そのものにまでは手をつけることをはばかったのだ。

ところが信長はちがう。

朝廷の権威を利用するだけ利用して、やがては支配下に置いて封じ込めようとしている。

こんな相手と渡り合わなければならないことが、前久生涯の不幸だった。

酒宴の後、前久は上臈の局に呼び止められた。

「お上がお召しでございます。常御殿にお渡り下さいますよう」

内々にお目にかかるなど、一年前にご譲位を延期して以来なかったことである。どんな御用かといぶかりながら、前久は常御殿でお出ましを待った。

やがて主上が座につかれた。

六十六歳になられる。近年ご健康がすぐれず、はた目にも分るほどおやせになり、表情も一段と険しかった。

前久の奥歯が急に痛み出した。

心労がたたったのか、数日前から右の奥歯がうずいている。酒に麻痺して忘れていた痛みが、こんな時にぶり返したのだった。

「朕の胸中を、察してくれたようだな」

主上は御帳の内からでも廷臣の思いを読み取られる。洞察力の鋭さは天与のものだった。

「ご宸襟を悩ましたてまつること、臣の力及ばざるゆえと恥じ入っております」

「急にお召しになられたのは、武田の行く末を案じておられるゆえにございます」

給仕を務める上臈の局が、主上からの盃を差し出した。

武田は新羅三郎義光以来の清和源氏の名家で、信玄は三条公頼の娘を娶り、妹を今出川晴季に嫁がせて都との好を通じている。

それだけに公家の中には武田家に同情を寄せる者が多かった。

「織田の軍勢は伊那谷から諏訪へ向かって進撃しております。また駿河一国も徳川方についたとのことゆえ、とても領国を保てるとは思われませぬ」

前久のもとには、信濃や甲斐から戦況を知らせる使者が引きも切らずに訪れている。だが片道三日もかかるので、今日どうなっているかは分らなかった。

「何とか家名を残す手立てはございませぬか。たとえ一万石なりとも所領を与えて下されば、いつか再び日の目を見る時もございましょうほどに」

上臈の局が主上のお気持を代弁した。

「臣は明後日、信長と共に出陣いたします。その道すがら、その件について話をする所存にございます」

「甲府の恵林寺には快川和尚がおられます。こちらの計らいも、よろしくお頼み申します」

主上は昨年快川和尚に「大通智勝」の国師号を授けられたばかりだが、恵林寺は信玄の菩提所なので戦火に巻き込まれる恐れがある。

主上はひときわ、そのことを案じておられるのだった。

「苦労が多いことと思うが、そちのほかに信長にものを言える者はおらぬ。公武の間がおだやかにゆくように計らってくれ」

主上のご意向は女房奉書で伝えられるのが常である。直々にお声をかけられるのは珍らしいことだった。

「ならば、臣からもお願いがございます」

緊張のせいか、前久の奥歯がひときわ痛んだ。

それでも伝えるべきことは伝えておかなければならなかった。

「このたびの信長の出陣と戦勝を祝うために、安土にご使者をつかわしていただきとう存じます」

「うむ。局と計らうがよい」

「いまひとつは、ご譲位の儀でございます」

「近衛公、お控え下されませ」

上臈の局が厳しく制止しようとした。

「お局さまこそ控えられるがよい。信長との折衝を任されたからには、すべてをありのままに奏上申し上げるのが臣たる者の務めでございます」

「遠慮は無用である。申すがよい」

「ご譲位の儀は本年中に執り行なう予定で準備を進めてまいりましたが、事によっては来年まで延引のやむなきに至るやも知れませぬ」

「そのようなこと、聞いてはおらぬ」

龍顔にくもりがさし、怒りの嵐が巻き起こりそうだった。

主上は神々に礼を尽くし、地上の平安を保つという尊き責務をになっておられる。一年の行動はすべて年中行事に縛られ、病気になっても灸をすえることもできないほどの厳しい戒律を順守しなければならない。

ご高齢でご病気がちの主上に、これ以上玉座にとどまっていただくのはあまりにも酷だが、朝廷を守るためには耐えていただくしかなかった。

「信長はこのたび、安土城内に清涼殿を模した御殿を造営いたしました。誠仁親王ご即位の後には、内裏を城内にお移し申し上げようとしているのでございます」

そればかりか猶子とした五の宮を即位させ、太上天皇となって朝廷を意のままにしようと目論んでいる。

信長にこうした野心がある限り、軽々にご譲位に応じては取り返しのつかないことになる。

前久は熱を込めて説いたが、主上のお言葉は思いもかけないものだった。

「信長とて朝廷を滅ぼすつもりはあるまい。なにゆえ意のままになってはならぬのだ」

「それは……」

前久は返答に詰まった。

古い時代に祭祀権と統治権とが分けられて以来、朝廷は時の権力者の意のままになってきた。

藤原氏、平氏、源氏、北条氏、足利氏、皆しかりである。

それなのになぜ信長の意のままになってはならないのか。主上がそう問われるのも無理からぬことだった。

「信長は朝廷を重んじてはおりませぬ。太上天皇となれば、朝廷の仕組みそのものを変えてしまうことでございましょう」

前久は強弁したが、屋敷に戻ってからもどこか納得できない思いが澱のように残っていた。

信長が朝廷の存続さえ認めるのなら、太上天皇になろうと外戚となって自分の子を皇位につけようと構わない。

現に前久の先祖の藤原氏は、二百年ちかくもの間天皇家の外戚となり、己れの屋敷を里内裏となして朝廷を牛耳ってきたではないか。

（それを、なぜ許せないのか）

前久ははたと困惑した。

これまでは朝廷を守り抜くためとばかり考えていたが、心の奥底にはどうやらちがう思いが巣くっているようである。

信長が太上天皇となれば、位階においても下位に立たされることになる。そのことに我慢がならないのではないか……。

（身共が守ろうとしているのは、朝廷ではなく己れの自尊心なのかも知れぬ）

三分咲きになったしだれ桜をながめながら、前久はしばし憂鬱な物思いにとらわれていた。

「ただ今戻りました」

薄闇の射す庭影に、黒装束の男がうずくまっていた。

前久の配下となった風の甚助である。

「昨日辰の刻、高遠城が落城いたしました。仁科盛信どの以下全員討死。また武田勝頼どのは新府城におられますが、軍勢は三千にも満たず、籠城の仕度も充分ではございませぬ」

昨日のうちにそのことを確かめ、夜を徹して都まで戻ったという。風の甚助という異名通りの凄まじい速さだった。

「この先、勝頼はどうするつもりじゃ」

「新府城にこもるのは無理でございましょう。どこか要害の地に移られるものと存じます」

「織田軍はすぐにも甲斐に攻め入るのか」

勝頼がこの先何日もちこたえられるか。助命の成否はその一点にかかっていた。

「織田軍は諏訪にとどまっております。柵を結い回し、陣構えを堅固にしておりましたゆえ、しばらくは動かぬものと存じます」

「わしは明後日、信長と共に出陣する。ひと足先に甲斐に戻り、当地の様子をさぐってくれ」

「承知」

「それから伊賀の子供たちのことだが」

それらしき子が六人、興福寺に保護されている。そう伝えようとしたが、甚助は風のように姿を消していた。

夕暮れは迫っていた。残された時間は少なく、やるべきことはあまりに多い。

しかも奥歯の痛みはいっそう激しくなっていた。歯の根が膿んでいるのか、頬が熱を持ち、脳髄にまでひびくような痛みが間歇的に襲ってくる。

痛みのせいで、物事を順序立てて考えられないほどだった。

「酒を持て」

侍女に命じ、二合ほどひと息に飲み干した。

効果は覿面である。

酒の酔いに感覚が鈍くなり、いつの間にか痛みを感じなくなった。

(ともかく信長の機嫌を取ることだ)

前久は二条御所に使者を出し、勧修寺晴子に対面を求めた。

使者は四半刻ほどで戻った。誠仁親王は参内しておられるので留守だが、晴子はいつでも対面に応じるという。

(晴豊を連れて行こうか)

前久はちらりと思ったが、一人で訪ねることにした。今日はかなりきわどい話になるかも知れぬと思ったからである。

晴子は表御殿の対面所で待っていた。

あごの細くとがった顔が丸みをおび、腰回りにも少し肉がついたようだが、それが豊かな貫禄となり、美しさを際立たせていた。

「奥の整理は進んでいますか？」

「はい。ようやく皆さまのご協力が得られるようになりました」

晴子は後宮の制を改めるために、誠仁親王のお子はすべて自分の子として育てると宣言している。

その手始めに、先月生まれた中山康子の娘を猶子にしたばかりだった。

「このほど信長は、甲斐に向けて出陣します。出陣と戦勝を賀して、朝廷からも使者を立てることになりました。晴子さまにも加わっていただけると心強いのですが」
「どうしてわたくしに」
「昨年安土におもむいていただいたお陰で、ご譲位の儀をすんなりと延期することができました。このたびもいろいろと難しいことがありますので、お力をお借りしたいのでございます」
「わたくしに力などありません。あれは偶然そうなったばかりです」
心なしか晴子の頬がうっすらと上気しているように見える。まるで肌の内側から、命の光が射しているようだった。
「近頃の信長の所業には目に余るものがあります。このままでは朝廷の存続さえ認めぬと言い出しかねませぬ。そうならぬよう、あの暴れ馬を朝廷の秩序の中につなぎ止めていただきたい」
「ですから、わたくしにそのような力など」
「晴子さまもご存知のように」
前久は間髪を容れずにたたみかけた。
「朝廷は女房衆によって守られてきました。後醍醐帝が勾当内侍を新田義貞に下された例を待つまでもなく、東夷を服させるために女房衆が果たした役割には甚大なるものがございます」

「近衛公、あなたはわたくしに信長に下れとおおせられますか」
「めっそうもない。そのようなことなど、夢にも考えてはおりませぬ」
強く打ち消したものの、名目的には晴子も女官の一人にすぎない。もし彼女を下すことで朝廷が守れるのなら、ためらってなどいられぬという非情な計算があった。
「このことを、宮さまはご存知なのでしょうか」
「いいえ。晴子さまのご内意をうかがった後で、お許しを得るつもりでおります」
「分りました。宮さまのお許しさえいただけるなら、安土にまいります」
しばらく考えた後で、晴子はきっぱりと請け負った。

第十章　命なりけり

みぞおちのあたりに絞り上げられるような痛みが走り、吐き気となって喉元まで突き上げてきた。

大盃を飲み干そうと口元まで運んだ武田勝頼は、さあらぬ体でお膳に戻した。

「どうかなされましたか」

近習の土屋右衛門尉が気づかった。

「いや、何でもない」

勝頼は平気を装って大盃をあけた。

柏尾の大善寺でのことである。新府城を捨てて岩殿城の小山田信茂を頼った勝頼主従は、甲州街道ぞいのこの寺に身を寄せて信茂の迎えを待ったが、三月五日になっても何の音沙汰もなかった。

「さすがは殿じゃ。将たる者は、こういう時こそ泰然と構えているものでござる」

沈みがちな座を盛り上げようと、秋山摂津守が大仰に誉め上げた。

勝頼は外の空気を吸いたくなって腰を上げた。

「お供つかまつる」

年若い右衛門尉が素早く刀を引き寄せた。

「無用じゃ。控えておれ」

廻り縁に立つと、ひんやりとした空気が頬をなでた。

目の前には茶臼山が黒い影となってそびえ、かすみにおおわれたおぼろな月が中天にかかっている。

時が止まったような静けさの中で、谷川のせせらぎだけが音高く響いていた。

勝頼は目まいを覚えた。

それほど酔っているわけでもないのに、足元が揺れているようにおぼつかない。

柱につかまらなければ、体を支えられないほどだった。

（信茂は来る。必ず来る）

心の中で呪文のようにくり返した。

万一信茂までが裏切ったなら、もはや生きる道はない。裸同然で山野をさまよい、無残に屍をさらして名門武田の名を汚すことになるだろう。

そう思うと焦燥に背中を焼かれるようだが、今の勝頼には信茂を信じて待つしかなかった。

目まいがおさまるのを待って厠に立った。明かり窓を開けて用を足していると、下腹部に妙な異和感があった。

血尿である。二月ばかりの心労のせいで、血の小便が出るようになっていた。

月明かりでも分るほどの毒々しい色を見ると、勝頼は気持の支えを一度に失った。

（逃げよう）

このまま何もかも打ち捨て、木こりにでも身をやつして山の中に逃げ込もう。一人なら追っ手も来るまい。自分さえいなくなれば、他の者もそれぞれに生きる道を見出すはずだ。

勝頼は月の光にそそのかされたようにその考えを追い、声を上げて笑い出した。

この期に及んでそんなことをするくらいなら、真田昌幸の勧めに従って上州の沼田城に逃れた方がよかったのである。

（そうだ。やはり沼田城へ行くべきだったかも知れぬ）

勝頼は打ちひしがれ、人生のすべてが失敗の連続だったような気がしてきた。

父信玄が強勢を誇った頃、信長は卑屈なばかりにへり下った書状を送って父の歓心

をかったことがある。

それを見た勝頼は、自分にもここまでなりふり構わぬ振る舞いができるのなら、すぐにも天下が取れるであろうと高言したものだ。

それがどれほど間違った考えであったか、勝頼は骨身に徹して思い知らされていた。

（いいや。信茂は必ず迎えに来る。今になって裏切るような薄情者ではない）

気持を懸命に立て直して庵室に向かっていると、かたわらの部屋から気色ばんで相手をなじる女の声が聞こえてきた。

「これは聞き捨てなりませぬ。この老いぼれの耳にも聞こえるように、もう一度はっきりとおおせられるがよい」

そう迫っているのは、信茂の母諏訪の局だった。

どうやら北の方の侍女が、信茂に対する疑いを口にしたらしい。

「わらわは今日まで、主家への忠義一途に生きよと信茂に言い聞かせてまいりました。それゆえ倅も、勝頼さまを岩殿城にお招きして戦い抜く覚悟を定めたのでございます」

「ならばどうして、今日になるまでお迎えがないのでございましょうか」

気丈に反論したのは、北の方の乳母だった。

「急なことゆえ、御殿の仕度がととのわないのでございましょう。笹子峠を越えれば、岩殿城まではすぐでございます。何も案じることはございませぬ」

「それなら使者をつかわすのが当然でございましょう。こちらからは昨日も今日も使者を送っておられるのに、返事がないではありませぬか」

女たちも先の不安に苛立っている。口調もついつい険しくなっていた。

勝頼は酒席に戻ると、

「久々に琴でも聞きたい。北の方を呼べ」

右衛門尉にそう申し付けた。

老女たちのいさかいの板ばさみとなっているよりは、琴でも爪弾いた方が北の方も気が晴れるだろうと思った。

「そうじゃ。理慶尼どのも琴の上手と聞く。本堂でかなでてもらい、皆に聞かせるがよい」

理慶尼は大叔父信友の娘だが、信友が信玄に誅されたために、大善寺に入って尼となった。勝頼主従がこの寺に身を寄せたのも、理慶尼の縁を頼ってのことだった。

やがて時ならぬ音曲の宴が始まった。

薬師如来像を安置した須弥壇の前で北の方と理慶尼が琴をかなで、勝頼主従や侍女たちが本堂や廻り縁に座って聞き入った。

勝頼の計らいで足軽、雑兵にも境内に入ることを許したが、集まったのは二百人にも満たなかった。

二人はぴたりと息が合っていた。

北の方が主旋律を爪弾き、理慶尼が頃合いよく相の手を入れる。それが譜面通りなのか即興なのか分らなかったが、二人の琴は時には調和し、時には争いながら流れるような調べを生み出していった。

勝頼は北の方をじっと見つめていた。

無心に琴に向かう姿は、五年前に嫁いで来た時のように初々しく可憐である。

琴の調べに耳を傾けているうちに、胸ふさぐ不安や絞り上げられるようなみぞおちの痛みから解き放たれ、心地よいやすらぎの中にたゆたっていた。

澄みきった小川の流れ。夏の光にきらめく水面。黒っぽい背中を見せて川をさかのぼる魚たち。そんな光景が脳裡をよぎった。

あれはまだ五つか六つの頃だ。父にこっぴどく叱られ、悔しくて哀しくて情けなくて、小川のほとりで一人泣いていたことがある。

だが川を泳ぐ魚の群を無心にながめているうちに、心がふっと軽くなったものだ。

二人がかなでる琴は、あの時の小川の流れとよく似ていた。
廻り縁に連なる家臣たちも、境内に詰めかけた足軽たちも、憑き物が落ちたようにおだやかな表情で琴の音に聞き入っていた。
演奏の後に北の方を部屋に呼んだ。同席したのは諏訪の局ばかりである。
「おかげで心が洗われた。皆にもよい骨休めとなった。礼を言う」
盃を渡して酒を勧めたが、北の方は申し訳程度に口をつけたばかりだった。
「どうした。気分がすぐれぬのか」
「いいえ。でも……」
北の方は言いよどんでうつむいた。
付き合えないのが心苦しいのか、膝に置いた手を固く組み合わせて肩をすぼめている。
「いいのだ。私はこうしていられるだけで満足なのだから」
さっきとちがって、酒がうまかった。酔いも心地よく回っていく。二杯三杯と盃を重ねるうちに、勝頼は北の方がいとおしくてたまらなくなった。
こんなに若い身で、今日までよく尽くしてくれた。北条家と手切れとなった時にも、家を捨てて武田に残る道を選んでくれた。

それなのに、自分はこんな境遇に北の方を引きずり込んでしまったのだ。
「岩殿城は天下に聞こえた要害じゃ。あの城にこもったなら、敵が幾人押し寄せて来ようと、半年や一年はもちこたえられる」
そのうちに天下の形勢も変わり、生きる道も開けてこよう。勝頼は北の方を力づけたいばかりに、見込みのない見通しを語りつづけた。
いとおしさは切なさとなり、ふいに熱い情欲が体の底から突き上げてきた。
男の情欲というものは、命の危険にさらされるほど高じるものらしい。
だが、新府城を逃げ出し明日をも知れぬ身で、そんなことを望むのはいかにも不様である。
そう思うからこそ今日までじっと気持を抑えてきたが、どうにも辛抱できなくなった。
「諏訪、夜具の仕度を」
勝頼はさりげなく命じた。
心中の葛藤を、親子ほどにも年の離れた北の方に知られたくはなかった。
「北の方もここに泊る。そのようにな」
「奥方さま、よろしゅうございますか」

諏訪の局が余計な気づかいをした。

「ご配慮は嬉しゅうございますが、今宵はご遠慮申し上げとう存じます」

北の方はうつむいたまま、消え入りそうな声で答えた。

「遠慮は無用じゃ。こうした時に慎しみがないと思うかも知れぬが、我らは二世を誓った夫婦ではないか」

「ええ、それでも……」

北の方は頑なである。大きな瞳を伏せたまま、思い詰めたようにじっと一点を見つめていた。

「何ゆえじゃ」

拒絶された怒りと下司な心を見透されたような恥ずかしさに、勝頼の頭はカッと熱くなった。

「何ゆえここに泊らぬ」

「……」

「落人同然の身となった私に、愛想が尽きたか」

苦い言葉を吐いて返答をうながしたが、北の方は貝にでもなったように口を閉ざしている。

「貴子、答えよ」

苛立ちのあまり、勝頼は手にした盃を叩きつけた。

「そちは私をさげすんでおろう。一戦も交えずに新府城から逃げ出しておきながら、何という体たらくだと、心の中であざけっているのであろう」

北の方は哀しげな目をちらりと向けた。

とまどうような幼い表情は、どんな言葉よりも鋭く勝頼の胸を貫いた。

北の方が哀れでならない。こんなことで当たり散らしている自分がやりきれない。

だが憤懣のやり場がどこにもないだけに、一度切れた気持の堰をふさぎ止めることはできなかった。

「それほど私が気に入らぬのなら、北条家に戻るがよい。幸い峠ひとつ越えれば相模国にたどり着く。明朝早々に送り届けるゆえ、仕度をして待つがよい」

勝頼は我身を切るような思いで悪態をつき、北の方を追い立てた。

横になったものの、とても眠れるものではない。無体なことをしたという後悔と自分に対する嫌悪とに悶々としていると、諏訪の局が訪ねて来た。

「倅の遅参ゆえのお腹立ちとは存じますが、北の方さまにあのようなお言葉を投げられては、あまりにお気の毒でございます」

諏訪の局はそっと目頭を押さえ、一通の書状を差し出した。

「これは北の方さまが先日納められた願文の写しでございます。勝頼さま大事とのお心に、何の偽りがございましょうや」

勝頼は書状を行灯にかざし、あわただしく目を通した。

「うやまつて申　　祈願の事

南無きみやうちやうらい八幡大菩薩

この国の本主として武田の太郎と号せしよりこの方代々まもり給ふ。ここに不慮の逆臣いできたつて、国家をなやます。よつて勝頼、運を天道にまかせ、命をかろんじて敵陣にむかふ。しかりといへども、士卒利を得ざるあひだ、その心まちまちたり。なんぞ木曾義昌そくばくの神慮をむなしくし、あはれ身の父母をすてて、奇兵をおこす。これ自ら母を害する也。なかんづく勝頼累代重恩のともがら、逆臣と心をひとつにして、たちまちにくつがへさんとする。万民の悩乱、仏法のさまたげならずや。そもそも勝頼いかでか悪心なからんや。思ひの炎、天にあがり、神意なほ深からん。我もここにして、あひともに哀しむ涙、又闌干たり。神慮天命まことあらば、五逆十逆たるたぐひ、諸天かりそめにも加護あらじ。この時にいたつて……」

涙がどっとあふれ出し、勝頼は先を読むことができなくなった。

なぜ自分はこんなにも愚かなのか。そのことが悔しくて、大きな体を震わせてすすり泣いた。

同じく三月五日――。

織田信長は夜明けとともに安土城を発した。

出陣は午の刻と定めていたが、前夜甲府からの使者が到着し、武田勝頼が新府城を捨てたと伝えた。

懸念していた上杉景勝にも出兵の動きはないと聞くと、信長は矢も楯もたまらなくなり、堀久太郎秀政、蒲生忠三郎氏郷ら馬廻り衆二千余騎を引き連れて岐阜へと向かった。

桜の季節とはいえ、明け方の風は冷たい。だが、青い薄闇と凛と張りつめた空気が何とも心地よかった。

信長がこんな形で馬を出すのは久々のことだった。

若い頃には天の声に命じられるままに、夜討ち朝駆けをくり返した。今だと思い定めると、たった一人でも城を飛び出したものだ。

信長はその頃のように五体に力がみなぎるのを感じ、満腹した虎のように機嫌がよ

かった。

武田信玄の脅威は、それほど重く心にのしかかっていた。

神業と評された用兵術ばかりでなく、調略にも政治的手腕にもたけ、わずかな隙も見逃すことなくつけ入ってくる。

はるか遠方の勢力にも手を回し、いつの間にか身方に引き入れて包囲の網をちぢめてくる。

最大の危機は、十年前、元亀三年十月だった。

北条氏政と和を結んだ信玄は、五万の軍勢を二手に分けて遠江に攻め込み、織田、徳川と雌雄を決しようとした。

しかも足利義昭や浅井、朝倉、石山本願寺の法主顕如にまで連絡を取り、信長包囲網を築き上げていた。

徳川家康は三方ヶ原で進撃を阻止しようとしたが、武田軍に圧倒され、ほうほうの体で浜松城に逃げ帰った。

もし信玄があのまま尾張に攻め込んでいたなら、信長は東西からはさみ撃ちにされ、命運も尽きていただろう。

だが、この時すでに信玄は肺の病におかされていた。そのために武田軍は遠江に陣

を敷いたまま、冬を越さざるをえなくなったのである。

この天祐が信長を救い、今や立場は逆転している。ついに信玄に勝ったという歓びは、何物にも代えがたいほど大きかった。

久々に長旅に出ることも、信長の心を浮き立たせていた。

信濃から甲斐に出て、富士遊覧などを楽しみながら駿河へと下る。

後顧の憂いも戦の緊張もない、生涯初めての大旅行がついに実現したのだった。

午の刻過ぎに柏原の宿に着き、上菩提院で昼食をとった。

信長の気は急いている。休息もそこそこに出立して大垣まで足を延ばすつもりだったが、

「殿、近在の村々の者たちが、出陣祝いの品を献上したいと申しております」

森蘭丸がそう告げた。

中庭にはとても入りきれないので、境内に待たせているという。

信長は興味をそそられて本堂に出た。砂利を敷き詰めた広々とした境内に、ぎっしりと百姓たちが詰めかけていた。

兵糧米や馬の飼、矢を作るための細竹、防寒用の笠やみのなど、長行軍に必要なありとあらゆる品々が所狭しと積み上げてあった。

「ほう、奇特なことよ」

信長は一人一人の名前と献上物を書き留め、褒美の金子を渡すように命じた。

いわば買い上げも同じである。信長は出陣のたびにこうした方法で物資を調達していたので、下々の者たちには絶大な人気があった。

上に厳しく下に手厚いのは、信長の一貫したやり方だった。

織田家に仕えれば、身分や家柄に関わりなく才覚次第で立身出世をとげることができる。

織田家の領内では、無体に年貢を課せられたり夫役を強いられることがない。

これまで領主の横暴に耐えてきた庶民にとって、信じがたいほどに公平な治政である。そのために他領の百姓までが、早く織田家の領国になってほしいと望むほどだった。

信玄王国があっけなく崩壊した原因も、信濃の民百姓が信長の治政を支持したことにあった。

そのことについて、太田牛一は次のように記している。

〈先々より百姓ども己れ己れが家に火をかけ、罷り出で候なり。子細は、近年、武田四郎、新儀の課役等申し付け、新関を据ゑ、民百姓の悩み尽期なく、重罪をば賄を取りて用捨せしめ、かろき科をばこらしめの由、申し候て、或いは張付にかけ、或いは討たせられ、歎き悲しみ、貴賤上下共にうとみ果て、内心は信長の御分国に仕りたしと、諸人願ひ存ずる砌に候間、此の時を幸ひと、上下御手合せの御忠節仕り候〉（『信長公記』）

献上者の列は長々とつづいていた。

境内ばかりでなく、門の外にも大勢が詰めかけている。その半数ちかくが、褒美の金子を受け取ろうとはしなかった。

「信長さまのおかげで、日々つつがなく暮らさせていただいております。これはお礼とお祝いのために持参したもので、決して商うつもりはございませぬ」

顔を誇りに紅潮させて、頑なに言い張るのだ。

中には幼な児を抱いて、頭をなでてほしいと願う者もいる。

痛む腰をさすってほしいとせがむ老婆もいる。

こんな時の信長は、徹底的に律義である。神妙な顔をして頭をなでたり腰をさすったりしていたが、やがて妙だと気付いた。

いくら庶民に人気があるとはいえ、短時間にこれほど集まるはずがなかった。

「久太郎を呼べ」

堀秀政が何か手を回したにちがいないと思った。

「ご明察、恐れ入ります」

秀政は悪びれることなく認めた。

前々から近在の者たちに頼まれていたので、上菩提院で休息すると早馬で知らせたが、まさかこんなに集まるとは思わなかったという。

「たわけが。そのような勝手をして、敵に在所を知られたなら何とする」

「それがしと蒲生どのの守り抜きます。まだ近江の内ゆえ、身方の軍勢がおっつけ馳せ参じることでございましょう」

しゃらっと言い抜けたものである。

このまま不破の関を越えて美濃の国に入れば、安土で後れを取った者たちの面目は丸つぶれになる。

それをさけるためには、この寺で一泊して後続の軍勢を待つしかなかったが、信長にそのような進言をしても叱責されるばかりである。

そこで一計を案じ、献上者を集めて出発を遅らせたのだ。

才覚といい度胸といい、申し分のない若者だった。

「慮外者めが。主を何と思っておるのじゃ」

目をむいて怒鳴りつけたものの、信長はこうした機転をこよなく愛している。献上者の応接を秀政に押しつけたばかりで、罪に問おうとはしなかった。

夕方、後れを取った者たちが青い顔で駆けつけた。

織田七兵衛信澄、菅屋九右衛門、長谷川竹、永岡与一郎、蜂屋兵庫頭、高山右近、中川瀬兵衛、明智光秀、丹羽長秀、筒井順慶など、総勢六万余。

天下無双の軍勢だった。

翌朝、寺を出て美濃の国へ足を踏み入れた。

先頭が赤坂の宿にかかっても、後方はまだ関ヶ原の西のはずれを進んでいる。それほど長蛇の行軍だった。

揖斐川の呂久の渡しにかかった時、背中に揚羽蝶の旗印をかかげた使い番が駆けつけた。

「申し上げます。仁科五郎盛信どのの御首、到着いたしました」

使い番の後ろに、首を運んで来た五人が控えていた。四人は甲冑姿だが、残る一人は小袖を着ただけで丸腰だった。

「お蘭、座をしつらえよ」

蘭丸が置いた床机に座り、信長は盛信の首を実検した。

氷詰めにして運んでいるので、死後四日たっても少しも傷んでいない。血の気が抜けて青白かったが、口元にはおだやかな笑みをたたえていた。

「さぞや見事な戦ぶりであったろうな」

信長はこれまでに何千回となく首を見ている。死相を見ただけで、どんな死にざまをしたか見て取ることができた。

「高遠城にこもられ、侍五百、雑兵二千と共に討死になされました」

「惜しい若武者を死なせたものじゃ。この面魂なら、身ひとつからでも名を成すことができたであろうに」

「いかがいたしましょうや」

「作法通り、長良川にさらすがよい」

「お待ち下され。願いの筋がございまする」

丸腰の若侍が平伏して訴えた。

「この者は」

「仁科どのの家臣と申しております。首の運び役を務めたいと懇願しますので、同道いたしました」

「それがしは小山田大学が嫡男内蔵助と申しまする。父と共に戦うべく高遠城に駆けつけましたが、すでに落城した後でございました。ならばせめて盛信どのの行く末を見届けようと、同道を願ったのでございます」

「それで、願いとは」

「主の首がさらされるのは、あまりにも無念でございます。それがしの首を身代わりとして差し上げまするゆえ、その儀ばかりはご容赦下されませ」

「年端もゆかぬのに、よい心がけじゃ。そちの忠義に免じて、さらし首にはいたさぬ」

今日の信長は妙に優しい。内蔵助の願いを聞き届けたばかりか、ねんごろに供養するようにと金子まで与えたのだった。

六日は岐阜城に泊り、翌日は雨になった。

春の嵐である。

横なぐりの雨が足早に降り、天地を青く染めて稲妻が走る。地を引き裂くように雷鳴がとどろく。

信長は荒れ狂う嵐をあきずにながめていた。荒らぶる神と共鳴して、不思議と心が鎮まっていく。

この嵐をついて、近衛前久が駆けつけた。

卯の花おどしの鎧をまとった公家陣参衆二百騎を従え、日の丸の旗印をかかげていた。

兵力として見れば屁のようなものである。

だが五摂家筆頭近衛家の当主で、現職の太政大臣である前久が陣参することには、計り知れない意味があった。

「前久は天皇の名代として加わっている。織田軍は天皇の軍隊なのだ」

敵にも身方にも、そう触れることができるからだ。

しかも天皇の軍隊であることを標榜すれば、戦況が不利になった時に勅命によって和議を結ぶことができた。

現に信長は、絶体絶命の危機を勅命和議によって何度か救われている。浅井も朝倉も石山本願寺も、勅命とあらば一も二もなく和議に応じたものだ。

その力の偉大さを身をもって知ったがゆえに、かえって朝廷への危惧を抱くようになった。

万一この力を敵に利用されたなら、織田家など一朝にしてくつがえされることは目に見えている。

それをどう防ぐかが、天下布武を実現するための最大の課題となっていた。

信長はいつものように長々と待たせた後で、前久と対面した。

「都での所用に手間取り、陣参が遅れましたこと、おわび申し上げます」

卯の花おどしの鎧が、前久には憎らしいほどよく似合う。馬術にもたけ、馬上筒の腕前は天下一品と言っていい。それを誇示するように、革袋に入れた馬上筒をしっかりと腰にたばさんでいた。

「所用とは何じゃ」

「いろいろと、多岐にわたりまする」

「それゆえ何かと問うておる」

前久の巧妙な誘いだと知りながらも、信長はそうたずねずにはいられなかった。

「主上に戦勝祈禱をしていただくよう奏上いたしました」

「応じられたか」

「明朝から修せらるる由にございます」

「それは奇特なことじゃ」

「吉田兼和にも軍陣祓いを申し付けております」

「ほう、それから」

「出陣と戦勝を祝う勅使をつかわされるよう奏上いたしました」

「来ておらぬ」
「上臈の局さまと晴子さまが安土までお出ましになりましたが、一足遅れで間に合わなかった由にございます」
晴子と聞いて、信長の胸がかすかにときめいた。
一年前の桑実寺での出来事を、鮮やかに思い出した。
「また各方面より、武田家を存続させてほしいとの陳情がございました。信勝どのを跡継ぎとして、家名だけでも残していただきとうございます」
永禄八年、信長は妹の子を養女として武田勝頼に嫁がせた。二人の間に生まれたのが信勝で、当年十六歳になっていた。
「主上も武田家の存続をお望みでございます。ここで度量の広いご判断をお示しあらば、三条家や今出川家の者たちも必ずご恩に報いることでございましょう」
「近衛、家柄というものはさほどに大事か」
「家柄ゆえに申しているのではありませぬ。信勝どのを取り立てることが、織田家にとっても利益になると申し上げておりまする」
「さようか。ならば、救う道があれば手を尽くしてみよう」
嵐はいっそう激しくなり、雷鳴はますます間近になってくる。信長は身の内から狂暴な衝動が突き上げてくるのを感じ、再び晴子のことを思った。
女にこれほど心惹かれるなど、絶えてないことだった。

遠くで稲妻が走り、網代輿の物見が紫色の閃光に閉ざされた。
雷は徐々に近づいているようである。
勧修寺晴子は降り込む雨もいとわず、南側に広がる平野をながめていた。
伊勢湾までつづく広大な平野は、都の景色とはまったくちがう。その豊かさと規模の大きさに圧倒されていた。
突然、雨にけむる景色を引き裂いて一条の稲妻が走り、目もくらむような閃光とともに雷鳴がとどろいた。
「ひゃあ、くわばら、くわばら」
侍女の房子が頭を抱えてうずくまり、雷よけの呪文をとなえた。
(信長はんが、怒ってはるようや)
晴子にはなぜかそんな風に思えた。すると雷までが何となくいとおしかった。
勅使として安土に着いたのは、三月五日の夕方である。信長はすでに出陣した後だったが、その夜は柏原に泊っているという。

そこで六日の未明に安土を発って後を追ったが、わずか半刻ばかりの差で会うことができなかった。

不破の関を越えれば夷の国である。いくら勅命とはいえ、これ以上後を追う必要はない。

上臈の局はそう言って引き返したが、晴子は岐阜まで行くと言い張り、供の青侍二十人ばかりに守られて東山道を東に向かうことにしたのだった。

やがて赤坂の宿を過ぎ、呂久の渡しにかかった。

朝からの雨で揖斐川が増水し、赤茶けた濁流となって流れている。

川には船橋がかけられていた。

二本の長い鎖を対岸まで張り渡し、その間に隙間なく小舟をつなぎ、小舟の上に板を並べて橋にしたものである。

武田征伐に向かう軍勢を渡すためにかけたようだが、増水した川に押され、下流に向かって大きくたわんでいた。

「この橋を渡れますか」

晴子は駕輿丁にたずねた。

僧形に頭をそり上げた屈強の八瀬童子が六人、軽々と輿をかついでいる。

「渡れますとも。ただし流木が橋に当たって、ふり落とされる危険がございます」

「姫さま、無理でございますよ。万一のことがあったら、お子さま方がどれほどお嘆きになることやら」

房子は震え上がって止めたが、晴子は渡るように命じた。

絶対に渡れるという自信があった。

何者かに、さあ渡れと背中を押されているようでもある。

まず供の青侍が渡って安全を確かめた。次に晴子の荷をかついだ人足が渡り、最後に輿が動き出した。

駕輿丁たちが声を上げて足並をそろえ、駆け足で渡っていく。流木の激突や船橋の裂断をさけるためには、ひと足でも早く渡りきる必要があった。

それでも輿はまったく揺れないのだから、さすがは八瀬童子である。後醍醐天皇の頃以来、輿の役として朝廷に仕えているだけのことはあった。

「ほらごらん。何の心配もないではありませんか」

晴子は試練を乗りきった嬉しさに有頂天になった。

これで信長に会う資格を得たような気がしていた。

「私は反対でございます。どうしてこんな思いまでして岐阜に行かなければならない

のですか」

「朝廷の安泰を図るための大事な使いです。できるだけのことをするのは当たり前ではありませんか」

「そうでしょうか。上臈の局さまのように都にお戻りになるのが、賢明だと思いますけど」

「朝廷がどれほど危うい立場にあるか、お前には分らないでしょう。だからそんなに呑気に構えていられるのです」

晴子はむきになって言い返したが、実はなぜこんなことをしているのか自分でも分らなかった。

勅使の務めをまっとうしたいという使命感もある。近衛前久にあんな風に挑発されただけに、おめおめとは引き退がれないという意地もある。

だがそれだけなら、これほど無茶はしなかっただろう。未練を残しつつも、船橋を渡ることを断念して都へ引き返していたはずである。

では何が晴子をこんなに大胆にしたのか。

それはおそらく不破の関を越えたことだろう。

朝廷では古来より不破、鈴鹿、明石の関の外は異邦の地だと考えてきた。

畿内とは朝廷の意向が届く範囲という意味であり、その外側は外国である。

朝廷の意向が通じない反面、都でのように細々とした仕来りに縛られることも周囲の目を気にする必要もない。

そんな解放感が、不破の関を越えたとたんに晴子のくびきを引きちぎったのだった。

「姫さま、あれをご覧なされませ」

房子がすっ頓狂な声を上げて袖を引いた。

輿の前簾の向こうに、茶色い水を満々とたたえた大河が流れていた。降りしきる雨にけむって、向こう岸も見えなかった。

長良川の水が土手を越え、日頃の三倍ほどの広さになって流れている。唐の国の黄河や揚子江もかくやと思えるほどだった。

河渡の渡しまで行ってみたが、これではとても渡し舟は出せないという。やむなく近くの寺に泊って雨がやむのを待つことにした。

幸い供の青侍の中に住職と知り合いの者がいて、思いがけず丁重なもてなしを受けた。

夕食には川魚の塩焼きや山鳥と大根の煮物などが出たが、晴子は魚肉には箸をつけなかった。

「お体の具合でも悪いのでございますか」
「いいえ。勅使の役目を無事に果たせるように精進しているのです」
「それなら、いただいてもよろしゅうございますか」
房子は不破の関を越えてから急に大食になっている。異国に踏み込んだ不安を、食べることでまぎらわそうとしているようだった。
「食事を終えたら、湯の仕度をして下さい。髪を洗います」
庫裏の湯屋を借りて入浴した。
「後にはどなたもお入りにならないのですね」
「後にも先にも、入るお方などありません。姫さまばかりでございます」
「そうですか。それでは」
用意の袋を湯船に沈めた。
湯が薄水色に染まり、涼やかな香りが湯屋に広がった。
「姫さま、これは……」
房子がとまどうのも無理はなかった。
この香湯を用いるのは、宮さまと同衾する夜だけだった。
「どうしてこんなものをお使いになるのですか」

「だって、御所ではもう使うこともないでしょう。もったいないではありませんか」
「もしかして、さっきのご精進も……」
内裏の後宮には、いにしえから練り上げられてきた閨房術がある。香湯を用いたり魚肉を断つのは、体の匂いを消すための初歩的な技だった。
「ちがいます。余計な気を回さずに、早く髪を洗いなさい」
晴子は白小袖をまとったまま湯船にあお向けになった。
ぬれた小袖が肌に張り付き、乳房が透けて見える。
若い頃のような張りはなかったが、形は少しもくずれていない。
腰も細く引き締まり、下腹部のあたりも品良く手入れがなされていた。
房子はたすき掛けになり、湯を張った桶に晴子の長い髪を沈めた。
黒々とした髪が、桶の中でとぐろを巻くようにのたうっている。
まるで晴子とは別の生き物のようだった。
「それにしても、女子の一生とはいったい何なのでございましょうね」
房子は薬草をといた湯を頭皮にかけ、先を細くした櫛で髪をすいていく。
「幸せなのは親の懐に抱かれていた頃ばかりで、年頃になれば好奇の目にさらされ、殿方のもとに上がれば気苦労ばかり。そうして子供を産んで老け込んでいくんですか

らねえ。三界に家無しとは、まことでございましょうかね」
「お前らしくもない。どうして急にそんなことを言い出すのですか」
「いえね。姫さまを見ていて、ふとそんなことを思ったのでございます」
「わたくしはそんなに老けましたか」
「とんでもない。姫さまのお美しさは、今でも天下に並ぶ者がないほどでございます。でも、十七、八の頃の輝くばかりの色艶にくらべたら、どうしてもねえ」
房子はぐちるようにつぶやきながら、髪を梳りつづけた。
「お前はどうです。女子のはかなさを感じるような出来事がありましたか」
晴子はむっとしてやり返した。
幼い頃から一緒に暮らしているが、房子に男がいたという話は聞いたことがなかった。
「いやですよ。人をからかったりして」
房子が大いに照れて身をよじった。
「からかってなどいません。あんなことを言うからには、思い当たることがあるのでしょう」
「ここだけの話ですが、実は若い頃にいい仲になった人がおりました」

「へえ、いつ」
晴子は思わず子供の頃のような蓮っ葉な口をきいた。
勧修寺家の荒れ果てた庭で遊んでいた頃には、地下の娘と同じような言葉使いをしていたものである。
「ずっと昔、二十歳そこそこの頃です」
「相手は、どんな人」
「お屋敷に出入りしていた商人です。おかしいくらい生真面目な人でした」
「そう。それでは逢瀬もままなりませんね」
「いいえ。児までできたのですよ」
晴子は目だけを動かして房子を見た。
冗談かと思ったが、房子は仏さまのように鎮まった表情をして髪をすいていた。
「姫さまが七つの頃に、しばらくお休みをいただいたことがありましたでしょう。あの時、実家に戻ってお産をしてきたのです」
「そう。そうだったの」
確かに房子がしばらく側にいなかった時期がある。病気だと聞かされてずいぶん心配したものだが、まさかそんなことだとは夢にも思わなかった。

「それで、無事に産まれたの」
「はい。丈夫な男の子で、父親に引き取られていきました」
「三人で所帯を持てばよかったじゃありませんか」
「ずいぶん迷いましたけど、やっぱり諦めました」
「どうして」
「姫さまが宮さまのもとに上がられるという話が持ち上がったからですよ。一緒に上がってくれと、お父上に頼まれましたから」
「そう。わたくしはお前の運命まで変えてしまったのですね」
「そうですよ。ですから軽はずみなことは慎しんでいただかないと」
晴子が何を考えているか、房子にも察しがついているようだった。

同じく三月七日――。
武田勝頼らの一行は笹子峠のふもとの駒飼に移り、小山田信茂が迎えに来るのを待っていた。
六日に信茂から使いがあり、駒飼まで迎えに行くと知らせてきたが、七日の夕方になっても何の音沙汰もなかった。

笹子峠を越えれば、岩殿城までは三里ばかりである。
後方から織田軍がひしひしと迫っているだけに、早く早くと祈る思いで待ち受けていたが、日は甲斐もなく暮れていった。
（信茂、何をしておるのじゃ）
勝頼は心中の動揺をおし隠し、百姓家の座敷にじっと座っていた。
信茂とは三方ヶ原の戦いで共に戦ったことがある。
元亀三年十二月二十二日、信玄にひきいられた武田軍三万余は、浜松城の北方三里ばかりの所にある三方ヶ原に布陣した。
ここで尾張へと進軍する構えを見せ、徳川家康を野戦に誘い出す作戦だった。
この時殿軍を務めたのが小山田信茂である。
勝頼は五千の軍勢をひきいてその前を進み、敵が襲いかかってきたなら小山田勢と一手になって防戦する構えを取っていた。
三十一歳の家康は、まんまと策にはまった。
武田勢が三方ヶ原を下りかけた時、酒井忠次、本多忠勝らを先陣として猛然と攻めかかった。
勝頼は手はず通り小山田勢と一手になり、巧みに敵を防ぎながら三町ばかりも逃げ

た。

そうして徳川勢を平地におびき出した時、地に伏せていた二千ばかりの長槍隊が穂先をそろえて突撃した。

思わぬ伏兵にたじろぐ敵の側面を、台地の西側に回り込んだ内藤昌豊の軍勢が突いた。

このため徳川軍は総くずれとなり、家康は命からがら浜松城に逃げ帰った。

戦の後、信茂と勝頼はそろって戦功を賞され、大いに面目をほどこしたものだ。

「誰か。諏訪をこれへ」

待ち切れなくなった勝頼は、信茂の母を呼んで事情を確かめようとした。

天気は西からくずれているらしい。

鉛色の雲が空をおおい、風が次第に強くなっていく。樫や椎の大木が、新緑におおわれた梢を激しく揺らしていた。

「殿、諏訪の局さまのお姿が見えませぬ」

土屋右衛門尉が告げた。

「そんなことがあるか。今一度さがしてみよ」

「くまなくさがしましたが、どこにもおられませぬ。侍女たちは、ここに着いた直後

からお姿が見えないと申しております」

「まさか、諏訪が……」

脳裡に走った不吉な予感を、勝頼はあわててふり払った。

「信茂を呼びに行ったのかも知れぬ。明朝岩殿城に使者を立てよ」

夜明けを待って右衛門尉らが出かけて行ったが、結果は最悪だった。

信茂の手勢が笹子峠に関所を構え、鉄砲を撃ちかけて追い返したのだ。

勝頼はあまりのことに言葉もなかった。生死を共にしようと誓い合った舌の根も乾かぬうちに、どうしてこんなことができるのか……。

呆然としている勝頼の耳に、新たな知らせが飛び込んで来た。

「申し上げます。秋山摂津守さま、逐電なされました」

信茂と連絡を取っていたのだろう。岩殿城にこもるようにと勧めた摂津守が、百余人の家臣と共に夜の間に消え失せていた。

「北の方を呼べ」

真っ先に思い浮かんだのは、この先どうするかということではない。今のうちに北の方を北条家に送り返さねばならぬということだった。

ほどなく、北の方が初老の乳母に付き添われてやって来た。

「そなたも聞き及んでおろうが、小山田信茂が寝返った。ここまで招き寄せたのも、諏訪の局を盗み出すためだったのだ」

自分で口にしながらも、勝頼にはそれが事実だとはまだ信じられない。

親族を亡くした時のような衝撃性の酩酊状態におちいっていた。

「かくなる上は、もはや我らに生きる道はない。今日明日にも最期の一戦をとげ、主従ことごとく討死にする。されどそなたは女子の身ゆえ、我らと共に自害するには及ばぬ。幸いここより小田原へは、道順もよく里程も少ない。屈強の者を選んで送らせるゆえ、急ぎここより立ち退いてくれ」

勝頼はひと息に言い切り、形見の脇差を差し出した。

「そなたはまだ若い。私のことなど気にかけずに、今度は甲斐性ある男のもとに嫁いでくれ。そなたが幸せになることが、私にとって何よりの供養なのだ」

「このような品を、受け取るわけにはまいりませぬ」

北の方はそっと脇差を押し返した。

「勝頼さまが兄と手切れをなされた後も武田家に残りましたのは、夫婦の縁をまっとうしたかったからでございます。今さらつれない言葉を聞くくらいなら、この場で死ねと言われたほうが嬉しゅうございます」

「この間は腹立ちまぎれに無体なことを言ったが、今度はそうではない。そなたを大事と思えばこそ、生き延びてくれと頼むのだ」

「勝頼さまのいまさぬ世に、わたくし一人が生き延びたとて何の甲斐がございましょう。夫婦は二世の契りと申します。この地で共に自害して、後の世までもお仕えしとうございます」

「聞きわけのないことを言ってくれるな。乳母にも重臣たちにも見捨てられたこの私だ。愛想づかしのひとつも言ってくれた方が、いっそせいせいするだろうに、そのように情け深いことを言われては、私は……、私は己れの無力が歯がゆうてならぬ」

感情の熱いかたまりが喉元までせり上がり、勝頼は涙を抑えきれなくなった。

この正月、今年こそは子を成そうと誓い合った二人である。

寝屋の睦言に明るい希望の数々を語り合い、至福の一刻を過ごしたというのに、無情の風の何と足早なことか……。

「殿、方々が庭先でお待ちでございます。ご下知を下されますよう」

土屋右衛門尉が迎えに来た。

下知せよと言われても、たった五十人ばかりではどうしようもない。こんなことになるくらいなら、どうして新府城で華々しく散らなかったかと、今さらながら悔やま

れた。

庭先に集まった忠義の者たちは――。

土屋右衛門尉、舎兄金丸助六郎、舎弟秋山源三、跡部尾張守、河村下総守、安西伊賀守、安部加賀守、小山田式部少輔、小宮山内膳、小原下総守、秋山紀伊守、弟善右衛門、神林刑部少輔、多田久三。

一門の者は勝頼の嫡男太郎信勝、従弟で大龍寺長老の麟岳和尚ばかりだった。

信勝は勝頼の先妻の子で、名目上は織田信長の孫に当たる。

弱年ながら剛気な性格で、新府城にこもって戦うべきだと言い張っていたが、織田の縁者なので無理押しすることをはばかったのである。

「よくぞ今日まで従ってくれた。皆に礼を言う」

勝頼は縁側に座ってねぎらいの言葉をかけた。

「だが、もはや当家の命運は尽きた。この上は攻め来る敵とひと戦して討死にしようと思うが、皆に従えとは言わぬ。非常の金子を分つゆえ、生きる道を求める者は遠慮なく立ち去ってくれ」

右衛門尉が三千両の黄金を縁側に置いたが、誰も手をつける者はいなかった。

「そうか。ならばこの金子は不用じゃ。大善寺に送って、我らの菩提をとむらっても

らうこととしよう」

問題はどこで最期の一戦をするかである。

小山田信茂の縁者である式部少輔は、笹子峠を越えて岩殿城へ向かうべきだと言った。いかに信茂でも、勝頼自ら馬を進めれば弓を引くようなことはするまいというのである。

「いや、それはなりませぬ」

異をとなえたのは秋山紀伊守。昨夜逃亡した摂津守の縁者である。

日川の奥、天目山栖雲寺こそ最期の地にふさわしいという。途中には秋山摂津守の所領があるが、紀伊守は自分が交渉すれば必ず通してくれると請け負った。

他の者もこの意見を支持し、天目山へ向かうことになった。

その頃、北の方は北条氏政に別れの文をしたためていた。

髪を少し切って文の上巻きに添え、

黒髪の乱れたる世ぞはてしなき
　思ひに消ゆる露の玉の緒

歌一首に万感の思いを込めて小田原へ送った。

異変が起こったのは、翌日の昼過ぎだった。

日川ぞいの細い道を天目山に向かっていた一行の前に、旗印もない二千ばかりの軍勢が立ちはだかった。

このあたり一帯を領する秋山摂津守、大熊備前守、甘利左衛門尉らが、勝頼を討ち取って降伏の手みやげにしようと蜂起したのである。

長年武田家の禄を食んでおきながら、ひと言の挨拶もなく鉄砲を撃ちかけてくる。

秋山紀伊守は鎧兜を脱ぎ、使者の証として竹竿の先に笠をかかげ、

「秋山摂津守どのに御意を得たい。殿は天目山にたてこもり、織田の軍勢と最期の一戦をしたいと望まれておる。武士の情けでござる。何とぞお通し下され」

ただ一人進み出て大音声に呼ばわったが、返答は鉄砲の一斉射撃だった。

紀伊守は全身を蜂の巣のように撃ち抜かれ、血を噴きながらあお向けに倒れた。

「殿、お退き下され」

土屋右衛門尉ら数人が、勝頼の前に並んで楯となった。

少し下流に小高い山がある。日川の本流と支流に左右をはさまれ、頂きには小さな社が建っていた。

「あれがよい。あそこで敵を待ち受けようぞ」

主従五十余人、女たちを守りながら山に上がった。

田野という集落の氏神を祀った社だった。

摂津守らの軍勢は、すぐに攻めかかろうとはしなかった。

さすがに恥を知ったのか、それとも織田軍の到着を待っているのか、山を遠巻きにしたまま様子をながめている。

勝頼は境内の周囲に柵と楯を巡らすように命じ、社のまわりにうずたかく枯れ木を積み上げさせた。

三月十一日の早朝――。

滝川一益がひきいる三千ばかりが、川ぞいの道を長々と連なって登って来た。案内に立っているのは、小山田信茂の家臣たちである。

相手は無勢とあなどっているのか、警戒する様子もなく続々と詰めかけ、左右の川ぞいに散開して武田勢を取り巻いた。

これに呼応して秋山摂津守らの軍勢が背後の山の尾根に上がり、一人も逃がすまいと待ち構えていた。

空は快晴で、川ぞいには山桜が雲を散らしたように咲いている。

勝頼は緋おどしの鎧をまとい、十文字槍を手に敵を見下ろしていた。

心残りは多かった。

いったいどうしてこんなにみじめな有様になったのか。ふた心ないと誓った重臣たちが、なぜこんなにもやすやすと自分を裏切るのか。

それがどうしても納得できない。まるで質の悪い狂言でも見ているようだった。

「お前が言った通り、新府城にこもるべきだったな」

側に控えた信勝に声をかけた。

織田の縁者であることがうとましくて、これまで突き放した扱いしかしてこなかった。そのことをわびておきたいと思った。

「今さらおおせられても、詮方ないことでございます」

信勝はにこりともしなかった。

父の失策に対する軽蔑と冷たい扱いへの反感が、胸の内で根雪のようにこりかたまっていたのである。

突然、三方から銃声が上がった。

ふもとから鉄砲を撃ちかけながら、滝川勢がいっせいに攻め登ってきた。

武田勢も二十挺ばかりの鉄砲で応戦した。

弾は一発の無駄もなく命中したが、滝川勢は委細かまわず柵まで押し寄せて来た。

勝頼の首を取って手柄にしようと、柵を乗り越えて境内に飛び込んで来る。

「末森五郎高綱、見参」

名乗りを上げて挑みかかってくる敵を、勝頼は一撃で倒した。十文字槍を片手で軽く横にふると、相手の首は胴を離れて高々と宙に舞った。

群がる敵が怖気づいて二、三歩下がったほどの凄まじい槍術だが、武田家屈指の使い手である勝頼には、こんなことは朝飯前だった。

「どうした。この首取って手柄とせよ」

勝頼は二間の槍を軽々とふり回し、敵の中に斬り込んでいった。

進むたびに血しぶきが上がり、敵は断末魔の叫びを上げて地に沈む。

十人二十人と巻き藁のように倒されると、滝川勢はわっと逃げ散り、腰を引いて遠巻きにした。

その輪の中に、信勝が負傷した足を引きずって駆け込んで来た。

「父上、これにておいとま申し上げます」

「後先なく果てる命。いとま乞いなど無用じゃ。深手ならばここにて腹を斬れ。浅手ならばいま一度敵に駆け入って討死せよ」

勝頼が突き進んで手本を示すと、信勝もおめき声を上げながら斬り込んでいった。

「殿、我らがしばし防ぎまする。社に下がってご自害なされよ」

土屋右衛門尉ら十人ばかりが、肩で息をつきながら楯となった。
勝頼は高床式の社まで下がった。
中では北の方が侍女たちと自害の時を待っていた。
白装束に着替え、懐剣を手にして強張った表情をしている。
まわりに積み上げた枯れ木に火が放たれ、壁板の間から煙が流れ込んでいた。
「さらばじゃ。これまでよう仕えてくれた」
勝頼は鎧の胴を脱ぎ、切腹の座についた。
「お待ち下さい。ひと言申し上げたきことがございます」
北の方はいつの間にか髪を下ろし、薄墨色の頭巾をかぶっていた。
「何じゃ。手短に申せ」
「身ごもりました」
「なに……」
「やや児ができたのでございます」
勝頼は絶句した。
あまりに思いがけないので、とても事実とは聞こえなかった。
「ひと月ほど前に気付いておりましたが、戦の妨げにならぬようにと伏せておりました。しかし、何も告げぬままお別れするのも勝頼さまをあざむくようで心残りが多く、この世ならざる身となってお話し申し上げることといたしました」
「そうか。それゆえ」
寝屋の供をこばんだのだ。
そうとも知らずに罵声をあびせたことが、悔やんでも悔やみきれなかった。
勝頼は北の方を抱き寄せ、大きな手を腹に当てた。
「よくぞ今日まで耐えてくれた。身重の体で城を落ちるのは、さぞ辛かったであろう。心細いことであったろうな」
「いいえ。勝頼さまのお側にいられるだけで、幸せでございました」
北の方が震えながら体をあずけた。
勝頼は脇差の切っ先を、北の方の胸に当てた。
このまま乳房の下を貫けば、楽にしてやることができる。だが幼い妻と芽ばえたばかりの我が子の命を絶つのは、あまりにも不憫だった。
国などいらぬ。家など滅びても構わない。
親子三人暮らしていかれる所があれば、どれほど幸せだろう。もはやかなわぬ夢ながら、勝頼は痛切にそう願った。

「貴子、来よ」

勝頼は北の方の手を取って社の階段口に立った。

五間ほど先では、右衛門尉らが血まみれの槍を握りしめて敵をはばんでいた。

「滝川勢の大将に申し上げる」

境内中に響き渡る大音声に、干戈の音がぴたりとやんだ。

「武田の四郎勝頼、この通り降伏申し上げる。生け捕りにして信長公の面前に引き据えられるがよい。されど、これなる北の方の一命ばかりは、何とぞお助けいただきたい」

兜を脱ぎ、北の方をかばいながら階段を下りた。

「殿、未練にござるぞ」

右衛門尉が制止しようとした。

その手を押しのけて進んだが、我に返った滝川勢が先を争って殺到し、二人はたちまち刃の渦に巻き込まれた。

勝頼、行年三十七歳。

北の方、十九歳。

二人に殉じた侍は四十一人、侍女は五十人であったという。

第十一章　恵林寺焼き討ち

三月十四日――。

精鋭七万をひきいた織田信長は、巳の刻過ぎに治部坂峠にさしかかった。

標高およそ四百丈。伊那谷の入口を扼する峠からは、雪をいただいて畳々と連なる信州の山々を見渡すことができた。

左手には恵那山から駒ヶ岳へとつづく山脈。右手のはるか遠くには赤石岳や仙丈ヶ岳がそびえている。

信長はしばし馬を止め、眼前に広がる雄大な光景に見入っていた。

かつて武田信玄が治めた国が、今や我が手に入ったのだ。この見渡す限りの山々が、すべて織田家の所領である。

何より空が良かった。

空気が澄みきって、果てしなく高い。真っ青な空を背景にして白い頂きが連なるさ

まは、荘厳な神々しさに満ちていた。

「お蘭、甲府はどっちじゃ」

「あれなる赤石岳のかなたでございます」

森蘭丸が絵図を示した。

いったん伊那谷を北に向かい、諏訪を経て甲府を目ざす。大山脈を迂回する五十里ちかい行程だった。

「信玄坊主は、このあたりで没したと聞いたが」

「この先の駒場だそうでございます」

三方ヶ原の戦の後に病が悪化した信玄は、甲府に引き揚げる途中に駒場で没した。治部坂峠から四里ほど北である。瀕死の身を輿に横たえながら、信玄もこの峠を越えたのだ。

陽が中天にかかる頃には、ふもとの浪合村に着いた。

四方を山に囲まれたすり鉢の底のような地形である。無理をすれば今日のうちに駒場の宿までたどり着けたが、信長はここで兵馬の足を休めることにした。

武田勝頼を討ち取ったという報は、昨日の夕刻に受け取っている。後の処理も信忠がそつなくこなしているので、先を急ぐ必要はまったくなかった。

昼食の後、信長は弥助を呼んで腰をもませた。

昔はいくら強行軍をつづけても疲れたことなどなかったが、近頃はさすがにこたえる。山道の登り下りには両膝で鞍をしめつけるので、腰と太股がひどくこっていた。

弥助はすらりと伸びた長い指で、こり固まった筋肉をほぐしていく。力は強いが指の当たりが柔らかいので、強すぎず弱からず、実に心地のいい指圧ぶりだった。

「もう一年になるな」

信長はうつぶしたまま声をかけた。

「はい。あっという間でございました」

信長に仕えるようになってから、弥助はますます日本語が上達している。いつの間にか読み書きまで身につけていた。

「信濃の国はどうじゃ。気に入ったか」

「このように山深き所は初めてでございます」

「そちの国は確か……」

「モノモタパ王国でございます」

「そこはどのような所じゃ」

「かつて我々の先祖は、北はザンベジ川、南はリンポポ川にまたがる広大な所領を治

めていました。国の西側には黄金やルビーを産する豊かな高原があり、東側はインド洋に面した平野が広がっていました。ソファラという大きな港があり、商人たちがペルシアやインドまで渡って交易を行なっていたそうでございます」

遠い故郷に思いを馳せたのか、弥助はわずかの間手を止めた。

「ほう。インドとはずいぶん離れていたようだが」

信長はメルカトルの世界地図を頭の中で思い描いた。

弥助の国からインドまでは、日本からインドに行くほど離れていたはずである。

「あのあたりでは、四月から九月にかけて南西の強い風が吹きます。この風に乗ってペルシアやインドに向かい、十一月から三月にかけて吹く北東の風に乗って国に戻って来るのでございます」

この航路はすでに五百年以上も前から開かれていた。

その証拠に宋の国で作られた磁器が、モノモタパの遺跡から出土するのである。

「明国の永楽帝の頃には、鄭和という将軍がひきいる大艦隊がインドやペルシアを訪れましたが、その一部はソファラの北方にあるマリンディという港まで達しています。ポルトガルやイスパニアの者たちは、この航路を利用してインドに達したのです」

バスコ・ダ・ガマがインドに到着した十一年後の一五〇九年、ポルトガルの艦隊は

インドのディウ沖の海戦でイスラム教国の連合艦隊を破り、インド洋交易の支配権を確立した。

それ以後インド洋沿岸の港に要塞を築いて交易の支配を強化し、港の周辺の国々の内紛に介入して植民地と化していった。

モノモタパ王国もこのような手口で支配下に組み込まれ、王族の末裔である弥助は奴隷として売り飛ばされる運命をたどった。

「ヴァリニャーノはアメリカ大陸を手に入れよと申したが」

信長はあお向けになって足をもませた。

「そちはどう思う。アメリカまで渡るには、よほど頑丈な船を作らなければなるまい」

「以前にも申し上げましたが、イスパニアに勝つためにはガレオン船や大砲を作らなければなりません。海を渡るための航海術も必要です。まずは彼らと交易して、そうした知識を学ぶべきでございましょう」

「うむ。余もそう考えてはいるが……」

やがては安土セミナリヨのような学校を日本中に作り、有為の若者に西洋の学問や技術を学ばせる。その後にイスパニアやオランダに派遣するつもりだったが、今はま

だ緒についたばかりである。

ガレオン船や大砲を作れるようになるまでどれほど時間がかかるのか、予測さえつかなかった。

「このような有様では、やがてこの国も西洋人どもに攻め取られるかも知れぬ。そうは思わぬか」

「あの者たちは残忍で貪欲で恥知らずです。黄金や財宝を手に入れるために、アステカやインカ、マヤの国々を滅ぼしました。私の国もインドもバタビアもルソンも、彼らの獰猛な爪に引き裂かれています。つけ入る隙さえあれば、この日本にも必ず食指を伸ばしてくるでしょう」

もし日本が彼らに支配されたなら領民はどうするか、信長には容易に想像がついた。

今の甲斐や信濃と同じである。申し訳程度の抵抗をした後で、なだれを打って彼らの軍門に下るに決まっていた。

日々つつがなく暮らすことさえできれば、上に立つのが武田だろうが織田だろうが、あるいはイスパニア人だろうが構わない。この国の民には、そんな開き直ったような太々しさがある。

しかもその時には、朝廷が真っ先に範を示すことになるだろう。

時の権力者にかつがれることで命脈を保ってきた朝廷の姿は、下々の民の臆面もない太々しさと不思議なほどに重なり合う。

信長にはそれが許しがたかった。

これまでひたすら天下統一を急いできたのは、そうした事態をさけねばならぬという焦りのせいかも知れなかった。

「戦って勝てぬとすれば、どうすればよい」

信長は低くつぶやいた。

弥助に問うたのではない。胸にわだかまる気がかりが、焦燥のあまりつい口をついたのだった。

「あの者たちは交易とキリスト教の布教によって他の国に近づき、政情の混乱を待って内紛を起こさせます。その時一方の勢力に加担して恩を売り、内紛に勝った後には意のままにあやつるのです」

モノモタパ王国がポルトガル人に滅ぼされたのも、そうした手口に乗せられたからだという。

「それはこの国の戦でも同じじゃ。一枚岩となった相手は、容易にはくずすことができぬ」

「それゆえ国を閉ざしてあの者たちの来訪を禁じ、つけ入る隙を与えないことです。そうすれば戦わずとも国を守ることができましょう」

「それでは籠城と同じじゃ。しばらく身を守ることができたとしても、やがては攻め落とされることになる」

国を閉ざしている間に、世界は長足の進歩をとげていく。ガレオン船や大砲はますます強力になり、西洋人の勢いはさかんになって、今とはくらべものにならない力で押し寄せて来るだろう。

そうなってからでは遅い。危険をおかし無理をしてでも、今のうちに西洋人に比肩しうる力を身につけなければならなかった。

「そちはどう思う。天下統一を終え、国の総力を結集して事に当たったなら、イスパニアに追いつくことができようか」

「恐れながら、無理だと存じます」

「何ゆえじゃ」

「この国の民は勤勉で頭が良く、礼節もわきまえています。西洋の学問や技術を身につけたなら、富み栄える国を築くことにおいてはイスパニアにひけを取りますまい。しかし、どうしても追いつけないものがひとつだけあります」

弥助は足をもむ手を止め、信長をじっと見つめた。

大黒天のように黒い肌が、つややかな光沢を放っている。二重まぶたの大きな目が美しく澄んでいた。

「気がねなど無用じゃ。申してみよ」

「キリスト教です。カトリックとプロテスタントという対立こそありますが、西洋人はキリスト教という共通の精神的基盤を持っています。それゆえ異教徒に対しては結束して対処しますが、神道を信じているのは、広い世界の中で日本人ばかりです」

帝を中心とした神道の国である限り、日本人は宗教的な孤児にならざるをえないというのである。

その危険は信長もうすうす感じていた。

吉田兼和とヴァリニャーノに宗論を命じたのも、この先海外に進出していくためには神道とキリスト教のどちらが有効かを見極めたかったからだ。

日本もキリスト教を国教とし、ローマ教皇の庇護下に入って海外進出の大義名分を得た方が得策なのか。

それともあくまで朝廷の権威を利用して国内の結束を図り、神道的世界の拡大を旗印にして打って出た方がいいのか。

宗論の中からその答えを見出そうと思ったが、ヴァリニャーノに敗れることを怖れた兼和らは、喪中などという口実を構えて出席を拒否したのである。

「上様、ただ今岐阜中将さまのご使者が、武田勝頼どの、ならびに信勝どのの御首を持参なされました」

蘭丸が敷居ぎわに平伏して告げた。中庭に検分の座をしつらえているという。

信長は近衛前久を従えて中庭に出た。

首板の上に勝頼の大きな首と年若い信勝の首が並んでいた。

「ほう。これほど大柄な奴であったか」

首を見れば身の丈の察しはつく。おそらく六尺ちかい偉丈夫だったはずである。

感心したのはそのことばかりで、死相は見るに耐えなかった。

この世への未練と執着に泣き狂わんばかりである。何万もの軍勢を動かす者としては、あまりに不様な往生際だった。

「近衛、覚えておけ。このような死に面をさらす奴が、国を滅ぼすのじゃ」

「それに比して、信勝どのは見事でございますな。織田家の血筋ゆえでございましょうか」

前久が冷ややかに応じた。

信勝を跡目として武田家を存続させる、という約束が反古にされたことに腹を立てている。追従とも聞こえる言葉の裏には、姪の子である信勝を死なせたことへの痛烈な皮肉が込められていた。

信長の頭は怒りにカッと熱くなったが、相手は帝の名代である。さしたる理由もなく斬り殺すわけにはいかなかった。

「上様、この御首をいかがいたしましょうか」

蘭丸が気づかって間に入った。

「信玄坊主も勝頼も、都に上ることを積年の宿願としておった。せめて首なりとも上洛させ、都の者たちにおがませてやれ」

これは同情ゆえではない。武田家びいきの朝廷への意趣返しと、意に従わねばこのようになるという脅しだった。

三月十八日、信長は高遠城に立ち寄り、翌十九日に上諏訪の法花寺に入った。

すぐ横にある諏訪神社上社は、信忠軍によって跡形もなく焼き払われていたが、寺だけは陣所とするために無傷のまま残されていた。

寺と境内との間には、数本の巨木が黒く焼け焦げて突っ立っている。諏訪神社の神が宿る御柱だった。

信長はしばらくここに腰を据えて采配をふるうことにし、各将に陣取りを命じた。総勢七万。色鮮やかな旗指物と最新の武具を備えた堂々たる陣容は、甲斐、信濃の武士たちを威圧するに充分だった。

翌日、滝川一益にともなわれて木曾義昌が訪ねて来た。帰服を許されたお礼に、見事な馬体の木曾駒二頭を献上した。

信長は重臣たちの前で義昌と対面し、ねぎらいの言葉をかけ、秘蔵の名刀と黄金百枚を与えた。

「木曾どのの忠節を賞し、本知二郡に加えて安曇、筑摩の二郡を新知行地として下されます」

蘭丸が告げると、義昌は安堵のあまり床に突っ伏して礼を言った。

「なお、滝川左近将監どのには、上野一国と佐久、小縣の二郡を下されます」

石高にしておよそ四十万石。それが武田勝頼らを攻め滅ぼした滝川一益への恩賞だった。

義昌が退出すると、戦勝祝いの酒宴となった。

広々とした本堂に、重臣たちが二列になって居流れている。

「一益、年寄ってからの遠国暮らしはこたえようが、東国を束ねる者はそちしかおらぬ。励んでくれ」

信長は一益を呼び寄せ、手ずから盃を渡した。

「この身は上様に差し上げたものでございます。老骨ではござるが、いかようにもお使い下され」

一益は感極まった様子で盃をおしいただいた。

やがて無礼講の酒宴となった。

重臣たちはまわりの者たちと盃をやり取りし、気軽な雑談にふけっている。

間近の席では、近衛前久と明智光秀が肩を寄せ合うようにして話し込んでいた。

光秀は若い頃に足利義輝に仕え、前久ともその頃から面識がある。都の文化や教養にも通じている。

それだけに話もはずむようだが、信長には何となく面白くなかった。

原因は嫉妬だった。

五十五歳になる光秀が、まるで親でもしたうように前久に寄りついている。

信長には決して見せたことのない信頼しきった表情と打ちとけた笑顔。都の空気を共有する者同士の濃厚な仲間意識……。

それが信長の鼻につく。

だがこんなことで腹を立てるのは大人気ないので、好きでもない酒をちびりちびりなめながら我慢していた。

ほころびかけた堪忍袋の緒を引きちぎったのは、光秀の不用意な一言だった。

「やがて天下統一が成ったなら、朝廷のご威光も津々浦々に行き渡りましょう。我らも苦労した甲斐がございました」

信長の動きは風のように早かった。

光秀の前に仁王立ちになり、怒りに血走った目でにらみ据えると、

「光秀、今何と申した」

甲高い声を上げて高足膳を蹴り上げた。

酒肴を盛った器が音を立てて飛び散り、本堂は墓場のような静けさに包まれた。

「苦労した甲斐があっただと。そちごときが、どんな苦労をしたというのだ」

光秀は青ざめたまま黙り込むばかりである。

「たわけが。言わぬか」

信長は正面から顔を蹴った。

光秀は真後ろにのけぞり、柱に背中を打ち当てて横に倒れた。

「上様、ご無体が過ぎまする」

堀秀政が見かねて制止しようとした。

「無礼者、下がっておれ」

信長は秀政を蹴り飛ばし、光秀のえり首をつかんで廻り縁に引きずり出した。

「よいか光秀。このきんかん頭にようく叩き込んでおけ。余は朝廷ごときのために天下を統一するのではない。この国を守らんがためだ。朝廷の威光を津々浦々に広めたいのなら、余を倒して天下を取れ。分ったか」

信長は光秀のもとどりをつかんで欄干に顔を打ちつけ、ぼろくずのように庭に蹴り落とした。

腹が立つのは、前久に対してである。

数日前の皮肉といい、今日の取りすました態度といい、目に物見せずにはいられない。

だが前久に手を上げるわけにはいかないので、憤懣のはけ口を光秀に求めたのだった。

同じ頃――。

織田信忠は甲府の躑躅ヶ崎の館にいた。

武田勝頼が本拠を新府城に移してからは廃城同然となっていたが、新たに手を入れて本陣としたのである。

東西百五十六間、南北百六間の広さの連郭式の平城で、周囲には幅三間ばかりの堀を巡らしてある。

構えは小さかったが、いたるところに信玄らしい防御の工夫がほどこされていた。

七日に甲府に入って以来、信忠は主殿の書院に引きこもり、家臣たちとの対面を極力さけていた。

今や信忠の名声は四方にとどろいていた。

高遠城での奮戦ぶりや、一戦も交えることなく勝頼を新府城から追い出した手腕は、若き日の信長のようだと評されていた。

その評価をさらに高め、将兵たちから神のごとくあがめられるためには、軽々には姿を見せないことだ。

一挙手一投足にも重々しい演出と、もっともらしい理由づけが必要だということを、信忠はようやく理解していた。

（勝った）

信忠は日に何度となくつぶやいた。

無事に大役を果たしたという安堵は大きい。手に入れたものも多い。だが、心の中には相変わらず空しい風が吹きつづけていた。

武田攻めの総大将に任じられた時から、己れを捨てて父の意に従うと決めた。それが間違っていなかったからこそ、こうして大功を立てることができた。

それなのに、なぜ空しいのか。

信忠には分らなかった。こうした感覚におちいったのは初めてなので、どう言い表わせばいいかも、どう身を処すればいいかも分らなかった。

信忠はじっと鏡を見つめることがあった。

映った顔は精悍さを増し、威厳に満ちている。

（お前はもう以前の信忠ではない。五万の大軍の上に立つ男なのだ）

仮面をかぶれと己れに言いきかせた。

生涯をかけて織田家の跡継ぎを演じるほかに、生きる道はないのである。

「殿、徳川家康どのがまいられました」

近習がそう告げた。

徳川家康は穴山梅雪を従えて下段の間に控えていた。

二人とも甲冑姿で平伏している。

信忠は上段の間につき、姿勢を楽にするように勧めた。

「こたびの勝ち戦、祝着至極に存じまする。こちらに控えおりますのが、穴山信君でございまする」

家康は四十一歳になって円熟味を増している。臣下の礼を取ってはいるが、振る舞いに一本筋が通っているので、少しも卑屈な感じがしなかった。

穴山梅雪は僧形に頭をそり上げた、四十がらみの武将だった。

「お二方とも参陣大儀にござる。お陰をもちまして、甲信両国の仕置きも大過なく終えることができました」

信忠はひどく丁重だった。

家康は織田家の家臣ではなく同盟者である。失礼な言辞をろうして不興をかうようなことがあってはならないと、ひそかに身構えていた。

「信忠卿の眼力には感服つかまつりました。高遠城をひと息に攻め落とされた手腕といい、信濃、甲斐に諜者を放って土豪や地侍を身方につけられた深謀といい、織田家の世継ぎにふさわしいお働きでございました」

「過分のお言葉、恐れ入ります。武田を新府城から追い落とすことができましたのも、お二方が駿河口から兵を進められたからでございます。父信長になり代わり、厚くお

礼申し上げます」

「ありがたきおおせなれど、我らが駿河口より兵を進めたのは、信忠卿のご下知に従ったまでのことでござる。北と南より息を合わせて攻め込まねば、あのように鮮やかに敵を追い落とすことはできませぬ」

誉め言葉に心地よく自尊心をくすぐられながらも、信忠は家康の本音がどのあたりにあるのか冷静に見極めようとした。

三月二日に高遠城を攻め落とした直後に、信忠は家康に甲斐に出陣するように求めている。

北と南からはさみ撃ちすれば、武田家の混乱はいっそう激しくなると見たからだが、そんな使いなど出さなくても、家康なら出陣の時期を誤ることはなかったはずだ。

それなのになぜこれほど下手に出て持ち上げるのか。

今のうちに取り入って良好な関係を築こうとしているのか、それとも何か別の魂胆があるのか……。

必死で思い巡らしているうちに、信忠は奇妙な感覚にとらわれた。

返すべき言葉とは反対の考えが、頭の中であぶくのようにふくれ上がり始めたのである。

「そうだとも。この私の確かな眼力があったからこそ、お前たちは何の抵抗も受けずに甲斐に馬を進めることができたのだ」

傲然と言い放ったなら、家康はどんな顔をするだろう。そう思うと奇妙な笑いがこみ上げ、言ってはならない言葉が次々と思い浮かんだ。

中でも極めつけは築山御前のことだった。

家康は今川義元の姪を妻にし、嫡男信康をもうけた。ところが武田勝頼と内通しているという疑いを持った信長は、家康に二人を殺すように命じたのである。

これはおそらく、家康の本心を確かめるために信長が仕組んだことだろう。だが家康は一言の弁解もせずに妻と子を殺したのだ。

武田家が滅んだ今、三年前のあの事件について家康がどう思っているか、是非ともたずねてみたい。

「女房子供を殺してまで所領を守ることが、はたして見事な生き方と言えますかね。しかもそれを命じた父上に臆面もなくひれ伏すとは、いったいどんな神経をしておられることやら」

そう言ったならこの場にどんな波風が立つか試してみたい。魔の誘惑にそそのかされそうで、信忠は固く口を閉ざしていた。

「穴山どのはこれより信長公のご陣所にお礼言上にまいられます。その前に信忠卿にご挨拶をと申されますので、ご案内いたしました」

信忠の胸中を知ってか知らずか、家康がそつなく話題を変えた。

「このたびはご陣に加わることをお許しいただき、まことにありがとうございました」

梅雪が深々と頭を下げた。

信玄の甥で娘聟という二重の縁で結ばれていながら、土壇場で勝頼を裏切った男である。

鼻の左側に小指の先ほどのいぼがあり、顔全体がひどく卑しく見える。あるいは裏切り者という先入観が、そんな印象を抱かせるのかも知れなかった。

「新参者ではございますが、次なる戦には手勢五千騎をひきいて先陣をうけたまわる所存にござる。何とぞよろしくお引き回しいただきたい」

「武田家をかくもやすやすと攻め滅ぼすことができましたのは、穴山どののご忠節があったからでございます。当家としても、決して粗略な扱いはいたしませぬ」

「かたじけないお言葉、いたみ入ります。これは心ばかりのお礼の品でございます。何とぞお納め下されませ」

梅雪が折敷にのせた黄金二百枚を差し出した。
甲州は金山に恵まれている。
信玄の努力によって、製錬技術も他国とは比較にならないほど進んでいる。
二百枚の黄金は、まぶしいばかりの山吹き色に輝いていた。
「お心づかいはかたじけのうござるが、これは父の陣所にご持参なされるがよい」
「信長公への進物は、別に用意がございまする。ご拝顔の栄に浴したお礼に、何とぞ」
（おのれのような薄汚ない奴から、びた一文もらえるか。この馬鹿が）
信忠はそう怒鳴りそうになり、あわてて口を押さえた。
そつなく振る舞おうとすればするほど、隠した本音が口をついて飛び出しそうになる。
腹に隠れたいたずらな子猫が、胸元や袖口から顔を出そうとする。
それを抑えようと気を張っているうちに、信忠のこめかみがぴくりぴくりと震え始めた。
「穴山どの。貴殿の参陣は、徳川どののお口添えと父の許しがあったゆえにかなったものでござる。私の立場としては、父より先に礼物を受け取るわけにはまいりませぬ。信濃路の日暮れは早うござる。ご遠慮は無用でござるゆえ、急ぎ父の陣所にまいられるがよい」

信忠はせき立てるようにして二人を下がらせた。
書院に戻って一人になると、信忠は手足を長々と伸ばしてあお向けになった。
いつになったら、こんなことに馴れるのだろう。どうしたら家康のように、怨み重なる相手に平然と頭を下げることができるのか。
（目的のために、己れを殺すことだ）
日々己れを殺し、鉄面皮をまとっていく。それ以外には考えられなかったが、はたして己れを殺してまでやり遂げるべき目的がこの世にあるだろうか。
そう自問してみて、信忠ははたと壁に行き当たった。
本音を隠して生きようとしているうちに、自分がどう生きたいのかさえ分らなくなっていた。
「殿、小山田信茂どのがまいられました」
「小山田……」
「岩殿城のご城主でございます」
これまた土壇場で勝頼を裏切った男だった。
（許してやろう）

相手は身ひとつで降伏の挨拶に来ているのだ。ここで度量の広いところを見せれば、甲斐の領民も安心して織田家に服するだろう。

かけるべき言葉をいくつか思い巡らしながら、信忠は対面の場にのぞんだ。

信茂は一人ではなかった。

母親らしい七十がらみの老女と、信忠と同年くらいの妻、それに二人の子供を連れていた。

「小山田信茂にございまする。ご拝顔の栄に浴し、恐悦至極に存じまする」

五人そろって平伏し、形通りの挨拶をした。

「我らが身を信忠卿のご差配にゆだねるべく、家内うちそろって参上いたしました。ご参陣をお許しいただけるなら、次なる戦場にて先陣をうけたまわり、ご恩に報じる覚悟にございます」

信茂は丸いふくよかな顔立ちをした四十半ばの武将である。母親の諏訪の局とは、瓜二つと言えるほどよく似ていた。

「家内総容でまいるとは、よい心がけじゃ。参陣をさし許すゆえ、忠節を尽くすがよい」

「ははっ。ありがたき幸せに存じまする」

「勝頼はそちの城を頼って、最期の一戦をするつもりであったと聞いたが」

「おおせの通りでございます」

「愚かな主とはいえ、袂を分つには苦しみも多かったことであろうな」

信忠は用意してきた優しい言葉をかけた。

信茂が御意と答えたなら、気を取り直して織田家に仕えよと励ましてやるつもりだったが、信茂の返答は意に反して素っ気ないものだった。

「恐れながら、勝頼どのは信玄公の偉業を継ぐ器ではございませなんだ。このような形で国を失うのも、自業自得でございましょう」

「ほう。偉業を継ぐ器とはいかなるものかな」

信忠は急に冷えた目をした。

お前には信長の後を継ぐ器量がない。なぜかそう言われた気がした。

「これは出過ぎたることを申しました。平にご容赦下されませ」

「謝らずともよい。偉業を継ぐ器とはいかなるものか、教えてもらいたいばかりじゃ」

「他国のことは存じませぬが、勝頼どのにはいくつかの失策がございました。新府城の普請といい、北条家との手切れといい、家運を傾けることばかりでございました。

器ではないと申し上げたのは、そのことを指してのことでございます」

信茂は額に脂汗を浮かべて弁解したが、信忠の不興をなだめることはできなかった。

「高遠城の小山田兄弟は、最期まで盛信を守って戦いつづけた。床に突き立てた槍を握りしめ、死してなお主君の楯となろうとした。この二人の忠節にくらべ、勝頼に対するそちの仕打ちはどうじゃ」

「……」

「己れの城にこもられよと誘い出しておきながら、三日も四日も山野をさまよわせ、挙句の果てに鉄砲を撃ちかけて追い返したそうではないか」

信忠は急に勝頼が哀れになった。

勝頼とて信玄に負けまいと必死の努力をしただろうに、やることなすこと裏目に出て、股肱の臣にまで次々と裏切られた。

その無念や悔しさを思うと、目の前の信茂が許しがたい仇敵のように見えてきた。

（いかん。落ち着け）

信忠は必死に冷静さを保とうとした。

今は人心の動揺を抑えることが先決である。懐に飛び込んで来た窮鳥を撃つようなことをしてはならない。

頭では分っているものの、腹に隠れた子猫はいつの間にか虎になり、凶暴な牙をむいていた。

「信茂、そちは勝頼の乳兄弟、そこなる母親は乳母であろう」

「おおせの通りに……」

「そのように親しき主をだまし討ちにしておきながら、よくも偉業を継ぐ器ではなかったなどと言えたものだな。武田家を滅ぼしたのは勝頼一人の罪ではない。そちのような不忠の臣が、かくもみじめな敗北を招いたのじゃ」

「恐れながら申し上げます」

信茂の苦境を見かねた諏訪の局が、三尺ほど進み出て口をはさんだ。

「信茂は自ら望んで勝頼さまをお見捨て申し上げたのではございません。城に戻って籠城すると告げたところ、重臣たちが連署状を作って反対し、迎えに行きたくとも行けなかったのでございます。このこと、天地神明に誓って偽りではございませぬ」

「黙れ。黙れ黙れ」

信忠は怒りに我を忘れ、小姓の手から太刀を奪い取った。

「その方らの性根はよう分った。そのような了見では、いつまた主を裏切るやも知れぬ。五人ともこの場で成敗いたすゆえ、庭先に出ろ」

信茂は事の急変に驚き、ひたすら頭を下げるばかりである。
その肩口を踏みつけにし、信忠は容赦なく刀をふり下ろした。
三月二十八日――。
信忠は二千余の馬廻り衆をひきい、甲斐平定の報告をするために上諏訪の法花寺に向かった。
小山田信茂を誅殺し家族四人を打ち首にしたことを、信忠はひそかに後悔していたが、甲斐の庶民は諸手をあげて称讃した。
勝頼の末路を哀れみ、信茂の汚ない振る舞いを憎んでいただけに、信忠の行為を正義の制裁として支持したのである。
これによって信忠の名声はいっそう高まり、沿道にはその姿を一目見ようと数万人の群衆が列をなしていた。
不思議なものである。
良かれと思ったことが悪しき結果を招き、激情にかられた振る舞いが庶民の熱狂的な支持を得る。
ならばこの先、得体の知れぬ群衆たちとどう付き合っていけばいいのか……。
信忠は馬を進めながら、人を治めることの難しさに改めて思いをいたしていた。

法花寺の参道では、織田家の重臣たちが列をなして信忠を迎えた。大功を賞するための、信長の粋な計らいだった。
「信忠、よき面構えになったの」
信長は本堂に泰然と座していた。
「お陰をもちまして、無事に役目を果たすことができました」
「武田は長年の宿敵じゃ。その相手をかくも鮮やかに攻め滅ぼした功績は大きい。そちを織田家の世継ぎとしても、誰も異をとなえはすまい」
信長は兄弟三人のうち、もっとも手柄を立てた者を後継者にすると宣言している。武田攻めの働きによって、信忠は改めて世継ぎと認められたのだった。
「近う寄れ、盃を取らす」
信忠は御前に進み出て盃を受けたが、心は晴れなかった。
重い責任を背負えば、ますます本当の自分から遠ざかるような気がした。
「案ずるな。余にもそのような時期があった」
驚いたことに、信長は信忠の顔を見ただけで胸中を見抜いていた。
「戦いは外ばかりではなく、心の内にもある。だが怖れることなく、信じた通りに生きるがよい。お前に天道の加護あらば、必ず道は開けるであろう」

「父上……」

信忠は信長の膝に取りすがって泣きたくなった。

常に時代の先頭を走ってきた父に、心の葛藤がなかったはずがない。そのことに初めて気付いたのだった。

谷川ぞいをさかのぼるにつれて、道は次第に険しくなった。

頭上をうっそうと木々がおおい、日射しをさえぎっている。時々けたたましい声を上げ、山鳥が飛び立っていく。

河原の石の上には雪が丸く溶け残っているが、人の足跡は絶えている。

このまま夜になったなら、あたりはさぞ冷え込むことだろう。

輿に揺られながら、勧修寺晴子はだんだん心細くなってきた。

（道に迷たんとちがうやろか）

不安はふくれ上がっていくものの、供侍をひきいる鶴崎右京大夫が間違いないと請け負ったのだから、不用意に口をさしはさむわけにもいかない。

日の高いうちに目的地に着いてくれと祈るほかはなかった。

「姫さま。本当にこの道でいいのでございましょうか」

房子がたまりかねたように訴えた。

こんな山奥にわけ入るのは初めてなので、鳥の声、梢の音にさえ肝を冷やしている。

「分りません。でも鶴崎が調べてきたのですから、間違いはないでしょう」

「やっぱり街道筋を行けばよかったのでございますよ。急がば回れということわざもあると申し上げたのに、無理に近道をしようとなされるから」

信長を追って長良川を越えた晴子だったが、岐阜に着いた時には信長は出陣した後だった。

ここで駄目なら都に引き返すと房子に約束していたが、岐阜まで着いてみると犬山で追いつけそうな気がした。

犬山では金山、金山では高野と気持の抑えがきかなくなり、ついに木曾谷の落合宿に足を踏み入れた。

幸い信長は上諏訪の法花寺に在陣しているという。

このまま木曾路を塩尻まで出て上諏訪まで行くには三日かかるが、神坂峠を越えて伊那谷に出れば二日で着く。

右京大夫が宿の者からそう聞き込んできたので、先を急ぐ晴子は近道をすることにしたのだった。

「山奥には武田の残党が逃げ込んでいるという噂もございます。今からでも引き返した方がようございますよ。何かあってからでは、取り返しがつきませんから」

房子はしきりに勧めたが、晴子は応じようとしなかった。

今から引き返したなら、上諏訪への到着がいっそう遅れることになる。一日を惜しんで二日を失うような愚をおかしたくなかった。

輿をかつぐ八瀬童子は、どんな険しい道も歩調を乱すことなく進んでいく。だが進めば進むほど谷は深くなり、山は険しくそびえ立っていた。

晴子もさすがに心もとなくなって輿を止めた。

「鶴崎、この道で間違いありませんか」

「谷川伝いにさかのぼれば、峠に出る道があると宿の者が申しておりました。間違いはないと思います」

右京大夫はそう答えたが、何やら自信なさそうである。

「四方に人をつかわして、もう一度道を確かめなさい。ただし、こちらの素姓を悟られてはなりませんよ」

通りがかりの者か山で働く杣人がいるだろうと思ったが、物見に出た者たちはなかなか戻らなかった。

時は刻々と過ぎていく。日がかげったせいか、あたりは夕暮れのような薄闇に包まれ、冷気が輿の床から忍び寄って来た。

頭上の尾根から獣の遠吠えが聞こえてくる。

山犬か狼だろう。縄張りの内に敵が侵入したことを告げるように、尾根から尾根へと鳴き交わしていた。

「いま何刻くらいでございましょうか」

房子は打掛けを二枚も重ね着してうずくまっていた。寒いのか怖いのか、太った体を小刻みに震わせている。

「宿を出たのは辰の刻ですから、午の刻を過ぎたくらいでしょう」

「やはり引き返した方がようございますよ。山には魔性のものが住むといいますから、夜になったらどんな目にあわされることやら」

「魔性のものとは何ですか」

「鬼や山姥ですよ。人を我が家に誘い込み、寝入るのを待って食べてしまうというではありませんか」

「それはお伽草子の中の話でしょう。大江山ではあるまいし、鬼などいるはずがないではありませんか」

「たとえいなくとも、これでは凍え死んでしまいます。後生ですから、昨日の宿に戻って下さいませ」

肩を寄せるようにして言い争っていると、右京大夫が一人の老婆を連れて戻って来た。

白髪を伸ばし放題にし眼窩が険しく落ちくぼんだ、山姥のような女だった。

「どうやら二里ほど下流で、沢をひとつ間違えたようでございます」

右京大夫が簾の前で片膝立ちになって告げた。

「しかしこの先に尾根に出る道がありますので、明日には峠を越えて伊那谷に下りることができましょう。この老婆の家が峠の近くにあるので、今夜は泊めてくれると申しております」

「そのお方は」

「平家の落武者の末裔だそうでございますが、今は猟や薬草採りをして暮らしていると申しております」

「尾根には雪が残っているでしょう。これだけの人数が泊まれるほどの家があるのでしょうか」

供侍や荷物運び、八瀬童子を合わせれば、総勢二十数人になる。夜の冷え込みは相

当厳しそうなので、屋外で眠らせるわけにはいかなかった。

「ご懸念には及びませぬ。他にもう二軒あると申しますので、屋根の下で雨露をしのぐことはできましょう」

「姫さま、およしなされませ」

房子が袖を引いて忠告したが、晴子は泊めてもらうことにした。

老婆の家は想像していたよりはるかに立派なものだった。

山の中腹を切り開いて平地を作り、かやぶき屋根の大きな家を建てている。ひと抱えもありそうな丸太の柱を使い、四つの部屋と広々とした土間があった。

奥の座敷には床の間があり、鴨居の上には長槍がかけてある。

ふすまには平家の紋所である揚羽蝶が描かれていた。

老婆は夫と息子夫婦の四人で暮らしているが、三人は仕事に出て今夜は戻らないという。

「このような山奥ゆえ、何のもてなしもできませぬ」

老婆は囲炉裏に吊るした鉄瓶の湯を桶に移し、晴子の足をすすごうとした。

「それは私がいたします」

房子があわてて桶を受け取った。

東宮夫人ともなれば、地を踏むことも素姓定かならざる者に接することもできないのである。

夕食に芋粥のもてなしを受け、早めに床につくことにしたが、困ったのははばかりである。家の者は側の谷川で用を足すというが、軽からざる身でそのような所にしゃがみ込むわけにはいかない。

やむなく源氏物語の昔のように手水盥で用をすませ、房子に捨てに行かせることにした。

外からけたたましい声が聞こえたのは、それからしばらくしてからだった。

「姫さま、ちょっと、ちょっとこちらにお出で下されませ」

身分を伏せろと言い含めてあるのに、何の遠慮もなく呼ばわっている。

何事かと思って縁側に出ると、盥を抱えたままぽかんと空を見上げていた。

「お前、それを早く」

恥ずかしさのあまり、体からどっと汗が噴き出した。

「もうすませてまいりました。それより空をごらん下さりませ。見事な星月夜でございます」

腰をかがめてみたが、軒が低いのでよく見えない。晴子は誰も見ていないことを確かめてから庭先まで出た。

空一面に星がまたたいていた。

金銀の砂をちりばめたような夜空が、大地を丸くおおって頭上に広がっている。まるで手が届くような近さで、今にもきらめきながら降り落ちてくるようだった。

「まあ、きれい」

晴子は口を半開きにしたまま、呆けたように空をながめた。

こんなに大きな空を見たのは初めてである。悠久の時の流れと広大な天地の広がりを、これほど切実に感じたことはなかった。

（人間は阿呆や）

なぜかそんなことを思った。

天地はこれほど美しいのに、どうして人間ばかりがいがみ合いそねみ合って生きなければならないのか……。

床についてからもその考えが頭から離れず、なかなか寝つくことができなかった。

自分が小さな虫になったような気がする。

都から信濃まで大旅行をしてきたつもりだったが、天上の目から見れば尺取り虫が三寸ばかり動いたようなものでしかあるまい。

（阿呆はうちや。ただの愚かな女子や）

晴子はふいに泣きたいような切なさにとらわれ、手足をちぢめて体を丸めた。

コトリ。

厨の戸を用心深く開ける音がして、誰かが外に忍び出る気配がした。

誰だろう。こんな夜ふけにどこへ行くのか。

晴子は体を丸めたまま聞き耳を立てた。

あたりはしんと寝静まり、鳥や獣の声さえ絶えている。その静寂の中に、かすかに人の足音がした。

何人かが小走りに家の前を横切り、厨口に集まって何かを話し合っている。

（妙やわ）

晴子の頭にひらめくものがあった。

勧修寺家の生まれとはいえ、体には母方の武家の血が流れている。そっと夜具を抜け出すと、厨の戸の隙間から外をのぞいた。

星月夜の青い明かりに照らされ、三人が立ち話をしていた。

一人はこの家の老婆、他の二人は野伏のような姿の男である。

話し声を聞き取ることはできなかったが、およその察しはつく。この家の者たちは

猟や薬草採りばかりか、野伏や野盗もなりわいとしているのだ。

彼らの最大の獲物は落武者である。落武者は家重代の財宝や逃亡用の銭を持っているし、皆殺しにしてもどこからも罪に問われない。

老婆はおそらく晴子の一行を武田方の落武者と見て、家に誘い込んだのだ。

ところが人数が多く一家では手に余るので、夜の間に仲間を呼び集めようとしているにちがいない。

（どないしよう）

晴子はめまぐるしく考えを巡らした。

この家には右京大夫ら八人の供侍が泊り、荷物持ちや八瀬童子は他の二軒に分宿している。

今のうちに一手になし、野伏を迎え撃つ仕度をしなければならないが、すでに他の二軒は襲われている恐れもある。

まずは老婆を取り押さえ、相手の出方をさぐることだ。

晴子は忍び足で座敷に戻り、房子を揺り起こした。

「姫さま、お通じでございますか」

「ちがいます。お前の好きな山姥が出たのです」

寝ぼけまなこの房子に事情を語り、老婆が戻ったならここに連れて来るように命じた。

やがて房子に案内されて老婆が枕元にやって来た。

行灯の明かりに下から照らされた顔は、夜叉のようだった。

「すみません。何やら寒気がして心細いものですから」

頼りなげに差し出した手を、老婆は何の疑いもなく両手で受け取めた。

晴子がもう一方の手を重ねて老婆の動きを押さえたところを、後ろに回った房子が帯締めで難なく縛り上げた。

もがく老婆を二人して押さえつけ、一部始終を白状させた。

すべては晴子がにらんだ通りで、夜明けとともに襲う手はずだという。

晴子は右京大夫らを起こし、他の二軒に分宿している者たちを呼びに行かせた。

公家の家来とはいえ、右京大夫らはれっきとした侍である。縁側の戸板に板を打ちつけ、厨の戸を厳重に閉ざし、玄関先には挟箱や唐櫃を置いて楯とした。

外に打って出る時に正面から矢をあびせられないようにするためだが、挟箱や唐櫃だけでは二、三人が身を隠すくらいの楯にしかならなかった。

「輿を使いなさい。横倒しにすれば役に立つはずです」

不思議なことに、晴子は少しも怖いとは思わなかった。緊張のせいか気持は心地よく高ぶっていた。

意外だったのは八瀬童子たちである。

僧形で丸腰なので戦の役には立つまいと思っていたが、輿の床の裏側にウメガイと呼ばれる諸刃の短剣を隠し持っていた。

その剣を竹の杖に差し込むと、立派な手槍になる。

六人とも大柄で筋骨たくましいので、侍たちよりよほど頼りになりそうだった。

野伏は夜明けとともに襲って来た。

いつの間にか屋敷をぐるりと取り巻いている。玄関口から打って出ると見抜いたらしく、正面に楯板を並べて向かいの陣を構えていた。

総勢百人ちかい。

大半が物の具をまとい、弓や槍ばかりか鉄砲まで備えている。このまま戦場に出ても通用しそうな、堂々たる陣構えだった。

中でも厄介なのが、正面に陣取った五人の鉄砲衆である。

猟をなりわいとしている者らしく、片膝立ちになって筒先のねらいをぴたりとこちらに向けていた。

「姫さま、ご身分をお明かしになったらいかがでしょうか」
房子が袖を引いて訴えた。
「いいえ。それはなりません」
晴子はきっぱりとこばんだ。
このような所でよからぬ噂を立てられては、朝廷にどんな迷惑が及ぶか分らなかった。
「あの者たちは武田の残党と見て襲ってきたのです。右京大夫、わたくしは信長公の側室で、戦勝祝いに上諏訪の法花寺に向かうところだと告げなさい」
信長の側室と名乗れば後難を怖れて手を引くかも知れないと思ったが、相手もしたたかだった。
もしそれが事実なら、身分を証すものを見せろというのである。
「誰か織田家とつながりのある品を持ってはいませんか」
そうたずねたが、とまどった顔を見合わせるばかりである。
「房子、お前はどうです」
「持ってはおりません。木瓜紋の小袖くらいはありますが」
「それでも構いません。文箱に入れて金襴の布に包みなさい。それから腕のたつ者を選んで女房装束にし、衆の垂れ衣をかけなさい」
晴子は矢継ぎ早に指示をした。

小袖の包みを女房装束の者が届けたなら、野伏たちも油断して中を改めるだろう。その隙を突いて鉄砲衆に襲いかかり、他の者たちも打って出る計略だった。
「ご側室の若狭の局さまおん自ら、信長公より下賜され木瓜紋のご衣装を披露なされる。しかとご吟味なされるがよい」
右京大夫がにせの局を戸口から押し出そうとした時、けたたましい銃声がして正面に陣取った野伏たちが次々と倒れた。
何と木瓜紋の旗印をかかげた織田家の鉄砲足軽二十人ばかりが、整然と二段構えの隊形をとって鉄砲を撃ちかけている。
信長の側室と聞いたばかりの野伏たちは恐慌をきたし、我先にと逃げ散っていった。
「ご無礼をいたします。二条御所のお方様でございましょうか」
忍び装束の男が玄関口に平伏した。
「それがしは近衛太閤に仕える横山甚助という者でございます。ご下命により、お迎えに参上いたしました」
晴子は岐阜を発つ時、信濃まで行くとしたためた文を前久に送っていた。

道中を案じた前久は、織田家の鉄砲足軽を借りて甚助を迎えに寄こしたのだった。

水を満々とたたえた幅三間ほどの堀に、朱色の真新しい橋が渡されていた。

堀の向こうには土塁と柵を巡らし、白木の冠木門が開けてある。

武田勝頼が新府城に移って以来放置されていた躑躅ヶ崎の館を、織田信忠が修復して本陣としたのである。

「ほう、これか」

大手門の前で馬を止めた信長は、意外そうにあたりを見回した。

宿敵信玄の館にしては、あまりにもみすぼらしかった。

「人は石垣、人は城なりか。のう近衛」

信長はかたわらの近衛前久に声をかけ、満足そうに館の内に馬を乗り入れた。

供をする前久の胸中は複雑だった。

兵法の達人であったばかりか、比叡山延暦寺から大僧正位を贈られたほど仏道や学問にも精通していた信玄は、都人にとっては特別な存在だった。

「信玄さえ動けば、信長は滅びる」

信長の相次ぐ横暴に眉をひそめる都人は、まるで神仏をたのむように信玄に期待を

寄せていた。

前久もその一人であり、信玄上洛を仕掛けた張本人だった。

今から十年前――。

前久は石山本願寺に潜伏して、打倒信長の秘策を巡らしていた。

この頃には信長と将軍義昭との間に隙が生じたために、義昭を自陣に取り込み、信長包囲網を構築したのである。

最初に手をつけたのが、本願寺教如と朝倉義景の娘との縁組みだった。

越前一向一揆に背後をおびやかされて出陣をしぶっている義景を起たせるためにも、信長包囲網にしっかりと組み入れるためにも、教如との縁組みは必要だった。

次に前久は、河内の若江城に移った。

城主の三好義継や大和信貴山城の松永久秀を説得するためだ。

二人とも足利義輝を殺した仇敵だが、信長を倒すという大目的のために怨讐を超えて和を結んだ。

畿内の態勢がととのった元亀三年十月、武田信玄は精鋭三万三千をひきいて遠江に攻め込んだ。

武田軍は鎧袖一触、圧倒的な強さをみせて徳川方の諸城を落とし、十二月二十二日

の三方ヶ原の合戦に大勝した。

また東美濃に攻め込んだ別働隊は、織田信長の実子が守る岩村城をやすやすと陥落させた。

この動きに呼応した足利義昭は、畿内に檄を飛ばして挙兵した。

応じたのは浅井、朝倉、六角などの越前、近江の大名と、三好、松永ら河内、大和の勢力である。

もしこの時、浅井、朝倉軍や伊勢長島の一向一揆が美濃に攻め込んでいたなら、信長の命運も尽きていたかも知れない。

ところが朝倉義景が無断で領国に引き揚げ、信玄も病を得て進撃不能となったために、辛くも窮地を脱したのである。

機を見るに敏い信長は大軍をひきいて上洛し、義昭との和議の仲介をするように朝廷に迫った。

ところが三年前にも、信長は勅命和議を一方的に破棄して近江に攻め込み、比叡山を焼き討ちにしている。

この悪行を憎まれた正親町天皇は、信長の求めに応じようとはなされなかった。

その態度に業を煮やした信長は、二条御所と内裏を残して上京を焼き払うという強

硬策に出た。

四月四日のことである。

あわてふためいた朝廷は、翌日には和議の勅使を義昭のもとにつかわし、信長はまたしても危ない瀬戸際を乗り切ったのだった。

この後、槇島城を追われた義昭が、前久を頼って若江城へと落ちて来た。

だが前久はその寸前に城を出て、丹波の黒井城へと移った。

黒井城は反信長方の要衝として頑強に抵抗をつづけている。しかも信長に命じられて丹波攻めに当たっているのは、前久とは旧知の明智光秀だった。

このあたりが前久の老獪なところで、それから二年後には光秀の仲介で信長と好を通じた。

信長包囲網などには一切関わっていないという態度を取りつづけ、信長の取りなしで勅勘（天皇の勘当）を解かれて洛中への復帰を果たしたのである。

（七年か……）

あれから七年の歳月をへて、天下は信長の手によって統一されようとしている。そのことに寄与してきたという自負と、信玄に気の毒なことをしたという思いが、前久の胸に去来していた。

躑躅ヶ崎の館に着いて間もなく、明智光秀が訪ねて来た。
数日前に信長に折檻された跡が、額に赤黒いあざとなって残っていた。
「近衛太閤さま、よろしゅうございますか」
「茶の仕度でもさせようとしていたところだが、急ぎの用かね」
「よろしければ、お人払いを」
何やら切っ羽詰まった様子である。前久は従者を下がらせ、四方のふすまを閉じさせた。
「恵林寺が信忠卿の軍勢に包囲され、焼き討ちにされようとしております。先ほど信忠卿より、殿にご指示をあおぐ使者がまいりました」
「それで、信長公は何と」
「卿の裁量に任すと申されました」
「争いの理由は」
「武田の残党をかくまっていた由にございます」
恵林寺は武田信玄の墓所で、住持の快川和尚は信玄の仏道の師である。寺には武田家の縁者も多い。その縁を頼って寺に逃げ込んだ者がいたのである。
「ご迷惑とは存じまするが、太閤さまのお力で和尚さまをお救い下されませ」

光秀がすがるように平伏した。
快川和尚は光秀と同じ土岐氏の出である。和尚が美濃の崇福寺にいた頃には、教えを受けた間柄でもあった。
(困ったことになった)
この事態をどう切り抜けるべきか、前久はめまぐるしく考えを巡らした。
都を出る時、快川和尚の処遇については特に配慮するように、正親町天皇から直々におおせつかっている。
和尚の身に万一のことがあれば、大通智勝の国師号をお授けになった帝の権威にも関わりかねない一大事だが、信長がそんなことに配慮するとは思えない。
何か起死回生の秘策はないものか……。
「近衛太閤、何とぞ」
光秀が重ねて懇願した。
「そちは、折檻という言葉の由来を存じておるか」
「いえ、浅学にして」
「漢の朱雲は皇帝を諫めようとして逆鱗に触れ、殿上から引きずり下ろされそうになった。それでも諫言しようと檻につかまり、折れるまで離そうとはしなかった。その

故事に由来する言葉だ」

「……」

「もしそちが信長公の行ないに過ちがあると思うなら、朱雲にならうべきではないのか」

「おおせはごもっともなれど、それがしにはとてもお諫めすることはできませぬ」

「織田家の出世頭にできぬことが、この私にできると思うかね」

前久は冷たく突き放した。

「あのお方のことだ。今度はこの私の額を欄干に打ち当てぬとも限るまい、それを承知の上での頼みとあらば、そちにも腹を据えてもらわねばならぬ」

光秀は当惑して黙り込むばかりである。

釘をさすのはこの時と見た前久は、きわどい言葉で念を押した。

「そちとて近頃のあのお方のなされようは目に余ると思うておろう。ならばいつまでも面従腹背をつづけるわけにはいくまい。万一朝廷にわざわい及ばんとする時には、檻を折ってでも諫言すると誓ってもらいたい」

「できる限りのことは、いたす所存にございます」

「それを聞いて安心した。ならば蟷螂の斧をふり上げてみるか」

前久はにこりと笑って光秀の肩を叩いた。

信長はうつぶせになって弥助に腰をもませ、心地よさそうにうたた寝をしていた。

「恵林寺の処遇につき、お願いの儀あって推参いたしました」

前久は水干の袖を開き、信長の間近に腰を下ろした。

「何じゃ」

信長は目をつむったままだった。

「快川和尚は天下の名僧でございます。武田の残党が境内に逃げ込んでいたとうかがいましたが、処遇には格段のご配慮をお願い申し上げます」

「すべて信忠の采配に任せておる。気がかりとあらば、恵林寺まで出向くがよかろう」

「そのお言葉、そのまま信忠どのに伝えてもよろしゅうございましょうか」

「構わぬ。されど近衛よ。何ゆえそのように気をもんでおるのじゃ」

信長が切れ長の目を開き、薄い笑みを浮かべた。

「都を出る時に、主上より二つのご要望をうけたまわりました。ひとつは武田家存続のこと。いまひとつは快川和尚のことでございます。ふたつともご叡慮にそむくよう

では、主上に合わす顔がございませぬ」
「そうか。ならば急ぐがよい。日没までにはけりをつけよと命じてあるでな」
日没までは、あと一刻ほどしかない。
前久は数人の供を連れ、恵林寺に向けて馬を飛ばした。
甲府から塩山までの道を駆け抜けた時には、陽は西に沈みかけていた。
恵林寺の黒い表門を織田の軍勢が包囲し、信忠自ら指揮を執っている。
前久は警固の将兵に名を告げ、ゆっくりと信忠に歩み寄った。
心配のあまり駆け寄って中の様子をたずねたかったが、太政大臣ともなると軽々しい振る舞いはできなかった。
「近衛公、先日は過分の祝いを頂戴し、かたじけのうございました」
信忠は地に片膝をついて礼を言った。
法花寺に信忠が訪ねて来た時、前久は都から持参した品々を戦勝祝いとして贈ったのである。
「旅先でのことゆえ、行き届かぬことばかりじゃ。やがては都にお招きして、祝いの能会など張行したい」
「かたじけのうござる」

信忠は能に熱中している。衣装や楽器について前久の教えを受けることも多かった。
「寺の様子はいかがかな。武田の残党をかくまっておると聞いたが」
「残党の件ばかりではございませぬ。神社仏閣を破却せよとのご下命ゆえ、立ち退きを求めているのでございます」
「では、快川和尚は」
「立ち退きには応じられぬと、他の方々と共に山門にこもっておられます。早々に引き払うように求めているのですが」
「和尚のもとへ、ご案内いただけようか」
「どうぞ、こちらでございます」
信忠が先に立って案内した。
黒門を入ると、一段高くなった所に朱塗りの門があった。
赤門とも中門とも呼ばれる四脚門で、屋根には武田家の四つ割り菱の紋がほどこされていた。
境内のひょうたん池の向こうに、二層造りの山門がそびえている。二階の廻り縁には、僧衣を着た七十人ばかりが座していた。
門の両側には枯れ木が山と積み上げられ、側ではかがり火が赤々と燃えさかってい

る。この火を枯れ木に移せば、山門はたちまち炎に包まれるだろう。

「立ち退きに応じなければ火を放つと伝えてありますが、あのように動こうとはなされないのでございます」

「命を賭けて寺を守ろうというご所存か」

「この寺は信玄公の墓所ゆえ、織田家に屈して見捨てることはできぬと申されております」

快川和尚の硬骨漢ぶりは都にまで聞こえていた。

斎藤義龍から無理難題をもちかけられた時、「汝義龍は一国の主なるが、我は三界の師なり。三界の広きをもって、なんぞ一国の狭きにかえんや」と言って美濃を去ったほどだった。

「分った。私が和尚と会って話をするゆえ、しばらく時間をいただきたい」

「そうしていただければ助かります。ただし日没までに事を終えよとのご下命ゆえ、そのようにご承知下され」

「日没までには、あと四半刻もあるまい」

前久は西の空を見上げた。

薄い雲におおわれた太陽が、落日の白い光を放ちながら帯那山の向こうに落ちかかっていた。

「お父上はすべてそなたの采配に任せるとおおせられた。せめて半刻の猶予を願いたい」

「お気の毒ですが、それはできませぬ」

「何ゆえじゃ。わずかの時を惜しんで、汚名を後世に残してもよいと申すか」

「父上の命令には背けませぬ。背かぬと分っておられるゆえ、それがしの采配に任すとおおせられたのです」

信忠はすでに前久の弟子だった頃の柔軟さを失っている。信長の雛形になったように冷徹だった。

日没は迫っている。前久は山門の急な階段をはうようにして登った。

二階の部屋には快川和尚が座し、説法を行なっていた。

まわりには僧のほかに稚児や若衆たちがいて、和尚の言葉を片言隻句も聞きもらすまいと耳を傾けていた。

「快川国師さま、お久しゅうございます」

前久は人をかき分けて前に進んだ。

「近衛公、何ゆえかような所に……」

快川は八十歳を過ぎているが、大柄でかくしゃくとしている。前久とは京都の妙心寺にいた頃から面識があった。

「信長公に従って甲斐にまいりました。到着早々、国師さまご受難とうけたまわり、急ぎ参上いたしました」

「かたじけない。ならば境内にたむろする織田の軍勢を早々に退去させて下され」

「面目なきことながら、それはかないませぬ。ひとまずこの寺を立ち退き、後日を期していただきとう存じます」

「当寺は信玄公の墓所ゆえ、織田の恨みをかうのはいたし方ありますまい。されど寺には世俗の力が及ばぬのが、古来よりの仕来りではありませぬか」

「おおせはごもっともなれど、信長公にはその理は通じませぬ」

古くから神社や仏閣は守護不入の地とされ、武家の権力が及ばなかった。

戦国時代になってからも、多くの武将たちが神仏の加護を得るためにこの仕来りを守ってきたが、信長は敢然とこれを否定した。

こうした特例を認めては、武家による一元的な支配は実現できないからだ。

「これは近衛公のお言葉とも思えませぬ。寺社の守護不入権というものは、朝廷によって保護されてきたものでございます。その権利を守り通さなければ朝廷の存続さえ危ういと思われたがゆえに、近衛公も石山本願寺と共に起たれたのでございましょう。信玄公が病をおして信長との戦を決意されたのも、貴公からのたっての求めがあったゆえではありませぬか。その信義も信念も捨てて信長の走狗になり下がり、信玄公の墓所であるこの寺を焼き払うことに手を貸すとは、本末顚倒もはなはだしいと申さねばなりますまい」

さすがは天下に名だたる硬骨漢である。相手が前久とはいえ、歯に衣着せずに非をなじった。

「信長は一人ではありません。時の流れというものがございます」

前久は苦しい胸中をそんな言葉で表わした。

快川に理があることは前久とて分っている。だが今は、朝廷や寺社の権威によって人を動かせる時代ではない。

この国の民が信長の考えを支持し、新しい時代を切り開きたいと願っているゆえに、信長の軍勢はあれほど強いのである。

そのことは信長と死力を尽くして戦った前久が一番よく知っていた。

だから信長と手を組み、新しい時代に朝廷を生かす道を選んだのだ。

それを変節と呼ばれるのは仕方がないが、民の支持を失っては、朝廷とて一日たり

とも存続することはできない。

時代に合わせて変わっていくための舵取役を、誰かが涙をのんで果たさなければならないのである。

「確かに、おおせの通りでございましょう」

快川も門弟二千人と称された高僧だけに、前久の苦衷は察していた。

「されど我らは三界不変の法輪に仕える身でございます。信長がそれを許さぬとあらば、寺と運命をともにするべきでありましょう」

快川は合掌して一礼すると、再び説法を始めた。

陽はすでに帯那山の向こうに落ち、残照ばかりを赤々と天に放っている。

それを合図にしたように、門の両側に積み上げた枯れ木に火が放たれた。

前久はやめさせようとして廻り縁に走り出た。

驚いたことに、いつの間にか信長が姿を見せていた。赤門の前に据えた床几に座り、信忠に何かを声高に指示している。

「諸僧よ。火はまさに足元に迫っておる。生死を超脱した境地を極むるはこの時である」

快川は微動だにせず説法をつづけた。

「死を目前にして、いかに法輪の真理を極めえたか。一語を著わして末期の句としてもらいたい」

そう叫びかけたが、誰も応える者はいなかった。

「ならば是非もない。安禅必ずしも山水をもちいず。心頭滅却すれば火おのずから涼し。碧巌録の偈に改めて思いをいたし、最後の修行に励むがよい」

火は廻り縁の檻を越えて足元まで迫っている。それでも前久は信長を見据えたまま立ち尽くしていた。

（この所行、許せぬ）

信長に対してはっきりと殺意を覚えたのは、この時だった。

第十二章　富士遊覧

我らの先達である太田牛一は、恵林寺の焼き討ちについて次のように記している。

〈さる程に、今度恵林寺において、佐々木次郎隠し置くについて、その過怠として、三位中将信忠卿より仰せ付けられ、恵林寺僧衆御成敗の御奉行人、織田九郎次郎、長谷川与次、関十郎右衛門、赤座七郎右衛門、以上。右奉行衆罷り越し、寺中老若を残さず山門へ呼び上せ、廊門より山門へ籠草をつませ、火を付けられ候。初めは黒煙立て見えわかず。次第〳〵に煙納まり、焼き上り、人の形見ゆるところに、快川長老はちともさわがず、座に直りたるまま動かず。その外、老若、児、若衆踊り上り、飛び上り、互ひに抱きつき、もだえこがれ、焦熱、大焦熱の炎にむせび、火血刀の苦を悲しむ有様。目も当てられず〉（『信長公記』）

太田はこの時恵林寺にあって惨劇を目撃しているだけに、その描写にはさすがに鬼気迫るものがある。

山門の二階にいた者たちは、床を焼く火の熱さに耐えかねて踊りでも踊るように足をはね上げ、飛び上がり、少しでも火に触れる部分を少なくしようと互いに抱きつき、それでも逃れようもなく、絶望の叫びを上げながら火だるまになっていった。

これが信長公のやり方である。

比叡山延暦寺を焼き討ちした時も、伊勢長島の一向一揆二万余人を焼き殺した時も、高野聖千余人を見せしめのために成敗した時も、同じような地獄の光景がこの世に現出した。

徳川幕府の御代となって平和で穏やかな日々がつづくせいか、近頃では乱世をなつかしむ軍記物語などが世にもてはやされている。

中でも信長公の事績を称讃するものが多いが、筆者にはどうもなじめない。

確かに信長公は偉大な天才であり、本朝史上まれにみる英雄である。

だがそれだからといって、公の行ないを何もかも是とするのは、ひいきの引き倒しではなかろうか。

天才には狂気がある。英雄も弱点を抱えている。

そうした苦悩を紙一重のところで乗り越えて何事かを成し遂げていく姿をとらえることにこそ、過去の人物を今の世に伝える意味があると思うのだ。

わずか二年ばかりとはいえ、この清麿は信長公のお側に仕え、生身のお姿を拝している。子猫を膝にのせたまま、陽だまりの縁側で居眠りしておられるところを見たこともある。

そうそう、ある時はこんなこともあった。

歯が痛むとおおせられるのだ。

あの信長公が奥歯の痛みに耐えかね、かんしゃく玉を破裂させてまわりの者に当たり散らされた。

不用意にお側に寄ろうものなら斬り殺されかねない雲行きなので、近習の誰もがじっとうつむいて嵐が過ぎるのを待っていた。

そのことにますます苛立たれた信長公は、何か思いきり残忍なことをして憂さを晴らしたげな目をしておられた。

これは危ういと見た私は、とっさに酒をお勧めした。

「なにっ、酒だと」

「はい。父がよくそうして痛みをまぎらわしておりました」

「ふん、公家など人間のくずだ。そのようなものと一緒にするな」

私が公家の出だと知っておられた信長公は、そんな悪態をつかれたが、歯の痛みはますます耐えがたくなったようで、ついに酒を持てと命じられた。

ところが信長公は日頃酒をたしなまれない。ひどい下戸で、飲むと頭痛がしてくる質なのだ。

恐ろしいことに、私はそのことを知らなかったのである。

信長公は眉をひそめて一合ばかりを飲み干された。すると面長の端正な顔がみるみる真っ赤になり、いっそう苦しげな表情をなされた。

歯の痛みはいっこうにおさまらない上に、頭痛にまで襲われるという結果になったのである。

「あの時には、お前は絶対成敗されると思ったよ」

森蘭丸どのや坊丸どのは後でそう話されたものだが、神仏のご加護があったのだろう。

「清麿、このたわけが」

信長公は怒りに目を吊り上げて立ち上がろうとなされたが、そのままぐらりと体を傾け、上段の間であお向けになったままお鎮まりになった。

間一髪のところで酒が回り、我らが荒らぶる主君を眠りの世界へといざなったのである。

それもこれも、もう昔のことだ。時は過ぎ、思い出は返らない。

真実とはかけ離れたことばかりが、歴史という名のもとにまことしやかに書き継がれていく。

「清麿よ。ならばその真実とやらをお前が書け」

耳底には今も坊丸どのの声が響いている。

その叱咤を心の支えとし、文章に一行の懈怠もないようにと念じながら、信長公がいかなる陰謀によって歴史の闇に葬られたかを記していくことにしよう。

燃え上がる山門と、苦しみにのたうち回りながら焼け死んでいく僧たちの姿を、織田信長はじっと見つめていた。

己れの手で殺した者の末期は、しっかりと見届けねばならぬ。信長にはそうした生真面目な責任感があった。

山門にこもった者の中には、快川和尚をはじめとして宝泉寺の雪岑長老、東光寺の藍田長老、高山長禅寺の長老など、臨済宗の高僧十一人が含まれている。

そのような者たちを手にかけるのは信長とて本意ではないが、命に従わないとあらば容赦するわけにはいかなかった。

信長はふと『歎異抄』の一節を思った。

ある時親鸞は弟子の唯円房に、人を千人殺したなら浄土に往生できるからやってこいと勧めるが、唯円房は自分の器量では千人はおろか一人だって殺せそうにありませんと答える。

これに対して親鸞は、次のように諭す。

「これにて知るべし。何事も心に任せたることならば、往生のために千人殺せと言はんに、すなはち殺すべし。しかれども一人にてもかなひぬべき業縁なきによりて害せざるなり。我が心の良くて殺さぬにはあらず」

他力本願の神髄を伝える有名な一節である。

その通りだと信長は思う。人はそうやすやすと人など殺せるものではない。天に選ばれた者だけが、数万、数十万の屍を踏み越えて我が道を行くことができるのだ。

「信忠、近衛はどうした」

気がかりは前久のことばかりだった。

「火が回る前に、山門を下りて甲府へと向かわれました」

「初めからこうなることは分っておろうに、大仰な奴よな」

信長は内心ほっとしていた。

あの才は捨てがたい。前久にはこの先まだまだ働いてもらわねばならぬ。

思えば不思議な縁だった。

永禄二年に初めて上洛した時、信長は十三代将軍義輝に拝謁した。その仲介をしてくれたのが、当時関白だった前久なのである。

信長が上洛した頃には、日本全体が大きな変革期を迎えていた。

応仁の乱以来百年ちかくもつづいた戦乱の世が終わりを迎え、新たな秩序が模索され始めていた。

下剋上の波に乗って一国、あるいは数カ国の支配者となった戦国大名たちは、己れの地位を正当化する権威を求めていた。

この国で誰もが認める権威といえば、朝廷と幕府しかない。そのために両者の地位は乱世の頃とは比較にならないほど高まっていた。

こうした気運をいち早く察したのが、前久の祖父尚通だった。

尚通は娘（慶寿院）を十二代将軍義晴に嫁がせ、公武一体となって朝廷と幕府の復興に当たろうとした。

義晴と慶寿院の間に生まれたのが、十三代将軍義輝である。

しかも前久の妹が義輝に嫁いだのだから、前久とは従兄弟で義兄弟という二重の縁で結ばれていた。

二人は同い年で、信長が上洛した当時は二十四歳。

二つ年上の信長に、天下というものの在りようを教えたのもこの二人だった。

記憶すべき永禄二年――。

義輝と前久は壮大な計略を仕掛けていた。

正親町天皇の即位の礼を挙行するので警固のために上洛せよと、全国の大名に呼びかけたのだ。

前久は毛利元就から二千貫の寄付を得て即位の礼の仕度を進め、義輝は全国の大名に惣無事令を発して合戦の中止と上洛する大名の通行の安全を保障するように求めた。

これに応じて越後の長尾景虎（上杉謙信）、美濃の斎藤義龍、そして信長が相次いで上洛し、毛利元就も山陽道を東へと向かった。

結局この計略は諸大名の足並みの乱れによって実現しなかったが、信長に朝廷の権威の使い方を鮮やかに教えた。

（この国を動かすには、帝をつかむことだ）

尾張の統一を終えたばかりの信長の視野に、天下取りの具体的な道筋が見えてきたのである。

永禄十一年に足利義昭を奉じて上洛したのは、この道筋に近づくための布石だったが、実はこのことにも近衛前久が陰ながら関わっていた。

義輝が松永久秀らに二条御所で暗殺された後、前久は細川藤孝（幽斎）らと謀って興福寺一乗院にいた義昭を脱出させ、越前の朝倉義景のもとに落ちのびさせた。

ちょうど明智光秀が一乗谷を訪ねていたので、彼を通じて義景に庇護を求めたのである。

藤孝と光秀が義昭と信長の間を取りもつために奔走したのも、前久に命じられてのことだった。

ところが信長が義昭を奉じて上洛すると、前久は都を出奔して石山本願寺に身をひそめた。

信長の真意が足利幕府の再興ではなく、朝廷を利用して天下統一を果たすことにあるといち早く見抜いたからだ。

以来本願寺を拠点として、信長を滅ぼすために暗躍する。

比叡山延暦寺が浅井、朝倉方についたのも、本願寺が禁をおかして一向一揆に挙兵を命じたのも、すべて前久が背後で根回しをした結果なのだ。

ところが天正三年六月、二人は突然和解する。

仲介したのは光秀だった。

反信長方の要衝だった丹波黒井城に身を寄せていた前久は、光秀を通じて信長に和解したいと申し入れた。

信長はこれを許し、正親町天皇に奏請して勅勘を解いてもらい、前久を都に呼び戻した。

天正三年六月二十八日のことだ。

時に前久四十歳、信長四十二歳——。

公武を代表する傑物二人は、七年間の対立をへてひとつになり、まるで古くからの盟友のような蜜月時代へと突入する。

この年九月、信長は前久を九州につかわし、島津家との交渉に当たらせた。

島津家の所領である薩摩、大隅両国はかつて近衛家の荘園だったので、前久の島津家に対する影響力には並々ならぬものがあった。

天正七年十一月に信長は誠仁親王に二条御所を献上し、親王一家の移徙を行なって自家薬籠中のものにしたが、この交渉を進めたのも前久だった。

翌八年三月の石山本願寺との和睦交渉においても、前久は仲介役として活躍する。

最後まで立ち退きを拒否していた教如を説得したのも、義父に当たる前久なのである。

五摂家筆頭近衛前久の力は、それほどに大きかった。

朝廷、寺社、旧幕府勢力のあらゆるところに人脈があり、どこをどう押せば問題が解決するかを掌を指すように分っている。

しかも学問にも諸芸にも精通していた。

書は近衛流を相伝し、歌道は「古今伝授」の奥義を受け継いだほどの域に達している。

信長が好きな馬や鷹についても造詣が深かった。

乗馬の技術ばかりでなく馬具や馬の見立てにも通じ、鷹狩りの作法、装束、道具について詠んだ『龍山公鷹百首』を残したほどだ。

馬上筒の腕前は武士でさえ遠く及ばないほどで、涼やかなはっとするほどの美貌の持ち主でもあった。

（世の中には、こんな男がいるのか）

信長は新鮮な驚きを覚え、前久に夢中になった。

天才の孤独をいやせるのは、天才ばかりである。信長は語るに足る男と初めて出会い、初恋でもしたように足しげく前久のもとに通った。

この頃前久にあてた文には、「ふと上洛申し候はんまま、面謁をもつて申し述ぶべく候」と書いていることが多い。

少しでも暇ができたなら前久のもとを訪ね、あれこれと語り合いたかった。

信長がどれほど前久を高く買っていたかは、その処遇を見れば歴然とする。

前久が都に戻った天正三年には三百石を与え、翌々年には前久の次男信基の元服に烏帽子親として立ち合っている。

天正六年には山城普賢寺の千五百石の近衛家旧領を復し、翌年には二条御所の近くに別邸を与えている。

誠仁親王が二条御所に移徙なされた時、前久は行列の先導を務めた。

これを見た都人は、

「近衛はんは、信長の言いなりにならはったんや」

と内心反感を覚えたというが、決してそうではない。前久には彼なりの思惑があって信長と手を結んだにすぎないのである。

そんなことは信長も先刻承知していた。

この先信長が朝廷の存続をおびやかすような挙に出たなら、前久は従順の仮面をかなぐり捨てて牙をむくだろう。

だがそれでも、いや、そんな気概を持った男だからなおさら捨てがたかった。

恵林寺の山門は燃えつづけていた。

すでに僧たちは焼け死んだらしく、炎の中にうごめく人影はない。人肉が焼ける胸の悪くなるような臭いが、境内にただようばかりだった。

日は帯那山の向こうに深く沈み、山は黒い影となって連なっている。夕暮れの薄闇の中で、山門から上がる炎の色ばかりが毒々しいほどに赤かった。

「信忠、本堂に火を放て」

一堂一宇残らず焼き払えと命じて、信長は急に寒気を覚えた。

氷を押し当てられたような寒気が背筋を走り、全身が鳥肌立って小刻みに震え出した。

それなのに頭は火をあびたように熱く、額や首筋に脂汗がにじんできた。

(快川らの祟りではないか)

そんな考えが一瞬頭をよぎり、信長は苦い笑いを浮かべた。

死者の祟りなどというものが本当にあるのなら、自分がこの年まで生きられたはずがない。

苦笑したのはそう思ったからだが、熱や寒気はいっこうに去らなかった。

「父上、いかがなされましたか」

信忠が気づかうほどに顔が青ざめていた。

「何でもない。甲府に戻る」

立ち上がろうとしたが、足に力が入らない。そのまま前のめりに倒れそうになった。

「父上」

信忠がとっさに体を支え、駕籠の仕度を命じた。

「この近くに向嶽寺という寺がございます。今夜はそこでお休み下されませ」

「このこと、皆に知られてはならぬ。湯治に出たとでも触れておけ」

はうようにして駕籠に乗ると、何物かに引きずられるように気を失った。

塩山向嶽寺は室町時代の初期に、武田信成が抜隊禅師を招いて開いた臨済宗の名刹である。

以来、武田氏代々の帰依を受けて栄えたが、武田氏滅亡に際してはいち早く恭順を表明したので、焼き討ちにあわずにすんだのである。

信長は本堂の奥の間にかつぎ込まれ、前後不覚に寝入り込んだ。

長旅の疲れで悪性の風邪をひいたのか、高熱がつづきびっしょりと汗をかいている。

眠っていても頭は割れるように痛く、絶えざる幻影にうなされた。

恵林寺の山門が燃えつづけていた。

紅蓮の炎の中で僧や若衆、稚児たちが、断末魔の叫びを上げながら焼け死んでいく。苦しみのあまり踊り上がり、飛び上がり、互いに抱きつき、もだえこがれて倒れ伏す。

その中で一人快川和尚だけが、座についたまま微動だにしない。炎が僧衣を包み、眉を焦し、肌を焼き立てても泰然と結跏趺坐している。

まるで炎の光背を背負った不動明王のようだった。

「信長よ。お前にはこんなことしかできぬのか」

快川がかっと目を見開いて一喝した。

信長の肺腑をえぐる鋭い目つきである。

「お前がいかに寺や神社を焼き立てようと、神仏を殺すことなどできぬ。たとえ一刻の栄華を極めたところで、神仏のご加護がなければ無間地獄、焦熱地獄に落ちるばかりじゃ」

「たわけが。地獄などお前らが作り上げたまやかしだ」

信長は熱にうなされながら反論した。

「信長よ。地獄はあるのじゃ。人は前世、現世、来世という輪廻の中に生きておる。現世で悪業をなした者は、来世でその罪をつぐなわねばならぬ。それが地獄だ」

「そのようなたわごとは、寺の中でほざいておれ。この世のことは、この世に生きる者が決める。神仏などもはや無用じゃ」

「ならば人は何のために生きるのだ。いかに栄華を極めたところで、信仰心というものがなければ人は決して満足することはできぬ。なぜなら心の奥底に眠る記憶が、前世や来世があることを知っているからだ。いかに法度を厳しくしたところで、信仰心がなければ人は決して心底から従いはしない。罪も報いもこの世限りのことでしかないと思うなら、人は我欲に負けてどんな罪でもおかすだろう。人を真に罪から遠ざけるのは、神仏をおそれ敬う心なのだ」

「余は持たぬ。そのような心など」

「そうであろう。それゆえ何十万という人を殺し、こうして地獄の苦しみを味わうことになったのだ」

炎はますます激しく燃えさかり、快川の顔といわず体といわず赤黒く焼き立てていく。それでも快川は微動だにしなかった。

「余は苦しんでなどおらぬ。たとえ何百万人を殺してでも、成し遂げねばならぬことがあるのだ」

「信長よ、そうした考えこそ、執着の最たるものだと知れ」

「ならば問う。帝も輪廻の中に生きておるのか」

「……」

「仏は一切の衆生は平等だと説いたではないか。ところが帝は、天照大御神の子孫ゆえにこの国を治める権利があると言う。もし輪廻というものが真実なら、何ゆえそのような理不尽を認めるのだ。その上帝から国師号をもらって己れを権威づけるとは、仏の道にはずれているではないか」

「それはこの国の衆生が、帝に対して尊崇の念を持っているからだよ。衆生を悟りに導くための方便なのだ」

「それこそまやかしではないか。お前らは民の無知につけ込み、詭弁をろうしていいようにあやつってきた。人を見下し、人をおとしめ、もの言わぬ奴隷に仕立て上げてきたのだ」

幻影に苦しみながらも、信長は猛烈に腹が立ってきた。

怒りが全身を燃え立たせ、そこら中に鉄槌を下さずにはいられなくなった。

「よいか快川。天照がいてもよい。来世とやらがあっても構わぬ。だが神仏の名においてこの国を支配しようなどと思うな。この世のことは我らが決める。たとえ人は愚かでも、己れの力と責任において生き方を決める。それが天下布武ということだ」

「哀れよのう。そちの考えは理を得ているようでありながら、ただの執着にすぎぬ。その執着ゆえに間もなく身を滅ぼし、焦熱地獄に落ちるであろうよ」

「たわけが。お前こそ炎に巻かれて焼け死んでいるではないか。心頭滅却すれば火が涼しいと言うのなら、立ち上がってここまで来てみろ」

「信長よ。こうかね」

快川はゆっくりと立ち上がり、炎に包まれながら悠然と歩いて来る。

不動明王と化した体が近づくごとに大きくなり、山のようにそびえ立って信長を押しつぶそうとする。

信長は声にならない叫びを上げ、体を激しく反り返らせて目を覚ました。

（夢か……）

汗まみれの首筋をなでて安堵の息をついたが、眠りに落ちると再び同じ夢にうなされるのだった。

三日目にようやく熱も下がり、寒気もおさまったが、体は綿のように疲れ果てていた。

気力の芯棒がへし折れたようで、体を起こすのもおっくうだった。

「殿、ここから遠からぬ所に湯治場がございます。お出かけになられたらいかがでご

ざいましょうか」

森蘭丸が勧めた。

「温泉か」

「いえ。湯がぬるいので、焼いた石を沈めて温かくするそうでございます」

開山の抜隊禅師が塩山のふもとに湯だまりを発見して以来、寺の僧や近くの住民が湯治場として利用しているという。

蘭丸ら近習ばかりを連れて出かけてみると、火山岩が鋭く切り立った谷の間に、六畳ばかりの広さの湯だまりがあった。

信長は側に建てられた小屋で白小袖一枚になり、肩まで湯につかった。

当たりのやわらかい湯がじんわりと体を包み、肩や背筋にへばりついた疲れをとかしていく。

裏の山ではうぐいすが鳴き交わし、目を上げると御坂山地の向こうに雪をかぶった富士の山がそびえていた。

信長は心を打たれた。

周囲から屹立してそびえる富士山の、何と気高く美しいことか。これこそ天下一と呼ぶにふさわしい山である。

天下人とは、かくありたい。

一切の妥協を排して峻厳とそびえ立ち、他からあおぎ見られなければならぬ。

湯の中で体を伸ばしてそんなことを考えているうちに、信長の気力は次第に回復してきた。

快川ごときのたわごとに惑わされてはならない。この国は神仏の権威をふりかざす者によってではなく、この世に生きる者の総意によって治められるべきなのだ。

そうした意識の高まりが下剋上の風潮を生み、戦国の世を現出した。

そのことをいち早く見抜き、天下布武の旗をかかげたからこそ、民百姓までが信長を支持したのだ。

その旗を今になって下ろすことはできない。たとえどのような抵抗を受けようとも、朝廷さえも超える存在となってこの国を治めるべきである。

（そうしなければ、今まで殺した者たちにも申し訳が立たぬではないか）

信長は何かに駆り立てられたように立ち上がり、声高に蘭丸を呼びつけた。

「都の信基に文を出す。書き留めよ」

蘭丸はすぐに矢立てと紙を取り出して間近に控えた。

「ひとつ、誠仁親王への譲位を急ぐこと。ひとつ、信長の将軍就任を取り計らうこと。

ひとつ、一条内基を免じて信基を関白とすること」

安土城に戻るまでにその道筋をつけておけと近衛信基に命じた。

当面の目標は誠仁親王を天皇とし、信長が将軍となって幕府を開くことである。

だが、やがては五の宮の即位と信忠の将軍就任を実現し、公武を超越した存在となってこの国を支配するつもりだった。

四月九日、塩山での湯治によって健康を回復した信長は、躑躅ヶ崎の館に戻った。

「戦勝祝いの勅使が、お待ちでございます」

近習に告げられて対面所に足を踏み入れると、勧修寺晴子が神妙な面持ちで控えていた。

晴子は紅の小袖に萌黄色の打掛けを重ねている。打掛けには唐花の文様が描かれていた。

鮮やかな文様と目鼻立ちのととのった晴子の華やかな顔立ちとが、拮抗しながら調和を保っている。

気高く清楚でありながら、熟れきった果実のような甘くそそられる匂いを放つ。

それが香湯のせいだとは、さすがの信長も気付かなかった。

「このたびの勝ち戦、まことにおめでとうございます。主上のお申し付けにより、祝いの使者として参上いたしました」

晴子が頭を下げると、背中に垂らしたおすべらかしがはらりと横にずれ落ちた。

後ろに控えた侍女の房子が、手早く元の位置に戻した。

「何ゆえわざわざ、かような所まで訪ねて来たのじゃ」

朝廷には何か別の思惑があるのではないか。真っ先にそう疑った。

そうでなければ、こんな所まで勅使をつかわすはずがないと思った。

「安土までまいりましたが、すでにお発ちになった後でございました。せめて岐阜までと思って後を追いましたが、一日ちがいで追いつくことができず、とうとうここまで来てしまいました」

「そち一人の才覚でか」

「はい。不破の関を越えたとたんに、羽根でも生えたように気持が軽くなりましたので」

晴子は屈託がない。瞳は童女のように生き生きと輝いていた。

信長の両腕に、桑実寺の石段で晴子を抱き上げた時の感触が鮮やかによみがえった。

二人して満開の山桜を見上げたことが、心温まる思い出として脳裡に刻まれている。

修羅の日々に、ぽっと明かりが灯ったような特別な一日だった。

「また山桜を見に行きたいものだな」
「ええ、ほんとに」
そのやり取りには、二人にしか分らぬひめやかな意味が込められていた。
「余は明日から富士遊覧の旅に出る。富士の裾野を横切って駿河に下り、東海道を通って安土に戻るつもりじゃ。そちの心に今でも羽根が生えているのなら、そこまで翔ぶのも一興かも知れぬ」
「ありがたきお言葉ではございますが、この場ではご返答いたしかねますゆえ」
明朝までに返答すると約して席を立った。
晴子が去った後も、甘やかな香りがあたりに色濃くただよっていた。

政治は駆け引きである。
目標を定めたなら、誰にも本心を悟られることなく根回しを終え、ひとつひとつ手順を踏んで事を運ばなければならぬ。
表に大義名分の旗を押し立て、裏では嘘と詐術と恫喝を駆使して、ねらう相手を手の内に入れる。
それは囲碁や将棋の駆け引きにも、漁師が獲物を網に追い込む手つきにも似ている。

正直や誠実とは無縁の業なのだ。
中庭に咲くあやめを見つめながら、近衛前久はそうした物思いにふけっていた。
恵林寺の焼き討ち以来、躑躅ヶ崎の館の寝所に引きこもっている。六日の間誰にも会わず、どうすれば信長を倒せるかを考えつづけていた。
（もはや妥協の余地はない）
恵林寺の山門から信長を見た時から、前久の決意は定まっていた。
これまで何とか信長と共存する道をさぐってきたが、これ以上譲歩をつづけて朝廷の権威を失墜させるわけにはいかない。そんなことは、前久の誇りが許さなかった。
近衛家の祖神である天児屋根命は、天照大御神から瓊瓊杵尊の統治を助けよとの命を受けてこの国に天下った。
以来中臣、藤原、近衛と姓こそ変わったが、一貫して朝廷を守り通してきた。
帝と朝廷を守ることこそが近衛家に生まれた者の大義であり、そのためにはどんな策をろうすることもためらってはならない。
たとえ刺し違えてでも信長を滅ぼす覚悟を定めていたが、事は極秘のうちに進めなければならなかった。
万一発覚したなら、正親町天皇にまで累が及ぶ。たとえ成功したとしても、摂関家

の当主がこのような陰謀に関わっていたことが公になれば、帝の権威を汚すことになる。

（では、どうすればよいのか……）

当てもなく思いを巡らしていると、天井からあやめの葉がひとひら舞い落ちてきた。

使いに出していた風の甚助が戻ったのだ。

前久は上段の間の脇息にもたれて耳を傾けた。

「先ほど信長が戻り、二条御所のお方さまと対面いたしました。富士遊覧に誘いましたが、返答は明日なされるとのことでございます」

甚助はそれだけ告げると、いずこへともなく姿を消した。

「ご家門さま、日向守さまが見舞いにまいられました」

取り次ぎの近習がふすまの外から告げた。

「不例じゃ。誰にも会わぬ」

「そのようにお伝えいたしましたが、是非にとおおせられますので」

「ならばここで挨拶だけ受ける。そう伝えよ」

前久は用意の覆面頭巾を手早くかぶった。頭巾も小袖も白なので、いかにも重傷を負った者のようだった。

明智日向守光秀は、緊張した硬い表情で入って来た。

「近衛太閤、こたびはかような仕儀となり、おわびの申しようもございませぬ」

すべて自分の責任と感じているらしく、申し訳なさに消え入りたげだった。

「ご不例とはうかがいましたが、ご容体も気にかかり、またおわびも申し上げたく、かくは推参つかまつりました」

「たいした火傷ではない。懸念には及ばぬ」

恵林寺の焼き討ちを止めようとして、前久は顔にわずかに火傷を負った。

跡が残らぬほどの軽いものだが、六日間も引きこもっているうちに、信長を諫めようとして重傷を負ったという噂が広がっていた。

「それにこのような傷を負うのも、不徳のいたすところじゃ。そちのせいではない」

「あのような頼み事をしたことが、今さらながら悔やまれまする。おおせのごとく、それがしが殿をお諫めするべきでございました」

「そちに頼まれていながら、快川国師を助けることができなかった。山門で焼き殺された僧侶たちの苦しみにくらぶれば、このような傷などものの数ではない」

「数日のうちに、都にお戻りになるとうかがいましたが」

「そのつもりじゃ。こたびの参陣には、武田家の存続と快川国師の安全を図る目的が

あった。帝からも内々にそのようなおおせがあったが、いずれもご叡慮にそむく結果となった。この上信長公に同道しても致し方あるまい」

「上様は明日駿河に発向なされます。徳川家康どのがご案内なされますので、我々には帰国の沙汰が下されましょう。都にお戻りになられるのなら、それがしがお供いたしまする」

光秀が切ない顔で申し出た。

前久をこんな目にあわせたことが気の毒で、何かをせずにはいられないのである。

「気持はありがたいが、それはなるまい」

「何ゆえでございますか」

「信長公の不興をかった身じゃ。供などしてもろうては、そちに迷惑が及ぶやも知れぬ」

前久は殊勝なことを言ってみせた。

こちらが控え目に振る舞えば、光秀はますます負い目を強く感じる。その思いが信長への反感に変わるよう、それとなく誘導していた。

「そのことであれば、ご懸念には及びませぬ。上様に申し上げれば左右なくお許しいただけましょう」

「すまぬが、今は織田の軍勢など見とうはない」

「近衛太閤……」

「織田の旗印を見るたびに、山門を取り巻いていた光景が頭をよぎる。炎に巻かれて果てられた快川国師のお姿がよみがえり、この胸が張り裂けそうなのじゃ」

ひとしきり目頭を押さえてから、前久は近習に酒を運ばせた。

「この傷では相伴もできぬが、見舞うてくれた礼じゃ。一献くんでもらいたい」

光秀を間近に呼んで朱塗りの盃を渡した。

底には金の色も鮮やかに菊の御紋が描かれていた。

「かたじけのうござる。ありがたく頂戴つかまつります」

光秀はうやうやしく盃をおしいただいた。

「そうじゃ。せめて笛など披露しよう」

前久は覆面のおおいをはずして笛をかなでた。

この場の雰囲気にはそぐわぬ、速い調子の明るい曲である。

「ああ、これは……」

光秀がことりと盃を置き、遠く切ないまなざしを虚空に向けた。

そう、足利義輝との最後の酒宴でかなでた曲である。

永禄八年春――。

義輝は二条御所に前久を招いて花見の宴を催した。

二人は従兄弟で義兄弟という二重の縁で結ばれている。片や関白、こなたは将軍として、朝廷と幕府の復興をようやく軌道に乗せた頃だった。

御所の桜は満開だった。

義輝は前久を誘い出し、花の下で酒をくみ交わした。同席したのは義輝の異母兄に当たる細川藤孝、奉公衆として義輝に仕える明智光秀だけだった。

義輝と前久は三十歳。

藤孝三十二歳。光秀三十八歳。

この四人が、朝廷と幕府を再建したと言っても過言ではない。義輝が急に思い立って酒宴を催したのは、それぞれの労を謝するためだった。

宴たけなわになると、義輝が剣舞を披露し、前久が笛をかなでた。藤孝は鼓を打ち、光秀は漢詩を誦して義輝の舞いに興をそえた。

気心が知れた者だけの座興である。

だが、いずれも一流の域に達しているので、なまなかの役者には及びもつかないような興趣がある。

その見事さに誘われて、女たちまでが庭に出て見物したものだ。

前久がかなでる笛には、その時の思い出が詰まっている。音のひとつひとつが、桜の庭の回想へといざなわずにはおかなかった。

あと十年、いや五年の歳月が四人に与えられていたなら、足利幕府は立ち直り、朝儀も旧に復されていただろう。

だがそれから三月もしないうちに、義輝は松永弾正らの謀叛によって討ち取られた。

以来十七年、二人はそれぞれの苦節をへてこうして向き合っている。今や織田家の出世頭となった光秀だが、あの頃のことは決して忘れていないはずだった。

「つい長うなった。いろいろと思い出すことも多くてな」

前久は笛を終えて思い出話に誘おうとしたが、光秀は慎重に身をかわした。

「思いがけぬもてなしをいただき、長居をしてしまいました。帰洛のことについては、上様のお許しをいただき次第お知らせいたします」

いつぞやのように涙を見せることもなく、逃げるように退出した。

前久は覆面を脱ぎ、渇いた喉を手酌の酒でうるおした。光秀の胸を揺さぶるつもりが、どうやら先にまいったらしい。

義輝と共に死んだ妹の里子や叔母の慶寿院の面影までがよみがえり、腹に力が入ら

ないようなやる瀬なさにとらわれた。

炎上する二条御所。

御所を包囲する数万の軍勢。

彼らが上げる勝鬨が、耳の底から地鳴りのように聞こえてくる。

二条御所の光景は恵林寺の惨状へとつながり、頬の火傷がひりひりと痛んだ。

もう傷はいえているのに、あの日のことを思い出すたびに皮膚の裏側に痛みがよみがえるのである。

「晴子さまは、どうしておられる」

「北の館にご滞在でございます」

「お目にかかりたい。先触れをせよ」

近習を使いに出し、対面の許しを得てから北の丸の御殿を訪ねた。

晴子は文机に向かって何やらしたためていた。

「お取り込みのさなかに、ご無礼をいたします」

「いいえ。わたくしもお目にかかりたいと思っていたところでした」

晴子はすぐに筆を置き、前久と向き合った。

薄色の陸奥紙には水茎の跡が鮮やかである。書道に通じた前久も感服するほどの、

形にとらわれない自由でのびやかな書体だった。

「道中記でも記されているのでしょうか」

「旅の徒然をまぎらしているばかりです。お目にかけるのも恥ずかしいのですが、墨が乾かないものですから」

「信長公は明日駿河に向かわれるそうですが、お聞き及びでございましょうか」

前久はそ知らぬ顔で切り出した。

「うけたまわりました」

「いろいろと用もありますので、私は信濃路をたどって都に戻るつもりです。晴子さまも同道なされませぬか」

「そのことについて、ご相談申し上げたいことがございます」

「ほう、何でしょうか」

「先ほど信長公より、駿河へ同道せよとのご内意をうけたまわりました。とても応じることなどできまいと存じますが、近衛公はどのようにお考えでしょうか」

思いもかけぬ問いかけに、前久は返答に詰まった。

都を発つ前に、朝廷は女房衆によって守られてきたと言い、晴子に犠牲を迫るようなほのめかしをした。

晴子はそれを逆手に取り、前久に決断をゆだねたのだ。

「何ゆえ信長公は、同道を求められたのでございましょうか」

前久は腑に落ちぬという顔をして問い返した。

「わたくしにも分りませぬが、ここまで来たなら駿河まで翔ぶのも面白かろうとおおせられました」

「晴子さまはいかがです。同道してもよいとお考えですか」

「そのようなことをすれば、都でどのような誤解を招くやも知れません。されどお断わりすれば信長公のご不興をかい、公武の間に悪しき影響を与えはせぬかと案じております」

「昨年の春にご譲位を巡る争いが起こった時にも、晴子さまにご使者に立っていただいたお陰で丸くおさまりました。信長公は晴子さまをよほどお気に入りのようだ」

あの時桑実寺で何があったか察しはついていると、前久はかなり露骨にほのめかした。

「気に入っていただいているのなら、そのお気持を頼りに内懐に飛び込みましょう。いつぞや朝廷は女房衆によって守られてきたとおおせられたのは、そのような意味でございましょう」

「あれは言葉のあやです。深い意味などありません」

「今はどうです。もしわたくしに信長公をお諫めし、公武の間を事なくおさめることができるとしたら、同道せよとおおせられますか」

晴子は覚悟の定まった鎮まった表情をして、錐のように鋭い問いを突きつけてくる。

「私に答えられることではありません。何ゆえそのようなことをおたずねになるのですか」

「わたくしは行ってもいいと思っております。しかし、このことが公になったなら、宮さまばかりか主上にまでご迷惑が及ぶやも知れません。その時には一人の女官として身を引くつもりですが、子供たちの行く末ばかりは立ち行くように計らっていただきたいのです」

「そこまでのご決意なら、おおせの通りにいたしましょう。しかし、ひとつだけお聞き届けいただきたいことがございます」

「何でしょうか」

「旅の間ご身分を伏せ、信長公の侍女として同行していただきたい。晴子さまの御輿には別の侍女を乗せ、私が供をして都まで向かいます。そうすれば世間の目をあざむくことができましょう」

前久は侍女とすり替わるための細々とした指示をした。

もはや信長と共存するつもりはない。だが晴子が信長を少しでも諫めてくれるなら、謀を巡らす時間がかせげると思った。

天正十年四月十日――。

織田信長は甲府を発って富士遊覧の旅に出た。

供をするのは馬廻り衆一万余人で、重臣たちは信州路を通ってそれぞれの所領に引き揚げることになった。

案内役を務めるのは、今度の武田攻めの功によって駿河国の大半を与えられた徳川家康である。

旅程はおよそ十日。

甲府から中道往還を通って富士の裾野を南に下り、東海道を上って安土に戻る。信長にとっては生涯最初で最後の大旅行だった。

旅の目的は行楽ではない。

古くは坂上田村麻呂が蝦夷討伐のために征夷大将軍に任じられて以来、武家の統領が将軍となるためには東国を掌握しなければならないという不文律があった。

源頼朝が十万の兵を動員して富士の裾野で巻き狩りを行なったのも、東国を完全に掌握していることを天下に知らしめるためである。

信長もこの例にならい、東国征圧を終えて将軍就任に必要な内実をととのえたことを、富士遊覧の旅を行なうことによって津々浦々に知らしめようとしたのだ。

この旅には、徳川家康との結束の強さを内外に示すという目的もあった。

三年前、武田勝頼との内通を疑った信長は、家康に正室の築山御前と嫡男信康を殺すように命じた。

妻子を犠牲にしてまで忠誠を尽くした功に報いるために、信長はわずかな手勢をひきいただけで家康に身を預けたのである。

信長は華美を好む。

供の軍勢には洛中での馬揃えのような派手な装いをさせ、自身も南蛮鎧に緋色のマントをかけてさっそうと馬を進めた。

延々とつづく行軍の中ほどに、金銀の金具で飾り立てた真新しい輿が進んでいた。

十人ばかりの駕輿丁にかつがれた大きな輿には、勧修寺晴子と侍女の房子がおし黙ったまま背中を向け合うようにして乗っていた。

昨夜、二人は激しく争った。

信長に同行するという晴子を、房子がいつになく険しい調子で諫めたからだ。

「そのようなことをすれば世間が何と言うか、姫さまにはお分りにならないのですか」

低い地声を吊り上げて言いつのった。

「たとえやましいことは何ひとつなかったとしても、あれやこれやと下世話な噂を立てるものです。そうなってからでは、いくら申し開きをしても間に合わないのですよ」

「そんなことは承知しています」

晴子は動じなかった。

この身を武器に信長の内懐に飛び込もうと、すでに覚悟を定めていた。

「万一そのような噂が宮さまや主上のお耳に達したなら、どれほどお心を痛められることか。そのことをお考えにはならないのですか」

「わたくしが行くのは、朝廷を守るためです。たとえどのような批判を受けようとも、やがては分っていただけるでしょう」

「隙あらば姫さまを追い落とそうとしている女房衆は大勢います。禁裏でも二条御所でもあらぬ噂を立てられ、宮さまにも二度と顔向けできなくなるのですよ」

「それでも構いません。子供たちの行く末のことは、近衛公にお引き受けいただきましたから」

「それでは……、それではこの私の一生は何だったのですか」

房子は握りしめたこぶしを、怒りに小さく震わせていた。

「姫さまが宮さまのお側に上がられて以来、女の幸せをみんな捨ててお仕えしてまいりました。やがては皇后さまにもなられようと、辛い思いを耐えてまいりました。それを今になってこんなことをなされては、何もかも台無しではありませんか」

「五摂家の出でなければ、皇后さまになることはできません。わたくしは女官の一人にすぎないのです」

「でも、やがてお子さまが」

「そのこととわたくしの立場とは別です。もし供をするのが嫌なら、都に帰っても構いません。近衛公が身代わりの侍女を連れて帰られるそうですから、同行させていただくように計らいます」

晴子は残酷なほど強情なことを言って寝所に引きこもった。

房子はしばらく声を殺して泣いていたが、今朝になると何事もなかったように輿に乗り込んで来たのである。

房子は黙り込んだままだった。

おそらく一睡もしていないのだろう。はれぼったい目をしてうつむいたまま、貝のように口を閉ざしている。

髪はつやを失い、肌は妙に黒ずんで、ひからびた手はひと回り小さくなっていた。

（あら、いつの間に）

こんなに老けたのだろうと晴子は思った。

幼い頃にはこの手に打たれたこともある。宮さまのお側に上がる時には閨の手ほどきをし、子供が生まれるたびに付き添いをしてくれた。

禁裏に上がる晴子に従うために、いとしい人や子供と別れたというのだから、女の幸せをみんな捨てたと言うのも無理からぬことである。

こうして意に染まぬ旅をさせるのは気の毒だが、決心を変えるつもりはなかった。

このままでは朝廷と信長の間はますます険しくなり、やがて破局を迎えることは目に見えている。

これをさけるためには、名目的にでも朝廷を立てるように信長を説得することだ。主上の命を受けて征夷大将軍になるという形を取れば、すべては丸くおさまるのである。

信長が頑なにそれをこばむのは、朝廷に対して屈折した思いを抱いているからにちがいなかった。

（その心をほぐせるのは、うちだけや）

晴子にはそんな自信がある。だからどんな誤解や批難を受けてもやり遂げたかった。

輿は足早に進んでいく。

騎馬に遅れまいとして駕輿丁たちが小走りになるので、前後左右ばかりか上下にも揺れる。

そのたびに下がり紐をつかんで体を支えなければならないので、座っているだけでもひと苦労だった。

「まるで米俵でも担いでいるようではありませんか。何の因果でこのような目にあわなければならないのでしょうね」

房子が腹立たしげにつぶやいた。

八瀬童子ならこれくらいの足取りで輿を揺らしたりはしない。信長の供などするからひどい目にあうのだと言いたげな口ぶりだった。

「お前は昨夜、こんなことをすれば世間が何と言うか分らないと言いましたね」

この機会に念を押しておこうと晴子は思った。

「心の底では、お前もそう思っているのではありませんか」
「そう思っているとは、どのような意味でございましょうか」
腹を立てた時の房子は、底意地が悪く辛辣である。
「わたくしが信長公のお供をするのは、よこしまな情にほだされてのことではないかということです」
「もしそう思っているのなら、姫さまの御髪を剃り落としてでも都に連れて帰ります。誰がこんな輿に乗ったりするものですか」
「そうですか。そこまで分っているのなら、わたくしのすることを黙って見ていて下さい。たとえどんなことがあっても、取り乱してはなりませんよ」
やがて笛吹川にかかった。
山深い国とは思えないほど広々とした川に、真新しい舟橋がかけられている。川の向こうには険しく山が切り立っているが、富士の姿は見えなかった。
舟橋を行く駕輿丁たちの足取りを危ぶみながら、晴子はこれまでいくつの川を渡ってきただろうと思った。
川は異界との境だと、古くから我が国では意識されてきた。
汚れを清め不浄を流す場所でもあった。

晴子の心にもそうした思いは根付いている。
川を渡るたびに日々の暮らしをはぎ取られていくような頼りなさと、未知の世界に踏み込むときめきを覚えるのはそのせいだった。
川を越えて一里ほど山に分け入った所に、右左口の宿場があった。
甲斐と駿河を結ぶ中道往還の起点となる所で、旅人はここに一泊して翌日の山越えに備えるのが常だった。
宿場のはずれに敬泉寺という寺があり、寺の側にはひなびた里には不似合いな華やかな御殿が建っていた。
徳川家康が信長の宿所とするために築いたもので、御殿のまわりには二重三重に柵を巡らし、警固の兵が隙間もないほど立っている。
御殿の周囲や街道ぞいには諸卒の陣小屋が千軒ばかりも建ち並び、にわかに町が出現したような有様だった。
晴子らが乗った輿は、冠木門を通って御殿の離れにつけられた。
離れには上段の間と下段の間があった。
信長の重臣のために用意したものだろうが、晴子が同行することになったので急遽宿所に当てたのである。

「これから殿は徳川どのとの宴席にのぞまれます。ごゆっくりお休み下されませ」

信長の近習がそう告げて立ち去った。

取り残された二人は、部屋の作りの見事さにしばし見とれていた。柱や天井はすべて白木で、床の間や欄間の作りも手が込んでいる。

畳もたった今あつらえたように青々としていたが、御所車を描いたふすまばかりは年代をへた重厚さを保っていた。

「このようなものを、いったいどこから持って来たのでございましょうね」

房子がいぶかるのも無理はない。大和絵の技法を駆使したふすま絵は、今や都にもわずかしか残されていない貴重なものだった。

「信玄公のご内室は三条家のご出身です。ゆかりの寺にでも残されていたものを、ここに移したのでしょう」

「今夜は、信長公はお成りになるのですか」

「分りません。でもお供をしているのですから、仕度だけはしておかなければ」

晴子は荷を解いて仕度にかかった。

ここでは満足なもてなしもできないが、旅の間に必ず信長の心をとらえなければならない。

その成否は最初の夜にかかっていると言っても過言ではなかった。

朝廷には古くから洗練された閨房術がある。それはおそらく、男が女のもとに通って妻とする妻問い婚の風習が生み出したものだろう。

男は初日、二日と女のもとに通いながら相手の品定めをし、三日目に三日夜の餅を食べて婚礼の証とする。

だが気に入らなかった場合には、初日か二日目で足を止めればその恋は終わったと見なされ、誰からも批難をあびることはなかった。

それだけに女は全身全霊を尽くして想う男を引き止めようとする。

閨房術の発達する理由がここにあった。

帝のご寵愛を受ける女房衆にとっても、閨房術は必須の課目だった。

彼女らはそれぞれの局に住み、帝のお運びを待つ。その結果としてお子をなし、その子が皇位につくようなことがあれば、身の誉れとなるばかりか、実家は外戚として強大な権力を掌中にする。

それゆえ帝に足しげくお運びいただけるように、公家の娘たちは幼い頃から礼儀作法や教養とともに閨房術を教え込まれた。

その力量がどれほどのものであったかは、新田義貞に下された勾当内侍の例を見れ

ば歴然とする。

鎌倉幕府を倒して上洛した義貞は、後醍醐天皇から勾当内侍を恩賞としてたまわった。

さらなる忠勤を励むようにとの思し召しによるものだが、義貞は初めて接した京女との房事に溺れ、軍事も政治も怠った末に越前の深田の中で敗死するという運命をたどった。

南朝方の重鎮であった北畠親房が義貞を評した、

〈させることなくして、空しくなりぬ〉

という言葉には、「よくもまあ、やすやすと落ちたもんや」とでも言いたげな冷笑が感じられる。

それは親房が、後宮における閨房術の凄まじさを身をもって知っていたからではないだろうか。

二人は黙々と仕度をした。

厳粛な儀式にでものぞむように生真面目な顔をして装束をととのえ、化粧をし、部屋に香を焚いた。

晴子は香道についての造詣が深い。数種類の香を調合することによって、香りを自

在にあやつることも人の心を左右することもできる。

今夜は伽羅を多目にして、森の奥深くにただよう空気のような、澄みきっていながらどこか甘い土の香りを含んだものにした。

家康との宴席で気を張り詰めた信長の疲れをいやし、気持を鎮めるためである。

行灯の数や位置も重要だった。

あまりに明る過ぎては物が露わになり過ぎるし、暗くては装束や化粧の美しさが引き立たない。

高い位置からの明かりでは顔がのっぺりと見えるし、低過ぎるといかにも床入りを待ち受けているようで品がなさ過ぎる。

何度か試した末に、部屋の両側の鴨居に和紙でおおった柱行灯をかかげ、床の間の隅に大きめの行灯を置くことにした。

鴨居にかけた柔らかな光が部屋をほどよい明るさに保ち、低い位置からの光が下の座につく晴子の顔を斜め前から照らすようにした。

こうすれば信長の目も疲れないし、斜め下からの明かりによって晴子の顔も陰影をおび、妖しげに引き立つはずだった。

こうしたひめやかな作業にいそしみながらも、晴子の胸は苦しいほどにときめいて

いた。

こんなことは初めてである。

鬢除を終えた夜に宮さまをお迎えした時にも、おそれ多さに気を張り詰めていたばかりで、胸が躍るようなことはなかった。

それ以後はあわただしい出産のくり返しで、恋などという感情とは遠いところにいたのである。

晴子は胸に手を当ててみた。

鼓動が速くなっている。乳でも満ちたように乳房が硬く張っている。軽く触れただけなのに、鋭い感覚が体の芯を突き抜けていく。

こんな切なさがあることは、歌や物語の中で知ってはいたが、まさか自分の内にもひそんでいようとは思ってもいなかった。

(あかん、しっかりせな)

同道したのは、信長を朝廷の中に取り込むためである。これは女の戦なのだ。そう戒めてはみても、揺れ動く心を立て直すことができなかった。

信長は夜がふけてからやって来た。

今夜はもう来ないだろうと諦めかけた時に、眠そうな目をしてふらりと現われた。

精魂を込めた香りにも明かりにも関心がないのか、上座につくなり茶を所望した。

珍らしく酒に酔っている。

房子が用意の桜湯を手早く出した。塩漬けにした桜の花を浮かべたもので、婚礼などのめでたい席に用いられる。

信長は花びらごと飲み込み、かわりを求めた。

塩の味がする湯は、酔いに渇いた喉をうるおすには最適なのである。

「このたびはお供をお許しいただき、まことにありがとうございました」

晴子はつつましく頭を下げた。

「うむ、不自由があれば遠慮なく申すがよい」

「かたじけのうございます。御陣中にありながらこのような宿所をご用意いただき、厚くお礼を申し上げます」

「これは家康の手柄じゃ。礼には及ばぬ」

「明朝はお早いお発ちでございましょうか」

「そのつもりじゃ」

「それではくつろいでいただくこともかないますまいが、何なりとお申し付け下されませ」

晴子は明かりと反対の方にわずかに首をかしげた。
陰影がより深くなって、魅惑するような愛くるしい表情になった。
「ならば膝を貸してくれ」
信長は許しも待たずに晴子の膝を枕にして横になった。
とまどってうつむく晴子の目を鋭く見据えていたが、二、三度まばたきをして目を閉じると、すぐに寝息を立て始めた。
初日は手も触れ合わぬのが作法である。だがこんなに無関心な振る舞いをされては、晴子は心中おだやかではいられなかった。

翌朝、信長は爽快な気分で目を覚ました。
これほど深々と眠り、五体に活力がみなぎるのを感じるのは久々のことだ。
日頃は自分でも苛立つほどに寝つきが悪く、眠りも浅い。眠っていても頭のどこかでめまぐるしく考えを巡らしているし、修羅の夢にうなされることも多い。
だが晴子の膝に頭をのせているとふっと心が軽くなり、張り詰めた神経も心地よくゆるんで、いつの間にか眠りについていた。
夜具に移されても気付かぬほどに深く寝入り込むとは、父信秀を失って以来絶えてなかったことだ。

そんなことではいつ寝首をかかれるか分らない状況を生き抜き、今日まで休むことなく突っ走ってきた信長だった。
部屋には柱行灯がひとつだけ灯してある。山あいのせいか冷え込みもかなり厳しい。夜はまだ明けていないようで、物音ひとつ聞こえなかった。
信長は身を起こし、ふすまをそっと開けてみた。下段の間には晴子と房子が寄り添うようにして眠っていた。
明かりを灯していないので、夜具のもり上がりでかすかにそれと分るばかりである。
信長は燃え尽きかけた柱行灯をはずし、晴子の枕元を照らしてみた。
箱枕に頭をのせ、乱れ箱に髪を納めて、行儀よく横向きに眠っていた。禁裏の女房衆ともなると、あお向けになって眠るようなはしたないことはしないのである。
頭をこちらに向けているので、顔はよく見えなかった。利発そうな秀でた額と細く通った鼻筋が、ゆらめく炎に照らされてぼんやりとうかがえるばかりである。
だが信長は晴子の表情をくっきりと思い描くことができた。
美しくととのった富士額や、きかん気の強そうな愛くるしい瞳、慎しみ深く閉じた唇。

桑実寺ですべてをさらけ出した女が、きゃしゃな体を横たえて安らかな寝息をたてていた。

（それにしても、よくぞここまで）

同道する決心をしたものだと思った。

禁裏の後宮の仕来りがどうなっているのか、信長には分らない。

しかし東宮夫人ともあろう者がこんなことをしては、無事ですむとは思えなかった。

信長はこれまで女に心を許したことはなかった。

数多くの側室を持ち、十数人もの子を生ませたが、女を愛した末の営みではない。

織田家の繁栄を図るために、腹を借りるくらいのつもりしかなかった。

だが、晴子はちがった。

最初に若狭の局と名乗って安土に来た時から、生命の弾みが心地よく伝わってくるような手応えを感じていた。

洛中での馬揃えの日には素性も知らぬまま湯屋の供をさせ、勅使として安土に来た時には軽からざる身と知りながら桑実寺の庵室に連れ込んだ。

深く知れば知るほど心惹かれるのは、命も体も丸ごと投げ出しているような晴子の生き方に共感を覚えるからか。

それとも東宮夫人という高貴な身分ゆえに、禁断の実に触れるような高ぶりにさそわれるのか……。

信長はふと、幼い頃に母の寝顔を盗み見たことを思い出した。

あれはまだ七つか八つの頃のことだ。

清洲城にいた母のもとを訪ねたが、幼い頃から離れて暮らしている信長に対して母は冷淡だった。

弟の信行にばかり優しくし、信長が近づくと迷惑そうに身をかわす。親しげに言葉をかけてくれることがあっても、無理をしているのがありありと分るほど表情が強張っている。

人一倍感受性が強く、母の愛に飢えていた信長は、何しに来たとでも言いたげな母の目を見るたびにひどく傷ついたものだ。

こばまれ、突き放され、裏切られた末に、女の胸には夜叉が住んでいるのだと悟った。母を憎み蔑みながら、生涯女に心を許すまいと誓った。

だが、それだけでは孤独な心をいやすことはできない。思いあぐねた末に、母の寝所をのぞきに行くことにした。

獰猛な犬でも、眠っている時にはやさしい表情をしている。母もきっと同じだろう

と思った。

その目論見はぴたりと当たった。信長と同じように癇癖の強い母が、菩薩のようにおだやかな表情をして眠っていた。

晴子の寝顔は、あの時の母の表情によく似ていた。

明かりを近づけ過ぎたのだろう。

晴子が目を覚まし、横になったまま上目使いに信長を見上げた。

驚くでも騒ぐでもなく、物問いたげな目をじっと向けている。くっきりと黒い瞳が、明かりに照らされて妖しげに輝いていた。

（この女にも、夜叉が住むか）

信長はそれを確かめたくて瞳の奥をのぞき込んだが、ふいに頬が燃えるような恥ずかしさを覚えてふすまを閉ざした。

「お蘭、どこじゃ」

わざと荒々しい声で森蘭丸を呼んだ。

「こちらに控えおりまする」

間髪を容れずに応じる声がした。

「四半刻の後に出立じゃ。全軍に下知せよ」

心の奥底に隠した秘密を見られたような気恥ずかしさが、信長を未明の出立へと駆り立てていた。

織田軍の凄まじさは、信長のどんな命令にも瞬時に対応できることである。

上は重臣から下は足軽雑兵にいたるまで、鉄の規律で統制され、眠っている間にも気を張り詰めて不測の事態に備えている。

出立の命が下ると誰もが我先にと飛び起き、鎧を着込み武具を帯し、一糸乱れぬ隊列をととのえて信長が現われるのを待っていた。

月明かりを頼りに宿場を出た一行は、つづら折りの道を通って右左口峠に向かった。およそ一里の道を登りきった時には、東の空があかね色に染まり、折り重なってつづく山々が影絵のように浮かび上がった。

峠を下りて谷川ぞいの村に着くと、茶屋の仕度がととのえてあった。徳川家康が信長を迎えるために作ったものである。

ここでしばらく人馬の足を休め、女坂峠を目ざした。

道は急に険しくなり、樹齢数百年とおぼしき大木がうっそうと生い茂っている。

だが何事にも手落ちのない家康は、左右の大木を切り払い、山を切りくずして道を広げ、要所に警固の兵を配していた。

女坂峠を越えると、精進湖へつづく下り坂である。

すり鉢の底のような地形に、青い空を映した湖が満々と水をたたえている。まるで大地の瞳のような、奥行きのある深い色合いだった。

湖畔の道をしばらく進むと、左に大きく曲がっていた。

先を行く軍勢が見えなくなるほどの曲がり角を抜けると、目の前に忽然と富士山が現われた。

純白の雪におおわれた山が、広大な裾野を従えてどっしりとそこにある。

信長は手綱を絞って馬を止め、茫然と山を見上げた。

富士山の大きさと美しさは、たとえようもないほどだった。

甲斐の国からは、頭が見えただけである。それでも感嘆に値したが、ここに来て裾野の果てまで見渡してみると、その存在は圧倒的だった。

信長は突然、神はいると感じた。

これほど見事な山を造ることによって、神は人間どもに己れの偉大さを知らしめたのだ。

それは天照のような女々しい神ではない。素戔嗚尊のように雄々しく猛々しい神でなければならぬ。

（余が神である）

富士と対峙する歓びに震えながら、信長は心の中でつぶやいた。

神はこの山を造ったように、自分をこの世につかわしたのだ。それゆえ権力の頂点に立ち、整然とした国を築かねばならぬ。

そうした決意に、胸がふつふつとわき立ってきた。

信長からかなり遅れて、晴子の乗った輿は大曲がりを越えた。

前には御簾が垂らしてあるので、輿の中は昼間でも薄暗い。暗さになれた目には、真っ白な雪におおわれた富士は輝くほどにまぶしかった。

「姫さま、あれが、あれが富士のお山でございます」

沈み込んでいた房子が、急に元気づいた。

富士遊覧は都人のあこがれである。正月には富士の形に似せた雪山を作り、祝いの宴を張ってあこがれの山に思いを馳せる。

その山を目前にして、懸念も気鬱も吹き飛んだようだった。

「分っています。御簾を上げなさい」

「よろしゅうございますか」

日頃は仕来りにうるさい房子が、言われるままに御簾を半分ほど引き上げた。それでも中腹までしか見えないほどに山は高い。

「何をしているのです。全部上げなければ、頂きが見えないではありませんか」

「でも、それでは」

晴子の姿がまわりから丸見えになる。

東宮夫人としてはあまりにも慎しみのない行ないだった。

「構いません。今は信長公の侍女として同道しているのですから」

御簾を広々と開けさせ、身を乗り出して頂きをながめた。

流麗な姿が青空にくっきりと映えている。

それは純白の十二単をまとった女神のようだった。

「どうです。お供をしてよかったでしょう」

晴子は富士の美しさが自分の手柄でもあるように自慢気だった。

「それはもう。生きているうちにこのような景色を目にすることができるとは、夢のようでございます。でも、このようなことをなされては、姫さまの行く末が危うくなりはせぬかと、気が気ではないのでございますよ」

「わたくしはもう身を引くべき年になりました。宮さまのことは、若草の君や新しく召し抱えられた女房衆に任せておけばよいのです」

「しかし、洛中に浮名を流すようなことになっては、身の置き所さえなくなりましょう」

「その時には髪を下ろして寺に入ります。たとえこの命を奪われたとしても、悔いはありません」

耐えられないのは、後宮の仕来りや格式に縛られたまま朽ち果てていくことだ。

たとえ旅の途中に斃れることになろうとも、信じた道を一歩でも先に進むことができれば本望だった。

「ひとつだけ、不躾なことをおたずねしてもよろしゅうございますか」

「ええ、どうぞ」

「姫さまは信長さまを慕っておられるのではありませんか」

「ちがいます。朝廷を守るためだと言ったはずです」

「それは分っておりますが、昨夜はとても楽しげに仕度をしておられました。宮さまには決してお見せにならない、艶めいたお顔をしておられましたよ」

「明かりのせいでそう見えたのでしょう。せっかく富士のお山を拝しているのです。つまらぬことに気を回さずに、好きな歌でも披露したらどうですか」

晴子は話題を変えたくて水を向けた。

房子もこれ以上問い詰めても無駄だと諦めたらしい。『万葉集』に収められた山部赤人の歌を低く謡った。

「田子の浦ゆ　うち出でてみれば　真白にそ
　富士の高嶺に　雪は降りける」

百人一首にも収められた有名な歌である。

富士を目の前にして聞けば味わいも格別だが、晴子は心の耳で別の歌を聞いていた。

（天の原　富士の柴山　木の暗れの
　時ゆつりなば　逢はずかもあらむ）

恋しい相手に逢えぬかも知れないという不安を歌ったものだ。

似たような不安が、晴子にもあった。

昨夜の信長の振る舞いを見る限り、自分に興味を持っているとは思えない。

内懐に飛び込むどころか、鼻先であしらわれたまま旅が終わるかも知れなかった。

美貌でも才覚でも、人後に落ちぬとひそかに自負している晴子である。東宮夫人として宮さまのご寵愛をいただいたという誇りもある。

この身を投げ出したなら、信長でさえなびかずにいられまいという自信があっただけに、意外な成り行きに少なからず動揺していた。

やがて一行は本栖湖に着き、湖畔の江岸寺を宿所とした。

湖をのぞむ高台に立つ寺の周囲には、将兵たちの陣小屋が千軒ちかくも建ち並び、二重三重に柵を巡らしてあった。

江岸寺は古くから、甲斐と駿河の国境を扼する軍事上の要衝として重視された寺である。武田信玄も寺内に武器弾薬を蓄え、非常の場合に備えていた。

その構えに着目した家康が、信長の宿所とするために城と見まがうばかりの要塞に造り替えていた。

晴子たちには僧坊の一室が与えられた。

荷を運び終え、疲れた足腰を伸ばしていると、森蘭丸が訪ねて来た。

「上様がお呼びでございます。身軽なご装束でお移り下されませ」

「何事ですか」

馬揃えの日に親しく言葉を交わして以来、晴子は蘭丸に好意を持っている。心を許せる数少ない身方のように感じていた。

「湖に舟を浮かべ、舟遊びをするとおおせでございます」

高台の下の入江に、小舟が一艘つないであった。陣羽織りを着た信長が、舟に乗り

込んで所在なげに待っている。

供を許されたのは蘭丸と晴子だけで、船頭は異人の弥助が務めた。

「旅はどうじゃ」

信長がぼそりとたずねた。

「お陰さまで、富士の姿を拝することができました。絵巻などにも描かれておりますが、とても筆舌の及ぶところではございませぬ」

「面白いか」

「ええ。このような旅ができるとは、夢のようでございます」

晴子は大仰なほどの愛想を言ったが、信長はにこりともせずに舟を出せと命じた。

弥助が力強く竿を押した。

舟は鏡のように静まった湖面を音もなくすべっていく。陽は西に沈みかかり、あたりは薄い闇に包まれている。

小袖を重ね着して打掛けを羽織っても肌寒いほどだった。

本栖湖は精進湖の何倍もの広さがあり、東側の平坦地以外は険しい山に囲まれている。

湖畔には物の具をまとった兵たちがずらりと並び、厳しく警固に当たっていた。旗指物を背中に立、あわただしく走り回る騎馬武者の姿もあった。

晴子は信長と並ん座ったまま、じっと舳先を見つめていた。

舟遊びだというう情の仕度もしていない。手持ち無沙汰を持て余してあたりを見回すると、

「今しばらくこのままでいよ。り向いてはならぬ」

信長が背中に手を回して肩を押さた。

思いがけないほど優しい手つきである。湯のような安堵が胸を満たしていくのを感じながら、晴子はそっと信長の指先に触れた。

日は足早に暮れていく。

湖の面が薄墨色に閉ざされた頃、湖畔にぽつぽつと明かりが灯り始めた。

警固の軍勢が松明をかかげたのだ。

明かりは西側から灯り、北と南に向かって走るように灯されていく。燃え上がる炎が水に映り、二重の輪で湖を囲んだように鮮やかだった。

「まあ、きれい」

晴子は思わず小娘のような声を上げた。

これは昨夜のもてなしに対する返礼なのだ。そう察して胸が一杯になったが、驚く

のはまだ早かった。

「もうよい。後ろを見よ」

信長にうながされてふり返ると、夕陽に赤く染まった富士が雲つく高さにそびえていた。

いや、赤ではない。

夕焼けそのままのあかね色、あるいは真っ赤に焼けた鉄の色に近い。

しかも陽が沈むごとに微妙に色相を変えていく。

その雄大な姿が湖畔に灯した炎に縁取られたようで、神々しいばかりの美しさだった。

晴子は魂も消し飛んだように茫々然として、天空に浮かぶ富士をながめた。

体が熱い。

まるでこの景色とともに真っ赤に染め上げられたようで、体の芯が燃えるようにうずいていた。

「晴子」

信長が名を呼び捨てにしたが、晴子は少しも不快ではなかった。初めて女として認められたようで、嬉しさがじわりと込み上げてきた。

「余を獲るつもりなら、ためらったりするな」

さすがに信長である。晴子がなぜ同道したかを正確に見抜いていた。

「人は一人で生まれて一人で死ぬ。何物にもとらわれずに、信じた通りに生きればよい」

「は、はい」

「ただし獲りそこなえば首が飛ぶ。それが戦というものだ」

「承知いたしました。今宵のお成りをお待ち申し上げております」

晴子は信長の手を取り、指の背から甲へとそろりとなで上げた。それが何を意味するか、分らないはずはない仕草だった。

寺に戻ると、酒宴の仕度がととのえてあった。

家康はこの機会に織田家と徳川家の好誼を深めておこうと考えているらしく、本堂には三十人ばかりの席が用意してあった。

晴子は僧坊に戻り、昨日と同じように信長を迎える仕度にかかった。

僧たちの住居だけに部屋は殺風景である。中庭に面して勉学のための付書院があるばかりで、ふすまや障子には何の飾りもほどこしていない。

舟遊びに出る前に花の仕度を命じておけばよかったと悔やんでいると、

「姫さま、これをお使い下されませ」
房子が腕一杯に花を抱えてきた。
藤の花も雪柳も黄色い山吹もある。
どの花もたった今摘み取ってきたように鮮やかだった。
「こんなものを、どこで」
「お出かけの間に、境内に咲いていたものをいただきました。ご住職がやさしいお方で助かりました」
「お花器と水盤があるといいけど」
「ご安心下さい。こちらに」
間仕切りのふすまを開けると、隣の部屋に数種類の花器が並べてあった。
晴子は縁側の障子戸を開けてみた。中庭の向こうに、湖が平らな闇となって広がっていた。
「ここを寝所に、向こうを次の間にします」
次の間には山吹と雪柳を華やかに生け、寝所の付書院には白磁の壺に藤の花をふた房だけ生けた。
「これでは少し淋しいのではありませんか」

房子が不服そうにたずねた。
「いいのです。藤は強い花ですから」
晴子にはひそかな目論見がある。それを披露した時の信長の反応を思い巡らし、心は鞠のように弾んでいた。
次の間の明かりは昨日と同じにし、寝所には低い位置にひとつだけ行灯を置いた。
香には少しだけ大麻を混ぜる。
殿方の心を妖しくそそり、この世ならざる世界へいざなう香りだった。
「まさか、今夜……」
房子はすぐにそうと察したが、あからさまに口にはしなかった。
「そのつもりです」
「しかし、作法にたがいます。床を急ぐようで、はしたないのではありませんか」
「お前も湖のまわりに灯った明かりを見たでしょう。夕焼けの富士を見せるために、信長さまはあれだけのことをして下さったのです。こちらの面目などに構っている場合ではありません」
緋色の布で夜具をおおい、身仕度にかかった。
衣装を身につける前に香湯を使いたいところだが、旅先ではそれもままならない。

かわりに香を溶いた湯を綿にしみ込ませ、体をぬぐうことにした。

信長は房事にひどく淡泊である。女のために尽くそうという気持はさらさらなく、身を横たえたまま仕えよと言う。

そうした性癖は桑実寺での逢瀬で分っているので、晴子にも一抹の不安があった。獲りそこなって首をはねられても悔いはない。

だが、所詮はこの程度の女かと思われては、死んでも死にきれなかった。

その頃、本堂では三献目の盃が回っていた。

信長から流れた盃を、列席した者たちが神妙な面持ちで回している。

徳川方の上座には家康と穴山梅雪が並んで座り、酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政らが居流れていた。

後に徳川四天王と称された者たちだけあって、面魂も居ずまいも見事なものである。しかも家康に心服しているさまがありありと見えて、はた目にもうらやましいほどだった。

（信忠では家康には太刀打ちできぬ）

信長にはそのことがはっきりと見えていた。

万一自分が急逝したなら、織田家はたちまち家康の離間策によってバラバラにされ、徳川の軍門に下ることになるだろう。

そうならぬように、今のうちに磐石の体制を築いておかなければならなかった。

三献の儀が終わると、宴席は無礼講となる。

それぞれが勝手に隣席の者と言葉を交わし、席を立って酌に回る。

まず真っ先に、家康が梅雪を従えて信長の前に進み出た。

「本日のご遊覧は、いかがでございましたでしょうか」

おだやかな笑みを浮かべて、酌をしようと身をのり出した。

「富士の山は、聞きしにまさる見事さじゃ。街道の整備、道中の警固など、もろもろ大儀であった」

「明日は富士の裾野を南に下り、浅間神社の人穴や白糸の滝を見物していただきとう存じます」

人穴は富士山の真下までつづいているという洞穴で、浅間神社の中でもっともご利益があると信じられている。

白糸の滝は屏風を丸く結い回したような形の滝から、糸を引くように水が流れ落ちているし、すぐ側には仇討ちで名を上げた曾我の十郎、五郎が身をひそめていたとい

う岩も残されている。

家康は行動予定と見所をよどみなく語った。

「あれは確か、源頼朝が富士の裾野で巻き狩りを催した時のことであったな」

「さようでございます」

「たかだか仇一人を討ったくらいで、今の世まで語り継がれるとは不思議なことじゃ」

「身近で起こったことゆえ、土地の者たちが語り草にしたのでございましょう」

「ところで梅雪」

信長は盃を置いて話を向けた。

「そちは先日信忠を訪ね、黄金二百枚を献じようとしたそうだな」

「参陣をお許しいただいたお礼にと存じましたが、信忠卿はご受納下されませんでした」

梅雪は神妙な表情の裏で、なぜこんなことをたずねるのかとめまぐるしく考えを巡らしていた。

降伏を許されたとはいえ、信長の機嫌ひとつで首が飛びかねない危うい立場なのである。

「それは奇特なことじゃ。甲斐や駿河には信玄の隠し金山が多いと聞くが、さぞ蓄えも多かったことであろうな」

「信玄公の砌には軍資金として蓄えておられましたが、勝頼公の代になるとたび重なる出兵や新府城の普請によって蕩尽なされたとうけたまわっております」

「そちはどうじゃ。駿河一国を預かる身とあらば、蓄えなくしてはすまされまい」

信長の問いは巧妙だった。

蓄えがなかったと答えれば城主としての能力がないと言うに等しく、あったと言えば差し出せと迫られるのは目に見えている。

並の武将なら返答に詰まるところだが、梅雪は一瞬のためらいもなく、

「江尻城には今も大判二千枚の蓄えがございます。また甲府の所領にも五百枚ほどございますので、ご下知のごとく処分いたしまする」

真っ正直なことを言った。

信長には小手先の言い逃れは通用しないと、家康に教え込まれていた。

「江尻の城は家康に与えたものゆえ、黄金の処分も任せる。そうじゃ。国の仕置きがすみ次第、二人で安土に来よ。こたびの返礼に、畿内各所を案内させよう」

「かたじけのうございます」

家康と梅雪がそろって頭を下げた。
「梅雪の手伝いがあれば、駿河の仕置きに手間はかかるまい。来月中頃でどうじゃ」
「しからば十五日でいかがでございましょうか」
「それでよい。お蘭、接待の役を光秀に命じておけ」
信長は性急に事を運び、二人の来訪を動かしがたいものにした。
「皆も聞け。余は征夷大将軍となって幕府を開く」
雑談にざわめいていた本堂がぴたりと静まった。
その中に一人、間延びした声を上げた者がいる。
「されど殿、将軍には源氏の流れをくむお方しかなれないのではございませぬか」
堀久太郎秀政だった。
「そのような仕来りは、朝廷が定めたものじゃ。無視すればよい」
「しかし征夷大将軍の職は、朝廷から任じられるものでございます」
信長にこんなことが言えるのは、織田家中でも堀久太郎と細川藤孝くらいのものだった。
「たわけが。そちが案ずることではないわ」
信長は機嫌のいい声で叱りつけた。

「それに朝廷の仕来りなど、ざるのように底抜けじゃ。やり方ひとつでいかようにもくぐり抜けられる。のう家康、そうであろう」
「まことに、さようでございます」
「幕府を開くに当たっては、そちの力を借りることも多かろう。これまで以上に励んでもらいたい」
信長は手ずから盃を差し出した。
「ありがたきおおせ、かたじけのうございます」
家康は臣下の礼を取って受けた。
「ついては両家の絆をさらに強くしておかねばならぬ。そちの子と信忠の娘をめあわせたいと思うがどうじゃ」
家康の表情が強張り、すっと血の気が引いていった。
三年前、信長は家康に妻子を殺させている。二人が武田勝頼に通じたと疑ってのことだが、そうした讒言をなしたのは信康に嫁していた信長の娘なのだ。
この事件から受けた家康の痛手は、計り知れないほど大きかった。
妻子を殺さなければならなかった無念ばかりではない。武士として大名としての面子が丸つぶれになった。

この上再び織田家から嫁をもらったなら、家臣や領民でさえ、もはや家康を男とは認めまい。

信長の走狗になり下がった腰抜けと見なすはずだった。

（この上どこまで理不尽な……）

そう叫びたい思いを悟られまいとしたのだろう。家康は顔をおおうように盃を傾け、ゆっくりと飲み干した。

家臣たちも殺気立った目をして成り行きを見守っている。家康と共に血の涙を流した者たちだけに、下知あり次第信長を討とうとひそかに身構えていた。

信長の家臣たちとて同様である。相手に少しでも不審の動きあらば即座に飛び出そうと、心気を研ぎ澄まして様子をうかがっていた。

両者の緊張が極限にまで達した時、

「縁組みとはありがたいおおせにございまする」

家康がのんびりとした声を上げた。

「されどそれがしの子は、まだ年端もいかぬ未熟者でござる。とても妻など持てますまい」

「いくつになった」

「上の於義丸が九つ、竹千代が四つにございまする」

「世継ぎはどっちじゃ」

「まだ決めかねておりまする」

「ならば安土に来る時までに決めておけ。信忠の娘は五つじゃ。どちらにも釣り合いがとれる」

信長はそう命じて席を立った。

（これでよい）

徳川家を臣下の列に加えるには、家康の世継ぎを信忠の婿として一門の中に組み込むことだ。

やがて信忠を将軍としたなら、足利幕府にならって三管領家を設置し、信雄、信孝の家と徳川家を当てる。

今のうちにそうした体制を築いておけば、万一のことがあっても織田家の天下が揺らぐことはないはずだった。

本堂を出て僧坊の前まで来ると、

「今夜の宿直は無用じゃ。警備を厳重にし、朝まで誰も近づけてはならぬ」

そう命じて一人で足を踏み入れた。

晴子と房子は次の間でつつましく待っていた。

付書院に置かれた水盤には、山吹と雪柳が咲きこぼれるように生けてあった。

「ご宴席、お疲れさまでございました」

晴子が桜湯を差し出した。

昨日より塩分が強い。だが疲れているせいか、かえってうまいと感じるから不思議だった。

「御酒はいかがでございましょうか」

「いらぬ、もひとつこれを」

桜湯を所望した。妙に喉が渇くのは、酒を過ごしたせいばかりではない。この先への期待に、いつになく気持が高ぶっていた。

それを見透したように、二杯目は塩分をおさえて飲みやすくしてあった。

「もう寝る。仕えよ」

寝所のふすまを開けると、甘味をおびた森の香りがした。清々しいのに、懐かしく温かい。水と土の匂いを思わせる香りだった。

しかも鼻から喉へと広がる甘味は次第に強くなって、気持を妖しくそそられる。めまぐるしい日々の緊張から解き放たれ、時間がゆっくりと流れ始めたような安らぎがある。

それが香に混ぜた大麻のせいだとは、さすがの信長も気付かなかった。

部屋の隅には、白磁の壺に藤の花がふた房生けてあった。

真っ直ぐに立てた朽木に藤の蔓をからませ、壺の外に咲きこぼれるように垂らしてある。

無造作だが清楚で興趣あふれる生け方だった。

「そういえば昼間、ほととぎすの声を聞いた」

藤の時期にはほととぎすが鳴く。そのことをふいに思い出した。

「はい、わたくしも聞きました」

「富士の山に藤の花か。好くは不治の病ともいうが」

めずらしく戯歌の文句などを口にしたのは、心がのびやかにくつろいだせいだった。

「古くから藤の歌は多い。何かひとつ披露してくれ」

「お待ち下されませ」

晴子が雅びやかな手つきで、短冊に一首をしたためた。

恋しけば　形見にせむと　わが屋戸に

植ゑし藤波　いま咲きにけり

「万葉集に収められた歌でございます」
即座にこうした歌を披露できる教養もさることながら、信長は筆跡の見事さに心を打たれた。
自由で伸びやかな書体は、しなやかな強さを内に秘めた晴子の姿そのものだった。
「よい歌じゃ。余が死んだなら、ゆかりの寺に藤を植えてくれ」
その時がわずか五十日後に迫っているとも知らずに、信長は不吉な頼みを口にした。
「寒くはございませぬか」
「いいや。体が温もってよい気分じゃ」
「ならば、こちらを」
晴子が付書院の明かり障子を開けた。
窓の先に暗い湖が広がり、十一夜の大きな月が湖面にくっきりと映っている。波のさざめきに揺られて、月も静かにたゆたっていた。
反射する光がちらちらと白磁の壺を照らし、薄闇の中にほの白く浮き上がらせる。
藤の花も月の光に白く染められ、白と黒との幽玄な世界に溶け込んでいた。
信長の背筋に寒気が走った。
ひときわ鋭い感性の持ち主だけに、感動を通り越して戦慄を覚えたのだ。

それほど見事な演出であり、驚くべき才覚だった。
「あの世とは、こういうところかも知れぬ」
なぜかそう感じた。
喜怒哀楽をつき混ぜた馬鹿騒ぎの果ての、哀しいばかりの静寂。
しかしそこには、無限の腕に抱かれたような安らぎがあった。
山の冷え込みはさすがに厳しい。
雪の富士から吹き下ろす風は、甲府とは比較にならないくらいに冷たかった。
「お風邪をめされてはなりません。お閉めいたしましょう」
晴子が明かり障子を閉ざした。
するとどうだろう。
藤の花と白磁の壺が行灯の明かりに照らされ、淡い朱色に染まった。
白磁の壺は湯上がりの女のようになまめいている。藤の花は桜の花びらが散るようである。
白と黒の幽玄の世界の残像があるせいか、この世の命を灯したような花の風情がひときわ可憐でいとおしかった。
藤には吹き散るという意味がある。藤原氏、ひいては公家社会を象徴する花である。

さらに言えば『源氏物語』の藤壺にも通じていた。

桐壺帝の女御となった藤壺は、義理の息子の光源氏に迫られるままに深い仲になった。

しかも不義の子を身ごもるという悪運に見舞われ、髪をおろして女としての執着を断とうとする。

そうした物語を、公家社会の申し子である晴子が知らないはずはないのだから、寝所にふた房の藤を生けたことには、ひとかたならぬ意味が込められているはずだった。

信長は座したまま藤の花に見入っていた。

壺とは女の象徴である。するとその中に命を吹き散らす藤の花は、男の姿そのものかも知れなかった。

「お召しものを」

晴子が信長の手を取って立ち上がらせた。

陣羽織を脱がせ、膝立ちになって革袴の紐をほどき、道服をはぎ取っていく。手際よくかいがいしい働きぶりだった。

「いつぞやも、このようなことがございました」

「桑実寺か」

「いいえ。洛中の馬揃えの時に」

湯に入ろうとした信長は、晴子が東宮夫人とも知らずに仕えるように命じた。

若狭の局と偽って安土に来たことといい、思えば不思議な縁だった。

「あの時にお体の傷跡を拝し、胸をつかれる思いがいたしました。このお方はこんなにも懸命に己れの道を切り開いてこられたのだと、涙がこぼれそうになりました」

白小袖一枚になった信長の胸を、晴子がそっとさすった。

左の胸から脇腹にまで及ぶ刀傷の跡を、細く柔らかい指でなで上げていく。

強烈な快感が背筋を走り、信長は思わず晴子の肩をつかんだ。

傷跡には特別の神経がある。

一度斬り裂かれているだけに他の皮膚より何倍も鋭感で、痛みの記憶を残している。

そこをしなやかな指でなでられると、心地よさが体の奥まで突き抜けるのだ。

「ご不快でございますか」

晴子が顔を上げてたずねた。

「いや、そうではない」

そこのところを、今度は舌先でなぞってもらいたい。信長はそんな欲望を覚えたが、

口にはしなかった。

「では、こちらに」

緋色のおおいをかけた夜具に、言われるままに横になった。

晴子は打掛けを脱いで信長にかけ、脱ぎ散らした衣服をたたみ始めた。

行儀よく座り、一枚ずつ丁寧に折りたたんでいく。

その手つきや仕草からは、忘れ形見でも扱うような細やかな愛情が感じられて、端で見ていても気分がよかった。

「まあ、このようなところに」

晴子が珍らしげに革袴をなでさすった。

西洋人のカルサンに似せて作った裁着袴である。革製というのも珍らしいが、信長は股のところに切り込みを入れてボタンで開け閉めできるように工夫していた。

「戦場では厠に行く暇などない。それゆえそこを開けて用を足すのじゃ」

「初めてこのようなものを見ました。ほかの方々はどうしておられるのですか」

「鎧直垂の袴は、尻のところが大きく割れておる。女子のようにしゃがみ込めば用は足せるが、命の瀬戸際にはそんな暇はない。三方ヶ原の戦で不覚を取った時、家康は大小たれ流しながら浜松城に逃げ帰ったそうだ」

「信長さまにも、そのようなご経験がございますか」

「一度だけある」

越前金ヶ崎城の朝倉勢を攻めていた時、浅井長政が突然叛旗をひるがえした。

このままでは前後からはさみ撃ちにされる危機に直面した信長は、用を足す間も惜しんで都へと逃げ帰ったのである。

「袴をぬらしたまま馬を走らせるのは気色が悪い。それゆえこのような工夫をしたのだ」

「信長さまはきれい好きでいらっしゃいますね」

晴子が首をかしげてほほ笑みかけた。

色白の頬が炎に淡く照らされて、何とも華やかな風情である。

「小便臭い袴を好きな奴などおるものか」

「でもそれが嫌だとて、このような工夫をなされたお方はおられませぬ。信長さまが本邦初でございます」

「なるほど。さようか」

信長は晴子の機知に感心した。こうした頭の良さを随所に見せてくれるので、話していても飽きないのである。

「晴子」
信長の呼びかけには、これまでにはない愛情が込められていた。
「はい」
「そちは何ゆえ余に従った」
「ご迷惑でございますか」
「そうではない。武家の妻がかようなことをすれば、手討ちにされても申し開きはできぬ。朝廷では、そうではないのか」
「朝廷とて同じでございます。されど公武の間が険しいままでは、先々が危ぶまれまする。それゆえ信長さまに、お心をほぐしていただきたいのでございます」
「その身を犠牲にしてか」
「犠牲とは思うておりません。わたくしは公家のことしか知らぬ女子でございました。ところが信長さまと出会い、広く大きな世界を見せていただきました。自分らしく生きることの大切さも教えていただきました。それゆえ信長さまの朝廷に対するお腹立ちも拝察することができまする」
晴子は道服の袖をたたむ手を止め、
「されど帝は、天上の神々にこの国の平安を願うという尊き責務をになっておられます。そのおかげで日々つつがなく暮らせるのだという感謝の気持を皆が持たなければ、この国をひとつにまとめることはできませぬ」
思い詰めた表情をして、じっと信長を見つめた。
「もうよい。ここに来よ」
信長はいとおしさに胸をつかれて手を差し伸べた。
晴子は膝立ちになり、信長に背中を向けて着物を脱ぎ始めた。
背中に腕を回して帯を解き、重ね着した小袖を一枚ずつ肩からすべり落とす。
そのたびに小袖に焚き染めた香が少しずつちがった匂いを放つ。脱ぐほどに香りは深くなり、信長の心を妖しくそそった。
薄絹の白小袖だけになると、晴子はおすべらかしを巻き上げ、うなじのところで手早く結んだ。
その結び方がどこか傾いていて、別の女になったようになまめかしい。
脱ぎ散らした着物を侍女の房子がかき集め、両腕に抱えて逃げるように次の間に下がった。
「ご無礼をいたします」
晴子が信長の横に添い寝した。

「手間のかかる女子じゃ」

信長は乱暴に抱き寄せ、唇を合わせた。

常にはないことである。だがそそられながら待たされたせいか、気持の抑えがきかないほどに高ぶっていた。

晴子は花びらのような唇を慎しみ深く閉じている。

信長は強引におし開いて舌をからめた。

晴子の舌がためらいながら応じてくる。

時には押し、時には引き、そらすように横にかわす。なかなかとらえがたい舌だった。

信長は小袖の合わせを広げて乳房をあらわにした。

右手を乳房に添え、乳首を口に含んでみた。

甘い味と香りがする。体にほどこした香湯が、口の中で心地よく溶けていった。

晴子は切なげに身体をよじり、胸の傷跡をなでさすった。信長の望みを見透したように、肉の引きつれたところを舌先でなぞっていく。

信長はうめき声を上げてあお向けになった。

快感が体を突き抜け、虚脱感にぐったりとなった。

突然、地鳴りのような音がした。

富士の山頂から吹き下ろす風が、湖畔の高台にある江岸寺を揺るがして吹き抜けていく。

風は雲を呼び、板張りに豆をぶちまけたような音を立てて雨が降り始めた。

遠くで雷が鳴っている。獣が低くうなるような不気味な音が、次第に近づいてきた。

さっきまでの晴天の月夜が、一転して嵐になった。

「まあ、こわい」

晴子は顔を上げて聞き耳を立てた。

唇がなまめかしくぬれている。

信長は体を入れ替え、腰紐を抜き取った。

小袖の前が割れて、体がくまなく光にさらされた。

細くしなやかな腰には、少しのたるみもない。下腹部のふくらみをおおう若草も美しく剃り上げ、わずかな翳りを残すばかりだった。

「雷神は余の下部じゃ。怖れるには及ばぬ」

「それならしばらく、黙らせて下さいませ」

「この夜を言祝いでおるのだ。耳を貸してやれ」
信長は晴子の胸から腰へと指先をすべらせ、翳りの下へとさぐりを入れた。充分にうるおった壺が、吹き散る花を待っている。
肝所を下から上へなで上げると、晴子がぴくりと体を震わせた。
切ないあえぎをもらしながらも、信長の帯を抜き取っている。
肌がぴたりと重なり、心地よくすれ合った。湿り気のないさらりとした肌である。
「こんなことを仕出かしては、都には戻れまい」
「それでも、いいのでございます」
「ならば安土に来よ。余の側に仕えればよい」
「わたくしの願いをお聞き届け下さるなら、そのようにいたしまする」
晴子は官女としての使命を忘れてはいない。歓びにもだえながらも、信長を籠絡しようと懸命だった。
信長は巧みに指をあやつって晴子を攻めた。
晴子が胸をそらしてのけぞった。
信長は手をゆるめない。両足を大きく抱え上げ、熱くうるおった壺に身を沈めた。
舌先よりもさらに柔らかいものが、猛り立つものを包み込み、潮が満ちるように締

め上げてくる。
「安土に来よ。さすれば願いを聞き届けてやる」
信長は耳たぶに口を寄せてささやいた。
晴子は顔をゆがめて耐えている。
歓喜と苦悶の入りまじった表情をして、唇をきつく引き締めていた。
征服者の歓びにかられて突き立てているうちに、晴子の髪がはらりと解けた。
腰まである髪が散って、動くたびに白い肌にまとわりつく。体の下敷きになった髪が、晴子の自由を奪っていた。
「少し、少しお待ち下されませ」
髪を結び直そうとしたが、信長は許さなかった。
「構わぬ。こうすればよい」
晴子を抱き起こして座位をとった。
座ったままの二人の体は、しっかりと結び合っている。
髪は広がったまま背中に垂れ、突き上げるたびにさわさわと揺れた。
雷鳴は間近でとどろいている。雨も激しく風も強い。
次の間では、侍女の房子が目を閉じ耳をふさいでうずくまっていた。

雷など真っ平である。

だがそれ以上に、寝所から時折聞こえてくる晴子の身も世もあらぬ歓びの声が怖ろしかった。

聞くまいとして耳を押さえても、その声は聞こえてくる。

見るまいとして目をきつく閉じても、晴子のあられもない姿が脳裡に浮かぶ。

（ああ姫さま。どうしてこのような）

晴子に取りついた悪運を、房子は呪わずにはいられなかった。

こんなことをして、この先無事にすむはずがないのである。

いかに口を閉ざそうとも噂はどこからかもれ、非難とあざけりをあびて朝廷から追われることになるだろう。

万一噂にならなくとも、もはや取り返しはつかなかった。

好きとは数奇であり物狂いである。この世ならざる魔に魅入られることだ。

そうした汚れを身にあびた者が、宮さまのお側にお仕えできるはずがないからである。

（もう何もかも終わりや）

絶望に打ちひしがれながらも、房子は心のどこかでこれでよかったのだと思っていた。

長年宿直をしてきたが、あんなに満ち足りた晴子の声を聞くのは初めてだったからである。

第十三章　三職推任

さて――。

これから辛い物語にかからなければならない。

希代の英雄であられた織田信長公が、近衛前久公によって葬られていく物語である。

かく言うこの清麿は、近衛家の門流に生まれながら、短い間ではあったが信長公の側近くお仕え申し上げたこともある。

それゆえお二人の争いを記すのは、身を二つに裂かれる思いがするが、さるやんごとなきお方からのご依頼によって筆を取ったからには、真実から目をそらすわけにはいかない。

また事実をねじ曲げたまま後世に伝えては、泉下の信長公もさぞお怒りになるであろう。

信長公が葬られた理由は、朝廷の上に立とうとなされたからだ。

そのような僭上の沙汰を、朝廷の守護者であった前久公がお許しにならなかったのである。

いつもながらの先走りで恐縮だが、前久公は明智光秀を指嗾して信長公を討たせ、足利義昭公を都に呼び戻して幕府を再興しようとなされた。

だが羽柴秀吉の裏切りによって光秀が討ち果たされたために、この計画は水泡に帰したのである。

本能寺の変後、疑いは当然前久公に向けられた。

信長公の三男信孝は父の仇として討ち果たそうとしたが、前久公はいち早く出家して嵯峨に身を隠し、そこも危うくなると醍醐に逃れ、ついには徳川家康公を頼って浜松に身を寄せられた。

しかし百戦練磨の前久公は、そのまま浜松にとどまっておられるほど柔ではない。

その後家康公の仲立ちによって秀吉と和解し、天正十三年には秀吉を近衛家の猶子として関白職に就任させるという離れ業を演じられた。

まことに申し上げにくいことではあるが、本能寺の変で手を汚した二人がそ知らぬ顔で手を結び、事変の真相を闇に葬ったのである。

秀吉の家臣となった太田牛一が、『信長公記』に変の詳細を記せなかった理由はこ

こにある。

また朝廷の側でも、徹底して記録の隠蔽や改竄が行なわれた。

禁裏の女官が記した『御湯殿の上の日記』は天正十年一月十七日以後の分が失われているし、山科言経の日記『言経卿記』でさえ六月五日から十二日までの分が消失している。

興味深いのは、事変の当事者だった二人。

勧修寺晴豊公と吉田兼和（後に兼見と改名）の日記である。

晴豊公は晴子さまの兄君であり、武家伝奏として信長公との連絡に当たっておられたので、公武の問題には精通しておられた。

その日記（『晴豊公記』）もやはり天正十年四月から六月までの分が欠けているが、幸いにも『日々記』と題して別途保存してあった。

このご配慮のおかげで、我々は巷間語られているような史談とはまったく異なる史実を知ることができるのである。

吉田兼和は吉田神社の神官という立場にありながら、前久公の右腕として明智光秀や細川藤孝との連絡に当たった陰日向の多い人物であった。

その彼が天正十年一月から六月十二日まで、二冊の日記を残している。

一冊は正本と称する改竄したもので、もう一冊は別本と名付けた改竄前のものである。

真実を隠すために日記を書き換えたものの、原本をひそかに蔵の奥深くにしまい込んでいたのだ。

この二冊を読みくらべれば、彼らが何を行ない何を隠そうとしたのか歴然とする。

参考までに、その一例をご紹介しよう。

変後の六月六日、使者として光秀のもとに下るように誠仁親王から命じられた時の件である。

〈日向守へ御使ひのためまかり下り、京都の儀別儀なきのやう、堅く申し付くべきの旨仰せなり〉（別本）

〈日向守へ御使ひのため下るべきの旨仰せなり。かしこまるの由申し入る〉（正本）

変のわずか四日後に、誠仁親王が光秀に京都の守護を依頼なされたのは、事前に連絡があったからとしか思えない。

また、それを知られては困るからこそ、改竄後の日記では何のために行ったかがそっくり削除されているのだ。

ともあれ、物語に戻ろう。話は天正十年四月二十日、前久公の帰洛から始まる。

四月二十日の正午過ぎ――。

近衛前久は山科の勧修寺に立ち寄った。神聖な都に戻る前に、信濃、甲斐で荒れた血を鎮めたかったからである。

勧修寺は醍醐天皇の御代に創建された真言宗の古刹で、勧修寺家の氏寺でもある。広々とした庭に立つ観音堂も見事だが、この時期には氷室池に咲くかきつばたが見ものだった。

前久は供も連れずに庭に出て、池のまわりを散策した。

ここまで来ると、風にまで馴れ親しんだ都の香りがする。かきつばたも雅びやかな紫色の花をつけ、池に浮かぶ蓮の花も丸いつぼみを結んでいた。

粟田口から都に入り、吉田神社に立ち寄った。

社殿の前には神官らがずらりと並んで出迎えた。

「ご家門さま。ご無事のご帰洛、おめでとうございまする」

吉田兼和が深々と頭を下げた。

「奥に酒肴の用意がございまする。ゆるりとおくつろぎ下されませ」

「その前に大元宮を拝したい」

大元宮は八百万の神々をひとつに集めて祀ったものだ。いわば神道の総本山である。

前久はその前で長々と手を合わせ、大願の成就を祈った。

誰を身方につけ、どう謀を巡らして信長を倒すか、旅の間知恵を絞りつづけてきた前久である。

手を合わせながら自分は天に代わって誅罰を下すのだと念じると、決心が揺るぎのないものになった。

酒席につく前に、兼和だけを奥の間に呼んだ。

「陣の儀は、いかがでございましたか」

兼和は前久の足をさすらんばかりにしてたずねた。

「恵林寺の噂は聞いておろう」

「焼き討ちなされたとうかがいました」

「快川国師の処遇については、主上もひときわお心を痛めておられた。その旨を何度も伝えたが、信長は耳を貸そうとしなかった」

炎の熱さが頬によみがえり、前久の胸に黒々とした憎しみが込み上げてきた。

「信長がこの大元宮を焼き払おうとしたなら、そちはどうする」

「さて。どうしたものでございましょうか」

兼和はあいまいな笑みを浮かべて考え込んだ。
問いに対する返答ではなく、前久がなぜこんな謎をかけるのかを考えている。
「快川国師のように従容と死につくか。それとも及ばずながら一矢報いるか」
「ご家門さまなら、いかがなされまするか」
「そうならぬように先手を打つ」
「なるほど。さようでございますな」
「これより秘策を巡らさねばならぬが、力になってくれるか」
「ご家門さまのためとあらば、いつでも命を投げ出すつもりでお仕えしてまいりました。ご計略をお聞かせ下されませ」
その前に酒を運ばせ、喉をうるおした。
綸言汗のごとしというが、太政大臣近衛前久の言葉も一度発したなら取り返しがつかない。喉が渇くのは、そうした緊張のせいだった。
冷酒をゆっくりと飲み干すと、
「信長を誅する」
切りつけるように言い放ち、兼和の目をのぞき込んで反応をうかがった。
兼和はまばたきもせずに見返し、唇を閉ざしたまま薄笑いを浮かべた。

「何がおかしい」
「別に、おかしくはございませぬ」
「たった今、顔をゆがめて笑ったではないか」
「誅されると分った時の、信長めの驚きぶりを思い浮かべたばかりでございます」
兼和は信長と呼び捨てにした。
この変わり身の早さが、この男の真骨頂なのである。
「何を迷った」
「は……」
「目の底に迷いの陰が走った。信長に注進しようとでも思ったか」
「めっそうもない。そんなことが果たしてできるかと、不安を覚えたばかりでございます」
「さっきの笑いには、わしの無力へのあざけりも込められていたわけか」
「あるいはそうかも知れませぬ」
兼和がすかさず銚子を取って酒をついだ。
「しかしご家門さまは、これまで何度も我々の意表をつくやり方で窮地を脱してこられました。そのご心底までうかがうことができぬのは、身共の愚かさゆえとお許しな

されて下されませ」

信長を討つ方法は二つある。

ひとつは参内させて暗殺すること。

もうひとつはどの武将かを抱き込んで謀叛を起こさせることだ。

簡単なのは前者だが、信長一人を殺しても織田家の勢力はそっくり残る。

万一信忠が陰謀を知ったなら、朝廷の存続さえ危うくなりかねなかった。

後者をとって一挙に織田家を滅ぼせばこうした懸念も消散するが、信長の重臣に謀叛を持ちかけるのは至難の業だった。

「まずは流れを作らねばならぬ」

前久は二杯目を干し、盃を伏せた。

「備後の公方さまでございましょうか」

「そうじゃ。義昭を呼び戻して足利幕府を再興すると触れて、旧幕府勢力を結集する。仏典に詳しいほかには何の取り柄もない男だが、当座の旗頭くらいにはなろう」

幕府再興を大義名分とすれば、細川藤孝や明智光秀らの賛同を得やすい。

義昭を庇護している毛利輝元や、関東管領家を継承している上杉景勝を身方につけることもできる。

しかも万一の時には、義昭を隠れみのにして朝廷に累が及ぶことをさけられるのである。

「まずは細川藤孝じゃ。あやつを取り込めば、三管四職家の者たちも我先にと参じよう。この役目、引き受けてくれるか」

「幸い身共と藤孝どのは従兄弟に当たりまする。何かと行き来もございますので、ご家門さまのご意向とあらば、一も二もなくお聞き届け下さりましょう」

「わしが動いておることは、藤孝のほかにはもらしてはならぬ。黒幕はそちということになる」

「承知いたしました。もうおひと方は、いかがなされますか？」

もう一人とは、言わずと知れた明智光秀のことだ。

兼和の妻の兄である佐竹出羽守は光秀の側近なので、光秀とも深いつながりがあった。

「あやつは信長に近過ぎる。充分に勝てる見通しが立ってからでなければ、誘いをかけたとて動くまい」

前久の動きは早い。

二条御所の隣の近衛邸に戻ると、足利義昭にあてて文をしたためた。

まず武田家の滅亡と恵林寺の焼き討ちのことを記し、このような横暴を許すわけにはいかないので、信長とは手切れをすると宣言した。

その上で、足利幕府を再興して義昭を上洛させる計略を語り、細川、斯波、畠山の三管領家や、一色、山名、京極、赤松の四職家に檄を飛ばして決起をうながしていると告げた。

それゆえ義昭は毛利輝元にこの意を含め、畿内の決起に合わせて上洛できるように準備万端ととのえておいてほしい。

苦心の文を記し終えた頃、風の甚助が庭先に現われた。

黒装束をまとい、薄闇の中にうずくまっている。

「本日、信長の一行が岐阜に到着しました。明日には安土城に入るものと存じます」

「侍女の輿も一緒か」

その輿に晴子が乗っていることは甚助も知っている。だが前久は名を口にすることをはばかった。

「信長の後ろに従っておられました」

「旅の間、寝所を共にしたことであろうな」

「御意」

「ご苦労。これから備後に下り、公方にこれを渡してくれ」

小さく折った文をたくし、義昭への口上を伝えた。

築地塀の向こうには、二条御所の大きな屋根が影絵のようにそびえていた。

今頃あの屋根の下では、宮さまが晴子の帰りを待ちわびておられるにちがいない。

伊勢へ参宮に行ったので帰洛が遅れるという前久の言葉を、何の疑いもなく信じておられるはずだった。

そのお姿を思えば心は痛むが、今の前久はこのことさえも策略の具とする鬼と化していた。

「急ぎ勧修寺中納言を呼べ」

近習にそう命じた。

晴豊を勅使として安土につかわし、信長と晴子の姿を見届けさせておく必要があった。

富士遊覧の旅を終えた織田信長が安土城に戻ったのは、四月二十一日のことだった。

本栖に泊った十一日以後の旅程は次の通りである。

十二日、大宮の浅間神社に泊る。

十三日、富士川を渡って江尻城に泊る。
十四日、藤枝の田中城に泊る。
十五日、小夜の中山を越えて掛川泊。
十六日、天龍川を渡って浜松城に泊る。
十七日、今切の渡りを越えて吉田泊。
十八日、岡崎を過ぎて池鯉鮒泊。
十九日、清洲城に泊る。
二十日、岐阜の御殿に泊る。
この間、勧修寺晴子も影のようにつき従っている。
旅の間に二人の間柄はよりこまやかなものとなっていた。
外濠の橋を渡って大手門前まで進むと、信長は馬を下りた。
三月五日に発って以来の帰城である。己れの力の象徴である安土城を、自分の足でしっかりと踏みしめたかった。
「晴子、そちも歩け」
雲上人は地を踏まぬなどという仕来りは信長には通じない。晴子を輿から下ろして履物を脱がせ、二人して大手道の長い石段を登り始めた。

「この山には地の霊が宿っておる。こうして素足で歩けば、その霊を身に受けて力がわいてくる」
表面を美しくととのえた石段は、踏みしめるとひんやりとして心地よい。その感触とともに五体に力がそそぎ込まれるのを感じながら、信長は足早に歩いた。
登るほどに傾斜はきつくなるが、晴子も遅れずについてくる。
母方の武家の血を受け継いでいるせいか、旅の間に見違えるようにたくましくなっていた。
「まあ、こんなところに」
晴子が驚きの声を上げて身をかわした。
石段には近在の寺から運んだ石仏を使っている。刻まれた仏の顔をわざと表にしているので、あやうく踏みつけそうになった。
「遠慮はいらぬ。踏んでみよ」
「嫌でございます」
「こんなものはただの石じゃ。寺や石仏をありがたがるのは、弱い人間どもの卑怯な言い訳にすぎぬ」
信長は石仏の顔を踏んづけて体を揺すった。

「おやめ下されませ。後生が悪うございます」
「後生などあるものか。死ねば無に返るばかりじゃ」
晴子に止められるとますます悪ぶってみせたくなる。まるで子供の昔に戻ったようだった。
「やはり、あれは本当だったのでございますね」
「何のことじゃ」
「ご尊父さまの葬儀の時に、信長さまが位牌に向かって抹香を投げつけられたという噂です」
「確かにそういうこともあった」
父信秀が死んだ時、信長は十八歳だった。
抹香を投げつけたのは、父を憎んでのことではない。腹に一物を隠しながら神妙な面をして葬儀に参列している、一門や重臣たちの狡さが許せなかったのだ。
幼い頃からこうした欺瞞や狡猾に対する嗅覚が人一倍鋭く、破壊せずにはいられなくなる。
比叡山や恵林寺を焼き討ちにしたのも、執拗に朝廷の権威を乗り越えようとするのも、そうした衝動に突き動かされてのことだった。

「信長さまは天上界をおかそうとする素戔嗚尊のようですね」
晴子は信長の衝動の本質を鋭く見抜いていた。
「ならば晴子、そちは素戔嗚が天照の機屋で狼藉を働いた折、陰を杼に突かれて死んだという侍女かも知れぬな」
織田家の祖は素戔嗚尊を祀る剣神社の神官である。信長とて神々の言い伝えくらいは聞き知っていた。
やがて黒鉄門をくぐり、本丸御殿にたどり着いた。
昨年末に完成した清涼殿そっくりの建物である。
壁や天井には金箔、銀箔をふんだんに使い、狩野派の絵師が描いた華やかな絵でふすまや格天井を飾っていた。
この建物は朝廷を己れの権力下に組み敷こうとする信長の野望を露骨に表わしたものである。
本物の清涼殿は東庭に面して鬼の間、御帳の間、東中段と並んでいるが、本丸御殿は東西の配置を逆にし、天主にいる自分を御帳の間の帝に仰がせようとしていた。
「まあ、何ということを」
晴子はさすがに青ざめた。

雲つくばかりの高さの天主が御帳の間におおいかぶさるようにそびえているので、信長の意図は誰の目にも明らかだった。

「立太子の儀を終えたなら、五の宮をここに移す。そちも一緒に来るがよい」

信長は得意気にひげを震わせた。

「嫌です。そのようなことが、許されるはずがありません」

「誠仁親王を二条御所に迎えた前例がある。五の宮をここに迎えることに、何の不都合があるものか」

前例のないことはやらないのが朝廷の仕来りである。

なぜなら朝廷の儀式はすべて神事であり、神事を人間の都合で変えては神々への不敬に当たるからだ。

公家たちがこの建て前を楯にとって要求をはぐらかすことを知り尽くしている信長は、相手に真意を悟られないようにして前例を作り、その前例を楯にとって無理な要求を押し通すという手法を取ってきた。

三年前に誠仁親王に二条御所を献上したのも、安土城内に五の宮を移すための布石だった。

「数年のうちには五の宮の即位を行ない、内裏をここへ移す。この御殿はそのために建てたのじゃ。もそっと喜べ」

「そのような非礼を、何ゆえなさねばならないのですか」

晴子がまなじりを決して異をとなえた。

「この国を変えるためじゃ」

「ならば頼朝公や尊氏公のように、幕府をお開きなされませ。信長さまほどのお力があれば、すべて意のままになるはずでございます」

「それでは足りぬのだ」

信長は怒りに高ぶった晴子を落ち着かせようと、肩を押さえてその場に座らせた。

「よいか晴子。将軍というものは帝の下部にすぎぬ。もし帝や朝廷が神々に地上の平安を祈るだけのものなら、余とて将軍となることに異存はない。だが、朝廷は、禁裏御領や荘園、寺社や座に対する特権を持ち、ことあるごとに治政に口をはさんでくる。将軍となっただけではこの要求を聞かざるをえなくなるではないか」

「昔日ならいざ知らず、今では御領所も荘園も武家に横領され、座の権利でさえ楽市楽座の制によって有名無実と化しております。今や朝廷に残された御領は、一万石にも上りますまい」

「だが、権威というものは失われておらぬ。この国の官位はすべて、勅許なくしては

得られぬ。暦ひとつを変えるにも、陰陽寮で作ったものでなければならぬと難癖をつけてくる。しかも腹立たしいのは、それが帝のご意志ではないということだ」

「それは、どういう意味でございましょうか」

「お前ら藤原一門は帝を二重三重に取り巻き、余人には近づけぬような仕組みを作り上げてきた。そちは以前、帝への感謝の気持を皆が持たなければこの国をひとつにまとめることはできぬと言ったが、下々のそうした気持につけ込んで甘い汁を吸ってきたのが、お前ら公家の正体なのだ」

中臣鎌足が大化の改新を成功させて以来、その子孫である藤原氏が朝廷の主導権を握ってきた。

藤原氏は近衛、一条、二条、九条、鷹司の五摂家に分れ、数々の特権を独占してきたのである。

彼らは従三位以上でなければ帝に対面できないという制度を作ることによって、帝の権威を仲間内だけで利用できる体制を維持してきた。

しかも何か不都合が生じれば、帝のご意志であるといって逃げを打つので、責任の所在さえ明らかにはならない。

こうした制度を改めなければ、日本を整然とした国に造り替えることなどできるはずがなかった。

「余が内裏を安土に移すのは、帝に対する不敬の念からではない。藤原一門の囚われ人となっておられる帝を、お救い申し上げるためじゃ」

「それはちがいます。藤原氏の祖神である天児屋根命は、瓊瓊杵尊を補佐するように天照大御神から命じられてこの地に天下りました。藤原一門はその命を忠実に果たしてきたばかりでございます」

「そのような神代の物語も、この国を支配するためにその方らの先祖が作った偽りじゃ。帝と藤原氏とは、もともと縁もゆかりもなかったのだ」

「な、何をおおせられますことやら」

「余はすべてを見抜いておる。その方らの先祖は外つ国からこの地に渡り来て、帝を人質に取った。そうしなければ、この国の民を治めることができなかったからだ」

「そのようなお考えをお持ちなのは、信長さまばかりでございましょう。藤原一門が陰日向なく帝をお守りしたからこそ、千年以上もの間朝廷がつづいたのでございます」

「ならば、わしがそれを変える」

破壊の衝動がふいに胸底から突き上げ、晴子をこの清涼殿でおかしたいという邪な

情欲へと変わっていった。

「今から、そのことを証してやろう」

信長は晴子の腕を取り、有無を言わさず引き寄せた。

ピシッ。

乾いた音がして頬に痛みが走った。

「ご無体な。座興が過ぎまする」

晴子が身をかわして逃げ去ってから、信長はようやく頬を打たれたことに気付いた。

思いもよらぬことである。こんな風に打たれたのは子供の時以来だが、不思議と怒りを覚えなかった。

夕方、近衛信基が訪ねて来た。

前久の嫡男で、弱冠十八歳ながら内大臣を務めている。信長が次の関白にと目している逸材だった。

「こたびの勝ち戦、祝着至極に存じまする。ご帰城あったとうけたまわり、都より馬を飛ばして参上いたしました」

「大儀じゃ。都も変わりないか」

「変わりございませぬ。東国平定を終えられ、将軍となられる日も近いという噂でもちきりでございます」

五年前に信基が元服した時烏帽子親を務め、信の一字を諱として与えた。以来信基は、信長を実の父親のように慕っている。

昨年四月に信基の制止を無視してお駒を成敗したために一時疎遠になっていたが、今では旧に復していた。

「勝頼父子の首は届いたか」

「都大路を引き回された後、四条河原にさらされました」

「公家どもの中には武田にひいきする者が多いという。さぞ眉をひそめていたことであろうな」

「そのような方々もおられましたが、下々の者たちはご尊父さまの天下平定が間近になったことを喜んでおります」

「恵林寺の焼き討ちについてはどうじゃ」

信長は自分のなしたことを過ちだったとは思っていない。だが洛中の者たちがどう噂しているかは気にかかった。

「快川国師が、心頭滅却すれば火おのずから涼しとの偈を残されたことが評判になっております」

「余の評判は悪いか」
「下々の者は、神仏のご加護によって日々安楽に暮らしていけると信じております。ご尊父さまのお考えを理解しろというのは無理でございましょう」
「そちはどうじゃ」
「当を得た処置とは思いませぬ」
信基はためらいなく答えた。
お駒を斬ろうとした時、身をていして止めに入ったほどの若者である。
信長の機嫌を取ろうというさもしい了見など、露ほども持ち合わせていなかった。
「何ゆえじゃ」
「あのような行ないを支持する者は、朝廷にも下々にもおりません。いたずらに反感を招くばかりでございます」
「あれくらいのことをせねば、この国は変えられぬ。神仏の力をふりかざす輩を、のさばらせるばかりじゃ」
朝廷や寺社の精神的な支配を打ち破って下々の迷妄をひらかなければ、この国をイスパニアやポルトガルに匹敵する国にすることはできない。
信長の敵は今や毛利や上杉ではなく、この国古来の信仰だった。

「甲斐からの文は届いたか」
「ありがたく落掌いたしました」
「段取りは」
「心やすき者たちへの根回しは終えましたが、朝廷の在りように関わることゆえ、私一人の力ではどうすることもできませぬ」
誠仁親王への譲位と信長の将軍就任、信基の関白就任を計らうように命じた文を、信長は甲斐から送っている。
やがては猶子としている五の宮を即位させ、信忠に将軍職をゆずって、公武の両権を一手に掌握するつもりだった。
「なぜできぬ。昨年譲位に応じると約したではないか」
「ご尊父さまに朝廷の官職についていただいた後に、ご即位の礼を行ないたい。宮さまはそうお望みでございます」
「笑止な。それをのめるくらいなら、この問題などとうに片づいておるわ」
昨年左大臣推任の問題が起こった時、信長は譲位の後に位につくことに固執した。
左大臣になった後に誠仁親王の即位を計らえば、擁立した責任を負うことになり、五の宮への譲位を迫ることができなくなるからだ。

ところが誠仁親王も左大臣就任が先だとおゆずりにならなかったために、金神ゆえに延引するという妥協案をのんだのである。

「あの譲歩と引き換えに、朝廷は譲位を先にすると約束したはずだ。それを今になって違えるのか」

「確かにそのような話が出たかも知れませぬが、宮さまのご真意ではございませぬ。武家伝奏の者が、事の決着を図るために勝手にしたことでございます」

「たわけが。そのような理屈が通ると思うか」

「たとえ通らなくとも、宮さまのご真意でなかったことは事実でございます。それゆえご尊父さまがご譲位を強行なされるなら、宮さまも非常の手段をお取りになると、近臣におもらしになった由にございます」

「何じゃ。何ができる」

「しかとは分りませんが、五の宮さまを廃嫡なされるものと存じます」

信長は驚きのあまり絶句した。

そんなことになったら、五の宮を即位させて太上天皇になる計略は水泡に帰す。しかもうかつなことに、誠仁親王にそれをなしえる力があることさえ失念していた。

二条御所に移徙して以来の従順な仮面に、完全にあざむかれたのである。

「知恵を出せ。どうすればそれを止められる」

「お求めの通り、先に官職につくほかはございますまい。その後にご譲位と五の宮さまの立太子の儀を計られるべきと存じまする」

「それでは遅い。いつになれば五の宮を即位させられるか分らぬではないか」

信長は力まかせに脇息を叩きつけた。

四月二十二日の明け方、晴子はいたましい夢にうなされていた——。

大和の女王となった晴子のもとには、次々と敗報がもたらされた。

白肩の津で敗れた敵は南の熊野へと迂回し、周辺の民を切り従えながら都へと攻め寄せて来る。

「もはや身方は総くずれでございます。都を捨てて、山城へとお移り下されませ」

平伏して告げたのは、兵士の装束をまとった房子だった。

「敵は、敵は何者です」

「西の外つ国から攻めて来た者でございます。真紅の旗をかかげ、黒い鉄の鎧に身を固めております」

人数こそ少ないが、鉄の鋭利な剣を用い射程の長い弓を使うので、身方は歯が立た

ない。

しかも切り従えた者たちを先陣に使い、後方から弓でおどしながら戦わせているという。

晴子は都に残った軍勢をまとめ、山の岩城へと逃れた。

峻険な山の山頂にぐるりと石垣を巡らし、城内には武器や兵糧を蓄えている。

しかも敵が知らない尾根の道を伝って身方と連絡を取れるので、五年や十年の籠城戦にも耐えることができた。

攻め寄せる敵を押し返す戦が、何年つづいたことだろう。

攻めあぐねた敵は、ある時和睦を申し入れてきた。山海の珍味を集めて和睦の酒宴を催すという言葉を信じた男たちは、今や敵の支配地となった都へ下りていった。

ところが、これは罠だったのである。

酒宴もたけなわとなった頃、敵は隠し持った剣で突然襲いかかってきた。

忍坂の　大室屋に　人多に
来入り居り　人多に　入り居りとも
みつみつし　久米の子が　頭椎い　石椎い持ち
撃ちてしやまむ　みつみつし　久米の子等が

頭椎い　石椎い持ち　今撃たば良らし

合図の歌が鳴り響く中、男たちはなす術もなく殺されていった。

このことを知った晴子は、さらに山深い地にある岩戸へと逃れた。奥の院と呼ばれる巨大な石窟の中で、わずかな兵士と侍女たちに守られて生き延びた。

敵は次第に支配地を広げていったが、女王の命なくしてはこの国を治めることができなかった。

力で押さえ込んでも、心服していない者たちはすぐに反乱を起こす。

まるでもぐら叩きのような戦いに疲れた敵は、女王を捕えようと躍起になった。

晴子は逃げた。

大和の深い山々を渡り歩き、石窟を転々としながら、庶民の平安を神々に祈りつづけた。

その噂は山の民や川の民、道々の輩など、敵に屈することなく抵抗をつづける者たちに伝えられ、反攻の気運が高まっていった。

このことに怖れをなした敵は「女王が都に来て降伏しなければ、奴隷とした者たちを日に千頭くびり殺す」と宣告し、容赦なく実行した。

十日で一万人、二十日で二万人。散所に押し込められて奴隷として使役されていた

者たちが殺されていく。
街道ぞいの木には絞首された遺体がぶら下がり、烏が甲高い声を上げて群がらぬ日はなくなった。
この惨状を救うために、晴子は敵に降る決意をした。
「おやめ下されませ。あの者たちに降れば、男は首を斬り落とされ、女は赤柄の矢で陰を突かれて殺されるそうでございます」
房子が必死で引き止めた。
「放しなさい。この身ひとつの犠牲によって多くの人々が助かるのなら本望です」
晴子はただ一人山を下りて、敵が待つ都へ向かった。
薄絹の貫頭衣をまとっただけだが、庶民にはすぐに女王だと分った。
誰もが道端にひれ伏し、顔だけ上げて食い入るように見つめている。
静かに涙を流している者もいれば、地を叩いて慟哭する者もいる。
晴子は南の城門をくぐり、都へ足を踏み入れた。あたりは敵がかかげた真紅の旗で埋め尽くされ、道の両側には黒い鎧をまとった兵が何千人となく立ち尽くしている。
正面には広々とした石段がつづき、その上に朱塗りの王宮がそびえていた。
表門が開かれ、金の王冠をかぶった男が下りて来る。

なんと、それは信長だった。
信長は晴子の頭から爪先までじろりとながめると、
「今日からそちは余の妻じゃ。この国の弥栄のために子を多く産め」
ひょいと抱き上げて石段を登っていった——。
晴子は胸をつかれて目を覚ました。
すでに夜は明けそめ、明かり障子から射し込む光が枕の間近まで迫っている。
昨日信長から言われたことが気になって遅くまで眠れなかったせいか、うかつにも寝過ごしてしまったのである。
「房子、いますか」
「お目覚めでございますか」
たすきがけをした房子が、庭先から現われた。
「いま何刻ですか」
「巳の刻を過ぎた頃でございます」
「そんなところで、何をしているのです」
「洗濯でございますよ。今日は天気も良さそうですから」
房子は次の間に上がり、険しい表情をして目覚めの湯を運んで来た。

「どこかお加減でも悪いのですか」
「いいえ。どこも」
「それなら申し上げますが、近頃姫さまはだらしなくなられたようでございます。前にはこんな風に朝寝なされることはございませんでした」
「長旅の疲れが出たのでしょう」
「夜ごとの逢瀬のせいではありませんか」
耳の痛いことをはっきりと言う。
晴子は恥ずかしさに耳たぶまで赤くなった。
「お顔にしまりがなくなりましたし、腰まわりなども下品に太くなったようでございます」
「どうしたのです。今朝はどうしてそんなに小面憎く当たるのですか」
「姫さまのお考えが分らないからですよ。心配で心配で、黙ってはいられないのでございます」
「そのことなら何度も話したはずです」
「明日兄君さまがお見えになるそうでございます」
「え……」

「戦勝祝いの勅使として、ご下向なされるのです。この不始末を、いったいどのようにお話しなされるつもりですか」
晴豊が安土に来たなら、晴子と信長の関係に気付くに決まっている。
そうなったらどうすればいいのかと、房子は足摺せんばかりに気をもんでいた。
「ありのままを話すつもりです。今さら隠し立てをしても仕方がありません」
「そんな……。あの厳格な兄君さまが、姫さまのなされたことをお許しになるはずがありません」
「たとえ許されなくとも、わたくしは信じた通りに生きるばかりです」
不安や後ろ暗さは胸を圧するばかりである。
だが、今さら引き返すことなどできなかった。
「なぜそのように意固地になられるのですか」
「意地など張っておりません。お前がいろいろとたずねるから、正直に答えているばかりです」
「ご自分でも罪深いことだと思っておられるのでしょう。それゆえそのように声高に話されるのではありませんか」
図星である。

晴子もそうした自問を夜ごとにくり返し、そのたびにちがうと言い聞かせてきたのだった。

「たとえ過ちをおかしても、ひたすら精進潔斎をすればその汚れは洗われます。今はこのことを隠し通すことこそ、姫さまの務めなのです」

「それは欺瞞というものです。裏ではどんな悪事を行なっても、表では体面をつくろって潔白なふりをする。仕来りや建て前に縛られ、何ひとつ本当の気持を口にすることができない。そんな生き方を変えたかったからこそ、わたくしは信長さまに同行したのです」

「今さら何をおおせられるのですか」

房子は部屋のふすまを閉ざし、晴子の間近に詰め寄った。

「そのように生きることが公家に生まれた者の務めだということくらい、姫さまもとうにご存知のはずです」

「それが務めだと信じて生きてきました。でも信長さまにお目にかかって以来、そんな自分が嫌になったのです。これからは内裏や後宮も変わっていくべきです」

「変えてなどなるものですか。朝儀は神事です。衰微した朝儀を復することはあっても、人の都合で変えることなど絶対に許されません」

「お前は急に立派なことを口にするようになりましたね」

晴子は立ち上がってふすまを開けた。

密閉された薄暗い部屋にいると、息が詰まってどうにかなりそうだった。

「姫さまが聞きわけのないことばかりおおせられるからでございます」

房子は再び手早く閉ざし、晴子を部屋の中に引き戻した。

「身の汚れを隠し通すことは、決して欺瞞などではありません。なぜなら神々に対して潔白な人間など、天下には誰一人いないからです。それゆえ主上は人にあらざるがごとき潔斎をつまれ、天下の者たちに代わって神々に仕えておられるのです。その尊き行ないの妨げとならぬように、身を慎しみ静謐を保つことが我々の務めなのです」

神事が行なわれている時に、わざと騒ぎ立てる馬鹿はいない。罪や汚れを隠し通すことはそれと同じだと房子は言った。

「いとしい人との間に児ができた時、私は誰にも知られぬように里に戻って産み落としました。ご当主さまや奥方さまがそれを隠し通して下さったからこそ、こうして姫さまにお仕えできるのでございます」

「そうね。そうかも知れませんね」

できることなら、晴豊にはこのことを伏せていたい。内裏に上がって以来、陰にな

り日向になって守りつづけてくれた兄を失望させたくはなかった。
それに信長を朝廷につなぎ止めるためにも、今の立場にとどまっておく必要がある。内裏から追われたならこの身がとたんに輝きを失うことを、晴子は充分にわきまえていた。
「しかし、一言の挨拶もなく帰洛するわけにはまいりません。信長さまにお目にかかってこのことを伝えますので、こちらにお越しいただけるように計らって下さい」
房子を使いに出したが、信長に会うことはできなかった。
「ただ今摠見寺に参籠なされておりますので、どなたにも会われませぬ」
森蘭丸がそう告げた。
信長は安土城の中に摠見寺を建立し、自らを神体として祀っている。
その寺にこもって何事かを祈念しているという。
「夕方にはお目にかかれますか」
「明日の明け方までおこもりになられますので、昼過ぎでなければ対面できないものと存じます」
「何をご祈願なされているのですか」
「分りません。誰にもご胸中をお明かしになりませんので」

何やらただならぬ気配である。
信長は昨年竹生島の参籠から戻った後に、外出していた侍女たちをことごとく成敗しているので、晴子とてうかつなことはできなかった。
翌日、勧修寺晴豊ら勅使四人が戦勝を賀すために安土城を訪れた。
信長は新築したばかりの本丸御殿で四人と対面した。
晴子はその間、ふすまを閉め切った薄暗い部屋の中で、房子と顔を突き合わせるようにして息をひそめていた。
二人が滞在している御台所は、清涼殿を模した御殿と庭をへだてて向かい合っているので、声だけは間近で話しているように聞こえてきた。
一方、信長は議定の間に座して勅使と対面していた。
御帳の間を使おうかとも思ったが、いたずらに朝廷を刺激するのは得策ではないと判断したのである。
下座にあたる台盤の間には、晴豊や庭田中納言らが神妙な表情で着座している。
この先の交渉がどれほど困難なものになるか、百も承知の面つきだった。
晴豊は型通りの戦勝祝いを述べ、朝廷から下賜の品々を披露した。太刀や時服、香などである。

中でも太刀は重要だった。

昔から朝廷の命を受けて出征した者が凱旋した時には、太刀をたまわる習わしがある。

信長にこうして太刀をたまわるということは、武田攻めが朝廷の命による征伐であったことを認めることだ。

そうなれば当然、戦功に対する恩賞が問題となる。

朝廷が信長に与えることができるものといえば、今や官位しかなかった。

晴豊がそのことに触れようとした時、

「お待ち願いたい」

信長の命を受けた蘭丸が、凛とした声で制した。

「お話の前に、昨年約束せしご譲位のことについてうかがいたい。今年は金神には当たりませぬゆえ、宮さまのご即位の礼がとどこおりなく行なわれるものと存じますが」

「その予定でございます」

「いつ行なわれるか、お聞かせいただきたい」

「信長公への恩賞の授与がすんだ後にとお考えでございます」

「それは朝廷の官位を授けた後ということでございましょうか」

「そのようにご理解いただきたい」

「ならば恩賞はご辞退申し上げます。昨年の約束通り、ご譲位の後に左大臣位を拝命いたします」

ご譲位の前に何としてでも信長を任官させたい朝廷は、恩賞を先にするという口実を構えてきた。

それを読んでいた信長は、恩賞を辞退して昨年の約束の実行を迫る作戦を取ったのである。

「おそれながら、こたびの勝ち戦については叡感なためならず、ぜひ恩賞を授けたいとお望みでございます。これをご在位の間の最後の務めとしたいとのおおせゆえ、何とぞお聞き届けいただきとう存じます」

見え透いた嘘である。

信長は正親町天皇のご意志に反して武田家を滅ぼし、快川国師を焼き殺したのだから、恩賞を授けたいなどと望んでおられるはずがない。

だがご譲位の前に信長を任官させるには、これほど優れた口実はなかった。信長が恩賞を受けない限り退位しないと、言い張ることができるからだ。

晴豊もこのことは充分にわきまえている。
面長の端正な顔からいっさいの感情を消し、どう責められようと帝の望みだと言い張った。
信長は次第に苛立ってきた。
これがこやつらの常套手段である。帝の権威をいいようにあやつり、人を丸め込んで屈服させようとする。
憎みてもあまりあるやり方だった。
「ならば恩賞を受けよう」
信長は逆手の逆手を取る策に出た。
「それほど御感あらせられるのなら、この御殿に行幸をあおぎ、授与の儀を行なっていただきたい」
「主上は近頃ご不例はなはだしく、とても行幸に耐えられるお体ではございません」
「ならば宮さまに名代として行啓いただきたい。五の宮は余の猶子ゆえ、連れ立ってまいられるがよかろう」
誠仁親王と五の宮を安土城に移し、譲位がなるまで幽閉する。
信長はそこまで腹をくくっていた。

鋭くそれを察したのか、晴豊は宮さまのご意向を確かめてから返答すると逃げを打った。
「これに応じるか昨年の約束を果たすか、二つに一つじゃ。三日の間に村井貞勝に返答を伝えよ」
厳しく命じて席を立った。
晴子は隠れたまま一部始終を聞いていた。
兄は誠実で優しい人である。
武家伝奏として公武の板ばさみとなった苦衷は察するに余りあるが、信長を諫めに飛び出すわけにはいかなかった。
（うちや。うちが力になってあげるんや）
公武の争いを丸く収める方法が、必ず何かあるはずだった。

四月二十五日は晴天だった。
甲斐から帰洛して以来、毎日好天がつづいているが、近衛前久の心はいっこうに晴れなかった。
備後の足利義昭と連絡をつけて幕府を再興すると告げ、細川藤孝に幕府ゆかりの者

たちを結集するように命じているが、事は遅々として進まなかった。

（やはり、参内させて殺すしかないか）

中臣鎌足は三韓進調の儀式の場で蘇我入鹿を謀殺し、大化の改新を実現した。

信長を参内させることさえできれば、討ち果たす手はいくらでもあるはずだった。

「勧修寺中納言さまがお見えになり、対面所でお待ちでございます」

取り次ぎの者が告げた。

晴豊は対面所で端座していた。

もともと細身でひょろりと背の高い男だが、信長との折衝で疲れ果てたのか一段とやせ細っていた。

「苦労が絶えぬようじゃな」

前久はねぎらいの言葉をかけ、侍女に酒を運ばせた。

「昨日安土から戻りましたが、所用にまぎれて報告が遅くなりました。おわび申し上げます」

「構わぬよ。ここにも立ち寄れぬほど大事な用事があったのだろうからな」

「本日、村井長門守から武田征伐の恩賞についての話がありました。太政大臣か関白、将軍のいずれかに推任するようにとの求めでございます」

世に名高い三職推任の要求である。

これにどう対応するか、京都所司代の村井貞勝と膝詰めで話し合ってきたのである。

「昨日加賀の菊酒が手に入った。まあ、飲め」

前久は盃を押しつけ、手ずからついでやった。

「かたじけのうございます。ありがたく頂戴いたします」

「それで。村井は何と申した」

「信長公は将軍となって幕府を開きたいと望んでおられるそうでございます。それゆえ将軍に推任されるのがよろしかろうとのことでございました」

「よいではないか。宮さまへのご譲位の前に職についてくれるなら、将軍だろうが関白だろうが好きなものに成してやれ」

「ところが、それだけではございませぬ。ご譲位の前に職につく代わりに、宮さまと五の宮さまに安土城に行啓いただき、宣下の儀を執り行なってもらいたいとのおおせでございます」

「ほう。それはまた……」

二の句がつげず、前久は盃を傾けた。

絶品の菊酒が、舌も震えるほどに苦く感じられた。

「このこと、いかが計らいましょうか」
「応じることなどできぬ」
行啓に応じたなら、信長は誠仁親王を人質にとって理不尽な要求を突きつけてくるだろう。南北朝に分裂していた頃のように、安土王朝を建てて都の朝廷を滅ぼそうとするかも知れなかった。
「だが、こばんだだけでは事はすむまい。明日にも二条御所を訪ね、宮さまと対応を協議してくるゆえ、そちは陣定に向けての根回しをしてくれ」
「落としどころは、どのあたりに」
「安土に勅使をつかわし、三職のいずれにでも推任すると伝えることになろう。ただし宣下の儀は内裏で行なわねばならぬ」
「承知いたしました」
「安土の様子はどうじゃ。何か変わったことはなかったか」
前久はそれとなくさぐりを入れた。
晴子と信長のただならぬ関係に気付いたかどうか、確かめておきたかった。
「本丸に清涼殿とうり二つの御殿を造営しておりました。金銀綺羅を尽くした、結構この上なき造りでございました」

「戦勝祝いに訪れた者たちも多かったことであろうな」
「まことに申し上げにくいことながら、思いがけないお方にお目にかかりました」
「ほう、誰じゃ」
「信基公でございます。勅使を迎える宴席にも、ご同席なされておりました」
「何か言っておったか」
「別に何もおおせられませぬが、信長公との間柄が以前よりも親密になられたようにお見受けいたしました」
「若い頃には分別のないことをするものじゃ。いずれはあれも己れの愚かさに気付く時が来る」
「そればかりならよろしゅうございますが、どうやらこちらの手の内がつつ抜けになっているようでございます」
「分った。皆まで言うな」
前久は追い払うように晴豊を下がらせた。
晴子の不行跡の証人に仕立てようという目論見は、見事にかわされたらしい。代わりに息子の非を咎められては立つ瀬がなかった。
夕方、思いがけない来客があった。

備中攻めにかかっている羽柴筑前守秀吉である。

持参した進物を庭に山と積み上げ、下男のごとく庭先に平伏していた。

「近衛太閤さま、ご拝顔の栄に浴し恐悦至極に存じたてまつります」

相変わらず大仰な芝居がかった振る舞いだった。

前久と同じ四十七歳だが、頭がはげ上がっているので老けて見える。

器量の悪さを愛敬でおぎなう技を身につけているが、落ちくぼんだ目だけはいつも油断のない光を放っていた。

「そちは毛利との戦の最中と聞いておったが」

「ただ今備中で対陣しているところでございます」

「何ゆえ急に上洛いたした」

「太閤さまにぜひともお目にかかりたく、夜を日についで馬を飛ばしてまいりました。敵方に悟られぬよう、影武者を残しての陣抜けでございまする」

「それは奇特なことじゃ。義昭のことでも頼みに来たか」

以前安土で会った時、秀吉は足利義昭の将軍位を朝廷の力で剝奪してくれと頼んだ。毛利家が義昭を庇護しているので、備中や美作の土豪たちは毛利家に大義名分ありと信じている。この結束をくずして内応させるには、義昭から将軍位を奪うのがもっとも効果的だというのである。

将軍、そして天皇への尊崇の念は、西国においては東国よりもはるかに強い。秀吉は人一倍鋭い鼻で、そのことを正確にかぎ取っていた。

「そのこともございまするが、まずは献上の品々をご披露申し上げまする。これ、虎之助」

秀吉にうながされて、二十歳ばかりの大柄の若者が目録を読み上げた。

加藤虎之助、後の清正である。

「黄金二百枚、白銀百枚、絹二百反、白磁の壺五つ、ルソン壺二つ、大鷹二本、馬五頭」

前久の四、五年分の収入に相当する桁はずれの進物である。それを臆面もなく読み上げさせるところが、秀吉という男の面白さだった。

「相変わらずの大盤振る舞いじゃな」

「われら下々の者は、粗忽にして気持の伝え方というものを知りませぬ。それゆえ命の次に大事な品々を献上して、意のあるところをくんでいただきたいのでございます」

「意のあるところは充分に分ったが、ルソン壺だけは引き取ってくれ」

「な、何ゆえでございましょうか」
「どうも好みに合わぬでな」
近頃ルソン壺は茶壺として珍重され、驚くほどの高値で売買されている。
だがもともとは高床式の南洋の家で糞尿を汲み下ろすために用いられていたことを、博学な前久は知っていた。
「さすがに雲上人となるとちがうものでございますなあ。お目が高い」
何がどう高いのか分りもせずに、秀吉はしきりに感心してみせた。
「そのようなところでは話が遠い。対面所に上がって酒など飲んでいくがよい」
「めっそうもない。天下の太閤殿下と同席するなど、及びもつかぬことでございます」
「無礼講じゃ。虎之助とやらも上がるがよい」
前久は二人を対面所に上げて酒をふるまった。
「して、用向きは」
「近頃、どうも気になることがございましてな」
秀吉が急に居ずまいを正した。
「毛利方の戦ぶりが変わったのでござる。以前は境目七城に兵を入れ、隙あらば反撃しようという構えを取っておりましたが、数日前から守りに入っており申す。どうやら城にこめた人数も、ひそかに引き揚げているようでござりましてな」
秀吉は四月四日に岡山に着陣し、十四日に宇喜多忠家の軍勢と共に備中に攻め込んだ。

これに対して毛利方は、足守川ぞいの宮路山城、冠山城、高松城など七つの城を拠点として迎え撃とうとした。
ところが最近では戦線を縮小して撤退にかかっているというのである。
「それは織田家の力、なかんずく羽柴筑前の武威に怖れをなしてのことであろう」
「もしそうであれば万々歳でございますが、毛利はいまだに六万の兵を擁しております。我ら三万余に怖れをなして兵を引くとは思えません」
「すると、どうしたわけじゃ」
「何か援軍でも待っているようなのでござる。もし援軍ありとせば、どのあたりからでございましょうか」
秀吉はとぼけたような笑顔のままだが、目はぞっとするほど鋭い。その迫力に前久は少なからず動揺した。
義昭から前久の計略を伝え聞いた毛利家では、事が起こるまで兵力を温存しようと

したのだろう。

その動きを見ただけで異変を察知するとは、驚嘆すべき勘の鋭さだった。

「わしには戦のことは分らぬ。今さら毛利家に身方する者がいるとは思えぬが」

前久はゆっくりと盃を干し、気持を立て直す時間をかせいだ。

「上様はあのように激しいご気性ゆえ、身方に寝返られたこともたびたびござった。浅井長政、足利義昭、荒木村重、松永久秀。数え上げればきりがないほどでござる」

その多くに前久は陰で関わっている。

秀吉がわざわざ前久を訪ねたのは、それを見抜いているからかも知れなかった。

「信長公はこの国を根こそぎ変えようとしておられる。敵が多くなるのも、やむをえぬことかも知れぬ」

「近衛太閤さまはいかがでございますか」

「かつてはそうした時期もあったが、今では信長公と歩みを共にしておる。一蓮托生(いちれんたくしょう)の間柄じゃ」

「四日前にほうき星が現われましたが、ご覧になりましたか」

「いいや」

「ほうき星は天変地異の前触れと申します。ご用心が肝要と存じまする」

「そちも息災でな」

「足利将軍の件は、何とかなりましょうか」

「古い記録を調べてみたが、将軍位を剝奪した例はない。他への宣下があった時に、前将軍の位は奪われたと見なされておる。近々信長公への宣下が行なわれるゆえ、義昭は名分を失うことになろう」

「それをうかがって安心しました。毛利の策に落ちぬように用心しながら、その時を待つことにいたしましょう」

「信長公が将軍となられたなら、備中への出陣を乞(こ)うたらどうじゃ。さすれば頑迷な西国武士も、自然と武威になびこうぞ」

「なるほど。よき知恵をお授けいただき、かたじけのうございまする。今後ともお引き回しのほど、よろしくお願い申し上げまする」

秀吉が帰ってからも、前久はしばらく立ち直れなかった。

何もかも見抜かれているのではないかという不安が、胸を離れないのである。

成り上がりの小者(こもの)と見下していた相手が、急にしたたかな本性をむき出して喰らいついてきた感じだった。

前久は三度、音高く手を打った。

「こちらに」
風の甚助が床下から応じた。
「あの男の動きをさぐれ。義昭の身近に間者を送り込んでいるやも知れぬ」
事がもれるとすれば、そこからしかない。
もし秀吉が計略を察知していながら自分を訪ねて来たのだとすれば、この博打、面白い目が出るかも知れなかった。
翌日、前久は二条御所を訪ねた。
周囲に堀を巡らし、築地塀の四角に角櫓を配した城構えの屋敷で、信長が三年前に誠仁親王に献上したものである。
以来宮さまはご家族と共にこの屋敷に住まわれているので、二条御所とも下御所とも呼ばれていた。
前久は対面所で長々と待たされた。
来客中とのことだが、宮さまが会うのを嫌がっておられることはよく分っていた。
「あの者は表裏があり過ぎる。やがて策に溺れて身を滅ぼすのではないか」
近臣にそうおもらしになったという噂は、前久の耳にも届いていた。
嫌われるのは構わない。誹謗されるようなことをしてきたのも事実である。

だが、自分がいたからこそ朝廷がここまで復興をとげたのだという自負が前久にはあった。
待つこと一刻。ようやく宮さまがお出ましになった。
近頃は当今に代わって政務をお執りになることが多く、ふくよかなお顔には聖主としての風格がただよっていた。
「信長のことなら聞いた」
いきなり用件にお入りになった。
挨拶する価値もない相手だと言わんばかりである。
「そのことを巡って、話し合っていたところじゃ」
「どのようなお話となりましたでしょうか」
「安土への行啓になど応じられぬ。いかなる官位であれ、宣下は内裏で行なうのが仕来りである」
「ごもっともなおおせなれど、それでは信長が承知いたしますまい」
「余に安土へ行けと申すか」
「そのようなつもりは毛頭ございませぬ。ただ昨年のご譲位の儀が、宮さまのご意向によって日延べになった経緯がございます。それゆえ信長も、こたびの叙位には宮さ

まのご賛同を得たいと願っております。行啓をお断わりになるのなら、何か別の形で御意をお示しになるべきかと存じたてまつります」

「参内して位を受けるのなら、祝いの品々を贈る」

「行啓に応じるか昨年の約束を果たすか、二つに一つだと信長は申したそうでございます。よほど思いきった御意をお示しにならなければ、これをくつがえすことは難しいものと存じます」

「近衛、そちは信長が何を企んでいるか存じておるか」

宮さまのお声が、苛立ちに荒立っていた。

「むろん、承知いたしております」

「申してみよ」

「口にするさえ、おそれ多きことにございますれば」

「構わぬ。そちのよく動く舌で、はっきりと申すがよい」

「宮さまがご即位された後に、五の宮さまへのご譲位を迫るでございましょう。五の宮さまご即位の後には、太上天皇として朝廷の上に立つものと存じたてまつります」

「今信長の求めに応じれば、その企てに手を貸すことになる。それが分らぬそちではあるまい」

「ならば信長を征伐なされますか」

ぐさりと一太刀あびせるような言い方をした。

今日こそは宮さまにもご覚悟を定めてもらわねばならぬ。そう腹を据えていた。

「かつて信長は、和議の勅命を出させるために上京を焼き払いました。こたびの要求に応じなければ、洛中を火の海にするやも知れませぬ」

「それでは、どうすればよい」

「おそれながら、このような令旨をお下しになるべきかと存じます」

前久は用意の文案を奏上した。

宮さまは一読なされるなり、目を閉じて黙された。

受け入れることはできぬとのご意志表示である。

「お怒りはごもっともなれど、これくらいの文をお下しにならなければ信長を参内させることはかないませぬ」

「しかし、その文面では余が位に任じたも同然じゃ。譲位を先にするのと同じではないか」

「ご安心下されませ。宮さまの御代になる頃には、信長はすでにおりませぬ」

「どういうことか」

「宣下の儀の前に、屈強の者を選んで誅伐いたしまする」
あるいは祝いの酒宴にこと寄せて毒殺するという手もある。
朝廷の典薬寮には、古代から伝えられたあらゆる種類の毒薬が保存してあった。
「余は知らぬ。そのような企てに手を貸すわけにはいかぬ」
「おおせはごもっともでございます。それゆえ、すべてはこの前久にお任せ下されませ」
宮さまを説き伏せ、文案通りの令旨を下していただくことにした。
書に曰く、
〈天下いよいよ静謐に申し付けられ奇特に候。日を経てはなほ際限なき朝家の御満足、古今比類なき事候へば、いかやうの官にも任ぜられ、油断なく馳走申され候はん事肝要に候。余りにめでたさのまま、御乳（親王の乳母）をもさしくだし候〉

第十四章　華麗なる罠

武田征伐の成功によって、織田信長の天下統一はいよいよ最終段階を迎えようとしていた。
武田家の遺領のうち、上野と信濃の二郡は滝川一益に、信濃の北部四郡は森長可に、甲斐は河尻秀隆に、駿河は徳川家康に与えられた。
関東の北条氏政も武田攻めに加わった功によって本領を安堵され、奥羽の伊達家も早くから好を通じていた。
残る敵は越後の上杉景勝と中国の毛利輝元、四国の長宗我部元親、そして紀州惣国一揆と呼ばれる地侍連合だけとなっていた。
このうち上杉勢に対しては、柴田勝家を大将とする北陸方面軍が越中の魚津城を包囲し、信濃からは森長可、真田昌幸らが春日山城に迫っていた。
中国の毛利に対しては、東から羽柴秀吉が備中の高松城に迫り、西からは九州の大

友宗麟が信長と同盟して進攻する構えを見せていた。

四国の長宗我部氏の処遇は、信長にとって頭の痛い問題だった。

最初信長は土佐一国の統一を終えた元親と同盟した。

阿波、淡路、河内に勢力を張る三好三人衆に対抗するためである。

この盟約の取り次ぎをしたのは明智光秀だった。

光秀の重臣斎藤利三の妹が元親の妻となっていたので、光秀も以前から元親と親交があった。

ところが天正五年頃から、信長はこの方針を変更する。

三好一族の重鎮だった康長が臣従を誓ったので、三好氏と長宗我部氏の両立を図ろうとした。

三好康長をくどいたのは羽柴秀吉だった。

やがて秀吉は甥の秀次を康長の養子となし、三好家との関係を強化していく。

そのために光秀と元親、秀吉と康長という対立関係が生じたのだが、形勢は光秀に不利な方向へと動いていった。

四国統一を目ざしていた元親が、信長の方針を無視して阿波、讃岐に進攻したばかりか、紀州惣国一揆と同盟して反信長の動きを見せ始めたからだ。

信長はやむなく天正九年六月に元親と断交し、秀吉に阿波と淡路の長宗我部軍を攻撃するように命じた。

秀吉は得たりやおうとばかりに姫路から兵を出し、十一月十七日に岩屋城、由良城を落として淡路を平定した。

ところがいざ長宗我部を討つとなると、事は慎重を要する。

このことが光秀の信用の失墜につながりかねないからだ。

信長が頭を痛めている原因はそこにあった。

体調もあまり良くなかった。

甲斐で病みついて以来、どうも本調子とは言いがたい。

体の芯に疲れが残っているのか、近頃ひどく寝汗をかくし、食もあまり進まない。

急に頭痛に襲われたり、背筋に寒気が走ったりする。

旅の間は晴子と過ごす楽しさもあって忘れていたが、安土城に戻ってみると明け方の冷え込みがひどくこたえるようになった。

ともあれ、光秀のことである。

元親叛乱の罪を責めて失脚させることは容易だが、信長に服属している足利幕府ゆかりの武将たちを、光秀ほどしっかりと押さえられる者はほかにはいない。

家柄からいえば管領家の流れをくむ細川藤孝の方が上だが、藤孝はいまひとつ信用できなかった。

十二代将軍足利義晴の落胤といわれているほどで、あまりに旧幕府勢力と近過ぎるからだ。

それに光秀を失脚させれば、羽柴秀吉の力が強くなり過ぎる。

あの猿めはここを先途と調略の手を伸ばし、光秀の与力としている武将たちをことごとく取り込んでしまうだろう。

柴田勝家や丹羽長秀らが束になっても及ばぬ力を手に入れた時、秀吉が何を考えるかは信長にさえ読みきれなかった。

（光秀の面目をつぶさずに元親を討つには、どうすればいいのか）

信長は断続的に襲ってくる頭痛に耐えながら考えを巡らし、方法は二つしかないという結論に達した。

丸一日考えてこれでいいと決すると、安土城に光秀を呼んだ。

せっかちな信長にしては慎重な行動である。しかも茶室に招いて手ずから茶を振る舞う気の使いようだった。

「甲信への出陣、大儀であった」

黒の天目茶碗に茶をたて、片手ですっと差し出した。

無駄のない簡潔な手前である。

「頂戴いたしまする」

光秀は作法通りゆったりと飲み干した。

どんな話かと緊張しきっているはずなのに、表にはまったく現わさないのだからさすがといえた。

「あの折には行き違いもあったが、さしたる他意はない。近衛のしたり顔が癇に触ったまでじゃ」

法花寺で光秀を打擲したことを、信長はそんな言葉でわびた。

「それがしの配慮が足りませんでした。改めておわび申し上げます」

「丹波出陣以来の働きは、秀吉に劣るものではない。畿内が無事に治まるのも、そちの力があればこそじゃ」

「過分のお誉めにあずかり、恐悦に存じまする」

「残るは中国と四国だが」

信長は茶碗を引いて二杯目をたてた。

「長宗我部が下知に従わぬからには、このままにしておくわけにはいかぬ。近々兵を

出して征伐することになる」

「それがしの力が及ばず、面目なき次第となりました。ご容赦下されませ」

「転変常なきは戦国の世の習いじゃ。失ったものは、次の機会に取り返せばよい」

「そのような機会を、与えていただけましょうか」

「元親を滅ぼすのは、余の本意ではない。土佐一国の安堵を謝して臣従を誓うなら、和を結んでもよい。出兵後のしかるべき時期に、そちからそのように伝えてくれ」

「征伐軍の顔触れはいかようになりましょうか」

「総大将は信孝じゃ。ただし、三好康長の養子として出陣させる」

三好家は百年ちかくもの間阿波、讃岐、淡路に勢力を張ってきた名家である。

信孝を養子とすれば、三好家に心を寄せる国侍たちの反発を抑えることができる。

しかも、康長が先に養子としていた秀次との縁組みは解消されるので、秀吉の一人勝ちになることをさけることもできた。

問題解決のもうひとつの方法は、信長の甥で光秀の娘婿に当たる織田信澄を征伐軍の副将にすることだった。

「信澄はまだ若い。出征に当たっては、そちの家臣のうちから心利いたる者を後見役としてつけるがよい」

そう申し付ければ、光秀は斎藤利三かその一門を派遣するだろう。

その者に元親との和睦の交渉を取りまとめさせれば、出征軍の消耗も防げるし光秀の面目も立つのである。

「重ね重ねのご配慮、かたじけのうございまする」

光秀は感極まって目頭を押さえた。

信長と出会って以来十四年。ずいぶんと年を重ねたものである。

「四国を押さえれば、毛利はおのずから伏するであろう。その後には天下に号令して新しい国造りに励まねばならぬが、この機会にそちの存念を確かめておきたい」

「何なりと、おたずね下されませ」

「そちはかつて足利義輝の近臣として幕政を司り、近衛前久や他の摂関家とも親しかった。朝廷に対してもひとかたならぬ思いを抱いていることであろうな」

光秀の尊皇家ぶりは有名で、天正七年に丹波の領民に出した触れには「あまねく天の下王土に生を請る者」と記しているほどである。

織田家中ではそうした心情を表に出さないようにつとめていたが、信長は鋭く見抜いていた。

「遠慮はいらぬ。思うところを申してみよ」

「日の本は神道の国でございます。誰もが等しく神々への畏敬の念を持っているがゆえに、国柄のちがいを超えてひとつにまとまることができるものと存じます」
「帝についてはどうじゃ」
「この国の民はいにしえより、帝が神々に礼を尽くしておられるからこそ日々平安に暮らせるのだと考えてまいりました。帝のご信任なくば政を行なえぬことは、足利尊氏公の例を見ても明らかでございます」
「ならば五摂家は」
「帝のご執政を補佐してこられた方々と存じまする」
「余はそうは思わぬ。帝は神々に礼を尽くすという尊き責務をになっておられようが、藤原一門は別じゃ。あの者たちは位階制度の中に人を押し込め、従三位以上でなければ帝に対面できないという仕来りを作ることによって、帝の権威を一門だけで利用してきたのだ」
聖徳太子が冠位十二階を定めたのは千年ほど前のことだ。
その頃には他の氏族の者も従三位以上に任じられたのだろうが、いつの間にか藤原一門によって独占されるようになった。
彼らが一門の権益を守るために作り上げた制度を根本から改めなければ、新しい国

造りなどはできない。信長はそう考えていた。
「そちは帝のご信任なくば政は行なえぬと言ったが、取り次ぎをするのはすべて公卿たちじゃ。我々には帝が何を考えておられるのかさえ分らぬ。このようなことでは、天下布武が成ったとは言えまい」
「おおせの通りかと存じます」
光秀にはちがう考えがあるようだが、異をとなえようとはしなかった。
「今はまだよい。国内の戦や政は武家の権限にゆだねられているが、諸外国との交渉においてはそうはいかぬ」
征夷大将軍にゆだねられるのは国内の統治権だけで、外交権は朝廷にあるとされている。それゆえ天下統一後にイスパニアやポルトガルと渡り合う時には、いちいち朝廷の許可が必要になる。
しかもそれを決めるのが一門の権益しか頭にない公卿たちとあっては、迅速な外交など望めるはずがなかった。
「それゆえ五の宮を即位させ、太上天皇となってあの者たちの上に立たねばならぬのだ。決して故なき僭上ではない。このことを肝に銘じておくがよい」
光秀を下がらせると、疲れがどっと出た。

言葉を尽くして家臣を従わせるなど、常にはないことである。
だが光秀ばかりか足利幕府ゆかりの武将たちの多くが、朝廷に対する信長のやり方に批判的なだけに、もどかしくとも説明しておく必要があった。
風邪でもひいたのか、悪寒がして体の節々が痛む。まだ夕暮れには間があったが、信長は早々と床についた。
翌朝、激しい喉の痛みで目が覚めた。
夜着が湿ってまとわりつくほど寝汗をかき、頭の芯にずきずきと痛みが走った。
「お蘭、湯を持て」
森蘭丸にそう命じようとしたが、虎落笛のような音がするばかりで声が出ない。つばを飲もうとすると、千本もの針が刺さったように喉が痛んだ。
「上様、都より村井長門守どののご使者がまいられました」
ふすまの外から蘭丸が声をかけた。
「構わぬ。通せ」
そう言おうとしたが、またしても声が出ない。思いがけない体の異変にとまどいながら、信長はふすまを開けた。
蘭丸と四十がらみの使僧が平伏している。

信長は目だけで中に入るようにうながした。
「申し上げます。先日のお申し入れに対し、朝廷よりご返答がございました」
昨年の約束通りご譲位を先にするか、誠仁親王が安土に行啓して将軍宣下を行なうか。二つに一つだと信長は申し入れている。
これに対して朝廷は、誠仁親王の行啓には応じられないが、使者をつかわして三職への推任を行なうと返答してきた。
「勅使として勧修寺中納言さま、宮さまのご使者として晴子さまと御乳の人が下向なされる由にございます」
「ならぬ」
そう怒鳴ろうとしたが、唇が空しく動いただけだった。
声の出ないもどかしさは、朝廷と交渉する時の苛立ちに似ている。
呼べど叫べどまともな返事は返ってこない。もっともらしい理屈を並べて、のらりくらりとかわされるばかりである。
それでもこれまでは辛抱強く我慢してきた。
敵の国に攻め入る時、あるいは利あらずして和を結ぶ時、勅命ほど使い勝手のいいものはなかったからだ。

だがめぼしい敵がいなくなった今では、勅命のありがた味もうすれている。それにつれて堪忍袋の緒も切れかかっていた。

「上様、これを」

異変を察した蘭丸が、素早く矢立てと料紙を差し出した。

信長は大きく息を吸って気持を鎮め、最後通告と記した。

二つに一つと言ったのだから、他の妥協案は一切認めないという意味である。

「そのように申し入れましたが、武家伝奏らは三職推任の令旨を発するは、宮さまが行啓なされて宣下されるも同じだと言ってゆずりません。上様に参内いただけるなら、宮さまもしかるべき扱いをなされるであろうと申しております」

「無用」

墨黒々と書き付けた。

そんな姑息な手がいつまでも通用するかどうか、今度こそ骨の髄まで思い知らせてやる。信長は比叡山を焼き討ちにした時のような狂暴な怒りにつき動かされていた。

そうとも知らずに、勅使の一行は五月四日に安土に下向した。

勅使は勧修寺晴豊と上臈の局、二条御所からの使者は晴子と御乳の人である。

上洛したならいかようの官にも任ずるという誠仁親王の令旨も持参していたが、信長は会おうとしなかった。

三日目の朝、

「二条御所のお方さまが、お見舞いにうかがいたいとおおせでございます」

蘭丸が取り次いだ。

「無用じゃ。今日のうちに帰洛させよ」

晴子に会ってみたい気はする。だが会えば姿勢を軟化させたと取られかねないので、心を鬼にしてはねつけた。

五月七日、病のいえた信長は天主の大広間で四国征伐の軍令を発した。

総大将は信孝、副将は信澄で、若い二人を老練の丹羽長秀と岸和田城主の蜂屋頼隆に補佐させることにした。

総勢二万五千。

淡路や阿波の守備についている三好康長の軍勢と合わせれば、長宗我部軍の二倍にのぼる兵力である。

だが、こと戦に関しては信長は用心深い。信孝を呼びつけて細々と指示を与えた。

「よいか。そちは総大将とはいえ、四国の内情については何も知るまい。三好山城守を父とも師とも仰ぎ、何事も腹蔵なく相談して決めよ」

「万々承知いたしております」

二十五歳になる信孝は意気軒昂だった。

嫡男信忠は武田征伐の成功によって織田家の世継ぎの座を揺るぎのないものとし、次男信雄は伊賀平定の功によって伊勢、伊賀の大半を与えられている。

二人に後れを取ってなるものかと、獲物を見つけた猟犬のようにはやり立っていた。

「讃岐はそちに、阿波は山城守に与える。まずは両国をしっかりと押さえ、余の下知を待って土佐に兵を進めよ。決してむやみに攻め込んではならぬ」

信長は朱印状まで出して、伊予、土佐両国の仕置きは自分が淡路まで出兵した後に決めると申し渡した。

信孝軍の暴走によって、長宗我部との和睦の機会を失うことを懸念したからである。

火をつけたはずなのに熱さが伝わってこない。

どうしたわけかといぶかっていると、敵は突然本性を現わし、みるみる勢いを増して焼け火箸のように肉にくい込んでくる。

近衛前久はうつぶしたままこぶしを握りしめ、歯をくいしばって灸の熱さに耐えていた。

都に戻ってからも神経をすりへらす日がつづいたせいか、背中がひどくこって頭痛がする。こうした時には灸が一番で、背骨の両側に三つずつ据えていた。

それにしても熱い。

身をよじっても全身に力を込めても、脳天にまで突き抜ける痛みは一向におさまらない。

背中をふた筋、じりじりと切り裂かれていくようだった。

「いくつかお取りいたしましょうか」

薬師の心得のある近習が案じ声でたずねた。

「構わぬ。それより天海坊はまだ戻らぬか」

「まだでございます」

「あやつめが。何をしておるのじゃ」

天海坊とは忍びとして使っている談山神社の修験者である。

信長が勅使との対面を拒否したと聞いた前久は、天海坊に拒絶の理由をさぐるように命じた。

三職推任を機に参内させて暗殺するという謀が、見抜かれたのではないかと案じたからだ。

だが五日もたつのに戻って来ない。あるいは捕えられて拷問でも受けているのではないかと、不安はつのるばかりだった。

やはり風の甚助でなければものの役には立たない。

だが甚助は秀吉の動きをさぐるために備中に潜入しているので、呼び戻すわけにもいかなかった。

不安とは質の悪い病のようなものだ。

こちらが弱気になればすかさずつけ込み、我が物顔に暴れ回る。

その頭を烈々たる気迫で抑え込み、喉元に白刃を突きつけられても平然としていられる胆力がなければ、とても策士にはなれない。

すでにそれくらいの力量はあると自負していた前久だが、今日ばかりは居ても立ってもいられなかった。

明日は安土に、徳川家康と穴山梅雪が到着する。

二人をもてなす酒宴に前久も招かれていたが、万一信長に計略を察知されていたなら、安土を訪ねることは死を意味する。

ことさら熱い灸で身を焼くのは、不安に浮き足立つ心をいましめるためでもあった。

灸は熱さの峠を越し、徐々に勢力を失っていく。

焼け火箸を引き抜くように熱さと痛みが去り、体中の神経が緊張から解かれてのびのびとくつろいでいた。

（いや、悟られるはずがない）

ここ数日の行動をつぶさにふるいにかけ、前久は気を取り直した。

信長を誅罰すると打ち明けた相手は吉田兼和と細川藤孝だけだし、参内させて討つ計略をご存知なのは宮さまばかりである。

前久の勧めに従ってのこととはいえ、宮さまにも三職推任の令旨を下して上洛をうながした責任があるのだから、口外なされるはずがなかった。

（では、どうして信長は勅使との対面をあれほど手厳しく拒絶したのか）

考えは解けない謎に行き当たり、堂々巡りをくり返す。謎を解く鍵をもたらすはずの天海坊は、ついに夕刻になっても戻らなかった。

かくなる上は危険を承知で安土に下るほかはない。

だがその前に、虎穴に飛び込む備えをしておかなければならなかった。

「秀吉が献じた大鷹と駿馬を、今日のうちに安土に届けておけ」

「今からでは夜になりますが」

「そのようなことは分っておる」

不機嫌に吐き捨てると、信基が住む別殿を訪ねた。
信基は文机に向かったまま筆を走らせていた。
後に名を信尹と改め、三藐院流の書道の祖とあおがれるが、その片鱗はすでにこの頃から現われていた。
「安土へは下らぬのか」
「他に所用がありますので」
「徳川家康はなかなか見所のある男だ。この機会に好を通じておくのも悪くはあるまい」
「父君はまいられるのですか」
信基がようやく筆を置いて向き直った。
信基が信長の野望に手を貸すことを、前久は手厳しく咎めたことがある。
だが信基はこの国を変えるためには朝廷も変わらなければならないと言ってゆずらなかった。
以来二人はそっぽを向いたまま、別々の道を歩んでいる。
同じ屋敷内とはいえ、顔を合わせるのは久々のことだった。
「下るとも。信長に招かれておるでな」

だからお前も供をせよ。前久はいつになくやさしい声をかけた。
「これは驚いた。父君から安土へ誘われるとは、どうした風の吹き回しでしょうか」
「たまには親子そろって行くのも悪くはあるまい。信長も面白がってくれようて」
「ご譲位や将軍宣下の話になったらどうです。ご尊父さまの御前で論を戦わせますか」
信基が苦笑した。
そうなってもゆずるつもりなどないことは明らかだった。
「こたびは家康を迎えるための宴席じゃ。難しい話をすることはあるまい」
前久は信長とさしで向き合うことをさけたかった。
一対一だと心の動きを見抜かれる恐れがあるが、信基がいれば話題もそらしやすい。
「せっかくですが、お断わりします。明日までに仕上げる約束ですから」
「書写か」
「さる大名家から古今和歌集の注釈を頼まれました。気付いたことを書き加えているばかりです」
「残念だな。安土では鷹狩りに出ようと思うが」
「父君がですか」

「そうよ。意のあるところを示すには、それくらいの芸当は見せてやらんとな」
前久の鷹狩りについての造詣は、信長や家康でさえ遠く及ばぬほどである。だが太政大臣の身でそうした技をなすことに批判も多いので、近頃は慎しんでいた。
「ならばまいります。馬で行かれますか」
前久から奥儀を伝授してもらいたがっている信基は、手のひらを返すように態度を改めた。
五月十五日の早朝、前久と信基は公家陣参衆五十騎をひきいて安土に向かった。
馬は坂本に預け、明智家の船で琵琶湖を渡ることにした。
「近衛公、お待ち申し上げておりました」
光秀が乗船口まで出迎えた。
家康の接待役をおおせつかっているだけに、緊張の色がありありとうかがえる。
「不馴れな役目ゆえ、行き届かぬことも多いと存じます。よろしくお引き回し下されませ」
「足利家の典礼に通じたそなたゆえ、案ずることはあるまい。存分に楽しませてもらうことにしよう」
二人は並んで舳先に立ち、気を張り詰めて出港を告げる太鼓の音に耳を傾けていた。

水夫たちは太鼓の音に合わせて櫂をこぐ。
船は静かに船着場を離れ、べたなぎの湖面を安土に向かって滑り出した。
「近頃、信長公のご機嫌はいかがかな」
前久はそれとなくさぐりを入れた。
「あまりお加減がすぐれぬようでございます」
「それは気がかりなことじゃ。病でもわずらっておられるのであろうか」
「武田征伐の疲れが出たのでございましょう。お風邪を召しておられるとうかがいました」
「勅使にも対面なされなかったゆえ、何事やらんと案じておったが、不例とあらばやむをえぬな」
前久はさあらぬ体で光秀の反応をうかがった。
病気のために対面をこばんだのなら、計略が察知されているという不安は氷解する。
「ここ数日伺候しておりませぬので、それがしも詳しいことは存じませぬ」
「近々四国征伐にかかるらしいが、出陣はいつじゃ」
「すでに住吉に参陣し、渡海の仕度にかかっております。上様のご下知があり次第、出陣するものと存じます」

「そちにひとつ教えてもらいたいことがある」
「……」
「天下統一の後に信長公が何を目ざしておられるかは存じておろう。武家の身で朝家を超えることが、はたして許されるものであろうか」
「そのことについては、上様から何もうかがっておりませぬので」
「聞いてはおらずとも存じてはおろう」
「妄言を慎しむのが臣たる者のたしなみでございます。ご不審の儀があれば、上様に直にお質しあるべきかと存じます」
言葉は柔らかだが、光秀の意志は固い。この先も信長に従いつづけることは明らかだった。
（この律義者めが）
前久は心の中で舌打ちをして、かなたにそびえる安土城の天主をながめた。
城下の大船止めに着くと、光秀が用意した輿で城へ向かった。
大手門をくぐって急な石段にかかると、前久もさすがに平然としてはいられなかった。
緊張のあまり心臓の鼓動が速くなり、胃のあたりがしくしくと痛み出した。

病気とは聞いたものの、不安はぬぐいきれない。
病気と偽って弟の信行を呼び出し、手ずから斬り殺したような男だけに、どんな罠を仕掛けているか分ったものではなかった。
いや、信長ばかりではない。
武田信玄、上杉謙信、毛利元就。戦国の梟雄と呼ばれた大名たちはすべて、身内との凄惨な戦いを制してのし上がっている。
荒ぶる時代ゆえに仕方がなかったとはいえ、胸の底に斬殺の牙を隠したような輩である。
（そんな輩に、朝家を汚されてたまるか）
前久は胸の怒りをかき立てた。
怒りと使命感だけが、不安に打ち克つただひとつの武器だった。
案内されたのは、天主の対面所だった。
格子窓から見下ろす位置に、清涼殿そっくりの本丸御殿が建っている。
朝廷を足下に組み敷こうとする信長のまがまがしい意図を、これ見よがしに突きつける配置だった。
「近衛、よう来た」

上段の間に着座するなり、信長は機嫌のいい声を上げた。
病み上がりらしい翳りはどこにもなかった。
「健やかなるご尊顔を拝し、恐悦に存じます」
「うむ。信基も大儀。親子そろっての伺候とは、めでたい限りじゃ」
「風の便りにご不例とうかがいましたが、大事ございませぬか」
計らずも信基が一番知りたいことをたずねた。
「ただの風邪じゃ。先ほど献上の品々を見た。明日あたり鷹野に出るのも面白かろう」
「ならばお供させていただきましょう」
上機嫌は本物である。前久はようやく虎口を脱した心地がした。
「光秀も大儀じゃ。家康には先の出征でひとかたならず世話になった。くれぐれも手落ちなきようにな」
「承知いたしました。お任せ下されませ」
光秀の返答はこれまでになく自信に満ちている。
そうできるだけの扱いを、信長から受けているにちがいなかった。
（なるほど。そういうことか）

二人の蜜月の理由を、前久は一目で見て取った。
怖るべきは羽柴秀吉である。
あの男がこれ以上勢力を伸ばすことを懸念した信長は、退勢気味の光秀を引き立てることで釣合を取ろうとしたのだ。
「備中の戦況はいかがでございますか」
前久はわざと秀吉の話題を出してみた。
「猿め、ここを先途と荒稼ぎしておるわ」
秀吉は毛利方が足守川ぞいに配した境目七城を北からひとつずつ攻略し、四月末には最大の難関というべき高松城を包囲した。
だが高松城は沼地に囲まれた要害の地にあり、城主は名将の誉れ高い清水宗治なので、城の周囲に土手を築いて水攻めにしているところだった。
「ほう。水攻めとは珍らしい」
前久の脳裡にちかりとひらめくものがあった。
毛利方が兵力を温存するために前線を縮小していることは、秀吉も察知している。
三万もの兵力で攻めかかったなら、高松城など数日で落とせるはずである。
それをあえて水攻めなどという悠長な策を取るのは、毛利の策に乗って敵地の奥深

く誘い込まれることを恐れているのか。
それとも高松城を毛利本隊を誘い出すための囮にしようというのか。
いずれにしても都で何事かが起こることを見越して、兵力を温存しているとしか思えなかった。
「四国を押さえれば毛利は四面楚歌じゃ。日ならずして我が軍門に下る。猿には高松城を攻め落とし、足守川より東を固めて沙汰を待てと申し付けたわ」
「羽柴は名うての戦上手ゆえ、手柄の機会を奪われてさぞ心残りでございましょうな」
「それでよい。近頃ちと思い上がりが過ぎるゆえ、きつく手綱を絞らぬとな」
「四国にはご出馬なされますか」
「淡路へ渡り、長宗我部の仕置きをせねばならぬ。その後に大船を連ねて備中に向かう」
「それはさぞ見事な船団でございましょう。御陣に加えていただきたいものですな」
そつのない追従をくり出しながら、前久は背中を焼かれるような焦りを覚えていた。
事を急がねばならぬ。
四国が信長の手に落ちたなら、毛利は足利義昭を見限って降伏を乞うことは目に見えている。
そうなれば幕府再興の計略は水泡に帰し、信長を討つ大義名分も失われる。
だが勝負をかけるには、持ち駒があまりに少なかった。

徳川家康と穴山梅雪が安土城に着いたのは巳の刻だった。二人とも数百人の近習を連れたばかりで、身を信長にゆだねたのである。
信長は大手道の脇にある大宝坊を宿舎とし、さっそく歓迎の酒宴を張った。
前久も信基と共に相伴し、家康、梅雪と向き合って座った。
「近衛の息子の信基じゃ。余の烏帽子子でもある」
信長は真っ先に信基と家康を引き合わせた。
「やがては関白となって朝廷を取り仕切ってもらわねばならぬ。年は若いが、父を超えるほどの働きをしよう。のう、近衛」
「過分のお誉め、かたじけのうございます」
前久は軽く会釈して受け流した。
饗応役の光秀は手ずから酒肴の膳を運び、座の真ん中について接待をする。
落ち付きと呼ばれる食事の献立は、本膳から五の膳まで山海の珍味を集めたものば

かりだった。

中でも近江名物の鮒鮨と長良川の鮎のうるかは絶品で、家康も梅雪もしきりに感嘆しながら箸を進めていた。

酒宴を終えて宿所に戻ると、前久は近習に体をもませた。

灸を据えて楽になった背中が、気疲れのあまり鉄の板のようにこっていた。

（このままでは、どうにもならぬ）

焦りはつのるが信長の備えは磐石になるばかりで、つけ入る隙はどこにもなかった。

「都からのご使者でございます」

近習にうながされてふり返ると、烏帽子姿の公家が平伏していた。

なんと風の甚助である。

使者に身を変えて白昼堂々と城に入るのだから、恐れ入った剛胆さだった。

「備中高松城は水攻めの最中でございますが、これを救おうと毛利の本隊が後ろ巻きに出てまいりました。羽柴秀吉はこれと雌雄を決するために、信長の出陣を乞うと触れております」

「確かか」

「陣中の数カ所に高札をかかげておりますゆえ、間違いございませぬ」

身方の士気を鼓舞するための触れとも取れるが、前久は鋭く裏の意図を読み取っていた。

秀吉は信長の出馬を乞うことで、何事かが起こるのを待っていると告げているにちがいなかった。

蒲生野は安土城から辰巳の方角へ二里ほど離れた所にある草原である。

中央には船岡山と呼ばれる小高い山があり、丑寅の方角には箕作山が大地のこぶのように盛り上がっている。

あかねさす紫野ゆき標野ゆき
野守は見ずや君が袖振る

額田王と大海人皇子が、相聞歌を交わした場所としても知られている。

五月十六日の早朝、明智光秀は前久や信基と共に、鷹狩りの段取りをするためにこの地を訪れた。

予定では連歌や茶の湯、能楽でもてなすはずだったが、前久の発案によって急に鷹狩りに変更されたのだ。

それだけに準備不足は否めない。

鷹狩りが苦手な光秀は作法についてもうといので、何事も前久の指示に従うほかはなかった。

「近衛公、勢子はどのあたりに配するべきでございましょうか」

蒲生野に着くなりうかがいを立てた。

「勢子とは巻狩りに使う言葉じゃ。鷹狩りでは下狩衆という」

こうした点には前久はやたらとうるさい。しかもそんなことも知らぬのかと言いたげな顔をするので、光秀には気の重い仕事だった。

「ご無礼をいたしました。下狩衆はどのあたりに配すればよろしゅうございましょうか」

「そうさな。箕作山のふもとと船岡山の北面の二カ所でよかろう」

「船岡山の南には不要でございましょうか」

「そちは客人をどうもてなすつもりじゃ」

「……」

「この狩野のどこで狩ってもらうつもりかとたずねておる」

「船岡山が好所かと存じます」

「そうじゃ。あの丘の上に立てば、野原から飛び立つ鳥に鷹を合わせることができる。それゆえ下狩衆には北から南へと鳥を追わせねばならぬ。先の二カ所こそその適地であろう」

「分りました。犬は使うべきでございましょうか」

「当然使わねばならぬ」

「犬の鈴は必要でしょうか」

「この草丈では、鈴がなくては犬がどこにおるか分らぬではないか」

前久の口調は次第に辛辣になり、光秀の気はますます重くなった。

鳥を草むらから追い立てるために犬を放つ。

鈴を付けるのは居場所を知るためだが、鈴の音があまりに大きいと鳥が早く飛び立ち過ぎて鷹を合わせそこなう恐れがある。

光秀が気を使っているのは、そんな失敗をしたくないからだった。

鳥を驚かすために鷹にも鈴を付ける。霞や靄が立ちこめた日には、鷹を見失わないように継尾をする。

今日の天気では継尾をするべきかどうかも、光秀には判断がつかなかった。

恥を忍んでそのことをたずねると、

「そのようなことは銘々が決める。そちは狩野から鳥をうまく追い立てさえすればよ

いのじゃ」

前久は相手をするのも馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに仕度にかかった。

まずは鷹の腹ごしらえである。

一日の狩りに耐えられる体力をつけるために、兎を殺して肉を与える。

普通は鷹匠に任せる仕事だが、前久は血のしたたる肉を手ずから与えた。こうしなければ、鷹との信頼関係が築けないのである。

「その方らとて、恩賞もくれぬ主君には仕えまい。鷹とて同じことじゃ」

三羽の鷹を次々と鳥屋から引き出し、口移しでもするようにして食べさせた。

半刻ほど遅れて、信長らが到着した。

いずれも自慢の鷹を三羽ずつ連れている。家康も梅雪も、こうなることを見越して持参したのである。

光秀は三人を船岡山に案内した。

さして高くはない山だが、山頂からは眼下に広がる蒲生野を一目で見渡すことができた。

「なるほど、ここなら鳥を当て落とすさまが手に取るように分りますな」

鷹狩り好きの家康が、鳥屋から出した鷹にいそいそと継尾をした。

「近衛はどうした」

信長はすべてを供の鷹匠に任せていた。

「信基公の後学のために、狩野から先鷹を使うとおおせられました」

「さようか。ならば始めよ」

光秀は供の者に用意の旗をかかげさせた。

それに応じて、箕作山のふもとから旗が上がった。

下狩衆の仕度がととのったという合図である。

夏草の生い茂る蒲生野には、包囲されたとも知らずに雉子たちがのんびりと羽根を休めている。

やがて二本目の旗が上がり、犬がいっせいに放たれた。

犬の吠える声と鈴の音に驚いた雉子たちが、羽音もけたたましく飛び立った。

百羽、いや、二百羽ちかい。北から追い立てられ、我先にと南へ逃げていく。

それを追って二羽の鷹が群の後尾に一直線に突っ込んでいった。

前久と信基が使った先鷹である。

雉子の群は恐慌をきたしたまま船岡山へと向かって来る。信長と家康は鷹を腕にのせ、身をかがめて放つ機会をねらっていた。

上々の首尾に光秀が安堵の胸をなで下ろした時、船岡山の南側から雉子の一団が凄まじい羽音を立てて飛び立った。

五百羽は優に超える大群が、次々と地を離れて南へ向かっていく。

この群にぶつかることを恐れたのか、船岡山に向かっていた鳥たちは大きく旋回して東へと進路を変えた。

（ああ……）

光秀は声にならない叫びを上げた。

下見に出ながら大群を見落とした罪は重い。このまま鳥が逃げ去ったなら、信長の体面まで汚すことになる。

戻ってくれとすがる思いで祈ったが、飛び去る鳥を止める術はなかった。

と、その時、箕作山のふもとの道を漆黒の馬が猛然と走り出した。

前久が左手に鷹をのせたまま右手で鞭を使い、手綱も取らずに馬をあやつっていた。

「近衛め。やりおる」

信長が感心したほどの騎乗ぶりで雉子の前に回り込み、馬上から大鷹を放った。

鷹が大きく羽ばたくたびに、翼に付けた二つの鈴が華やかな音を立てる。

その音に驚いた鳥たちは再び旋回して南に向かった。

大鷹は羊の群を追う犬のように、雉子の群を船岡山に追い立ててくる。

頃合いやよしとばかりに、信長と家康が次々と鷹を放った。

六羽の鷹が空高く舞い上がり、頭上から群の真ん中に突っ込んでいった。

恐るべき速さで急降下し、雉子の頭をひと蹴りして高々と舞い上がる。雉子たちはこの一発で気を失い、糸を引くように地上に落ちていった。

速さにまさる鷹は飛翔と降下をくり返し、次々に獲物を当て落としていく。

逃げられぬと見た雉子たちは、地面に下りて草むらに隠れようとするが、そこには地獄の犬たちが待ち受けている。

敗軍のみじめさそのままの狩られようだった。

鷹狩りを終えて安土城へ戻ると、光秀は近衛前久の宿所を訪ねた。

何よりもまず、危ういところをとっさの機転で救ってくれたことへの感謝を伝えておきたい。近頃はご譲位を巡る争いもあって疎遠になりがちだったので、前久の温かい配慮がいっそう嬉しかった。

前久は庭にいた。大鷹を止まり木にとめ、信基に継尾の仕方を教えている。

さっき雉子たちを船岡山に追い込んだ殊勲の鷹は、まるで置物のようにおとなしく身をゆだねていた。

「継尾は白を用いる。雪かとも霞のうちに手放せる継尾の鷹のほの見ゆるなりとは、このことを詠んだものだ」

前久は白鳥の羽根を器用に鷹の尾に結び付けていく。取り次ぎの者が光秀の到来を告げても、ふり返ろうともしなかった。

夕餉の仕度も気になったが、光秀はじっと待った。

織田家の出世頭となった今でも、前久には頭が上がらなかった。

それは前久が五摂家筆頭の当主だからでも、太政大臣だからでもない。光秀が身命を投げうって仕えた足利義輝と、従兄弟で義兄弟という固い絆で結ばれているからだった。

「何の用かな」

四半刻ちかく待たせても、前久はわびのひとつも言わなかった。

「先ほどは危ういところをお救いいただき、かたじけのうございました。心ばかりのお礼の品を持参いたしましたので、お納め下されませ」

光秀は桐の箱に入れた天目茶碗を差し出した。

千利休からゆずられた秘蔵の品だった。

「ほう、利休か。羽柴筑前なら、金銀を山と積み上げたろうに」

前久がつまらなさそうに茶碗を取り上げた。

「恐れながら、この天目茶碗は金銀ではあがなえぬ品と存じまする」

光秀は近頃、秀吉とくらべられることに生理的な嫌悪感を覚えてしまう。そのせいかいつものゆとりを失って、言わずもがなのことを口にした。

「利休は好かんのや。お前いるか」

無造作に信基に渡した。

「頂戴いたします。以後当家の宝といたしましょう」

信基は茶碗を両手に包み、いつくしむように感触を味わっていた。

「忙しかろうに、礼を言うためだけに待っていたのか」

「恐縮ではございますが、夕餉の献立にお目通しいただきとう存じます」

光秀は御膳奉行から上がってきた書き付けを差し出した。

接待料理には特別の格式と約束事がある。

今夜は鷹狩りの獲物を中心にした料理にするように命じていたが、作法にはずれていないかどうか有職故実に精通している前久に確かめてもらいたかった。

その日の夕餉も、光秀は手ずから膳を運んで接待した。

人をもてなすために走り回るから馳走という。接待役が座の真ん中に入り、酒をつ

ぎ肴を取り分けるのが古式にのっとったやり方だった。

一の膳は信長が好きな飯の湯漬けと、若狭の鯖の塩引き、山芋のむかご、長良川の鮎の風干しの焼き物、するめと鮭を三杯酢にひたした和え混ぜ。

それに釜で炊いた姫飯と香の物である。

二の膳は子孫繁栄の縁起物であるからすみと、さざえの壺焼き三つ。ぶつ切りの蛸を油で揚げた天ぷら。いりこ（ナマコの干物）と串あわびなどを具とした集め汁。

それに今日の獲物の雉子を焼いた小串と、くらげときゅうりを和えた酢の物である。

小串とはいっても長さ一尺もある串に雉子のぶつ切りを刺した野戦料理だが、味つけが普通とはちがっていた。

宣教師たちがインドから持ち込んだカレー粉をまぶしているので、雉子の旨味が引き立っている。

天ぷらといいカレー粉といい、新し物好きの信長に配慮した心憎いばかりの献立だった。

「ほう。これは何という料理でござろうか」

家康は蛸の天ぷらが気に入ったらしく、相好をくずして箸を伸ばした。

「テンポラスというポルトガルの料理じゃ。なかなかの美味であろう」

信長は己れの手柄のように得意気だった。

「このように旨い料理を初めていただきました。当家の膳部の者にも、作り方を教えていただきとう存じます」

後に家康は天ぷらに当たって他界したと伝えられるほどこの料理にやみつきになるが、初めて知ったのはこの席でのことだった。

三の膳は鱧の山椒味噌添え、白鳥とたけのこの包み焼き。これは掘りたてのたけのこを両断し、中をくり抜いて白鳥の肉を詰め、直火であぶった野戦料理である。

つづいて伊勢海老の舟盛りと、のしあわびの塩もみ、鯉汁。

四の膳は鳥の内臓をだし汁に漬け込んだ百菊焼き、青鷺汁、瓜の塩もみである。

最後の五の膳は、丸焼きにした鳴を羽根を広げて飛んでいるような形に盛りつけた鳴の羽盛り。くじらの尾の身とうどの吸い物。ばい貝の塩ゆでだった。

この膳が運ばれると、前久がにわかに険しい表情をした。

「近衛、どうした」

信長が見とがめたほどの眉のひそめようだった。

「いえ。何でもございませぬ」

「遠慮は無用。気に入らぬことがあるなら申すがよい」

「しからば申し上げますが、日向守ともあろう者がこのような献立をあつらえるとは解しかねまする」

問題ないと請け負っておきながら、思いもよらぬ言いがかりである。光秀は衝撃に血の気が失せるのを感じながら前久を見つめた。

「ほう。何ゆえか」

「将軍が賓客をもてなす時には、鶴、雁、雉子の三鳥を用いるものでございます。しかるにこれでは四鳥。しかも青鷺や鴫のような下司な鳥では、客に対しても礼を失することになりましょう」

「恐れながら申し上げます」

光秀は信長の許しを得てから反論した。

「この鳥はいずれも本日の獲物でございます。三鳥の格式ありとはいえ、旬の品々を新しきうちにお召し上がりいただきたく、このような献立としたのでございます」

「これは日向守の言葉とも思えぬ。四鳥は死に通じ、鳴は死期に通じることを知らぬわけではあるまい。その禁をあえておかすとは、他意あってのことであろう」

前久の高飛車な言葉に、光秀は気後れして黙り込んだ。長年臣従してきた習性が、大事なところで足枷となったのである。

光秀は焦った。

他意あってのことと言われて反論できなければ、どんな疑いをかけられるか分らない。だが、前久がどうして急にこんな態度を取るのか分らないので、どう切り返していいのか判断がつかなかった。

「近衛、四鳥や鳴はそれほど不吉なものか」

「祝儀の席には決して出してはならないものでございます」

「たわけが」

信長は声を上げて軽やかに笑った。

「そのような作法や格式は、その方らが我が身を飾るために作り上げたまやかしじゃ。塩漬けの鶴より、獲りたての鳴が旨いに決まっておるではないか」

座の空気が緊張に張り詰めた時、森蘭丸が急使の到来を告げた。

「備中高松城の羽柴筑前どのより、至急ご披見いただきたいとのことでございます」

信長は差し出された書状に素早く目を通し、もう一度ゆっくりと読み返した。

毛利の本隊五万が高松城の救援に出張ってきたので出馬を乞う、というものである。

「猿め。抜け目なく機嫌を取りおるわ」

出過ぎて憎まれまいという魂胆は見え透いていると苦笑しながらも、信長は上機嫌

だった。

「それで、ご出馬なされますか」

前久も妙に華やいだ表情になっていた。

「四国を先に平らげるつもりであったが、一気に毛利を叩くのも悪くはあるまい」

「ならば将軍宣下の後にご出陣なされませ。さすれば足利義昭の将軍位は剝奪され、毛利の大義名分は失われまする」

「誠仁親王への譲位が先じゃ。光秀、饗応役はもうよい。急ぎ丹波へ戻り、出陣の仕度をせよ」

与力として付けられたのは細川忠興、池田恒興、高山右近らで、総勢三万。秀吉の軍勢に匹敵する大軍だった。

信長の先陣として出陣するのだから、決して不名誉な命令ではない。だが光秀は心に穴が空いたような寂しさを覚えていた。

前久に冷たく突き放されたことがこたえるのだ。

これまで信長に仕えながらも、胸の内には常に義輝や前久がいた。

幕府や朝廷のために今を耐えているという心の支えがあった。

だが前久に見限られては、この先何のために生きていけばいいのか。どうしてもそう感じてしまうのだった。

五月十七日の早朝——。

信長は重い気分で目を覚ました。昨夜の宴席で酒を過ごしたせいか、頭の芯に鈍痛が残っている。

以前は酒が嫌いで早々に宴席を立つことが多かったが、近頃では酔う楽しみを覚えるようになった。

心にゆとりができたせいなのか。それとも忍び寄る老いが鋭敏すぎた神経を鈍くしているのか。

深く考えることもなく家康や前久との語らいに時を過ごしたが、体質ばかりは変わらないらしく、二日酔いで頭痛がする。

何やら不吉な夢にうなされ、目を覚ました後にも気が晴れなかったが、どんな夢だったかどうしても思い出せなかった。

これも近頃の変化である。

以前なら夢でさえ克明に覚えていた。ましてそれが不吉な夢とあらば、何が原因なのかを徹底して考え抜いた。

不吉な夢には必ず何らかの理由があると信じているからで、そうした用心によって危機を未然に防いだことが何度もある。

だが今朝の信長は深く考え抜く根気を失っていた。

（光秀には迷いがある）

そのことだけは昨夜の表情から読み取っていた。

律義で生真面目な男だけに、旧主である足利義昭の息の根を止めることにためらいがあろう。その迷いをふり切るにはどうすればよいか。

「お蘭」

宿直の蘭丸を呼んで光秀の様子をたずねた。

「昨日は鷹狩りの後に、近衛公の宿所をお訪ねになりました。狩野でのお礼に天目茶碗を持参し、夕餉の献立についてうかがいを立てられたそうでございます」

蘭丸は抜かりなく光秀の行動を調べ上げていた。

「あやつめ。よほど胆を冷やしたと見える」

いつもは沈着な光秀のうろたえぶりが、信長には小気味よかった。

危ういところを前久に救われたのだから、秘蔵の天目茶碗を献上しても惜しくはあるまい。

苦笑しながらそう思っただけで、献立のことは気にもとめなかった。

もし信長にいつもの鋭さがあったなら、前久が献立について相談を受けながら四鳥や鳴について不服を言い立てたことに不審を覚えたはずである。

その理由を考え抜き、秘かに巡らされている罠を察知することができただろう。

だがこの日の信長は狩野の雉子のように隙だらけで、光秀をどう使いこなすかということにしか頭が回らなかった。

（光秀には欲がなさ過ぎる）

初めて会った時から信長はそう感じていた。

足利幕府の奉公衆として政治の枢要をになってきたせいか、治政の手腕は家臣の中でも群を抜いている。

戦をやらせてもなかなかの達者で、越前金ヶ崎からの撤退戦では秀吉と共に殿軍を務めたほどだ。

性格も律義で曇りがなく、和漢の教養にも通じているが、人の上に立つ器ではなかった。

欲がないために、人の欲にも鈍感なのだ。

人は義に生きるべきだと信じ込んでいるせいか、目先の褒美よりも大義名分で人を

動かそうとする。

秀吉のように銭をばらまき、女を当てがい、見え透いた芝居を打って人の心を盗るような芸当は、薬にしたくともできはしない。

要するに育ちと家柄が良過ぎるのである。

土岐氏の一門に生まれ、幼い頃から古い道徳と教養を叩き込まれて育ったために、己れの欲を是とすることさえためらうのだ。

こんな男を使いこなすには、次々に重要な仕事を与え、己れをかえりみる隙もないほど働かせるにしくはない。

これまで信長は光秀をそのように扱ってきた。だから光秀に迷いがあるのなら、いっそう厳しく鞭を入れなければならぬという考えしか浮かばなかった。

腹を決めると、光秀を対面所に呼びつけた。

「出陣大儀。ついては申し渡すことがある」

信長はわざと突き放した物言いをして、蘭丸に朱印状を読み上げさせた。

「今度近江、丹波の所領を召し上げ、西国のうち二カ国を当て行なうものなり。ますます忠勤をぬきんずべし。よって執達件の如し」

光秀は平伏して命を受け、いつまでも面を上げようとはしなかった。

「日向守どの」

蘭丸が承諾の返答をうながした。

光秀は苦渋に満ちた顔を上げ、

「恐れながら、二カ国とはどこでございましょうか」

不満を隠そうともせずにたずねた。

「毛利平定を終えてから決めるとおおせでございます」

「国替えの期限は」

「それも同じでございます」

秀吉と光秀の軍勢六万、四国征伐軍三万が陸海両路から迫れば、毛利は日ならずして降伏する。

その後には毛利、長宗我部を先陣として九州を平定し、秀吉に筑前を、光秀に肥後と日向を与えて将来の南蛮進出に備えさせる。

それが信長の数年来の構想だった。

秀吉が筑前守に、光秀が日向守に叙されるように計らったのは、その時に備えて領国支配の大義名分をととのえようというねらいがあった。

「光秀、不服か」

「めっそうもございませぬ。ただ、丹波の経営が緒についたばかりゆえ、いましばらくのご猶予をいただきとう存じます」
「そちはいくつになった」
「五十五にあい成りました」
「まだ老け込む年ではあるまい。平穏の地にぬくぬくと居座ろうとしてはならぬ」
酷な命令であることは分っている。だがイスパニアやポルトガルに匹敵するような国を築くためには、光秀にもうひと働きしてもらわなければならなかった。
その夜の饗応役は信長が務めた。
重臣たちが驚愕したほど異例の出来事だが、これは光秀に配慮したものだった。
いかに急な出陣のためとはいえ、饗応役を途中で辞めさせては光秀の体面に関わる。だが信長自らが後任を務めるのであれば、誰も光秀に非があるなどと取り沙汰はしない。
厳しい役目を与えはしたが、このことを伝え聞けば光秀も意のあるところを分ってくれるはずだった。
恐縮したのは家康と梅雪である。
信長が目の前に座り、侍女のように酒をそそいだり肴を取り分けてくれるのだから、

落ち着かないことおびただしい。
それでも中座するわけにもいかず、緊張にこちこちとなりながらも五の膳まで饗応にあずかった。
夕餉の後、信長は家康を別室に呼んで余人を交えず語り合った。
「そちの鷹使いも、なかなかさまになってきたではないか」
「上様のご教示の賜物でございます」
「天下平定を終えた後には、三河あたりの鷹野に出てみたいものじゃ」
家康を呼んだのは、家康の嫡男と信忠の娘の縁組みについて返答を迫るためである。
だが自分からそのことを切り出そうとはしなかった。
「頼朝公の故事にちなみ、富士の裾野で催してはいかがでございましょうか」
「面白い。天下狩りとでも銘打てばよき見せ物となろう」
「世継ぎは於義丸と定めました。その折に披露させていただければ、これに優る幸せはございませぬ」
「では、よいのじゃな」
「ご一門に加えていただければ、当家末代までの誉れにございます」
「そうか。ならば明日にも信忠に知らせてやらねばならぬ」

信長は満足をそんな言葉で表わした。

「幕府は安土にお開きになりますか」

「大坂じゃ。海に開けたところでなければ、イスパニアには太刀打ちできぬ」

「では、新しい城を」

「本願寺の跡に築く。堺の港に入る南蛮人どもにも見えるように、安土城の何倍も大きな城を築かねばならぬ」

大坂を拠点として瀬戸内海の航路を押さえ、巨大な船団を作り上げて海外へ進出する。長年の夢がようやく手の届くところまで近づいていた。

「この国でもっとも度しがたいのは朝廷じゃ」

将軍宣下のことが頭にあるせいか、信長は思わず本音を口にした。

「天下統一のためには朝廷の権威を利用するほかはなかったが、帝は魔物じゃ。利用しているつもりが、いつの間にか不可思議な呪力でがんじがらめにされてしまう」

「その呪力を、いかにして解かれますか」

「分らぬ。余が神であると言ってはみたが、誰も帝のようにあがめはするまい。幕府を開いた後、二重三重の法度を作って封じ込める以外に策はないかも知れぬ」

この構想を、家康は後に『禁中並公家諸法度』という形で実現する。

朝廷を封じ込めることが、武家政権の安定のためには絶対に必要だったからである。

同じ頃――。

近衛前久は自邸に細川藤孝を招いて茶をふるまっていた。

三畳の狭い茶室には、低い位置に和紙に包んだ灯りがある。薄明るい光に照らされて、二人の影が壁をおおい隠すほどに大きく映っていた。

赤さび色の茶碗に点てた茶を、前久はさりげなく差し出した。

「これは宗易どのですか」

藤孝が器を両手で拝してたずねた。

「いいや。真似て作ってみただけや」

近衛家の所領には、良質の赤土を産する村がある。

前久はそこに窯を築き、好みの茶碗を焼いていた。

この茶碗は利休好みにあつらえたものだが、陶工が焼いた本物には及ばない。それでも藤孝ほどの通人が一瞬迷ったほどだから、まあまあのできと言えた。

前久は無類の利休好きで、光秀が差し出した天目茶碗も喉から手が出るほどに欲しかった。

だが光秀を追い詰めるために、わざと突き放した態度を取ったのである。
実は狩野に雉子の大群がいることにも気付いていたが、光秀が信長から叱責されるように仕向けようとわざと教えなかった。
ところが飛び去る雉子を見ているうちに、鷹狩り好きの血が騒いで大鷹を放たずにはいられなくなったのである。
「贋物はいかん。茶碗も人も同じだ」
己れの甘さを、前久は苦く笑った。
武力を持たぬ公家にとって、策略だけが頼みの綱である。
帝の権威を巧みに用いて武家や寺社や下々の民をあやつり、思うところに導かなければ朝家の安泰は図れない。
そのためには力のある者に取り入って利用し尽くし、邪魔者を罠に落として息の根を止めることもあるが、それは公家にとっての戦であって何ら後ろ暗いところはない。
責められるべきは、戦の最中に鷹狩りなどに気を取られた未熟さだった。
「そっちはどうだ。根回しは進んでおろうな」
「足利家ゆかりの者に廻状を回し、ひそかに身方をつのっております」
「人数は」

「これをご覧下されませ」
藤孝が一通の書状を差し出した。
打倒信長と足利幕府再興を誓う連判状だった。
血判署名したのは細川、斯波、畠山の三管領家、山名、一色、京極、赤松の四職家、それに信長によって所領を奪われた大名たちだが、いずれも没落して不遇をかこっているので、十数人が寄り集まってもさしたる勢力にもならなかった。
めぼしいのは武田元明、朽木元綱、京極高次くらいである。
「枯木も山のにぎわいというが、これではさしたる軍勢にもなるまい」
「かれこれかき集めて、五千がやっとでございましょう」
「そちの軍勢を合わせれば、一万にはなるな」
信長がどれほどの軍勢をひきいて上洛するかは分らないが、一万の軍勢で奇襲をかければ討ち取ることも可能である。
だがその後のことを考えれば、これだけの身方では心もとなかった。
「面目なきことながら、当家の軍勢は二千ばかりしか動かせませぬ」
「丹後一国を領する身で、二千ということはあるまい」
「倅忠興は信長公に心酔しております。計略を事前に告げたなら、それがしを斬り

捨てて安土に注進しかねませぬ」

だから忠興を高松城に出陣させた後に、残存の軍勢をひきいて駆けつけるほかはない。藤孝は苦渋に満ちた表情で打ち明けた。

「そちほどの切れ者でも、我が子の扱いはままならぬか」

「申し訳ございませぬ」

「いずこも同じじゃ。できぬものは致し方あるまいが、そうなると是が非でも日向守に身方してもらわねばならぬな」

信長と光秀を離間させようとしたのはそのためだが、さしたる効果があったとも思えなかった。

「それがしも何度か水を向けてみましたが、用心堅固で応じようとはなされませぬ」

「信長からあれだけの恩を受けた身じゃ。年をとれば用心深くもなるのであろう」

「義昭公から御教書を出していただいたらいかがでしょうか」

「わしも日向守も、義昭などとうに見限っておる。動かせるとすれば、勅命のほかはあるまい」

たとえ光秀が挙兵に同意しなかったとしても、勅命とあらば信長に注進するようなことはしない。

前久にはそう断言するだけの確信があったが、信長に恩義を感じておられる正親町天皇を動かすのは至難の業だった。

（変の前にご譲位を行なえば……）

そんな考えが、夏の雨雲のようにぽかりと浮かんだ。

誠仁親王が帝になられたなら、勅命を出していただくこともできる。

ご譲位の後なら信長も喜んで将軍宣下を受けるのだから、洛中におびき出すことも可能である。

小さな雲はみるみる入道雲となってそびえ立ち、前久の頭をおおい尽くした。

「近衛公、いかがなされましたか」

「何でもない。薩摩から珍らしい酒が届いたが飲んでみるか」

ぶどう酒とビードロのグラスを出して藤孝に勧めた。

島津義久から贈られた品である。透明なグラスにそそいだぶどう酒は、灯りに照らされて血の色に輝いていた。

「これがワインというものでございますか」

藤孝はひと口すすって顔をしかめた。

夏も間近という時期に温度の管理もしていないのだから、旨かろうはずがないので

ある。

「宣教師どもは、この酒を神の子キリストの血と見立てるそうじゃ。心して飲め」

「そういえば、血と同じ鉄さびのような味がいたしまするな」

「もし光秀が同意したなら、与力の大名たちも従うと思うか」

前久はしばらく間をおいて話を戻した。

光秀と共に出陣を命じられた池田恒興、高山右近、中川清秀らがそろって身方となるのなら、総兵力は四万ちかくにふくれ上がる。

この勢力で畿内を押さえ、毛利や長宗我部、上杉、紀州の惣国一揆に織田軍の討伐を命じたなら、勝負は一気に決するはずだった。

「明智の与力とはいえ、倅のように信長公に心酔している者もおりまする。身方となるのは大和の筒井くらいでございましょう」

「住吉には四国征伐軍三万が出陣の仕度をととのえて下知を待っておる。池田恒興や高山右近がこれと一手になって攻め寄せて来たなら、光秀とそちの勢力で支えることができるか」

「十日や二十日は何とかなりましょうが、それ以上は無理でございます」

「ならばもう一人、身方をつのらねばならぬな」

「心当たりがございますか」

「誰だと思う」

「さて。住吉の軍勢に備えられる者といえば、丹羽長秀どのか羽柴秀吉どのしか見当たりませぬが」

「その秀吉じゃ。あやつなら餌次第では釣れるやも知れぬ」

秀吉は毛利の動きに陰謀の匂いをかぎ取りながらも、信長の出陣を乞うたのである。

それをどう受け止めるべきか、前久にも判断がつきかねていた。

「なるほど。それは引きがあったと見るべきでございましょう」

藤孝は足利義輝の管領と目されていた逸材である。信長にも重用されているので、織田家の重臣たちの動向にも通じていた。

「羽柴どのは日の出の勢いではございますが、その勢いゆえに近頃では信長公にうとまれております。中国平定を終えたなら筑前を与えられ、南蛮進出の先兵とされましょう。そのことに不満を持っておられるとすれば、千載一遇の好機とばかりに飛びついてこられるやも知れませぬ。ただ……」

「何じゃ。遠慮なく申すがよい」

「あれは表裏多きお方でございます。頭が切れ過ぎるゆえに諸刃の剣ともなりましょ

う」

たとえ同心を誓ったとしても、不利とみれば信長に注進しかねないというのである。

そんな相手に誘いをかけるには、よほど慎重に事を運ばなければならなかった。

「餌は摂津、播磨、美作の三カ国もあれば充分であろうが、難しいのはどう投げ込むかじゃ。喰いつきやすいところにそれとなく針を落とさねば、せっかくの魚が逃げてしまう」

「逃げるどころか、こちらが水の中に引きずり込まれてしまいまする」

「光秀が勅命を奉じて大事をなすゆえ、その心得あるようにと知らせるのはどうじゃ」

秀吉がこちらの動きを察しているのなら、それだけで意味が分るはずである。

万一見込みちがいだったとしても、勅命とは中国征伐のことであると言い抜けられるので陰謀の証拠とはなるまい。

前久は策略家の血が騒ぐのを抑えかねて、我知らず早口になっていた。

「よき分別と存じまする。ただ、近衛公に累が及ぶようなことがあっては朝家の禍根となりましょう。羽柴どのへはそれがしの名で密書を送りまする」

謀議がまとまり茶室を出ようとしていると、にじり口の戸を軽く叩く者があった。

光秀の様子をさぐるために坂本につかわしていた風の甚助である。

「日向守どのは五月二十六日に坂本城を発ち、丹波へと向かわれます」

「光秀の様子はどうじゃ」

「何やら期することがあられるのか、西教寺に長々と参籠しておられました」

西教寺は天台真盛宗の総本山で、坂本城から半里ほど離れている。

信長が比叡山を攻めた時に焼き討ちにあったが、坂本城主となった光秀はいち早く寺を再興し、明智家の菩提寺とした。

天正四年に他界した光秀の妻煕子の墓もこの寺にある。

光秀が参籠して何を祈願しているのか知る術もないが、悩みや迷いが生じたのだとすれば離間策が効を奏したのかも知れなかった。

前久は甚助をその場で待たせ、藤孝に密書をしたためるように命じた。

「善は急げという。この男は信長に恨みを持つ伊賀者でな。かような使いにはうってつけじゃ」

密書を持った甚助は、休む間もなく高松城を包囲中の秀吉の陣所へ向かった。

休む間がないのは前久も同じである。

翌朝早々に内裏を訪ね、上臈の局に対面を申し入れた。

「お待たせいたしました。久方ぶりのご参内でございますね」
侍女数人を従えて現われた局が、ちくりと皮肉のとげを刺した。
昨年三月にご譲位の問題が起こった時、上臈の局は帝のご健康がすぐれないのですみやかにご退位の道を開いてくれるよう涙ながらに訴えた。
前久は善処すると約束しながら、翌日行なわれた小御所会議では金神ゆえに延引すると決した。
五の宮を即位させて太上天皇になろうという信長の計略を阻止するためだが、面目をつぶされた上臈の局はそれ以来前久を敵視するようになっていた。
「本日はお局さまのお力を拝借するためにまいりました」
「あら。珍らしい物言いをなされますこと」
「昨年延引と決したご譲位について、そろそろ計らわなければなりませぬ。ついてはまことに僭越ながら、身共に扱いを一任していただきとう存じます」
「前にそのようにお願い申し上げましたのに、ずいぶんな仕打ちをなされたではありませんか」
「あの時にはやむをえない事情があり、お心に沿うことができなかったのです。決して他意あってのことではありません」

「今は事情が変わりましたか」
「さよう。信長は天下統一を目前にして、ますます態度を硬化させております」
「そのことは承知しております」
先日信長に対面を拒否されただけに、上臈の局も危機感をつのらせていた。
「それゆえこたびは何としてでもご譲位を実現しなければなりません。しかし下御所の宮さまの説得や信長との交渉など難しい問題も山積しておりますので、期日をいつにするかは身共に任せていただきたいのでございます」
「分りました。お上にそのように奏上いたしましょう」
「もしご叡慮にかなうならば、その旨をしたためた奉書をいただきとう存じます」
天皇側近の女官が記した女房奉書は、勅命と同じ効力を持つ。光秀をくどき落とすためには、何としてでも手に入れておかなければならなかった。
ところが事はおいそれとは運ばなかった。
前久に不信感を持つ上臈の局は、各方面に使者をつかわして状況を確かめているらしく、二日たっても三日たっても何の音沙汰もなかった。
光秀の発向は目前に迫っている。
焦った前久は上臈の局の実家である花山院家に圧力をかける一方、二条御所を訪ね

て宮さまに謀略のあらましを告げた。

「ご譲位の後に将軍宣下を行なうと告げて信長をおびき出し、明智日向守に誅させます。つきましては日向守に挙兵を命じる令旨を下していただきとう存じます」

歯に衣着せずに真っ向から迫った。

「日向守は同心しておるのか」

「いえ。宮さまのご令旨をもって説き伏せまする」

「あの者は信長第一の家来じゃ。たやすく同心するとは思えぬ」

「信長が毛利平定を終えてからでは、もはや取り返しがつきません。もしあの者を許せぬと思し召しなら、身共の計らいに命運を賭していただきたい」

信長と勧修寺晴子との噂がそれとなく広がるように、前久は裏で手を回している。許さぬと思し召しならという言葉には、そんな意味も含まれていた。

乞われるまま三職推任の令旨をお下しになった時から、宮さまは前久の手の内に握られておられる。

その上でこのように強硬に迫られては、お断わりになることはとてもおできになるなかった。

上﨟の局から女房奉書が届いたのは五月二十五日のことである。

翌日、前久は宮さまの令旨と奉書を持って吉田神社を訪ね、光秀との対面にのぞんだ。

吉田神社は春日大社、大原野神社と並ぶ藤原家氏神三社のひとつで、前久にとっては我が社も同じである。

案内も待たずに客殿に上がり、光秀の到着を待った。

吉田兼和を粟田口につかわして待ち伏せさせているので、ほどなくやって来るはずだった。

庭の池には蓮が白い花をつけていた。波なりにたゆたう葉の間から首を持ち上げ、清らかな香りを放っている。

（はちす葉の濁りにしまぬ心もて）

そんな歌がふいに浮かんだが、後の句がどうしても思い出せなかった。

やがて光秀が兼和にともなわれて渡殿を渡って来た。

来たくはないが誘いを断わる決心もつかなかったらしく、思い詰めた表情をして伏目がちに歩いていた。

「出陣中に呼びつけて悪かったな」

前久は形だけのわびを言った。

「いえ。戦勝祈願をしていただきたいと思っておりましたので」
「ならば好都合だが、誰に対する戦勝かな」
「むろん毛利でございます」
「毛利は義昭を奉じておる。毛利を討つということは、足利幕府の息の根を止めるということじゃ。そのようなことを、当家の氏神がお聞き届けになると思うか」
「……」
「そちが信長に仕えたのは、義昭を将軍として幕府を守るためだったはずだ。義昭はあのような痴れ者ゆえ浪々の身となったが、私や義輝と誓い合ったことは忘れてはおるまい」
永禄八年弥生三月、義輝は二条御所に前久や藤孝、光秀を招いて花見の宴を催した。この席で朝廷と幕府を復興して天下をあるべき姿に戻そうと誓い合ったが、それから百日もたたぬうちに義輝は松永弾正らの謀叛によって討ち取られたのである。
「一日たりとも、忘れたことはございませぬ」
「そう信じたからこそ、わしもできる限りの手助けをしてきた。畿内の管領となったそちがとどこおりなく働けるように、朝廷や寺社への根回しもおこたらなかった。織田家で重きを成すことができたのは、そうした手助けがあったからではないか」

「おおせの通りにございます」
「しかるに信長は朝廷や幕府の秩序を打ち壊し、己れの意のままになる天下を築こうとしておる。それが分っていながら毛利征伐に出るのは、わしや義輝への裏切りではないのか」
光秀はぐうの音も出なかった。
幕府と信長のどちらを取るかと迫られれば、長年奉公衆として幕府に仕えていた光秀としては前者と答えざるをえない。
それをためらうのは信長の力量への信頼と織田軍団の強さに対する怖れ、それに今の立場を失いたくないという思いがあるからだった。
「では、備中への出陣を取りやめよとおおせられますか」
長い沈黙の後で、うめくようにつぶやいた。
「それでは手ぬるい。明智の軍勢で信長を滅ぼし、義昭を都に呼び戻して幕府を再興せよ」
前久は女房奉書と宮さまの令旨を示し、信長を洛中におびき出す計略を打ち明けた。
「ご譲位の儀を終えた後に将軍に任ずると知らせれば、信長は取るものも取りあえず上洛する。そちの軍勢をもってすれば、それを討ち果たすことなど造作もあるまい」

「しかし、そのような……」

光秀は蒼白になって目を宙に泳がせた。

「この豊葦原の中つ国は、帝を中心とした神道の国じゃ。帝のご信任なくば政は行なえぬ。信長のように力で押さえ込もうとしても、次々に叛乱を招くばかりじゃ。比叡山の焼き討ちや一向衆徒の虐殺のようなむごたらしい惨禍が、果てしなくつづくことになろう」

「……」

「たとえその者たちを殺し尽くして国が治まったとしても、そちにはもはや活躍の場はあるまい。林通勝や佐久間信盛と同様に、役立たずとののしられて放逐されるのが関の山じゃ」

「何ゆえでございましょうか」

さすがにむっとしたのか、光秀が色をなして問い返した。

「そちが重んじられたのは、わしの後ろ楯があればこそであろう。だがこの企てに加わらねば、その糸も今日限り切れる。それに信長は、幕府を開いた後には家康を重んじるつもりじゃ。その証拠に、家康の嫡男と信忠の娘を妻わせたではないか」

幕府を開いた後、信長は信忠に将軍職をゆずり、信雄、信孝、家康を三管領として

補佐させようとしている。

光秀や秀吉は政権の中枢からはずされ、九州にあって海外進出の先兵とされるはずだった。

「だが、ここで起てば後漢の光武帝と同じじゃ。そちは足利幕府中興の祖として末代まであがめられ、土岐家は三管領家のひとつとなって末永く栄えるであろう」

前久はここを先途と詰め寄ったが、光秀は強情に黙り込んだまま首を縦にふろうとしなかった。

「そうか。どうしても応じられぬのなら、この場でわしを斬るがよい」

「……」

「この企てを知ったからには、そうしなければそちの身が守れぬ。遠慮なく斬っていけ」

「決して他言などいたしませぬ。それゆえ近衛公も……」

「わしはもはや思いとどまりはせぬ。必要とあらば、そちに話したことを信長に告げる」

「しかし、そのような大事……。とてもそれがし一人の力では」

「日向守どの。一人ではござらぬよ」

隣室に控えていた藤孝が、すっとふすまを開けた。
話がここに落ちることを読んで、入念に仕組んでいたのである。
「これをご覧いただきたい」
藤孝は手つきも鮮やかに連判状を示した。
「幕府重恩の面々は、皆この計略に加わっておりまする。勅命を奉じて信長を討ち、義昭公を都にお迎えすれば、池田や中川とてこぞって身方に参じましょう」
「光秀よ。毛利を討ち義昭を滅ぼせば、そちは旧主を弑した逆臣となる。信長を討って幕府を救うことこそ、武士たる者の取る道ではないのか」
前久も藤孝も、光秀にとっては主筋に当たる。計略の才は当代随一と言っても過言ではない。
この二人に大手からめ手から情理を尽くして攻め立てられては、いかに節操堅固な光秀とてこばみ通すことはできなかった。

第十五章　ときは今

床の間に藤原定家の書をかけ、水盤には色鮮やかなあやめの花を生けた。
教材とする『古今和歌集』も人数分そろえ、書見台も用意している。後は息休めに出す茶菓の仕度をととのえれば万全だった。
「房子、使いの者はまだ戻りませんか」
次の間の房子に声をかけたが返事がない。勧修寺晴子は花鋏を片づけてからふすまを開けた。
茶具はきちんとそろえてあるが、房子はいない。どこへ行ったのかと廊下に出てみると、奥御殿の部屋の前で立ち話をしていた。
相手はどうやら勾当内侍となる高倉京子の侍女らしい。いかにも世なれた感じの臈たけた侍女は、晴子に軽く会釈をして逃げるように立ち去った。
「どうしたのです。何かありましたか」

「いいえ。下御所の仕来りについて少々たずねられたばかりです」
「使いの者はどうしました。まだ戻りませんか」
「まだでございます。きっとお申し付けの干菓子がないのでございましょう」
「間もなく講読を始める時刻です。早くしないと間に合いませんよ」
晴子は気負って急き立てたが、房子はあまり乗り気ではないらしく、
「その時には、買い置きの品がございますので」
気の抜けた返事をして次の間に引き返した。
新しく二条御所に仕えるようになった女官たちに『古今和歌集』の手ほどきをする会は、一月前に晴子の発案で始まった。
年若いこととはいえ、彼女たちにはあまりに教養がなさ過ぎる。これでは後宮の体面や朝廷の威信にも関わりかねないので、五日に一度集まって敷島の道から学ぶことにした。
第一回目の講読会にはすべての女官が参加し、晴子の博識と感性の豊かさに舌を巻いたものだが、第二回目から少しずつ参加者が少なくなっていった。
晴子と信長との醜聞がどこからともなくもれ伝わり、悪性の風邪のように後宮に蔓延していったからである。

それにつれて女官や侍女たちの晴子に対する態度はよそよそしくなり、やがてはこの世にいない者のように冷たく無視するようになった。
しかもこれを好機とばかりに、若草の君に仕えている丹波の局が巻き返しに出た。
老獪な彼女は女官たちに周到な根回しをして、晴子が七草粥の日に決めた定めをくつがえしにかかったのである。
半月前――。
断わりもなく訪ねて来た丹波の局は、
「皆さまがご教示いただきたいことがあるとおおせでございます。広間にお運び下されませ」
底意を隠した慇懃な態度で晴子を招いた。
広間には内侍司に出仕するすべての女官が顔をそろえていた。
上臈の局となる花山院満子、大典侍となる万里小路厚子、目々典侍となる飛鳥井雅子ら、後宮に入るために育て上げられたようなうら若い娘たちが、それぞれの侍女にかしずかれて神妙に座していた。
席は実家の家格の順で、この二月に皇子を産んだ若草の君中山康子も中ほどにかしこまっている。

晴子が与えられたのも、清華家の出である花山院満子より下の座だった。

（何を大仰な）

ただならぬ気配を感じたものの、晴子は少しもたじろがなかった。

この者たちが束になってかかってこようと、自分の立場を揺るがすことなどできはしない。そんな自信があったからだが、上座が空いたままになっていることが気にかかった。

（宮さまは内裏に行かれたはずや。いったいどなたがお出ましになるんやろ）

その疑問はすぐに解けた。晴子が広間に入るのを待ちかねたように、主上にお仕えする上臈の局が入って来たのである。

彼女も花山院家の出で、満子の伯母に当たる。家柄といい経歴といい、晴子がとうてい及ばない相手だった。

晴子の醜聞について、上臈の局はひと言も触れなかった。

満子が懐妊したことを告げ、宮さまのお子はすべて晴子の養子にするという前の取り決めを撤回するように迫ったばかりである。

「後宮の悪弊を絶ちたいというお考えには賛成ですが、何事も無理はいけません。子供というものは、実の母親に育てられるのが一番幸せなのですよ」

上臈の局のやさしげな言葉の裏には、そちらが無理を通すのならこちらにも考えがあるという意味が込められている。

時期が時期だけに、この恫喝にあっては晴子も譲歩せざるをえなかった。

それ以来、晴子の立場はいっそう悪くなり、講読会に顔を出す者は日に日に少なくなっている。

それでもやめようとしないのは、ここで毅然たる態度を取りつづけなければ、寄ってたかって苛め抜かれることが分っているからだった。

巳の刻を告げる鐘が鳴った。

一つ、また一つ。

諸行無常の響きありといわれた祇園精舎の鐘の音もかくやとばかりに、陰にこもった胸にしみ入る響きを残して消えていく。

講読会は巳の刻からと触れているが、鐘が鳴り終えても誰一人姿を現わさなかった。

「房子、皆さまの部屋を訪ねて、もう一度ご案内申し上げなさい」

「そのようなことをしても無駄でございますよ」

「無駄でも構いません。お出でにならないのなら、その理由をきちんとうかがってきなさい」

「理由など、とうにお分りのはずではありませんか」
「ならばそう言って断わればいいでしょう。それを何ですか。裏に回り陰に隠れてこそこそと噂話ばかりして」
晴子とて身から出たさびだということは分っている。富士遊覧の旅に出る時から、こうした立場に立たされるとは予想していた。
だが現にその渦中に投げ込まれてみると、後宮の女たちの陰湿で悪意に満ちた反応は耐えがたかった。
「陰に隠れてばかりではありませんよ。さっき高倉さまのお付きの方が、悪い噂がおさまるまでは出席を見合わせるとおおせられましたから」
「さっき立ち話をしていた時ですか」
「ええ。飛鳥井さまからも同じような申し入れがございました」
「ならばどうしてわたくしに伝えなかったのです」
「事前に申し上げたなら、姫さまはお二人のところへ談判にまいられたでしょう。そんなことをすれば、恥の上塗りになると思ったのでございます」
高倉京子と飛鳥井雅子は晴子が見込んでいる才媛で、前回の講読会には顔を出していた。

だが醜聞が広がる一方なので、ついに見切りをつけたらしい。
「だからあの時、あれほどお引き止め申し上げたのでございますよ。それを少しも聞く耳をお持ちにならないから」
「わたくしは後悔などしておりません。朝家を守るためには、あのようにするほかはなかったのです」
結局講読会は中止せざるをえなくなった。
参加者がいなくなっての立ち消えという不名誉な事態で、後宮での立場がいっそう悪化することはさけられない。
だが奇妙なことに、晴子は少しもふさぎ込んではいなかった。
それどころか、窮地に追い込まれるほど身の内から清々しい活力がわき上がってくるのを感じ、誰に何と言われようと、思う通りに突き進んでみようとひそかに覚悟を定めていた。
晴子はこれまで公家社会や後宮の仕来りになじめないものを感じながらも、まわりから求められるままに生きてきた。
そう生きることが自分の務めだと信じていたし、なぜなじめないのかも分らなかったので、漠然たる不満や手応えのなさを感じながらも、この暮らしを変えようとは思

わなかった。

だがこうして石もて追われる身になって初めて、公家社会や後宮の本質がはっきりと見えてきた。まわりの女たちが石を投げてまで守ろうとしているものが手に取るように分った。

哀しいことに、それは帝や朝家を守ることではない。公家社会で序列化された実家の体面と、後宮における己れの立場にすぎないのだ。

人としての自由もなく、独自の生き方を貫くことも許されない。己れを捨て仕来りに合わせることが求められるばかりである。

こんな生き方が、子供の頃から自分らしく生きたいと渇望していた晴子に似合うはずがなかった。

その落差が耐えがたいと思い始めた頃に信長と出会い、傷だらけになりながらもこの国を変えていこうとする姿に打たれた。

暗く閉ざされた世界に、一条の光が射したような歓びを覚えた。

だから飛び立つ決意をしたのである。どこまでできるかは分らないが、光の射す方に向かって力の限り羽ばたいてみよう。

そんな殉教者のような覚悟が、晴子をこれほど潑剌とさせているにちがいなかった。

「姫さま。近衛相国さまがお出でになりました」

房子が告げた。

相国とは太政大臣の唐名である。

「相国ではない。もとの太閤になったのでな」

前久がにこやかに愛想をふりまきながら入って来た。

面長の美しくととのった顔に、烏帽子と水干がよく似合っている。

身のこなしも優雅で、歩を進めるごとに馥郁たる香りがただよってくる。

（このお方に誘われたら、どんな女もなびかずにはいられまい）

そう思えるほどだが、当人にはまったくその気がないのか浮いた噂など一つもない。

そのことが後宮での前久の人気をいっそう高くしていた。

「太閤になったとおおせられましたが、職を辞されたのでございましょうか」

晴子は挨拶もそこそこにたずねた。

「辞めました。年寄りがいつまでも職にしがみついていては、後進の道をふさぐことになりますから」

「まあ、まだ充分にお若いではありませんか」

「いやいや。知命の年も間近でございますから、そろそろ出家遁世しようと考えてお

りまする」

前久が職を辞したのは、万一企てに失敗した時に朝廷に迷惑が及ばないようにするためだが、晴子にはそこまで察することはできなかった。

「それならわたくしもお供をいたしましょうか」

「ご冗談を。晴子さまこそまだ充分にお若いではありませんか」

「後宮でのわたくしの役目は終わりました。仏門に入って心静かに余生を過ごすのが似合いの年かも知れませぬ」

「それは困ります。今日おうかがいしたのも、お聞き届けいただきたい事があってのことなのですから」

「何でしょう」

「六月一日にご譲位の儀を執り行なうことになりました。宮さまは主上となられ、信長への将軍宣下を行なわれます。ついては至急上洛するよう安土に伝えていただきたいのでございます」

「ずいぶん急なお話ですね」

ご譲位が先か将軍宣下が先かについては、公武の間で激しいつばぜり合いをくり返してきた。

五の宮の擁立をねらう信長は誠仁親王が即位した後でなければ将軍宣下を受けないと言い張り、これを阻止したい朝廷は正親町天皇のご在位中に信長を任官させようとご譲位の要求をこばみつづけてきた。

それを今になってなぜ急に折れたのか……。

「信長は武田氏を滅ぼして東国を支配下におさめました。中国の毛利も四国の長宗我部も、日ならずして織田の軍門に下ることになりましょう。そうなってから要求に屈するよりは、中国征伐前に将軍に任じた方が得策だという意見が大勢を占めたのでございます」

「それは宮さまもご承知ですか」

「むろんご承知です。不本意ではございましょうが、事ここに至ればやむなしとのご決断をいただきました。この先は信長に僭上の振る舞いなきよう、我々の力で御していくほかはありますまい。そのためにも晴子さまにご尽力いただきたいのでございます」

それは五の宮の擁立を諦めさせるという意味なのか、それとも性急に事を運ばせないということなのか、晴子はめまぐるしく考えを巡らして前久の胸の内をさぐろうとした。

「いかがでしょう。使者として安土に下っていただけましょうか」
「分りました。そのかわり、いつぞやお願いしたことだけはお忘れなきように」
「忘れてなどおりませぬ。やがて世の中が落ち着いたなら、この日のことを懐かしく思い出す時も必ず巡ってまいりましょう」
六月一日まではあと四日しかない。晴子はあわただしく仕度をととのえ、翌朝早く安土へ向かった。
（なんで急に、こないなことになったんやろ）
安土に向かう輿の中で、晴子はそのことばかりを考えていた。
ご譲位の要求に応じた後に将軍宣下を行なったなら、信長は数年のうちに将軍職を信忠にゆずり、宮さまにも五の宮に皇位をゆずるように迫るだろう。
これを防ぐ手立ては、もはや朝廷にはない。
そんな屈辱的な立場に立たされることを、誇り高い宮さまが本当にお認めになったのだろうか。それとも何か思いもよらぬ秘策を巡らしておられるのか。
冷静に思い巡らしてみようとするが、胸の内には何やら浮き立つものがある。
五の宮が帝となったなら、晴子は国母として後宮を意のままにすることができるし、太上天皇となる信長の協力を得て朝儀を復することも悪弊を正すこともできる。

そう考えただけで心地よさに陶然とするほどだが、この道には背徳の匂いがつきまとっていた。
（あかん。人はこうやって身を滅ぼすんや）
自制しようとしてみるものの、いったん動き始めた気持の流れを止めるのは容易ではなかった。
晴子が下向することは、京都所司代からの早馬で知らせてある。信長もただならぬ使いと察したのか、安土城に着くとすぐに本丸御殿で対面した。
「挨拶は無用。用件を手短かに述べよ」
弓を射ていたのか、弓手に射籠手をつけたままだった。
「六月一日に内裏でご譲位の儀が執り行なわれます。翌日には将軍宣下を行ないたいとのおおせゆえ、至急ご上洛下されませ」
「そは誰の計らいじゃ」
「近衛太閤さまでございます」
「何ゆえ急に折れた」
「中国征伐の前に将軍となられれば、足利義昭公を奉じている毛利家の大義名分は失われます。信長さまの天下統一に資することで朝廷の意のあるところを示し、公武の

関係を円満に保ちたいとのお考えにございます」
「さようか。近衛も聡い奴よな」
「ご返答をお聞かせ下されませ」
「ならば月末に上洛する。宮さまのご即位を祝って盛大な茶会を催すのも悪くはあるまい」
「五月二十九日でございますね」
「そうじゃ」
「承知いたしました。急ぎ都に立ち戻り、その旨をお伝え申し上げまする」
「せっかく来たのだ。ゆるりとしていくがよい」
そう勧められたが晴子は固辞した。五の宮が即位するのなら、今後は厳重に身を慎しまなければならないと思った。

五月二十七日の明け方、明智光秀は夢にうなされていた。
あたりは深い霧に閉ざされている。乳色の闇が色濃く立ちこめ、足元さえ見えない中を、光秀はいずこへともなくさまよい歩いていた。
いったいここはどこなのか。どこへ向かえばこの苦しみはいやされるのか。

何もかも見失ったまま、胸の奥底からわき上がる哀しみに急き立てられて歩きつづけた。
背中にはずしりと重い荷物を背負い、足は棒のようである。我慢の限界はとうに超えているのに、立ち止まることも座り込むことも許されなかった。
（ああ、主よ。お許し下さい）
光秀は虚空に向かって声にならない叫びを上げた。
主とは信長のことか帝のことか、それとも娘玉子が信仰しているキリシタンの神のことか、もはや自分でも分らなかった。
と、その叫びに応えるように、どこからか鉦の音が聞こえてきた。澄みきった軽やかな音がひとつ、そしてまたひとつ。霧を貫いて響いてくる。
光秀はその音に導かれて歩きつづけ、とある寺にたどり着いた。
霧の中にそびえる山門は、固く閉ざされたままである。それでも鉦の音だけは門扉の向こうから聞こえてくる。
光秀は門を押し開こうとして両手が血まみれになっていることに気付いた。
たった今斬り殺してきた僧たちの返り血で、手も顔も体も真っ赤に染まっている。
その手で何度押しても、門はびくともしなかった。

（駄目だ。ここに立ち寄る資格はない）

絶望に腰がくだけそうになった時、門扉が音もなく開いた。

なだらかな登り坂となった参道の両側には、桜並木が満開の花をつけている。霧はいつの間にか晴れて、春の香りがただよっていた。

（そうか。ここは）

坂本の西教寺。比叡山延暦寺の焼き討ちの後に光秀が再興した天台真盛宗の総本山である。鉦の音の間にかすかに聞こえてくるのは、ひたすら御仏に祈る不断念仏の声だった。

なじみ深いその声に引き寄せられて足を早め、急な石段を登って本堂を訪ねた。

阿弥陀如来像の前で勤行に励んでいるのは、尼僧の姿をした妻の熙子だった。

声をかけても熙子はふり返らない。十回念仏をとなえるごとに手元の鉦を一度叩く、天台真盛宗独特の行に没頭していた。

その音が時には胸にしみ入るような、時には胸を突き刺すような調子で迫ってくる。光秀は懐かしい妻の姿をもっとよく見ようと、本堂の廻り縁に上がってみた。

賢夫人の誉れ高かった熙子である。光り輝くばかりの容色は、尼僧になっても少しも劣えてはいなかった。

光秀はふと遠い思い出にさそわれた。

まだ将軍義輝に奉公衆として見出される前、あり余る野心と才能を持て余しながら不遇をかこっていた頃のことだ。

ある時、里村紹巴の連歌会に招かれた。紹巴が頭角を現わし始めた頃で、主催する会には公家や武家の名士が集まっていた。

光秀にとっては出世の糸口をつかむまたとない機会だが、そうした会に顔を出すためには少なからぬ束脩が必要である。

その都合が光秀にはどうしてもつかなかった。

零落したとはいえ、名門土岐氏の御曹司である。誰にも借銭の相談などできないまま出席を断念しようとした時、娶ったばかりの熙子が懐紙に包んだ金をそっと差し出した。

黒髪をかもじ屋に売って工面したという。

熙子は童髪のようになった頭にしきりに手をやってきまり悪がったが、その配慮のおかげで連歌の会に出席し、近衛家や細川家への出入りを許されるようになった。

あれから三十年、光秀は再び運命の岐路に立たされていた。

（私はこの先どのように生きればいいのだろうか）

万感の思いを込めた問いかけは、どうしたわけか声にならない。だが心は届いたらしく、熙子が鉦を叩く手を止めてふり返った。

（人は誰も迷いの中にいます。ご自分の信じる道をお歩きになるしかありますまい）

（もはや何を信じればいいのかさえ分らない。多くの僧侶を手にかけたあの日から、私は人の道を見失ったのだよ）

（ならば歌をお詠みになったらいかがですか）

（歌……どうして歌なのだ）

そうたずねたが返答はなく、熙子の姿はいつの間にかかき消えていた――。

「熙子」

光秀は夢の中で呼びかけ、声を上げた拍子に目を覚ました。

夜はまだ明けきっていないのか、あたりは静まり返っている。光秀は夜具の上に座り込み、しばらく物思いに沈んでいた。

信長の命に従って備中へ向かうべきか、前久の計略に加担して信長を討つべきなのか。

丹波の亀山城に着いてからも覚悟が定まらない。こんな夢にうなされるのも、心が千々に乱れているからだった。

自分を見失ったのなら歌を詠め。夢の中で熙子はそう言ったが、あれはいったいどんな意味だったのだろう。

歌を詠むことで本当の自分に立ち返ることができるというのか。それとも明日行なう愛宕神社での連歌の会で、答えが見つかるという知らせなのか。

思いあぐねた光秀は、部屋を出て天守閣に上ってみた。

三層の天守閣の階上からは、丹波平野を一望に見渡すことができる。

広々とした景色をながめれば気も晴れるだろうと思ったが、板戸を開けたとたんに夢の中に引き戻されたような寒気を覚えた。

あたりは一面の霧に閉ざされていた。

丹波平野は四方を山に囲まれた盆地なので、気温の変化の激しい朝夕には霧が立つことが多い。

光秀が築いたこの城も霞城という別名があるほどだが、これほど深い霧は初めてである。

夢の中でと同じように、迷いが霧となって視界を閉ざしているようだった。

（この霧は必ず晴れる。道はおのずと開けるはずだ）

心の中で念じていると、一陣の風が霧を吹き分け、遠くにそびえる愛宕山が見えた。

高さ三百丈といわれる山頂だけが、くっきりと空に浮かび上がっている。
その神々しいばかりの姿に打たれた光秀は、今日のうちに山に登ることにした。
山頂の神社に夜を徹して参籠すれば、明日の連歌の会までには答えが得られるような気がした。
「愛宕山へ参詣する。供をせよ」
嫡男の十五郎ら十数人を引き連れ、霧が晴れるのを待って城を出た。
亀山城下から愛宕山に登るには、尾根伝いの道を水尾の里に向かう。
後に明智越えと呼ばれるようになった道で、七月三十一日の千日詣では毎年大勢の参詣客が蟻のように列をなす。
光秀が亀山城主となってからは参道の整備にも力をそそいできたので、狭い道ながら馬でも楽に登ることができた。
従者に口取りをさせて、光秀は真っ先に馬を進めた。
道の両側にうっそうと生い茂る雑木林では、蟬がやかましく鳴き交わしている。
耳を圧するほどの蟬しぐれには、短い夏を懸命に生き抜こうとするひたむきさが感じられて息苦しいほどだった。
愛馬の栗毛が四肢たくましく山を登るにつれて空気は次第にひんやりとして、蟬しぐれもいつの間にか静まっていた。

人里離れた静寂の中を、時折梢を揺らして風が吹き抜けていく。人の魂を迎えるという時鳥の声ものどかに聞こえてくる。
馬の鞍を膝でしっかりと締めて歩を進めるうちに、光秀は次第に快活な気分になってきた。
冷静になって考えれば、信長に理があることは明白だった。
神仏の権威を後ろ楯とした勢力がいつまでものさばっていては、整然たる統治など望むべくもない。
朝廷や公家、寺社などが荘園や座、守護不入権などの特権をふりかざしている限り、この国はいつまでたっても宗教と政治という二元的な支配から抜け出せないのである。
鎌倉幕府や足利幕府には手をつけることができなかったこうした課題を、信長は天下布武の旗印のもとに克服しようとしている。
あと十年信長に舵取りを任せたなら、この国は確実に変わる。
イスパニアやポルトガルと肩を並べて、日本人が七つの海を股にかける時代が必ずやって来るはずである。
信長に右腕と見込まれたほどの才覚の持ち主だけに、光秀にもそのことがはっきり

と見えていた。

所領など出雲でも石見でも、あるいは日向でも構わない。

この国が変わる瞬間に信長と共に立ち会い、将来に向けての基礎を築くことができるのなら本望ではないか。

なめらかな愛馬の歩みに揺られながら、光秀は迷いの霧がすっきりと晴れるのを感じていた。

「父上、ご覧下さい」

背後で十五郎が高ぶった声を上げた。

四十の年に授かった嫡男で、昨年元服して光慶と名乗っている。今度が初陣なので連歌会に出席を許し、揚句の大役を任せることにしたのだった。

十五郎が指さす先には亀山城の雄姿があった。

ようやく実を結び始めた稲穂の海に、白亜の色も鮮やかに三層の天守閣がそびえていた。

「あの城もあの土地も、信長公からいただいたものだ。そのことを片時も忘れてはならぬ」

抵抗なくそう言えるほど決意は固まっていた。

水尾の里から愛宕神社までは、爪先上がりの険しい道がつづく。馬ではとても進めないので、全員歩いて登ることにした。

途中に水尾山の陵がある。

元慶四年十二月に崩じられた清和天皇のご遺骨を納めたものである。

天皇ご自身の遺詔によって墳丘は築かれなかったが、水尾の里の人々によって陵が守られてきたのだった。

愛宕神社に詣でる者は、この陵におまいりしていくのが常である。

光秀もいつものように立ち寄ったが、この日ばかりは勝手がちがっていた。

周囲を半間ばかりの柵でおおった陵が、強い力で何かを訴えかけてくる気がしたのである。

清和天皇は源氏の祖である。

ご在位の間は藤原氏の専横にお苦しみになり、三十一歳という若さでみまかられたが、皇子の貞純親王が源氏の姓をたまわって臣下にお下りになって以来、子孫は永々と勢力を築いてきた。

源頼朝も足利尊氏も、そして美濃源氏の流れをくむ土岐家に生まれた光秀も、清和天皇の末裔に当たる。

日頃はさほどに重くも感じなかったその事実が、陵の前にぬかずくと呪力でも発しているような力で迫ってきた。

戦場で兜の鉢を強打された時のように、光秀はしばし朦朧としていた。

自分がどこにいて何をしているのかさえ見失ったまま、清和天皇のご無念をひたすら思った。

（信長は平氏ではないか）

唐突にそんな考えが浮かんだ。

平氏を名乗る者を将軍にしてはならない。信長を倒して朝廷と幕府を守ることこそ、清和源氏の血を引く者の務めである。

胸がしびれるような陶酔を覚えながら、己れに語りかけた。

岩場だらけの参道を汗を浮かべて登りながら、光秀は再び迷い始めていた。

今朝、霧の中にいたとすれば、今は闇の中に投げ出されている。そう感じるほどのやる瀬ない迷いだった。

愛宕神社の太郎坊に着くと、かりそめに三度みくじを引いた。

最初は備中に向かうべきだと考えながら、二度目は信長を討つ是非を問いながら、そして最後は明智家の弥栄を祈りながら神判をあおいだが、結果はいずれも凶だった。

竹のくじの先には、まるでわざとのように凶という禍々しい文字が記されている。

「何を、馬鹿な」

光秀は土壇場で神仏にすがろうとする己れの気弱さを笑ったが、受けた痛手は思いのほかに大きかった。

翌二十八日は雨だった。

連歌会の宗匠を務める里村紹巴が、数人の連衆と共に巳の刻過ぎには到着した。

この日の連歌会も、長年の友である紹巴が備中での戦勝を祈願するために開いてくれたものだった。

「これは日向守どの。お早いお成りですな」

光秀より三つ年上の僧形の男だが、足腰は驚くほど達者である。

降りしきる雨の中を一刻以上も歩き通したというのに、大きな額には汗さえ浮かべていなかった。

「昨夜から参籠しておりました。宗匠どのこそお早いお着きではありませんか」

「実はさるお方に使いをおおせつかりましてな」

紹巴は光秀を奥に誘うと、細かく折った密書を渡した。

〈敵は二十九日に上洛。二百にも満たぬ供揃えなり〉

署名こそないが、近衛前久の筆だということはすぐに分った。

（宗匠どのが何ゆえこのような使いを）

光秀は一瞬狐につままれた気がしたが、考えてみれば近衛家とこの連歌師のつながりは深い。

紹巴に『源氏物語』の手ほどきをしたのは前久の父稙家だし、近衛家の後押しがあったからこそ天下一の連歌師と呼ばれるほどに立身できたのである。

（宗匠どのが戦勝祈願の連歌会を張行しようと誘われたのも、近衛公の差し金かも知れぬ）

前久ならそこまで周到なことをやるはずだと思いながら、もう一度密書に目を通した。

信長の供がわずか二百にも満たぬとすれば、討ち果たすことは赤子の手をひねるよりもたやすい。

（あの信長公が、わしの手の内にある）

そう考えただけで、光秀の胸の底からえも言われぬ歓びがわき上がってきた。

この十五年間服従を強いられ、数々の屈辱にも耐え抜いてきた。

その相手を今こそ意のままにできると思うと、狭い檻から出て手足をのびのびと投げ出したように心地いい。

信長さえいなければ、この世はこれほど自由なのだ。

（朝廷のためでも幕府のためでもない。自分のために信長を討つのだ）

想像もしていなかったほどの解放感が、前のめりになるほど光秀の背中を強く押した。

「どんな歌会になるか、近衛太閤も楽しみにしておられました。雨の中を清滝から登ってきた甲斐があるといいのですが」

紹巴の言葉の裏には、歌によって返答せよという意味が込められていた。

後に『愛宕百韻』と呼ばれる連歌会は、威徳院西坊で午の刻から始まった。

連衆と呼ばれる参加者は、光秀と紹巴、西坊の住持である行祐法印など九人である。

「日向守どの、お願い申す」

発句は興行の上客が詠むという決まりに従って、まずは光秀が筆を取った。

ときは今天が下しる五月哉

五月雨降る西坊の庭の情景を詠んだものだ。

連歌は五七五の発句に七七の脇の句を付け、脇に第三の句を付ける。前句とは関連

するが、前々句とは別の世界に転じるのが作法である。

『愛宕百韻』で光秀が詠んだ十五句のうち長句が七、脇に付けた短句が八だが、いずれも迷いや苦悩、そして決意に至ったいきさつを驚くほど正直に吐露している。

筆者は公家の生まれだが、それほど歌道に通じているわけではない。だが、その歌を手がかりに光秀の心の軌跡をたどり、挙兵に至った動機を解き明かしてみることにしよう。

ときは今天が下しる五月哉

この句は土岐氏の流れをくむ光秀が天下を取る決意を表明したものだという説が広く流布しているが、ときと土岐氏をかけたという説が曲解であることは、出陣連歌が神にささげる祝言だということを考えれば明らかである。

光秀ほどの教養人が、これから自分が天下を取るなどという不作法な歌を、神聖を旨とする発句で詠じるはずがない。

ときは「天の時」や「実りの秋」という意味とするのが、祝言の作法にかなった解釈である。

後漢の学者王充は『論衡』の中で、

「儒者は太平瑞応を論じて皆言う。……関梁を閉ざさず、道に虜掠なく、風条を鳴らさず、雨塊を破らず、五日に一風、十日に一雨……」

と記している。

こうした天下太平のめでたい験を祝言に読み込むことは、我が国でも古くから行なわれていた。

世阿弥作の謡曲『高砂』の中で、「四海波静かにて、国も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや」と祝言するのはその一例である。

光秀が「ときは今」と歌ったのは「国も治まる時つ風」の時を念頭においてのことだ。

だからこそ嫡男光慶が発句に対応した揚句で、「国々は猶のどかなるころ」と受けているのである。

だからといって、信長討伐の意志がなかったわけではない。

なぜなら「天が下しる五月哉」という言葉は、平家になぞらえた信長を打倒するという暗喩だからである。

そう読み解くためには『平家物語』を思い起こさなければならない。

土岐氏の祖である源頼政は、高倉宮以仁王の令旨に従って打倒平氏の兵を挙げるが、宇治川の戦いに大敗して自害してしまう。

この合戦が行なわれたのが五月二十三日のことだ。

五月哉という詠嘆には、この史実を思う気持が込められている。自分も誠仁親王の令旨を奉じて信長を討つという覚悟の表明なのである。

光秀の暗喩が連衆にはすぐに分ったことは、行祐法印が付けた、

水上まさる庭の夏山

という脇の句が示している。

これは威徳院の庭の池に雨が降りしきる情景と、五月雨によって増水した宇治川の様子を重ね合わせたものだ。

なぜなら水上まさるという表現は、「折節五月雨のころ、水まさつて候」という『平家物語巻第四』の言葉を踏まえているからである。

発句と脇の句がそうであるならと、宗匠である里村紹巴は第三句で『源氏物語』に転じた。

花落つる池の流れをせきとめて

この句は謀叛を決意した光秀を諫めようとしたものだという説が流布しているが、紹巴の真意はまったく逆である。花とは信長のことではなく、『源氏物語』の花散里の巻を踏まえた言葉なのだ。

朱雀帝の寵愛を受けている朧月夜の内侍と密通した光源氏は、彼女の父である右大臣の逆鱗に触れ、須磨に身を引くことを決意する。

光源氏が別れを告げるために花散里のもとを訪ねるのが、ちょうど五月雨の頃。

この物語が念頭にある者には、この歌には光源氏の没落をくい止めるという意味と、右大臣であった信長に追放された足利義昭を救ってほしいという意味が込められていることがすぐに分る。

近衛前久の意を受けた紹巴は、是非挙兵せよと光秀をいざなっているのである。

これに応じて光秀が詠んだ二番目の長句は、

月は秋秋はもなかの夜はの月

発句で『平家物語』を踏まえて平家打倒の覚悟を披瀝した光秀は、この句で行動に移る決意であることを告げる。

秋の月夜の情景は、治承四年八月十七日の深夜に山木判官平兼隆の館を夜襲し、平家打倒に立ち上がった源頼朝の故事にちなんだものなのである。

それを察した大善院の僧宥源が付けた句は、

それとばかりの声ほのかなり

出陣する武士たちの声がほのかなのは、夜討ちだからである。光秀が挙兵する時も

信長を夜襲するであろうことが、宥源にも分っていたのである。

源頼政の敗死から頼朝の挙兵へと物語性をもって歌を連ねているのは、光秀に源氏の流れを継承するという強烈な意識があったからだ。

それが情緒的な自己正当化にすぎないとは分っていながら、ついに家や血脈の呪縛から抜け出せなかったのである。

胆を据えたとはいえ、光秀にも迷いはあった。

それを気づかった紹巴の弟子の心前が、

泊瀬路やおもはぬ方にいざなはれ

と呼びかける。

思わぬ方という言葉には、思わぬ企てを近衛前久という意外な人物にもちかけられたという二重の意味が込められている。

これに応じた光秀は、

深く尋ぬる山時鳥

迷いをふり切ろうと、時鳥の鳴く道を愛宕山まで訪ねて来たと告白する。

その迷いがどんなものであったかを語ったのが、

葛のはのみだるる露や玉ならん

という三番目の長句である。

風にひるがえりやすく裏が白い葛の葉は、白抜きの桔梗紋を旗印に使う光秀の象徴である。

葛藤の末に達した境地を、光秀は四番目の長句で次のように詠む。

旅なるをけふはあすはの神もしれ

これにつづく五番目の長句は、

朝霞薄きがうへに重なりて

この歌の裏に込められた、年老いて髪もうすくなった頭を迷いの朝霞がおおっているという意味は、霧におおわれた亀山城の情景そのままである。

光秀に同情している心前は挙兵の先行きに不安を覚えていたらしく、

むら蘆の葉隠れ寒き入日影

何やら滅亡を予感させるような長句を詠む。それに対して光秀は、

たちさわぎては鳴の羽がき

立ち騒いだなら、鷹狩りで狩られる鳴の羽がきのようにみじめな結果になるだろうと応じている。

蒲生野の鷹狩りで草むらに逃げ込んだ雉子たちが犬に嚙み殺されていく光景と、安

土城での饗応のときに近衛前久に鳴は死期に通じると責められたことが、光秀の念頭にあったのである。

立ち騒ぐとは単に夜討ちの兵に混乱が生じるという意味だけではなく、天下騒乱にならないようにするという意味もあったらしく、最後の長句では次のように詠む。

しづまらば更けてこんとの契りにて

更けてという言葉には、夜が更けることばかりではなく、季節が深まることと年老いるという意味が込められているのだから、秋の頃になったなら年老いた自分も今度の働きによって平安を取り戻すことができると歌っているのである。

光秀の希望はどのような形でかなえられるのか。

その答えを紹巴の高弟である猪名代兼如が、

あまたの門を中の通ひ路

と付けた句で暗示している。

あまたの武家屋敷が並ぶ道の中央を進むというのである。

だが恩賞など光秀にはどうでもいい。一命を賭して令旨に従うという使命感しかなかった。

はるばると里の前田を植ゑわたし

と詠んだ宥源の長句に次の句で応じていることが、そのことを明確に表わしている。

縄手の行衛ただちとはしれ

縄手とは田のあぜ道というだけではなく、まっすぐな道の意にも用いられる。つまりは目的に向かって一直線に突っ走るという決意の表明だが、この句には木曾義仲や新田義貞の姿が詠み込まれている。

なぜなら二人とも縄手から泥田に落ちたところを討ち取られているからだ。

義仲が後白河法皇の、義貞が後醍醐天皇の命令に翻弄されたあげく討死にしていることを考えれば、光秀にも令旨に従って挙兵した後に使い捨てにされるという予感があったのだろう。

だがそれでも朝廷の存続と源氏の誇りをかけて起つ決意をしたのである。

連歌会を終えると、光秀は迷いの晴れた清澄な境地に達していた。

「日向守どの、よき張行になりましたな」

紹巴が歩み寄ってねぎらった。

「宗匠どののお陰でござる。これで心おきなく出陣することができまする」

「この百韻をご覧になれば、ご家門さまもさぞお喜びになられましょう」

ご家門さまとは前久のことだ。連歌会は数人の執筆によって記録されているので、

そのうちの一冊を都に持ち帰るのである。

「縄手から落ちぬようにお導きいただきたい。近衛太閤にそのようにお伝え下さい」

「承知いたしました。勝利を言祝ぐ連歌会を洛中で催す日も近うございましょう」

百韻を神前にささげ、清滝へ下る紹巴らの一行を見送った頃には、すでに夕闇が迫っていた。

光秀はあわただしく身仕度をし、雨の中を亀山城へ戻っていった。

余談だが、死別した妻のことを詠んだ光秀の短句が一首だけある。

おもひなれたる妻もへだつる

こうした陰謀に加担するには、あまりにも誠実で真っ直ぐな心の持ち主だったのである。

同じ頃――。

織田信長は安土城天主の最上階にたたずんでいた。

眼下には白い湖面を見せて琵琶湖が広がっている。比叡山から比良山へとつづく山並みが、こやみなく降りつづく雨に煙り、水墨画のような色合いで連なっていた。

信長は廻り縁に立ち尽くし、明日の上洛のことを考えていた。

ついに朝廷に勝ったという思いは強い。明日の夕方には本能寺に入り、太上天皇の格式をもって公家たちの拝謁を受ける。

公武両権を掌握するという史上誰もなしえなかった偉業を、もうじき達成できるのである。

（長かった）

正直そう思う。足利義昭さえ追放すれば、すぐにも天下に号令できると考えていたが、それからの道のりは遠かった。

比叡山や石山本願寺、高野山、伊賀や紀州の惣国一揆など、畿内においてさえ次々と新たな敵が立ち現われた。

そうした勢力の背後には、常に朝廷がいた。

神社ばかりか寺院までが、二重三重の周到さで朝廷の権威と結び付いていた。

あれほど強く仏の前の平等を説く石山本願寺までが、顕如の頃から法主を九条家や近衛家の猶子となし、門跡寺院の格式を手に入れて権勢の支えとしていたほどだから、後は推して知るべしである。

信長が戦っていた相手は、個々の勢力ではない。人々の心の中にまで根強く張り巡らされた、こうした旧い意識なのである。

これを変えるためには、天皇の上位に立つしかない。天道思想に言う革命が、その時こそ本当の意味で成就するのだ。

（太上天皇）

己れに冠されるであろう称号を、信長は胸の内でつぶやいてみた。

誠仁親王への譲位を実現したからには、その地位は手に入ったも同然だが、心は目の前の景色のように暗かった。

ついに勝ったという安堵はあっても、喜びや満足はわかないのである。むしろ不安や怖ればかりがじわじわと広がっていく。

天皇の権威を乗り越えることへの畏れが、いざ実行するという段になって思いがけない力で信長をおびやかしたのである。

帝は天下の平安を保つために神々に礼を尽くすという尊き責務をになっておられる。いわばこの国第一の神主である。

そのお方を超えるということは、日本人が長年つちかってきた神道的世界観を否定するということだ。

（はたしてそんなことが許されるのか）

信長の心の奥底には、いまだにかすかな迷いがあった。

織田家の祖は剣神社の神主であり、父信秀もひときわ朝廷に対する尊崇の念が強かった。

信長が伊勢神宮や熱田神宮、剣神社などを手厚く保護し、朝廷に対する援助を惜しまなかったのは、その血を色濃く受け継いでいたからである。

それを今になって改める必要があるのだろうか。神道を否定した後に、国を導く新しい理念を打ち立てることができるのか……。

信長は冷徹な為政者である。愛憎半ばする気持を抱きつづけてきたとはいえ、朝廷の力の大きさは充分に理解していた。

後醍醐天皇に叛旗をひるがえして武家政権の樹立を目ざした足利尊氏でさえ、結局は北朝を擁立し、帝の命によって幕府を開くという形でしか混乱を収拾できなかったのである。

我が国の史上初めて帝の権威を乗り越えようとする信長が、ひしひしと重圧を感じるのは当たり前かも知れなかった。

天地は雨にぬれながら暮れていく。たそがれ時とも逢魔が時ともいう。迫り来る闇がすべてを無為へと変えていくような、やる瀬ない刻限だった。

「お蘭、近う」

森蘭丸を呼んで、部屋の四方に明かりを灯させた。
特製の巨大な行灯に、あたりが明々と照らされた。
壁や柱、軒の梁にいたるまで金箔を押した部屋は、さながら空中に浮かぶ金閣寺のようだった。

金閣寺を造営した足利義満は、信長と同じように太上天皇となって天皇の権威を乗り越えようとした。

寺の一階を寝殿造り、二階を武家造り、最上階を唐様式の仏殿造りにしたのは、明皇帝から日本国王の称号を授けられた義満が、朝廷と武家の上に立って君臨するという宣言だったのである。

安土城の上層二階も、この発想をそっくり踏襲していた。

五階の八角の段は、神仏混交の日本の現状を表わしている。

吉田神社の大元宮と同じ八角形の建物にすることで朝廷が奉ずる唯一神道を、内部に阿鼻地獄図や釈迦説法図を描くことで仏教を表現したのである。

その上の四角の段は、天上界を表わしたものだ。

四方の壁に唐の故事にもとづく天地創造の様子が描かれているのは、天道思想の継承者である信長が神仏混交の日本に君臨するという意味なのである。

心に迷いが生じると、この四角の段にこもるのが信長の常だった。
三皇五帝や老子や孔子など、唐の国を国家たらしめた賢人たちの力を我が身に取り込むためである。

正面にあたる南の面には、伏義と神農、黄帝が描かれていた。
三皇とたたえられる伝説上の人物で、伏義は黄河から龍がもたらした宇宙の図と亀がもたらした人知の書によって八卦を創造したという。

一日に百草をなめて毒か薬かを確かめたという神農は農業と医学の創始者で、黄帝は帝王学を修めて国家の統一を成し遂げた漢民族の始祖とされる人物である。

西の面には老子と文王が描かれていた。
老子は『道徳経』を著して無為自然の道を説いた道教の祖であり、文王は周王朝を打ち立てた武王の父である。

北面には文王が渭水のほとりで釣り糸を垂れている太公望と出会う場面と、周王朝の諸制度を整備した文王の次男周公が洗髪中に客と対面する場面。

東の面には十人の高弟に教えをたれる孔子の姿と、桓公の霊廟で欹器を見る場面が描かれていた。

欹器とは三つの青銅の水瓶を吊るしたもので、適量の水を入れれば水平を保つが、

少しでも過不足があればこぼれてしまう。

政治、経済、宗教の均整を保つことが肝要なことを示す、帝王座右の道具だった。

壁画は南から西、北、東へと連なり、国家としての形をととのえていく様子が描かれている。

信長がすべての賢人と向き合ってから南面に戻ろうとした時、

「吉法師よ」

不届きにも幼名で呼びかける者があった。

むっとして東の面をふり返ると、孔門十哲を前にして教えをたれる孔子の顔が父信秀になっていた。

「父上……」

信長は思わず膝を正しそうになった。

信秀にはもの心ついた頃から文武両道にわたって厳しく仕込まれた。殴る蹴るは日常茶飯事で、時には本当に斬り殺されそうになったほどだ。

それだけに今でも父に対する怖れや反発、そして感謝がある。信長が頭が上がらないと感じるただ一人の相手だった。

「吉法師よ。帝の御座をおかしてはならぬ」

「おかしてはおりません。太上天皇となって公武に君臨しようとしているばかりです」

信長は幼い頃のままに丁重な言葉を使った。

「それは臣下の身に許されることではない。許されざることをして御代を騒がせることは、帝の御座をおかすということなのだ」

「お言葉ではございますが、朝廷の権威を超えなければこの国を変えることはできません。武家はいつまでも公家の風下に立たされ、朝廷の意を抜きにしては何事もできなくなりましょう」

「ならば公家を説き伏せればよいではないか。それもならぬ時は、朝廷の命に従えばよいのだ」

「公家どもがどれほど因循姑息な輩か、父上とてご存知ではありませんか。あの者たちは帝に近づくことを余人に許さず、帝のご意志という大義名分を楯に取って己れの利を図っております。こうした仕組みを改めなければ、いつまでたっても整然とした治政を行なうことなどできますまい」

「吉法師よ。あくまでその道を進もうとすれば、義満のごとく殺されるぞ」

信秀が厳しく予言した。

我が子義嗣を皇位につけて太上天皇になろうとした義満は、立太子の式にのぞむ直前に急死したのである。

史書は病死と伝えている。

だが当時から噂にも上っていたように、義満は皇統の尊厳を守ろうとする者によって毒殺されたのである。

「ご冗談を。この信長を討てる者など、もはや誰一人おりませぬ」

「そうかな。そちはまだ帝の真のお力を知らぬようだ」

その一言を最後に、信秀は黄泉の世界へと戻っていった。

（たわけが）

狩野永徳が描いた色鮮やかな孔子像に向かって、信長は小さくつぶやいた。

父の祭壇に抹香を投げつけた時のような反発と怒りが、胸の底からふつふつとわき上がってくる。

それほど言うなら、意地でも帝の権威を乗り越えてやろうと思った。

翌二十九日はどんよりとした曇り空だった。

早朝卯の刻、信長は安土城を出て上洛の途についた。

六月一日に催す茶会のために、秘蔵の名物茶器三十八種を運ばせたが、供揃えは百

五十人にも満たなかった。

「上様、いま少し備えを厳重になされませぬと」

懸念する重臣もいたが、信長は取り合わなかった。

すでに信忠が千五百の兵をひきいて上洛している。ご譲位の祝儀にこれ以上の軍勢を動かすのは、天下がいまだに治まっていないようで好ましくなかった。

山科まで吉田兼和らが出迎えに来ていた。

「こたびのご上洛、まことにおめでとう存じまする」

「出迎え大儀」

信長は馬上からひと声かけただけだった。

「ついては今後のことについてご相談申し上げたいと、近衛公がおおせでございます。ご都合はいかがでございましょうか」

「午の刻に訪ねて来るように申し付けよ」

一陣の風が吹き抜け、急に雨が降り出した。

走り雨があたりの山々を白く閉ざして近づいて来る。

「この雨では難儀であろう。出迎えは無用と公家どもに伝えておけ」

「承知いたしました。それではひと足先に立ち戻り、洛中にてお待ち申し上げます

る」

一礼して引き下がり、神主とも思えぬ軽やかな手綱さばきで走り去った。

この日のことを兼和は日記に次のように書き留めている。

〈信長御上洛お迎へのため、侍従を召し具し山科に至つて罷り出づ。雨降る。未の刻御入洛。お迎へ衆おのおの罷り帰るべきの由、先にご案内の間、すなはち急ぎ罷り帰るなり〉

これが『兼見卿記』の別本、つまり元々の日記の記述である。

ところが改竄後の正本には次のように記している。

〈信長御上洛お迎へのため、山科に至つて罷り出づ。数刻相待つ、午の刻より雨降る。申の刻御上洛。お迎へおのおの無用の由、先へお乱（森蘭丸）案内候間、急ぎ罷り帰りをはんぬ〉

信長が入洛した刻限を前者では未の刻と記しているのに、後者では申の刻と書き換えているのは、この間に信長が前久と対面してご譲位や将軍宣下について話し合ったことを隠すためだ。

なぜなら二つとも信長をおびき出すために前久が仕掛けた罠なのだから、両者の対談が行なわれたことが明らかになれば、本能寺の変への前久の関与が否定しがたくな

るからだ。

この嘘の辻褄を合わせるために、兼和は数刻相待つなどと白々しく書き加え、蘭丸に言われたので信長には対面できなかったかのように装っているのである。

約束の午の刻より少し早く、近衛前久が本能寺に訪ねて来た。

「ご上洛、大慶に存じまする」

真新しい烏帽子をかぶり、紫色の絽の水干を着ている。下に着た白小袖が透けて、何とも涼しげだった。

「都は暑い。今日は特にむすようだ」

信長は扇でせわしなく胸元をあおいだ。

「それゆえ、いろいろと工夫をこらしてしのいでおりまする」

「山科で兼和と会うた」

「今日のうちに御意を得たく、ぶしつけながら使いを命じました」

「予定に変わりはあるまいな」

「明日清涼殿でご譲位の儀が執り行なわれ、二日には将軍宣下の運びとなります。ご出陣前のあわただしい時期ゆえ大儀とは存じますが、二日の未の刻までにご参内下されませ」

「承知した。お蘭、あれを」
蘭丸が用意の文を差し出した。ご譲位を祝う献上品の目録である。
正親町天皇や誠仁親王ばかりか、女房衆や公家衆にまで手厚い贈り物をしている。単なる祝いというより、信長の意に従ってご譲位に応じたことに対する褒美という意味合いが強かった。
「かたじけのうございまする。さっそく内裏に持ち帰ってご披露申し上げましょう」
「明日は祝いの茶会を開く。天下の名物をあまた持参したゆえ、宮さまにもお運びいただきたい」
ご即位なされたばかりの帝を招くことで、天下に権勢を示したい。
信長が秘蔵の名物を持参したのはそうした目論見があったからだが、これには前久が難色を示した。
「おそれながら、ご譲位の後には内裏におこもりになるのが仕来りでございます。二日には将軍宣下も行なわれることゆえ、その後にお成りいただくのがよろしゅうございましょう」
「さようか、ならばそれでもよい」
「そのかわり五摂家以下公家衆うちそろってお礼に参じますゆえ、ぜひとも茶会を催していただきとう存じまする」

「さようか。ならば堺や博多の商人どもも招いてやろう」
打ち合わせを終えると、信長は手ずから膳を運んで前久をもてなした。
「思えば長い付き合いだな」
酌をしながら語りかけた。
永禄二年に初めて上洛した時以来だから二十三年になる。足利義昭を奉じて上洛した後にはしばらく敵対していた時期もあったが、天正三年に和解してからは互いに固い協力関係を築いてきた。
信長の天下統一が成ったのは、前久の助力があったからと言っても過言ではないのである。
「お陰でようやくここまでこぎつけた。礼を言う」
「めっそうもない。すべてはご貴殿のお力によって成し遂げられたことでございます。天道のしからしむるところでございましょう」
「こたびのことは一個の野心からでも、帝をないがしろにするものでもない。この国を新しく造り替えるためには、公武の権を我が手に掌握する必要があったのだ。そちとしては不本意であろうが、この国のために今後も力を貸してくれ」

「ご尊意は重々承知しております。お気づかい下されませぬように」
「太政大臣を辞したそうだな」
「はい」
「何ゆえじゃ」
「先に朝廷は三職のいずれにも推任するとお伝えいたしました。万一関白や太政大臣をお望みになった場合に備えて、位を空けておいたのでございます」
「ならば明日にも復してくれ。信基を関白とするまでは、そちに働いてもらわねば困る」
「承知いたしました。ご貴殿が将軍となられる日に復することといたしましょう」
前久は誠心誠意嘘をつく。
その面立ちは気品にあふれ弁舌もさわやかなので、まさか二日後に天下をくつがえす大陰謀を巡らしていようとは、さすがの信長も気付かなかった。
「先ほどより、二条御所のお方さまがお待ちでございます」
前久が帰るのを待ちかねたように、蘭丸がそう告げた。
「構わぬ。ここに通せ」
「ご書院にお成りいただきたいとのおおせでございます」

今度は何を企んでいるのかと書院へ行くと、生絹の衣を着た勧修寺晴子が両手をついて深々と頭を下げた。
「ご上洛、おめでとうございまする」
部屋には涼やかな香りがただよっている。
本栖湖のほとりで聞いた香とよく似た香りだった。

玄関から外に出ると、吉田兼和がすかさず傘を差しかけた。
「お務め、ご苦労さまでございました」
上首尾を疑っていないのか、意味あり気な含み笑いを浮かべている。
近衛前久は厳しい一瞥を投げただけで、急ぎ足に表門に向かった。
外には親王や五摂家の者しか使用を許されない檳榔庇の牛車を待たせてある。供の者が差し出した足台を踏んで車に入ると、兼和が当然のように横に乗り込んで来た。
「お疲れでございましょう。この先の茶屋に酒肴の仕度を申し付けておりますので、お立ち寄り下されませ」
いつものごとくそつがないが、前久はとてもそんな気分にはなれなかった。
かつて信長とは、肝胆相照らす蜜月時代があった。その男をひそかに裏切り、罠に

落とし、葬り去ろうとしているのだ。

万やむをえざる仕儀とはいえ、やりきれない自己嫌悪におちいっていた。

嘘によって人を動かすことは、真実によって説得するより何倍も骨が折れる。己れ自身にその嘘を真実だと思い込ませる手順が必要だからだ。

しかも嘘をつけばつくほど、己れの真実は汚されていく。嘘をつかずに渡れる世の中なら、誰もこんな思いなどしたくはないのである。

牛車は低い車輪の音を上げながら進んでいく。屋根を叩く雨の音は激しくなるばかりだった。

どこかで時鳥の声がする。こんな雨の日にも、けなげに夏を告げていた。

「物見を開けよ」

兼和に命じた。

「お暑うございますか」

「そちらの側から、時鳥の声がしたのだ」

「はて。身共には聞き取れませなんだが」

物見を開けたが、鳥の声はどこからも聞こえなかった。

横なぐりの雨が降り込んできたばかりである。

「この雨では鳥も息をひそめておりましょう。空耳でございますよ」

兼和が首をすくめて物見を閉めた。

「五月雨の月はつれなきみ山より、ひとりも出づる時鳥かな」

前久は定家の歌を口ずさんだ。雨の日でも時鳥は鳴くと言いたかったからだが、その歌が別の歌を連想させた。

時鳥雲居のよそに過ぎぬなり

晴れぬ思ひの五月雨のころ

『新古今和歌集』に収められた後鳥羽上皇の御製である。

位を土御門天皇に譲って院政を行なわれた上皇は、朝廷の弥栄のために歌集の編纂をお命じになったのだった。

奥山のおどろが下も踏み分けて

道ある世ぞと人に知らせん

鎌倉幕府の圧迫によって衰微した朝廷の復権をとげようという、強いご意志を込められた歌である。

その志を果たすべく承久の変を起こされたが、あえなく敗れて配流の身となられ、隠岐で幽閉されたままはかなくなられたのだった。

「道ある世ぞと人に知らせん」

口にしてみると上皇のお志の強さが直に伝わってくる。前久はふさいだ心に喝を入れられたような気がした。

「こたびの壮挙は、後鳥羽院のご事績と同じように語り継がれることでございましょう」

兼和が心中を察して追従を言った。

「そちも院の大御歌を存じておったか」

「お志の高さにこの胸を撃ち抜かれて以来、片時も忘れたことなどございませぬ」

「ならば真名序を誦してはくれぬか」

「は？」

「歌集の序文を聞きたい。そちのよく回る舌で朗々と誦してくれ」

「まことに不調法ながら、そこまでは覚えてはおりませぬ。何とぞご容赦下されませ」

「そちの頭は、烏帽子をのせる役にしかたたぬようだな」

序文は歌集編纂の目的を宣したもので、次のごとく記されている。

〈それ、和歌は、群徳の祖、百福の宗なり。玄象天成り、五際六情の義いまだ著れず、

素鵝の地（出雲）静く、三十一字の詠甫めて興れり。爾来、源流まことに繁く、長短異なりといへども、あるは下情を抒べて聞に達し、あるは上徳を宣べて化を致し、あるは遊宴に属して懐を書し、あるは艶色を採りて言を寄す。誠にこれ、理世撫民の鴻徽、賞心楽事の亀鑑なるものなり〉

素戔嗚尊が出雲の地で初めて歌を詠んで以来、長歌、短歌と形は異なっても、民の真情を詠んで天皇の耳に達し、天皇の慈愛を詠んで民を教化し、遊宴にかこつけて思いを書き、花や紅葉の美しいながめを見ては言葉を寄せてきた。

まことに和歌は、世を治め民をいつくしむ大もとであり、心を愛で物事を楽しむ模範となる。

およそそんな意味だった。

「わしが事を成さんとするは、上徳を宣べて化を致し、後鳥羽院のお志を継がんがためじゃ。平氏を名乗るあの男に、朝廷を左右されてたまるか」

「承知しておりますとも。それゆえ身共も、微力なりとはいえお力をお貸し申し上げているのでございます」

「何だと」

前久は目をむいて兼和をにらみつけた。

抑えに抑えた憤懣が胸もとまでせり上がり、音をたてて華々しくはじけた。

「力を貸したとは何事だ。そちごときに何ができる。何が分る。いつからそのような大層な口がきける身分になったのじゃ」

「これはご無礼をいたしました。他意なきことでございます。何とぞお許し下されませ」

「やかましい。口先だけで謝るな。心にもない世辞を言うな。人の機嫌をうかがうような卑しい目つきをするな。そちごときの浅知恵で、このわしの胸中をはかれるはずがあるまいが」

前久は車に備え付けの扇子をつかみ、兼和の横面を手厳しく張った。

日頃は自制心を失うことなど絶対にない。だがひとたび怒りの虎を放ってみると、心地よさに胸がしびれるようである。

その陶酔に我を忘れて、前久は力任せに打ちつづけた。

「ご家門さま、太閤さま。お許しなされて下されませ。この兼和が悪うございました。ご家門さまのご庇護なくしては、一日たりとも生きられぬ身でございます。何とぞ哀れと思し召して、お許しなされて下されませ」

兼和は床にはいつくばり、前久の足に頭をすりつけて訴えた。

烏帽子が飛び総髪にした髪は乱れて、草むらに逃げ込んだ雉子のように見苦しい。

いっそ車から蹴り落としてやろうかと思ったが、さすがにそこまでするのははばかられた。

「分ればよい。わしとて手荒なことはしたくないのじゃ」

「身共の罪でございます。身共が至らぬばかりに、ご家門さまのお心を乱してしまいました。万死に値する罪でございます」

兼和は近頃体に脂がつき、首回りが窮屈なほど太っている。その体を小さく丸めてうずくまり、すすり泣きに泣きつづけた。

二条御所の隣の近衛邸に戻ると、里村紹巴が待ちわびていた。

「ご家門さま。愛宕山での百韻でございまする」

明智光秀が張行した連歌会の記録を差し出した。

「ときは今天が下しる五月哉、か」

前久は百韻の連歌に素早く目を通した。

光秀が挙兵の覚悟を定めたことは明らかである。これほど正直に心情を吐露しているのは、前久の手に渡ることを見越してのことかも知れなかった。

「相変わらず律義なことよな」

「縄手から落ちぬようにお導きいただきたいとの、お言伝てでございます」
「この兼如というのは何者じゃ」
前久は兼如が詠んだ長句に興味をひかれた。
賢きは時を待ちつつ出づる世に
この歌は後鳥羽院の追善連歌興行として有名な「水無瀬三吟」の中に収められている「仏たちかくれては又いづる世に」という歌の本歌取りである。
周の武王が殷の暴君紂王を討とうとして挙兵したものの、黄河のほとりまで進みながらいまだ天の時ではないと言って引き返したという『周本紀第四』の故事を踏まえたものだ。
つまりは後鳥羽院の志を継ぎ、紂王信長を討って世に出る時が来たという暗示なのである。
これに対して光秀は、次の短句で応じている。
心ありけり釣のいとなみ
渭水のほとりで釣り糸を垂れていた太公望が周の文王に見出されたという故事が、光秀の念頭にあることは明らかである。
光秀は太公望のような軍師となって王である天皇や将軍を助けるつもりなのであって、決して天下を取ろうなどとは思っていない。
兼如の長句はそんな思いを巧みに、そして的確に引き出したのである。
「猪名代兼如と申しまして、先祖は代々奥州伊達家に仕えていたと聞き及んでおります」
「今は何をしておる」
「父親の代に伊達家の騒動に巻き込まれ、洛中にて浪々の身をかこっております」
「惜しいことよ。機会があれば世に出られるように計らってやれ」
この一言によって、後に兼如が伊達家の連歌師に返り咲く道が開けたのだった。
「ひとつだけ、おうかがいしてもよろしゅうございましょうか」
「うむ」
「ご家門さまは何ゆえ、あのお方がわずかな手勢で上洛されることがお分りだったのでございますか」
「分っていたわけではない。あのように書かねば、日向守の重い腰が上がるまいと思っただけじゃ」
嘘だった。
信長が上洛に応じると聞いた前久は、安土に文を送り、ご譲位の祝儀に大軍を動か

しては礼にそむくと申し入れている。

人一倍自尊心の強い信長が律義に忠告を守ることは、容易に想像がついたのである。

紹巴が帰った後も、前久の気鬱は晴れなかった。

これでお膳立てはととのったが、何とも寝覚めが悪くなりそうな企てだった。

（それにしても百五十ばかりの供揃えとは）

前久は一人で酒をくみながら、信長の豪胆ぶりに喝采の声を上げたくなった。

後の世の者たちは油断と評するだろう。天下人となった気の緩みだとそしるかも知れない。だが前久には信長の真意が手に取るように分った。

信義のゆえである。

ご譲位の儀を計らった前久に、信長は身ひとつも同然で上洛することによって報いたのだ。

それが分っているだけになおさら辛い。なろうことなら生かしておきたい男だった。

「出家するか」

ことりと盃を置いて独りごちた。

せめてそんな形でなりとも哀悼の意を表したかった。

夕刻、風の甚助が備中から戻った。

縁先に平伏すると、こよりのように細くした密書を小袖の襟元から引き出した。

「今度惟任日向守、勅命を蒙り義兵を挙げる段、尤も然る可くと存じ候」

そう記されている。前久が投げた餌に、羽柴秀吉がぱくりと喰らいついてきたのだった。

「備中の様子はどうじゃ」

「高松城のまわりに土塁を築いて水攻めにしておられます。数日来の雨で、城のまわりは湖のような有様となっております」

「五月雨の時期とは、果報なことよな」

「毛利は四万の大軍を動かし、足守川の西岸に布陣しております」

「うむ、大儀じゃ」

前久は褒美の銭を投げたが、甚助は引き下がろうとはしなかった。

「ひとつだけ、お聞き届けいただきたいことがございます」

「申すがよい」

「本日限り暇をいただきまする」

「行くつもりか。本能寺へ」

「仇の最期をこの目で見届け、妻や子らへの冥土のみやげにしとう存じます」

翌日、内裏の紫宸殿でご譲位と践祚の儀が行なわれた。

遺憾ながらこの事実は、歴史の表には現われていない。

足利幕府再興の企てが羽柴秀吉の裏切りによって失敗した後、朝廷では本能寺の変に関与した証拠を隠し通した。

この日のご譲位も信長をおびき出すために前久が仕掛けた罠だっただけに、数多くの日記や文書類とともに闇に葬られたのである。

ところがわずかながら、この事実を伝える証拠が残されている。

勧修寺晴豊卿が『晴豊記』から抜き取り、『日々記』と題して書庫の奥深くに秘蔵しておられた当時の日記に次のような記述がある。

〈六月、雨降。のけ者数かぎりなし。こや共かけ事外なり。吉田めし、安土へ明智方へ勅使なり。明日罷り下るべく候由候。巻物下され候。各御談合共なり〉

本能寺の変の四日後に吉田兼和を内裏に召し、明智光秀のもとへ勅使としておつかわしになったというのである。

お命じになったのが誠仁親王であることは、同じ日の兼和の日記に安土へ使いに行くように親王から命じられたと記されているので明白である。

では何ゆえ親王の使いを勅使と記したのか。

親王がすでに践祚の儀を終えられ、帝としての内実をととのえておられたからとしか考えられない。

ご即位の礼とは異なり、践祚の儀は内々の簡素な行事である。

玉座におつきになった誠仁親王のお姿を拝した後、公家たちは打ちそろって本能寺を訪ねた。信長に祝儀のお礼を言上するためである。

その顔ぶれについて、山科言経は次のように記している。

〈前右府（信長）へ礼に罷り向ひをはんぬ。見参なり。進物は返されをはんぬ。参会衆は近衛（前久）殿、同御方御所（信基）、九条殿、一条殿、二条殿、聖護院殿、鷹司殿、菊亭、徳大寺、飛鳥井、庭田、四辻、甘露寺、西園寺亜相、三条西、久我、高倉、水無瀬、持明院、予（言経）、庭田黄門、勧修寺黄門（晴豊）、正親町、中山、烏丸、広橋、坊城、五辻、竹内、花山院、万里小路、冷泉、西洞院、四条、中山中将、陰陽頭、六条、飛鳥井羽林、中御門、唐橋などなり、その外僧中、地下少々これあり〉

（『言経卿記』）

五摂家を筆頭に清華家、名家、羽林家の当主たちがことごとく顔をそろえたのだった。

信長は御殿に造り替えた本堂で待っていた。

前久らは公家の序列に従って次の間に居並んだ。
順番は言経が日記に書き付けた通りである。
「ご上洛おめでとう存じます。本日は我ら一同にまで過分のご配慮をいただき、まことにかたじけのうございました」
前久の動きに従って公家衆がいっせいに頭を下げた。
高々とかぶった烏帽子が、風になびく葦のごとく揺れた。
「ご践祚の儀、大慶である。皆も計らい大儀であった」
信長は黄金色の大紋に緋色の烏帽子という傾いた形をしていた。雅びやかな公家たちと対極の装いをすることで、彼我の立場を鮮明にしたのである。
「祝儀の引き物に名物を持参した。眼福を得るがよい」
次の間の片側に垂らしてあった御簾が引き上げられ、緋毛氈を敷き詰めた雛段が現われた。
縁側に長々と連ねた段には、信長が安土から持参した三十八種の茶道具が並べてあった。
九十九茄子、円座肩衝、紹鷗白天目、堆朱龍の台、牧谿筆ぬれ鳥、千鳥の香炉、蕪なしの花入など、いずれも富と力にあかして集めた名品である。

しかもどの品にも由緒があり、茶道をたしなむ数奇者たちの垂涎の的となっていた。
「遠慮は無用じゃ。間近に寄って手に取ってみるがよい」
信長の許しが出たが、公家たちは誰一人立とうとはしなかった。
五摂家筆頭の前久が動かなければ、小指の先さえ持ち上げることはできない。公家の身分制とはそれほど厳しいのである。
前久はそれを誇示するごとくしばしの間をおき、袖を払って立ち上がった。
信基、九条兼孝、一条内基、二条昭実の順にそれにつづいた。
「近衛、いかがじゃ」
「いずれも結構な品々と拝見いたしました」
「ならばその方らにくれてやろう」
信長が思いもかけぬことを言い出した。
「今後茶の湯は朝廷において司るがよい。ただし心得ある者でなければ、まことの値打ちは分るまい。一人一品持ち帰ることを許すゆえ、それぞれ好みの品を記してお蘭に届けよ。同じ品に二人以上の希望があれば、くじによって決める」
これは公家たちの眼力を試すためばかりではない。何事も家格に従ってしか決められない公家社会の仕来りを、入札に等しいやり方で根底から突きくずそうとするもの

だった。

備中高松城は水に浮かぶ城と化していた。

低湿地に築かれた城を攻めあぐねた羽柴秀吉が、堤防を築いて足守川の水を引き入れる作戦に出たからである。

信長から備中攻略の命を受けた秀吉は、春の到来を待って姫路城を出発し、備前の石山城に入って宇喜多家の後見役である宇喜多忠家と対応を協議した。

これに対して毛利方は、備前と備中の国境に位置する足守川を防衛線とし、境目七城の守りを堅固にして秀吉軍を撃退しようとした。

北から宮路山城、冠山城、高松城、鴨庄城、日幡城、庭瀬城、松島城と川ぞいに連なる七つの城に一万余の兵を配し、相互に連携して備中を死守する構えを取ったのである。

中でも守りの要である高松城には、名将の誉れ高い清水宗治以下五千余の兵を入れていた。

この形勢を見た秀吉は、三万余の軍勢を二手に分け、右翼隊を宮路山城と冠山城へ、左翼隊を鴨庄城と日幡城に差し向けて攻略し、南北の備えをくずしてから高松城に攻

めかかった。

ところが高松城の守りは固かった。

周囲を大きな沼や泥田に囲まれ、大手口には八反堀と名付けた深い堀をうがっているので、大軍をもって攻めかかろうにも進撃する道がない。

先鋒を命じられた宇喜多忠家が八千の兵で力攻めに攻め寄せてみたが、沼や泥田に足を取られて人馬が立ち往生してしまう。

そこを城中からねらい撃たれたり、小舟に分乗した敵に急襲されるので、犠牲者が増えるばかりだった。

「これでは埒があき申さぬ。半年かけても落とすことなどできませぬ」

秀吉の軍師として名高い黒田官兵衛がいち早く困難を見抜き、水攻めにするよう進言した。

城のまわりの低湿地は、北と東を山に囲まれた三角形となっている。

この山の端と端を結んだ堤を築き、五月雨で増水した足守川の水を引き入れれば、城は水中に没するというのだ。

秀吉はさっそく周囲の地形を調査し、足守川が川底の高い天井川であることを確かめると、五月八日から築堤工事に取りかかった。

北西の足守川のせき止め場所から石井山の南麓にある蛙ヶ鼻まで、基底部の幅十三間、上端部の幅六間半、高さ四間ばかりの堤を延々と築いた。

全長およそ千七百三十間。

一間の堤を築くのに三千五百二十八俵の土俵を要したというから、全部で六百十万俵余を投じるという難工事だった。

短期間に土俵を集めるために、秀吉は一俵につき銭百文、米一升を支払うと周辺の村々に触れを出した。

これを聞いた村人たちが我も我もと土俵を運び、乱杭を打った場所に積み上げていったので、工事はわずか十二日間で終わった。

翌日、石を積んだ川船三十艘を沈めて足守川をせき止め、堤の内に水を引き入れた。

計画は見事に図に当たり、高松城は本丸の床上まで水につかった。

これでは食糧弾薬の供給どころか、将兵の寝る場所の確保さえままならない。

しかも秀吉は浅野長政に船や船頭を集めさせ、城に攻めかかる態勢を着々ととのえていった。

急を聞いた毛利軍が救援に駆けつけたのは五月二十一日のことである。

日差山に小早川隆景軍二万、庚申山に吉川元春軍一万、そして猿掛城に毛利輝元軍

一万と、毛利家の総力をあげて高松城を救おうとしたが、増水した足守川にはばまれて城に近づくことはできなかった。

秀吉は堤防の数カ所に放水口をもうけ、堤内に流入した水を川に戻して毛利軍が堤にさえ接近できないように工夫をこらしていた。

こうした万全の構えを取った上で、石井山の山頂に本陣を築いて高みの見物を決め込んでいた。

ところが、この戦の天才の胸中もおだやかではなかった。

摂津、播磨、美作の領有と引き換えに近衛前久の計略に従うと決めたものの、事が起こるまでは誰にも明かすことができなかった。

万一外にもれたなら、秀吉の信用はがた落ちになる。

光秀が信長を誅殺して足利幕府の再興を果たした後に、勅命には逆らいがたいので帰順するという体裁をととのえなければならなかった。

しかし、根が陽気で楽天的な秀吉にとって、人には言えない秘密を持ちつづけるのはひどく骨の折れることである。

たとえ勅命とはいえ、大恩ある信長を裏切っていいのかという迷いもある。

しかも十日ほど前から、ひどい足のかゆみに苦しんでいた。

秀吉の郷里では穴股腐れと呼ぶ。

梅雨の頃に泥田に入って仕事をすると、足の指の間に田虫が入ってやわらかい皮膚にもぐり込み、猛烈なかゆみを発する。

築堤工事の見回りに出て泥田に入ることが多かったために、こんな業病に取りつかれたのだった。

（かゆうてかんわ。たまらんがや）

宿所とした寺の本堂に座り込み、秀吉は左足の指の間に薬をすり込んでいた。

薬に詳しい官兵衛から分けてもらったものだが、まったく効果がない。かゆみはいっそうひどくなるばかりだった。

雨は相変わらず降りつづいている。

高松城を浮き城にし、毛利の大軍の足を止めた恵みの雨だが、そろそろやんでもらいたい。からりと晴れた空のもとで陽に当てたなら、このかゆみも治るはずだった。

秀吉は毛利からの使者を待っていた。

毛利家も前久の計略に加わっているのなら、必ず和議の使者を寄こすはずである。あと二、三日持ちこたえれば事が起こるのだから、交渉にかこつけて決戦を引き延ばし、清水宗治や城兵たちを助けようとするはずだ。

秀吉なら絶対にそうする。それがいまだに梨のつぶてなのは、前久にあざむかれたのかも知れなかった。

（陰でこそこそとうごめきくさる。穴股腐れのような奴らだぎゃ）

必要とあらば恥も外聞もなくへつらうが、秀吉は前久を評価も信頼もしていなかった。

待望の使者は午後になってやって来た。

「殿、官兵衛どのが毛利の陣僧を連れてまいられました」

近習の加藤虎之助が告げた。

「おお、ここに通せ」

秀吉は床に西国の絵図を広げ、床几に座して計略を案じているふりをした。

「筑前守どの、安国寺どのをご案内いたしましたぞ」

官兵衛が左足をひきずりながら入って来た。

有岡城の土牢に一年もの間幽閉されていたために、膝の関節が曲がったまま固まったのである。瘡病のために頭は瘡だらけになったが、それでも節を曲げなかった硬骨漢だった。

官兵衛の後ろに、傲然と頭を上げて安国寺恵瓊が従っている。こちらは三十二、三

歳ばかりの、いかにも才子然とした僧だった。
「安国寺どのは毛利家から和睦の使いを命じられ、それがしを頼ってまいられたのでござる」
「筑前じゃ。用向きを聞こう」
秀吉はちらりと恵瓊を見やっただけで絵図に目を落とした。
「こたびの高松城攻めのご計略、お見事と感服つかまつりました」
僧形でありながら、恵瓊は武士のような口をきいた。
「春秋時代の頃に、晋の知伯が晋陽城を水攻めにしたと『史記』に見えまするが、本朝においてはいまだその例を聞いたことがございませぬ。まことに古今無双、くらべる者なき大智略と拝察いたしました」
「あれは官兵衛の献策によるものじゃ。一軍の将たる者は、田舎の小城ひとつにこだわりはせぬ。常に天下国家をにらんで事をなすものじゃ」
「恐れ入りましてございます」
恵瓊はかしこまって頭を下げたが、何やら興ざめした様子だった。
「天下のため、かつは国家のため、清水備中守以下五千の将兵の命をお助けいただきたいと主輝元が申しておりまする。何とぞご慈悲をもってご寛恕いただきとう存じまする」
「条件は？」
「かくのごとくと申し付かっております」
一、備中、備後、美作、因幡、伯耆の五カ国を織田家に割譲すること。
一、高松城の全将兵を助命すること。
恵瓊が差し出した書き付けにはそう記されていた。
このうち美作、因幡はほぼ秀吉の軍門に下っているが、残りの三カ国は手つかずに近い状態だけに、異例とも言える好条件だった。
「一両日のうちに返答をすると、輝元どのに伝えよ」
事が起こるまでの方便だからこそ、このような条件を持ちかけたのかも知れぬ。秀吉は胸の算盤をひそかにはじいた。
「この和談、そちはどう見る」
恵瓊が引き下がるのを待って官兵衛にはかった。
「論外でござる」
「何ゆえじゃ」
「信長公は二日に将軍となられ、四日には三万の軍勢をひきいて都を発たれると聞い

ております。さすれば毛利など風前の灯。和議を結ぶ必要などございますまい」

ちょうど一月前、信長は堀久太郎を使者としてつかわし、毛利本隊が救援に来る前に高松城を落とせと厳命している。

これに反して和議の交渉などを始めたなら、信長が激怒することは火を見るよりも明らかだった。

「しかし、上様のご到着の前に毛利を屈服させたなら、この筑前の手柄となろう」

「五カ国を得たくらいで、信長公がご満足なされるとお思いですか」

「そうよなあ。さはさりながら」

和議を結ぶ本当の目的を話せないだけに、さすがの秀吉も言葉に詰まった。

それをあざ笑うかのように、穴股腐れが猛烈なかゆみを発し始めた。

まるで脳天に突き抜けるようなかゆみである。右足の親指でかいても届かないので、いっそう苛立ちがつのってきた。

「たとえ毛利家の存続をお許しになるとしても、与えられるのは周防、長門の二カ国くらいでございましょう。お許しになるはずのない和議にかかずらって城攻めを怠っては、手柄どころか首さえ危うくなりまするぞ」

官兵衛は弁舌さわやかに言い立てたが、秀吉の耳には届かなかった。あまりのかゆさに、頭を叩き割って脳みそをかきむしりたいほどだった。

「どうかなされましたか」

「穴股腐れがかゆいだぎゃ。だちかんわ」

秀吉は座り込み、足の指を開いて息を吹きかけた。

「そちの瘡頭もさぞかゆかったろうな。有岡城の土牢で一年余りもよう辛抱できたものじゃ」

「長い間に辛抱の仕方を身につけました。何かひとつの事を考え抜いていると、そちらに気がいってかゆみを忘れるものでございます」

「まことか」

「ただし迷いがあってはなりません。考えが四分五裂し、かゆみと苛立ちがつのるばかりでございます」

「そうじゃ。その通りだぎゃ」

秀吉はしばらくためらい、思いきって前久の計略に同意したことを打ち明けた。

いずれ毛利家と折衝する時に、官兵衛の知恵を借りなければならないのである。それなら早く話して、重荷の片棒を担いでもらいたかった。

「なるほど。それで安国寺どのは晋陽城の故事など持ち出されたのでござるな」

事の重大さに顔色を失うかと思いきや、官兵衛はそうつぶやいただけだった。

「何じゃ。その故事とは」

「晋の家老であった知伯は、他の三家老の所領を我が物にして晋王室を乗っ取ろうと企てたのでござる。韓、魏の二家は知伯を怖れてこれに従いまするが、趙家は晋陽城にこもって異をとなえ申した。知伯はこの城を水攻めにしたものの、趙の軍師張孟談は夜中ひそかに城を脱出して韓と魏を身方に引き入れ、知伯軍を攻めてこれを滅ぼしたのでござる。つまり知伯は信長公、趙家は毛利、そして主家を救った張孟談は自分であると、かの坊主は言いたかったのでござりましょう」

だとするなら恵瓊の言葉には韓や魏のように身方をしてくれるかという問いかけもあったのだろうが、そんな高度な謎かけに応じる教養など秀吉は持ち合わせてはいなかった。

「そちはどう思う。早まったかの」

「何ゆえかようなご決断をなされたかをうかがいませぬと、返答のしようがございませぬ」

「そうさな」

秀吉ははたと考え込んだ。

なぜ信長の謀殺を黙認する気になったのか、自分でもよく分らない。

風の甚助と名乗る伊賀者から前久の計略を聞いた時、ひどく気分が晴々とした。惚れた女子に夜這いをかけるようなときめきを覚えた。

それでつい承知する気になったのである。

いわば直感のなせる業で、熟慮の末に決めたことではなかった。

「つらつら考えてみるに、近頃の上様のなされようは道にはずれておる。将軍となって幕府を開かれるのは結構だが、武家の身で朝廷をないがしろにされるは不当であろう。このまま上様が天下に君臨なされたなら、寺社なく神仏なき国になるは明らかじゃ。それでは人々の心のうるおいも古き良き風習も失われてしまうではないか」

「何やらとってつけたような理屈でござるな」

官兵衛が鼻で笑った。

「そちもそう思うか」

「理を説くのはそれがしの役目でござる。殿には似合いませぬ」

「実はわしにもよう分らんでよ。じゃがこの話を聞いた時に、浮き立つような晴々とした気分になったんじゃ。あれほど御恩を受けながら、心の底では上様を憎んどったんじゃろうかのう」

「これまでのご恩には、充分すぎるほどの奉公によって報いておられます。信長公もそのことはよくご存知でございましょう」

「貸し借りはないということか」

「信長公と同じように、殿も天に選ばれたお方でございます。ためらいなく、意のままになされませ」

「そちは人を乗せるのがうみゃあでかんわ。じゃが意のままを言うなら、わしもそろそろ上様に仕えるのが嫌になったんじゃ。飽きたのかのう。疲れたんじゃろか。昔なら何ともなかった上様の言葉が、近頃はひどく腹立たしく感じるようになった。わしももう四十七だで、いつまでも猿呼ばわりされとうはにゃあよ」

「信長公の掌の中におさまりきれぬほど、殿の器が大きくなったのでございましょう」

「それに先の見込みもにゃあじゃにゃあか。筑前くんだりまでやられてこき使われるくらいなら、播磨、美作、摂津をもらって腰を落ち着けた方がいいと思ったんじゃ。こんな考えは間違うとるかのう」

「もし事が起こったなら、毛利はどのように動きましょうか」

官兵衛は兵法書を抱いてこの世に生まれてきたような鬼才である。この男を軍師にしたことが、秀吉の最大の幸運だった。

「足利義昭を奉じて上洛するに決まっとろうが。四万もの大軍を動かしたのは、その時に備えるためじゃ。高松城を助けるためじゃありゃせん」

「その時、殿はどうなされまするか」

「ひと戦して面目を立て、勅命に従って将軍方になるという体裁をつくろうしかあるみゃあて」

「この官兵衛、いささか見込み違いをしていたようでござる」

「さっきは意のままにしろと言うたではにゃあか」

「天下の謀をなされるのなら、信長公にとって代わるくらいの気概を持っておられるものと存じておりました。まさか毛利の軍門に下るおつもりとは……」

「たった三万の軍勢で何ができる。へたに動けば東と西からはさみ撃ちに合うだけじゃ」

「三万ではござらぬ。六万でござる」

「……」

「摂津には信孝公の軍勢三万がおりまする」

「そうか。そうだかや」

いち早くとって返して信孝軍と合流し、信長の仇討ちと称して光秀と戦えば勝算はある。問題は毛利の追撃をどうかわすかということだった。

「そのことなら、それがしにお任せ下され」

「策があるか」

「安国寺どのと毛利の本陣に出向き、韓、魏の故事にならうゆえに先陣をうけたまわりたいと申し入れまする。さすれば軍勢を返しても、しばらく時を稼ぐことができましょう」

「でかした、官兵衛。うまくいきゃあ天下が転がり込んでくるだでよ」

前久の計略を聞いた時に胸がときめいたのは、こうした展開になることを無意識のうちに予感していたからにちがいなかった。

「ただし、日向守どのとの戦が長引いたなら、朝廷を敵に回すことになります。そのお覚悟をなされませぬと」

「あんなきんかん頭に後れを取ったりするもんかい。三日でけりをつけてやるだぎゃ」

こっちは信長殺しに前久が関わった証拠をつかんでいるのだ。光秀を討ちさえすれば、朝廷など意のままにあやつってみせる。

秀吉は雀躍する思いで大返しの仕度にかかった。

足のかゆみは、いつの間にか忘れていた。

第十六章　見果てぬ夢

鞍の前輪に手をかけて馬に乗ろうとしたが、鐙がうまく踏めなかった。
足をかけようとすると、逃げるように先へそれる。ようやく踏んでも爪先が端にかかっているだけなので、くるりとひっくり返る。
長年戦に出ているが、こんなことは初めてだった。
（やはり平静ではいられぬらしい）
明智光秀はひそかな苦笑をもらした。
信長を討つ覚悟は愛宕山の連歌会で定めたはずである。
それ以来迷ったことなどなかったのに、いざ出陣となると緊張のあまり鐙ひとつまともに踏めなくなっていた。
二百にも足りぬ信長主従を一万三千の軍勢で攻めるのだから、これは合戦ではない。
光秀の心をこれほど強張らせているのは、信長を討つという事の重大さだった。

「皆の者、よう聞け」
光秀が騎乗するのを待って、斎藤利三が塩辛声を張り上げた。
「信長公は明日将軍宣下を受けられる。備中に向かう前に晴れの式に供奉し、明智の軍装を都人に見せよとおおせじゃ。構えて他勢に後れを取ってはならぬ」
亀山城の大手門前に勢揃いした軍勢が、ときの声を上げて利三の檄に応えた。
これが軍勢を都に向けるための方便だということは、右腕と頼む利三にさえ明かしていない。一万三千の将兵たちは、洛中での馬揃えにのぞんだ日のように華やかな軍装をまとい、誇らしげな顔をしていた。
六月一日申の刻、明智軍は合図の陣太鼓がとどろく中を粛々と都に向かった。
距離はおよそ六里半、老ノ坂峠を越えたあたりで休息を取り、明朝未明には都に着く予定だった。
どんよりと曇ったむし暑い日である。
夕方が近いというのに、涼しい風はいっこうに吹いてこなかった。
愛馬の栗毛をだく足で進めながら、光秀は酔ったような目まいを覚えていた。
何やら自分が自分でないようで頼りない。鞍の位置がいつもより三尺ばかりも高いようで、馬が地を踏む感触さえ伝わってこなかった。

（縄手の行衛ただちとはしれ）

光秀は愛宕山で詠んだ最後の句を胸の中でくり返した。

この国に生きる武士にとって、天皇のために戦うことほど名誉なことはない。多くの源氏の名将たちと同じように、自分にもその機会が与えられたのだ。

後醍醐天皇の命を受けた足利尊氏は、鎌倉方として出陣する途中にこの地で叛旗をひるがえし、都に攻め入って六波羅探題を滅ぼした。

信長を討って幕府を再興するための行動を、尊氏と同じように丹波から起こすことが、光秀にははるか昔から定められた宿命のように感じられた。

丹波平野は四方を山に囲まれている。

中央を流れる保津川は、保津峡の山あいをぬって洛西に至り、桂川と名を変える。

その川に沿って馬を進めながら、光秀はあたりの景色をながめていた。

遠くに連なる山々、ようやく実を結びかけた稲穂の海、行基の頃から作られてきた灌漑用の溜池や用水路……。

名残りを惜しむように見回していると、この土地の豊かさに改めて気付いた。

何もかもが初めて目にするように新鮮だった。

光秀出陣と聞いて、沿道には多くの領民たちが見送りに出ていた。

誰も大仰に土下座などはしていない。

光秀がそうした虚礼を嫌うことを知っているので、立ち尽くしたまま信頼しきった眩しげな目を向けていた。

光秀が領主となって以来、人々の暮らしは目に見えてよくなった。

年貢の負担が軽くなり、公事や裁きが公平になった。

戦のために不意に徴用されることもなく、用水路の整備が進んだお陰で水争いもなくなった。

それが光秀の手腕によるものだということを、領民たちは誰よりもよく知っている。

こうして出陣を見送り、自分たちで編んだ足半や馬草鞋を差し入れするのは、ひたすら帰国の無事を願ってのことだった。

（この者たちのためにも、もっといい国を築かねばならぬ）

新しく田畠を開き、道を整備し、麻や桑の栽培もさかんにしよう。子供たちを寺に集めて、読み書きくらいはできるように教育したいものだ。

光秀は新しい施策について次々と思い巡らした。

今よりもいっそう優れた治政を行なうことが、明日の企てが間違っていなかったと証明するただ一つの方法だった。

山陰道に出て念仏寺の脇を通り過ぎた時、ふいに酉の刻を告げる鐘が鳴った。
亀山城からここまでは半里ばかりしか離れてはいない。だが一万三千もの軍勢がそれぞれの組に分れて出発したので、一刻もの時間を要したのだ。
（もうそんな刻限か）
光秀はなぜかぎくりとし、こんなことでは夜明け前に都に着けないのではないかと思った。
都までは六里半の道のりなのだから、普通の時ならそんなことはないと一笑に付したはずである。
だが今日ばかりは夜間行軍のさまざまな不都合ばかりが思われて、じっとしていられないような焦燥に駆られた。
（何か大事なことを忘れているのではないか）
日頃は陣立てから行軍、戦場における采配まで、重臣たちに任せている。
重大な決断をする時には、必ず多くの意見に耳を傾けてきた。
だがこの企ては己れ一人で決め、重臣たちまであざむいて軍勢を動かした。
こんなことは初めてなので、計略に何か手落ちがあるような気がしてならなかった。
（何だろう。何を見落としたのか）

あるかないかも定かならぬ手落ちを、光秀は必死にさがし求めようとした。
一度きざした不安はまたたく間に枝葉を伸ばし、天をおおうほどにそびえ立って光秀をおびやかすので、そうせずにはいられなかった。
（上洛、将軍宣下、本能寺……）
思いつくまま脈絡もなく考えを追っているうちに、はたと思い当たることがあった。
信長は明日将軍宣下があると信じているのだから、内裏への往復には供揃えを盛大にしようとするはずである。
本能寺には二百足らずの近習しかいないとしても、妙覚寺にいる信忠軍千五百を未明に呼び寄せるのではないか。
あるいは信孝の四国征伐軍にも上洛を命じているかも知れない。
これに備中出陣を命じられた中川清秀や高山右近らが加わっていたとしたら、五万を超える大軍となるではないか。
光秀の思念は、まるでわざとのように絶望的な方向へと伸びていった。
（いったい、どうして……）
信長を討つことが赤子の手をひねるより簡単だと思い込んだのか。何を根拠に成功は疑いなしと断定してしまったのか。

すべては近衛前久から出たことである。だが公家というものがどれほど頼りにならないかは、都暮らしの長い光秀は熟知していた。

信長が言ったように、あの者たちは帝の権威を利用してこの国を支配してきたのだ。帝の命と称して人を動かし、自家の利益と既得権の確保を図ろうとする。

しかも我が身に危害が及んだ時には、帝を守るためと言い立てて身をかわし、すべてを闇に葬って口をぬぐっている。

木曾の冠者義仲も新田の小太郎義貞も、あの者たちに翻弄された挙句に討死にした。万一この計略に不都合が生じたなら、前久とて平然と自分を見捨てるだろう。

光秀は腹に力が入らないような絶望にとらわれ、何もかも投げ出して亀山城に引き返したくなった。

信長こそこの国の希望である。

帝や朝廷の呪縛から民の心を解き放つことのできる者は、信長をおいてほかにはいない。

それでも光秀には、このまま都に向かい信長に打ちかかる道しか残されてはいなかった。

心の奥底にひそむ何者かが、帝のために死ぬことこそが源氏に生まれた者の宿命だと語りかけるからである。

海行かば水漬く屍　山行かば草生す屍
大君の辺にこそ死なめ　顧みはせじ

大伴家持は『万葉集』の中でそう歌っているが、そうした覚悟や願望は光秀の中にも色濃く脈打っていた。

やがて野条を過ぎ、篠村八幡宮に着いた。

足利尊氏が勅命に従って兵を挙げると宣した場所だった。

八幡宮の境内で勢揃えをした後、光秀は斎藤利三や明智秀満ら股肱の重臣たちを神前に集めた。

「皆に申し渡すことがある」

懐から誠仁親王の令旨を取り出し、うやうやしく拝してから利三に手渡した。

目を通した利三は、無言のまま秀満に回す。六人の重臣たちが読み終わるまで、誰一人口を開こうとはしなかった。

「本日宮さまは践祚の儀を行なわれた。それゆえこの令旨は勅命も同じである。よって明朝義兵を起こし、朝敵信長を本能寺に誅する」

そう口にしてみると、光秀の心は急に鎮まった。

腹に声が入らないような頼りなさが失せて、五体に力がみなぎってきた。

「かつて尊氏公は、この神前において後醍醐天皇の命に従うことを明らかにされた。わしも今日同じことをなす。八幡大菩薩に代わって不義を討つのだ」

重臣たちは寂として声もない。

茫然と目を落とす者、哀しげな目で天井をあおぐ者。反応はさまざまだが、誰も決断に賛同していないことは明らかだった。

「信長公を討たれた後に、いかがなされますか」

娘婿の秀満がたずねた。

「備後におられる義昭公を都にお迎えし、幕府の再興を果たす。事が成り次第、義昭公は毛利軍四万をひきいて上洛なされる。これは細川藤孝どのや近衛太閤も承知しておられることだ」

「勅命とあらば是非もござるまい」

光秀の胸中を察した利三が、いち早く賛意を表した。

「されど信長公を討たれるのなら、殿が天下人となってこの国を導いていただきたい」

「わしにはそのような野望はない。幕府の再興を見届けたなら、身を引くつもりじゃ」

「ならばせめて事が成るまで、全軍には天下人になると下知して下され。時代の歯車を元に戻すというのでは、天下布武を夢見て戦ってきた将兵が納得いたしませぬ」

利三はいつになく強硬だった。

明智軍の強さは、装備の優秀さや光秀の采配の見事さだけによるものではない。将兵の一人一人が、信長の天下統一に出世の夢をかけて骨身を惜しまず働いているからこそなのである。

その方針を光秀が受け継がないことが明らかになれば、将兵たちが我先にと信長のもとに走ることは目に見えていた。

同じ頃――。

洛中の本能寺では、寂光寺の日海と鹿塩利賢の囲碁の対局が行なわれていた。

日海は後に本因坊算砂と名乗り、本因坊家の祖となった名人である。

信長も上洛した折には手ほどきを受けることがあり、今夜の酒宴の座興に対局を命じたのだった。

日海はこの年二十五歳。対する利賢はすでに初老の域にさしかかっている。

勝負は序盤から互角に推移していたが、日海の技量がはるかに上回っていることは明らかだった。

（こやつ、手を抜いておる）

そう感じた瞬間から信長は勝負に興味を失い、なまめいた物思いに沈んでいった。

昨日晴子が焚いた香の残り香が、胸元から立ちのぼってくる。

深く体にしみ込んだ香りが、汗にまじってしみ出していた。

信長は目立たぬように息を吸い、香りの中に心を遊ばせた。

久々に二人で過ごした濃密な時間が、胸を絞り上げるような切なさとともによみがえった。

何をしたわけでもない。ただ書院の中で向かい合い、晴子の焚く香を聞いていただけである。

だがそれはどんな刺激より心地よく信長を満たし、深い歓びと安らぎにいざなったのだった。

わざわざ秘蔵の香を持って駆けつけてくれた晴子の面影をしのびながら、信長はこの際いっそ立太子の件まで計らっておこうかと考えた。

五の宮を皇太子となし、安土城の本丸御殿に住まわせたなら、晴子も当然引き移って来るはずである。

そうなったなら、誰はばかることなく晴子と会うことができる。

そんな臆面もない考えに心を動かされるのも、香の魔力にとらわれたせいかも知れなかった。

ふいにどよめきが起こった。

烏帽子を並べて囲碁を観戦していた公家たちが、不思議そうに盤面をのぞき込んでいた。

信長の予想に反して、勝負は利賢優勢のうちに中盤を迎えていた。

このまま対局が進めば負けはさけられない状勢だが、日海は思いもよらぬ奇策で応酬していた。

三劫という。

劫とは互いに石を取ったり取られたりする形で向き合う状態をいうが、その形を盤上に三カ所も作っていた。

囲碁をたしなまれる方々なら、こうした場合には勝負がつかなくなることをご存知のはずである。

取ったり取られたりをくり返していてはいつまでも勝負がつかないので、取られた

者は一手別のところに打ってからでなければ劫にかかってはならないという規則がある。

だが三カ所に劫ができると、互いに連続して劫に打てるようになり、どちらかがゆずらなければ勝負がつかなくなる。

だがいずれの劫も死活に関わる肝所にあるので、優勢を占めている利賢もゆずれない。日海もゆずれば負けが確定するので、三つ巴のにらみ合いのまま延々と劫の打ち合いがつづいた。

はたしてこれは偶然だったのだろうか。

日海は負けるはずのない利賢にわざと優勢を取らせ、三劫という奇策によって引き分けに持ち込むことで、信長に明日の異変を知らせようとしたのではないか。

そんな想像に誘われるのは、日海と信長にまつわる不思議な伝承が、駿河国の芝川ぞいにある西山本門寺に残されているからである。

この寺の境内には、信長の首塚と伝えられる墳墓がある。

本能寺の変に遭遇した日海が、信長の首を原志摩守宗安という者に託し、この寺まで運ぶように命じたという。

後年日海はこの寺に本因坊と名付けた子院をいとなんで余生を過ごしているし、宗安の子である日順を西山本門寺の住職として寺を守らせている。

そしてこの日順上人が記した過去帳に、「摠見院信長、明智の為に誅さる」と記されているのだ。

この伝承が事実とするなら、日海が信長に並々ならぬ好意を寄せていたことは明らかである。

だが朝廷までが関わった陰謀を口頭で伝えることはできないので、三劫を作ることによって三者が均整を保つべきだと訴えたのではないだろうか。

三者とは朝廷と武家、そして民である。この三つが相互に支え合ってこそ無事に国が治まるのであり、どれが突出してもうまくはいかない。

もし信長がそれを悟り、朝権を超えようという企てを放棄するなら、九死に一生を得ることができるであろう。

日海はそう伝えようとしたと思えるのだが、信長には届かなかった。

「それではいつまでたっても埒があかぬ。持碁となせ」

持碁とは引き分けのことだ。

囲碁の世界で三劫を勝負なしとするのは、この一言に始まったのである。

二人を下がらせ、再び酒宴となった。

夕暮れも間近で、信長にも疲れが忍び寄っている。そろそろ皆を下がらせようと考えていると、森蘭丸が一通の書き付けを持参した。

さっき公家たちが紙に書いて所望した名物を、分りやすく書き出したものだった。

一見した信長は、失望のあまりものを言う気にさえなれなかった。

摂関家は上物を、清華家や名家は中物をと、まるで申し合わせたように家格に相応したものを望んでいる。

これでは名物をくれてやる意味がまったくなかった。

「その方らは、欲する物さえ自分では決められぬようだな」

憎さげに吐き捨てて、近衛前久に書き付けを渡した。

「分相応と申しまする。己れの立場をわきまえるのが礼の始めでございましょう」

「たわけが。そのような理屈がイスパニアやポルトガルに通用すると思うか」

信長はかっとして甲高い声を上げた。

笑いさざめいていた公家たちが、死人のように黙り込んだ。

「よいか近衛。家格や身分などというものは、その方らが朝家を中心として作り上げたまやかしじゃ。この国ではともかく、他国では意味をなさぬ」

「されど、我らには我らの仕来りがございます。それを守り抜くことにも、大きな意

味がございましょう」

「その仕来りとやらが、この国を愚劣で曖昧なものにしておるのじゃ。人は自由に生きてこそ天命にかなった生き方ができる。分相応などと言ってちぢこまっていては、何ひとつ新しいことなどできはせぬわ」

信長は腹立ちまぎれに席を立とうとしたが、この際言いたいだけのことを言っておこうと思い直した。

「明日将軍宣下を受けた後、五の宮さまの立太子の儀を執り行なう。やがて吉日を選び、安土に移徙していただくつもりじゃ」

「その旨、奏上申し上げまする」

「それからこの春立ち消えとなった作暦のことだが、西洋の暦学に照らしても、十二月に閏月を入れるのが妥当である。尾張暦に従ってそのように作暦せよ。来年からは、地上の時も余が司ることといたす」

「承知いたしました。すべておおせのごとく計らいまする」

前久は何ひとつ異をとなえようとしなかった。

信長は寝所に下がって弥助に背中をもませた。

長々と座っていたために、腰から背中にかけて板のようにこっている。弥助の長く

しなやかな指に心地よく身を任せながら、信長は茶器の名物を公家どもにくれてやると言ったことを後悔していた。

茶の湯は何人も差別しない。

茶室に入れば、貧富や権勢に関わりなく一個の人間として向き合うことを原則としている。

官位や家柄に縛られ分相応の品しか望めないような輩に、茶の湯を司ることができるはずがなかった。

「お蘭、これへ」

表に控えた蘭丸を呼び、名物の下げ渡しは中止すると告げた。

「茶の湯と朝廷は相容れぬものであることが分った。近衛に使いを出してそう伝えよ」

「名物はいかがいたしますか」

「安土に持ち帰る。奥の納戸にでもしまっておけ」

納戸には非常の際の避難口がある。あと数刻の後にはそこを目ざして走ることになろうとは、さすがの信長も想像さえしていなかった。

弥助は無言のまま指圧をつづけている。近頃では体のこり具合で信長の体調の変化が分るようになっていた。

「そちと会ったのは、確か……」

「昨年の二月でございました」

「あの折には心無いことをした。さぞ不快であったろうな」

弥助の黒い肌は墨を塗ったものではないかと疑い、上半身裸にして洗わせてみた。そんなことをしたことが急に恥ずかしくなった。

「いいえ、少しも不快ではありませんでした」

「遠慮せずともよい」

「本当です。信長さまはこの肌の色に驚かれたばかりで、私をさげすんでおられるのではないことが分りましたから」

「今頃そちの国はどうじゃ。さぞ暑かろうな」

「赤道を越えて南に行くと、季節が日本とは反対になります。今頃は秋の収穫の時期でございます」

「ヴァリニャーノはアメリカへ向かえと申したが、そちの考えはどうじゃ」

いつぞやと同じ問いを、信長は再びくり返した。

それほどヴァリニャーノの言葉が気になっていた。

「太平洋を渡るには、日本からでも一月以上かかります。帰りは倍以上を要するでしょう。その航海に耐えられる船と航海術があれば、アメリカは挑戦に値する土地だと思います」

「あの巡察師は、いまどこにおる」

「肥前の長崎と聞いております」

「文を書きたい。通辞をせよ」

自分を戒めるために背中を鞭打つというヴァリニャーノの姿を懐かしく思い出し、信長は今の気持を伝えておきたくなった。

弥助はイタリア語にも通じている。さっそく文机を運ばせ、竹で作った筆を出して筆記の仕度にかかった。

「急ぎ書をもって意を達せしめ候」

自分で文を書くつもりになって文語を口にしたが、弥助は普通に話してくれた方が通辞しやすいという。

「さようか。ならば」

信長は咳払いをひとつして、思いつくままを語った。

「昨年七月に別れて以来一年ちかくが過ぎたが、いかようにお過ごしであろうか。

余は五月二十九日に上洛し、洛中の本能寺に滞在中である。明日二日には内裏で将軍宣下を受け、四日には三万の軍勢をひきいて西国に向かう。

備中には羽柴秀吉の軍勢三万がいるし、倅信孝の軍勢三万も四国に攻め入る予定なので、一カ月のうちには西国の平定を終えて九州まで馬を進めることになるであろう。

その時に備えて迎えの仕度万端をととのえるよう、博多の商人島井宗室に命じてあるので、貴殿も是非博多までご足労いただきたい。

久々に会って旧交を温め、今後のことについても意見を聞かせてもらいたいと思っている。

余の一生は戦いの連続であった。

十八歳の時に父を失って以来、常に全軍の先頭に立って敵を蹴散らし、二十六歳で尾張一国の統一を成し遂げた。

この間には、実の弟をこの手で討つという辛い試練も乗り越えなければならなかった。

二十七歳の時に天下の副将軍と号した今川義元を桶狭間で討ち取り、三十五歳で足利義昭を奉じて上洛した。

足利幕府を再興することによって天下が治まるかと期待していたが、その後も次々

に謀叛を企てる者が現われ、もはや新しい治政を行なわなければこの国が立ち行かないことを思い知らされた。

では、この国はどうあるべきなのか。

そんな問題に直面していた頃に、畿内で布教していたルイス・フロイスに出会った。

フロイスから世界の状勢を聞き、西洋の優れた治政の在り方を教えられ、この国を変えなければならないという思いをいっそう強くした。

ところがこの国には変化を望まない輩がいる。

朝廷や寺社など、古い信仰によって支えられ、数々の特権を握りつづけてきた者たちである。

そうした者たちの支援を受けて、比叡山や高野山、石山本願寺などが、余の前に立ちはだかった。

そのことが天下統一をいっそう困難なものにしたが、およそ十年におよぶ戦いの末に、ようやく彼らを屈服させることに成功した。

昨年の七月に貴殿が安土を去られてからも、伊賀国を征服し、宿敵武田を攻め滅ぼし、三カ国もの所領を毛利から奪い取った。

もはや天下に敵する者はなく、将軍となって幕府を開く日も間近である。

長年の懸案だった朝廷対策も、今日大きく前進した。

余が朝廷の上に立ち、公武両権を掌握してこの国の力を結集し、イスパニアやポルトガルのように海外に進出していく日も近いことだろう。

その折には貴殿からローマ教皇へよろしく取りなしていただきたい。

ここに至るまでには悩みも多かった。

なぜなら朝廷の上に立とうとすれば、日本人が長年信奉してきた神道を否定せざるをえないからだ。

神道なくしてこの国をひとつにまとめることができるかという問題は、まだ誰も克服したことのない我が国最大の課題である。

西洋の諸国がキリスト教という信仰によって束ねられてきたように、我が国も神道という曖昧模糊とした信仰を基礎として統一国家の形体を保ってきたが、これからは天下布武の時代である。

信仰ではなく一人一人のより良く生きようという意志が、この国を動かす原動力とならなければならない。

そのためにも、余は憲法というものを制定しようと考えている。

我が国にもかつて十七条の憲法や御成敗式目という国の基本方針を定めた憲法があ

った。

これをもっと緻密で効力あるものとし、何人にも明確で公平な原則とすれば、これまでのような曖昧さから脱却することができるだろう。

だがそれだけで充分だとは、余も考えてはいない」

信長はふと口をつぐんだ。

その先に何が必要なのか、しばし考えあぐねたからである。

三条坊門通りに面した二条御所も、夜の闇に包まれていた。

夕餉を終えた後に寝所に向かおうとした勧修寺晴子は、ふと思い立って香箱を取り出した。

昨日本能寺を訪ねた時に、

「今宵の礼じゃ。珍らしい品ゆえ聞いてみろ」

信長がそう言って香包を差し出した。

表に香木の名も記されていないので、いっそう気にかかる。それに今夜は気持が妖しく波立って、このまま床についても眠れそうになかった。

千鳥の蒔絵をあしらった十種香箱から香道具を取り出し、所定の位置に整然と並べ

た。

香道は後宮の女房のたしなみのひとつで、香を焚く動作や手順にも茶道と同じようにさまざまな作法と仕来りがあった。

まず火取香炉に炭火を入れて香席に運ぶ。

これは本来従者の仕事だが、房子に頼むのははばかられた。

昨日無断で本能寺を訪ねたと知った房子は、腹立ちのあまり口をきこうともしないからである。

晴子は火取香炉の火屋を取りはずし、火筋で炭火をはさんで聞香炉に移した。

次に炭火を灰の中に埋めて火窓を開け、香炉を右手でおおって火味を確かめる。

火が強過ぎると香木が焦げついて異臭が混じり、弱過ぎると香りが立ち上らないので、てのひらで火加減を覚えることが肝要だった。

火味がいつもより強いと感じた晴子は、炭火を灰で厚めにおおい、灰を火筋でかいて箸目をつけた。

てのひらの熱さが、昨日の本能寺での逢瀬を思い出させた。

香りは何よりも強く人の心の琴線をかき鳴らす。わずかな残り香さえ、夢のひと時を鮮やかによみがえらせる。

晴子が焚いたのは富士遊覧の時に用いたのと同じ香だったので、二人はあの日の思い出にたっぷりとひたり、肌を合わせるよりもさらに強い力で結び合わされていると感じていた。

香炉の灰の上に銀葉を置いた。

銀葉とは香木をのせるための雲母の板で、銀で覆輪しているのでこう呼ばれている。銀葉に指の脂や汚れがつくと香りが濁るので、銀葉挟みではさんで灰の上に置くのが作法だった。

香包から香木を取り出し、銀葉の上にのせた。

しばらくすると香木が熱され、ふくよかな香りがただよい始めた。

信長が言った通り珍らしい香木である。

伽羅のようだが、それにしては辛みがあまり感じられない。ふっくらとしたほのかな甘味が、鼻の奥から喉元へと広がっていく。

晴子は左手で香炉を取り、右手を添えて顔の近くまで運んでみた。右肘を張り目をつぶって大きく息を吸い込んでみる。

とたんに草深い森の情景が脳裡に浮かんだ。

高い木々におおわれ、生命の恵みに満ちあふれた森である。

天をおおって広がる枝の間から木もれ日が射し、小鳥が声を上げて飛び交い、柔らかく湿った地面は厚い苔におおわれている。

そうした情景から発する香りのすべてが、この香木には含まれていた。

大地をくぐって流れ出す水の甘さ、澄みきった森の空気のさわやかさ、苔の青くさいほろ苦さ、熟れきらない果実の酸味……。

伽羅は二味以上を含むといわれるが、この香りは五味以上を含み、しかも流麗な琴の音のように刻々と変化していった。

（もしや、これは）

正倉院に秘蔵されている蘭奢待ではないか。それ以外にこんな香りを発する香木があるとは思えなかった。

蘭奢待は正親町天皇が「聖代の余薫」と評されたほどの名木で、勅命によってしか切り取ることを許されていないが、信長は天正二年三月に朝廷に迫ってこの名香を手に入れた。

切り取ったのは幅一寸八分だというが、八年たった今も蘭奢待を秘蔵し、折に触れて楽しんでいたのだろう。

わずかな破片とはいえ、それを贈ったことには特別の意味があるはずである。

なぜなら信長は、天下一の名物を持つことは天下一の人物にしか許さないからだ。
蘭奢待を贈ることは、晴子を自分と同等と認めたと言うに等しかった。
（立太子のことも安土への移徙も、本気でやろうとしてはるんや）
朝廷にとってゆゆしき事態とは知りながら、晴子はそれでも構わないと思った。
蘭奢待の香りに体中を満たされながら、こうした計らいがすべて自分を安土へ呼び寄せるためだという考えに夢見心地でおぼれていった。
ふと我に返ると、香木が尽きかけていた。
細く裂いた木片が銀葉の上で炭と化していく。
晴子はあわてて房子を呼んだ。
この香りを聞かせたくて、昨日からのいさかいも忘れて声をかけた。
「はいはい。そんなに何度もお呼びにならなくとも、ちゃんと聞こえておりますよ」
不平まじりにつぶやきながら入って来た房子が、みみずくのように目を丸くした。
「あら、何とふくよかな」
目をつぶり、うっとりとしてつぶやいた。
「どうです。呼んであげてよかったでしょう」
「まるで娑羅双樹の花の下にいるようでございます。伽羅でしょうか、沈でしょう

か」
「誰にも話してはなりませんよ」
「まあ怖い。近頃の姫さまには話せないことが多くて困ります」
「これは正倉院の蘭奢待です。昨日信長さまにいただきました」
「まっ」
房子はあわてて鼻と口に手を当てた。
これ以上ひと息たりとも吸い込んだなら、天罰が当たってもだえ死ぬとでも思っているようだった。
「何をしているのです。せっかくの名香ですから、心静かに味わったらいいではありませんか」
「でも、そんな……。蘭奢待はお上のほかには聞くことを許されていないとうかがいましたので」
「聞いてしまったものは仕方がありますまい。ほら、もうすぐ尽きてしまいますよ」
晴子にうながされて房子が香炉をのぞき込んだ。
東大寺の正倉院に千数百年もの間秘蔵されていた香木が、芳香を放ちながら使命を終えていく。

二人はまるで秘めやかな悪事の共犯者のように、じっと見つめ合ったまま黙り込んでいた。

「何かお礼をしなければなりませんね」

先に口を開いたのは晴子だった。

すでに香木は炭と化し、銀葉の上に虫の死骸のように横たわっていた。

「信長さまは明日将軍宣下を受けられます。そのお祝いもかねて何か贈りたいのですが、いい知恵はありませんか」

「それはおよしなされませ」

「どうしてですか？」

「宮さまのご勘気をこうむることになりかねません。それでなくとも近頃はご不興をかうことが多いのですから、少しはお慎しみ下さらないと」

房子が急に世なれた侍女の顔になって諫めようとした。

「宮さまはどうなされていますか？」

「さあ、うかがっておりませんが」

「若草の君のところでしょう。それとも上臈の局のところかしら」

宮さまのご践祚の儀が行なわれたので、内侍司の女房たちも正式に職に任じられた。

主上の間近に仕える上臈の局には花山院満子が就任し、後宮第一の女官となったのである。

「上臈の局さまのところでございますが、内裏からお戻りになってからご気分がすぐれぬようでございます」

「ご不例ですか」

「いいえ。何やらご不快なご様子で、ひどく御酒を過ごしておられます。先ほどもきつく言いつのっておられるお声が、長廊下まで聞こえてまいりました」

（妙やわ）

今日のご践祚は信長の強要に屈して行なわれたものなので、ご不快なのはよく分る。だが明日は将軍宣下の庭にのぞむ大切なお役目が控えているのだ。

何事にも律義で厳格な宮さまが、それを承知で御酒を過ごされるとは尋常ではなかった。

晴子は何かに急かされるように立ち上がり、長廊下まで出て耳をすました。

確かに花山院満子の局では酒宴が行なわれている。

お酔いになった宮さまの甲高い笑い声が、中庭の向こうから聞こえてきた。

「誰か心利いたる者を実家につかわし、兄君さまにすぐに来ていただくように伝えな

さい」

「今からでございますか」

「そうです。早馬を立て、兄君さまにも馬で参じられるようにお願いして下さい」

日暮れてから急使を出すなど、公家の社会ではありえぬことである。

だが慣例を無視してでも確かめなければならないことがあった。

（明日の将軍宣下は、罠かも知れへん）

そんな不安に胸がざわめいている。焦燥のあまり居ても立ってもいられなくなった。

晴豊は半刻ほどして駆けつけた。本能寺から戻って、早々と床についていたという。

「明日の将軍宣下の仕度はととのっていますか」

晴子は兄の顔を見るなり、飛びかからんばかりにしてたずねた。

「いいえ。こたびのことは中山公が計らわれるので、我々は何もうかがってはおりません」

中山親綱は若草の君の兄で、宮さまがもっとも信頼しておられる側近だった。

「石清水八幡宮へのご使者はつかわされましたか」

「そのことについても、うかがってはおりません」

「房子、房子」

別室に控えた房子を声高に呼んだ。

「今日は中山公は伺候されましたか」

「はい。今も宮さまの宴席に連なっておられます」

「まあ、やはり……」

あまりのことに二の句がつげなかった。

朝儀は神事である。将軍宣下の前には八幡大菩薩のご神意をうかがい、新将軍任命の許しを得る。

今夜のうちにそのことを司るべき中山親綱がこんな所で酒を過ごしているとは、どう考えてもおかしかった。

「何か気がかりでもおありでしょうか」

武家伝奏の要職にありながら、晴豊は少しも異変を感じていなかった。

「何でもありません。急にお呼び立てして申し訳ありませんでした」

晴子は平静を装って晴豊を帰宅させた。

何もかも話して、胸にうず巻く不安をぬぐい去ってもらいたい。

何かの罠が仕掛けられているのなら、本能寺に走って信長に危険を知らせてもらいたかったが、何の証拠もないまま打ち明けることはできなかった。

もし信長を葬り去るような罠が仕掛けられているとすれば、背後で糸を引いているのは近衛前久に決まっている。

主上となられた宮さまも関わっておられるにちがいない。

つまりは朝廷の総意ということである。その方針に反して晴豊一人が信長方についたなら、陰湿きわまりない苛めを受けることは目に見えていた。

たとえ信長の窮地を救った功によって一代の間は立身したとしても、信長の死後、あるいは織田家の滅亡後に、勧修寺家に対して報復がなされる。

百年かかっても二百年かかってもきっちりと落とし前をつけるところが、公家社会や五摂家体制の怖ろしさなのである。

（どうしよう。どうしたらええんやろ）

晴子の焦燥をあざ笑うように、宮さまの宴席はにぎやかになっていく。

何かを論じる無遠慮な声や人を小馬鹿にしたような笑い声が、夜の静寂を貫いて晴子の耳に飛び込んできた。

腹立ちのあまり、晴子は後先のことも考えずに花山院満子の局を訪ねた。

床の間に宮さまがおつきになり、中山親綱や吉田兼和ら四人が相伴していた。

夜もふけているせいか、満子や侍女は別の間に下がっている。それを確かめると、

晴子はすっと気が軽くなった。

「ほう、これは珍客のご到来でございますな」

兼和が悪意のあるおどけ方をした。

宮さまは厳しい一瞥を投げられたばかりで、声をかけようともなさらなかった。

他の公家たちも鼻じらんだ顔で晴子を見つめただけだった。

「明日の将軍ご宣下について、おうかがいしたいことがあって推参いたしました」

晴子は宮さまの間近に荒々しく座った。

「ご宣下は何刻から行なわれるのでございましょうか」

「未の刻からでございます」

宮さまにうながされて兼和が答えた。

「ならば何ゆえ、このような夜ふけまで酒宴に興じておられるのでございましょうか」

「本日はご践祚の儀を終えられためでたき日でございます。それゆえ我ら側近の者が、ご無理を承知でお出ましいただいているのでございます」

「中山さま。ご宣下の儀はあなたが取り仕切っておられるとうかがいましたが、八幡宮へのご使者はおつかわしになったのでございますか」

「これは公事ゆえ、お方さまにお答えする必要はないと存じます」
親綱が余計な口出しをするなと言わんばかりの横着な物言いをした。
若草の君の兄なので、前々から晴子を快く思っていないのである。
「わたくしは主上や宮さまのお申し付けで何度も安土にまいりました。公事についておうかがいするのは当然ではありませんか」
「何をそう気をもんでいるのかね」
宮さまが苛立ちを抑えた低い声で口をはさまれた。
「そなたが望んでいた通り、私が践祚を終えた後に信長は将軍に任じられる。それでよいではないか」
「お言葉ではございますが、わたくしはそのようなことを望んだことは一度たりともございません。お申し付けの通りに、使いの役目を果たしたばかりでございます」
「お笑いぐさだ。私が何も気付いていないとでも思っているのかね」
宮さまが手をお払いになると、四人の側近がいっせいに席をはずした。
「昨年の春に安土に使いに行った時、そしてこの春に戦勝を賀すためにつかわされた時、そなたと信長の間に何があったかは承知しているのだ」
「後宮での女房衆の噂話が、宮さまのお耳にまで達したようでございますね」

「噂話なものか。近衛太閤から直に聞かされたのだよ。まるで耳に汚物でも詰め込むようにね」
宮さまのお話しぶりはおだやかである。だがその取りすましたような冷静さが、かえって晴子には酷く感じられた。
「そうですか。近衛公らしいやり方ですこと」
晴子に信長のもとへ行けとけしかけておきながら、一方では宮さまに不実を逐一報告して信長打倒に立ち上がらせたのだ。
憎い敵ながら恐れ入った凄腕だった。
「その口ぶりでは、すべて事実と認めるようだね」
「こうなることを承知で選んだ道ですから、今さら弁解はいたしませぬ。いかなる処罰も甘んじて受けるつもりでございます」
「たいそう信長にご執心のようだが」
宮さまが苦々しげに手元の大盃を飲み干された。
いくらお酔いになっても、晴子に裏切られたご気鬱は晴れないようだった。
「あの男の命も明朝までだ。東の空に陽が昇る頃には、火だるまになって西方浄土へ旅立っているだろうさ」

「まさか、そのようなことが……」
「信長を討てと、明智日向に勅命を下した。今頃一万三千の軍勢が、老ノ坂峠を越えて都へ向かっているはずだ」
晴子は弾かれたように立ち上がった。
「待ちなさい。この私の胸の内が、そなたには分らないのか」
「……」
「そなたを失いたくはない。何もかも承知の上でここに残るというのなら、無念を忍んで許そうと思っているのだ」
宮さまのお言葉に寸毫の偽りもないことは分っている。だが晴子はその誠意をふり切って信長のもとへ向かおうとした。
ところが外へ走り出ようとした途端、何かにつまずいて前のめりに倒れ伏した。
脇に隠れていた兼和が足をかけたのである。
「これもご下命ゆえ、いたし方がございませぬ。お許しなされて下されませ」
心にもないわびを言いながら、晴子を手早く縛り上げた。

二条御所の隣にある近衛邸は、耿々たる明かりに照らされていた。

中庭を隙間なく囲んでかがり火を焚くように、前久が命じたからである。
屋敷には家礼や門流から三百人ばかりの陣参衆を集め、薩摩の島津家を通じてイスパニア人から購入した最新式の長鉄砲を持たせていた。
鎧を撃ち抜く射程距離が、従来より一町ばかりも伸びたという優れもので、この鉄砲を三百挺もそろえているのは天下広しといえども前久の手勢だけだった。
陣参衆には菊のご紋章の入った真新しい鎧を着せ、錦の御旗をかかげさせていた。
かがり火を盛大に焚かせるのは、信長の送り火とするためである。
朝廷の軍隊であることが一目で分るようにしたのは、光秀が信長を討ち果たした後にいち早く明智軍に合流し、この企てが勅命によるものであることを天下に知らしめるためだった。
錦の鎧直垂を着込んだ前久は、座敷に座り込んで馬上筒の手入れをしていた。
今からこんな仰々しい格好をする必要はまったくない。だが今夜は気持が高ぶって眠れそうになかった。
（今頃信長は、高枕で寝入り込んでいるだろうて）
馬上筒の銃身を磨き上げ、引き金に指をかけて火挟みをかちりと落としてみた。
見事に均整のとれたほれぼれするような鉄砲である。これで信長にとどめを刺せな

いことだけが、ただひとつの心残りだった。

これほど心が浮き立つのは、信長の偉大さを知り尽くしているからである。

時には戦い、時には身方となって過ごしてきた二十三年という歳月の果てに、ついに勝利を手に入れたのだ。

その瞬間があと数刻で現実になると思うと、とても平常心ではいられなかった。

「これにて、お暇申し上げます」

ぎりぎりまで信長の動きをさぐりつづけてきた風の甚助が、庭先に平伏して別れを告げた。

「生きては帰らぬつもりのようだな」

「命永らえても甲斐なき身。あの男と刺し違えて妻子のもとへ行けるのなら、これに過ぐる歓びはございませぬ」

「もはや信長の命は手の内にある。刺し違えることはあるまい」

「いえ、されど」

「興福寺からの知らせでは、そちの子が十五人まで見つかったそうじゃ。なで斬りの惨禍の中を生き抜いた子供たちのためにも、生きる道を選んだらどうだ」

甚助ほどの手練れを失うのは忍びない。これからやり遂げてもらいたいことも多か

った。

「子らをお助けいただいたご恩は忘れませぬ。されど近衛さまに命を助けていただいた時から、信長と刺し違えることだけを願って生きてまいりました。それ以上のことを望む資格は、それがしにはございませぬ」

命がけで惚れ込んだお志乃を、甚助は助けてやることができなかった。それ以来、生きる資格はないと思い定めていたのである。

「ならばこれ以上止めはすまい。本能寺を改築した時、非常の際の抜け道を作ったという噂を聞いた。くれぐれも討ちもらすことのないようにな」

「何度か寺内に忍び入り、およそのことはつかんでおります。ご懸念には及びませぬ」

「そちが生きているとは、あの男も思ってはおるまい。最期の時にはしっかりと名乗ってやれ」

昨年十月に伊賀に出陣していた時、前久は信長の命を助けた。

松の木の上から信長に飛びかかろうとした甚助を、寸前に馬上筒で撃ち落としたのである。

その功を言い立てて甚助をもらい受け、洛中を引き回して手柄を披露した後に成敗

したと信長には伝えてある。

その甚助が生き延びて命を取りに来たと知ったなら、信長は瞬時に気付くはずである。

前久がすでにあの頃から信長を倒す日が来ると考えていたことを。今日まで前久の手の中で生かされていたにすぎないことを……。

その時の信長の悔しがりようを思うと、勝利の歓びに体がとろけそうだった。

甚助が去ったのと入れ違いに、吉田兼和が酒に酔った赤い顔をして訪ねて来た。

「御所での酒宴が思いのほか長引きましたゆえ、このような時刻となりました。お許しなされて下さりませ」

「首尾はどうじゃ」

「上々吉でございます。宮さまは快くお酔いになり、先ほどお休みになられました」

二条御所で晴子を取り押さえたいきさつを、兼和はひとしきり得意気に語った。

「あまりの身勝手をお怒りになったのか、宮さまはすべてをありのままにお話しになりました。するとお方さまは、本能寺へ急を知らせに行こうとなされるではありませんか。そこで身共が物陰に身をひそめ、検非違使よろしく取り押さえたのでございます。おかわいそうに。今頃お方さまは高手小手に縛り上げられ、奥座敷に押し込められ

れていることでございましょう」

「宮さまがそうせよとお命じになったのか」

「めっそうもない。宮さまはお方さまの不実を何もかもご承知の上で許そうとなされたのでございます。ところがお方さまが、ご制止をふり切って信長のもとへ駆けつけようとなされるものですから、やむをえざる仕儀となったのでござりますよ。恋は盲目とか申しますが、いやはや、女子の業というものは度しがたいものでございますなあ」

「何をそうにやついておるのだ」

「決してにやついてなどおりませぬ。ただ、身共に取り押さえられた時のお方さまの驚きぶりを思い出すと、へっへ、何だか小気味がよくて」

兼和が神官らしからぬ下卑た笑い方をした。

「そのような気持は胸の奥深くしまっておけ。このことは決して他言してはならぬ」

たとえ明日の企てが成功したとしても、お二人の仲を修復することは無理かも知れぬ。足利幕府の再興が成ったなら、五摂家の娘を宮さまの后として立后の制を復さねばなるまい。前久はそう思った。

この構想は計略の失敗と宮さまの急死のために立ち消えとなったが、四年後にちが

った形で実現することになる。

前久の娘前子が後陽成天皇に嫁し、後醍醐天皇の御代以来絶えていた立后の制がおよそ三百年ぶりに復活したのだった。

「わしは明日出家する」

兼和を相手に酒を飲みながら、前久はぽつりと打ち明けた。

「おやめ下されませ。ご家門さまが身を引かれては、暗夜に明かりを失ったも同然でございまする」

「わしもそろそろ知命の年となる。公の務めは、信長と共に終えるのがふさわしかろう」

それは偽らざる心境だった。

信長がいたから死力を尽くしてきたのである。好敵手がいなくなった後の治政になど、まったく興味がなかった。

「出家後には、いかがなされますか」

「東求堂にでもこもって余生を過ごすつもりじゃ」

銀閣寺はもともと近衛家の所領である。東求堂に隠棲することは、出家を決意した時から決めていた。

「余生といっても長うございましょう。ご家門さまが安閑とお過ごしになるとはとても思えませぬが」

「そうさな。出家をするからには、死んでいった者たちの菩提をとむらいたいものじゃ」

足利義輝や毛利元就、上杉謙信、武田信玄、朝倉義景、浅井長政、快川国師、そして織田信長……。

十九歳で関白に就任してから三十年ちかくの間に関わってきた者たちは多い。そのほとんどが戦乱のうずに巻き込まれて非業の死をとげていた。

「それならば一代記をお書きになったらいかがでございましょうか」

「くだらぬ」

「ご家門さまに書き留めていただけば、亡くなられた方々にとって何よりの供養になりましょう。それにこの時代の記録としても得がたいものになることは間違いございませぬ」

「我らの役目は陰に日向に朝家をお守りすることじゃ。帝の弥栄を保つための土塊となればよい。我が身の功名を後の世に誇るようなことをしてはならぬ」

厳しくいましめながらも、前久はまんざらでもない気分だった。

一代記をものするなら、書き残しておきたいことは山ほどある。
若い頃には越後に下向し、長尾景虎と共に北条氏と戦った。
景虎が鶴岡八幡宮で関東管領である上杉氏を相続した時にも、関白として臨席して花をそえた。
正親町天皇のご即位の礼の費用を献上させるためにひそかに安芸に下り、毛利元就と膝詰めで交渉した。
足利義輝と公武一体となった復興を図り、義輝が討たれた後には義昭を擁立するために奔走した。
織田信長と熾烈な戦いをくり返し、利あらずとみて和解した。
それ以後は信長の盟友として働き、天下統一と朝廷の復興に少なからず寄与してきた。
だが二人の考え方のちがいは埋めがたく、ついにこのような仕儀に立ち至ったのである。
「ただ今、近衛内府さまがまいられました」
前久の物思いは、信基の着到を告げる高い声にさえぎられた。
「一人か？」

信基がどうしてこんな時刻にやって来たのか解せなかった。
「勧修寺さまとご一緒でございます」
「はっはあ。読めましたぞ」
兼和がぱちりと膝を打った。
先ほど晴豊は晴子に呼ばれて二条御所を訪ねている。その時将軍宣下に不審があると聞かされ、信基のもとに相談に行ったにちがいないという。
「さようか。あちらもこちらも難儀なことじゃ」
前久はすぐに二人を通して対面した。
「このものものしさは何事でございますか」
よほど急いで来たのか、信基の息は荒かった。晴豊の顔にも不審がありありと現われている。
こんなに不用意に胸の内を悟られるようでは、公家としてはまだまだだった。
「明日の将軍宣下に供奉しようと思ってな。陣参衆に参集を命じたのじゃ」
「それにしても、夜通しかがり火を焚かれるとは尋常ではありませぬ。それに三百挺もの長鉄砲をご用意なされたというではありませんか」
「我らの手勢は少ない。長鉄砲くらい持っておらねば、人目を引くことはできぬでは

ないか。夜通しかがり火を焚くのも、織田家の家臣には劣らぬという心意気を示すためじゃ。少し早いが、ついでに水無月祓いも行なっておる」

水無月祓いは半年間の罪や汚れを祓うために六月晦日に行なわれる神事で、夏越の祓いとも呼ばれている。

夏越という言葉は神慮をやわらげるという意味の和しにも通じているので、荒らぶる信長を送るには格好の神事だった。

「それにしては茅萱の用意をなされていないようですね」

「中庭のかがり火を見たであろう。あのように火の輪を作り、茅萱の輪の代わりとしたのじゃ。帰りには心してくぐっていけ」

「石清水八幡宮へは、誰をつかわされたのでしょうか」

「広橋と徳大寺をつかわしておる。夜明けまでには戻るはずじゃ」

それは嘘ではなかった。こういう疑いを持たれないように、前久は二人を男山につかわしていたのである。

追及の材料を失った信基は、当惑して晴豊と顔を見合わせた。

「何か気がかりでもあるようだな」

「い、いえ。下屋敷がただならぬ様子とうかがいましたので」

「それは大儀であった。せっかく来たのじゃ。酒でもくんでいけ」

前久は上機嫌で二人に酒を勧めた。

「このたびのお計らいについては、父君にお礼を申し上げなければなりません」

数献くみ交わした後、信基が改まって頭を下げた。

「五の宮さまのご即位や安土への移徒についてのご懸念もおありでしょうが、信長公に僭上の振る舞いなきよう、この私が命を賭してお諫め申し上げます。主上のご宸襟を悩まし申し上げるようなことは決していたしませぬ」

「ずいぶんと自信があるようだな。お駒を斬られた時には、死人のようになっておったが」

「私事と公事は異なりますが、あの出来事のお陰で私も鍛えられました。こだわりをぬぐい去ることはできませぬが、信長公のやろうとなされていることが正しいと信じていますので、私情を捨ててお仕え申し上げようと存じます」

「信長の何を正しいと信じているのだ」

信長に仕えるという言い方が気になったが、前久はとがめようとはしなかった。

「天下布武でございます。朝廷や寺社が治政に口をさしはさむことなく、信長公の差配にゆだねるべきでございましょう。さすればこの国の力をひとつにし、イスパニア

やポルトガルと肩を並べることもできると存じます」

「うむ。わしもそう思う」

「西国の平定を終えたなら、信長公は明智日向と羽柴筑前を九州に配し、南蛮進出に備えさせるお考えでございます」

年若い信基は、天下統一後の信長の治政や海外への進出について熱っぽく語った。

前久はさも同意しているような相槌を打ち、信基を有頂天にさせた。

このことが父子の間の亀裂を修復しがたいものにした。

翌日本能寺の変が起こり、丸ごとあざむかれていたことを知った信基は、終生前久を許そうとはしなかったのである。

快く酔った信基らを帰らせた後で、前久は信長が克服しようとした課題について、何の解答も用意していなかったことに思い当たった。

この国を一元的に支配し、力を結集して諸外国と競い合うにはどうすればよいか？

もしそんな必要に迫られる時が来るとすれば、武家ではなく朝廷が中心とならなければならない。古代の律令制を復活させて帝を中心とした国を築くことこそ、考えうる最良の道である。

いつの日かそれが実現したなら、耐えがたきを耐えて朝家の尊厳を守りつづけてきた者たちの努力が、正しく評価されるにちがいないと思った。

老ノ坂峠を越えると、道は急な下り坂になる。

山陰道は幅四尺ばかりで、人馬は一列になってしか進めない。明智勢一万三千は蟻の行列のように長々と連なって闇の中を進んだ。

いまにもひと雨来そうな雲行きで、月も星も隠れている。

沿路の者に見とがめられないように松明もわずかしかかかげていないので、将兵たちは前の者の背中につかまるようにして進んでいった。

風が強い。木々の梢をざわめかせて吹き過ぎていく風に、鎧の金具がすれ合う音も馬のひづめの音もかき消されていた。

前のめりになりそうな体を膝で支えながら、明智光秀は愛馬の栗毛を進めた。もはや迷いはない。信長、信忠父子を討ち取ることだけに意識を集中していた。

子の刻も過ぎた頃、沓掛に着いた。

ここで道は二つに分れている。東へ上れば都、南へ下れば山崎である。

信長の命に従っていたなら、ここから山崎に出て、山陽道を備中へ向かうところだった。

沓掛には小さな宿場があり、五、六軒の家がある。
光秀は宿場に着くなり住人をことごとく捕えて家の中に押し込め、全軍に小休止を命じた。
将兵に腰兵糧を使わせ、馬には水と飼葉を与えた。
馬草鞋もすべて新しく取り換えさせた。急な下り坂でひづめを痛める恐れがあるし、少しは足音を抑える効果もあるからである。
光秀も重臣たちと共に干飯を食べた。
長行軍に腹がへっているので、いつになくうまい。飯の味が分るようなら大丈夫だと安心したが、ふいに強い吐き気が突き上げてきた。
光秀はきつく口を閉ざしてもちこたえ、異変を気付かれぬように水とともに飲み下した。
「申し上げます」
急ごしらえの本陣に物見の者が飛び込んで来た。
信長は百五十人ばかりの家臣と本能寺に宿泊中。妙覚寺の信忠勢も五百人ほどしかいないという。
洛中には木戸があり、夜間の軍勢の移動は禁じられている。

少なくとも夜明けまでは、住吉にいる四国征伐軍や備中出陣を命じられた者たちが本能寺に駆けつける気づかいはなかった。
「殿、桂川まで先発隊をつかわしましょう」
斎藤利三が干飯を頬張りながら声をかけた。
「安田国継がよろしいかと存じます。これへ呼びましょうか」
「それには及ばぬ」
「不審な者がいたなら斬り捨てさせねばなりますまい。出陣の目的を明かしておいた方がよろしいかと存じますが」
将兵たちはまだ、信長の将軍宣下に供奉するために都に向かうと信じている。だが戦仕度をさせるためには、どこかで本当のことを告げなければならなかった。
「まだ伏せておけ。不審を抱く者があれば、上様の命で徳川どのを討つとでも伝えればよい」
信長を討つと知ったなら、将兵たちは我先にと信長のもとに駆けつけるのではないか。そんな不安が光秀をひときわ慎重にさせていた。
「そちと秀満が手勢をひきいて先陣を務めよ。先に桂川のほとりに布陣し、本隊の到着を待て」

もっとも信頼できる利三と秀満の軍勢を先にし、脱走しようとする者を監視させることにした。

「洛中への先陣も、我らにお申し付け下され」

「手勢を二手に分け、そちは本能寺へ、秀満は妙覚寺へ向かえ。光慶」

「ははっ」

沓掛に着いて出陣の本当の目的を聞かされた光慶は、夜目にも分るほど青ざめていた。

「そちも一千余の手勢をひきいて先陣の供をし、内裏を警固せよ。まわりを隙間なく囲み、何人たりとも通してはならぬ」

本能寺の包囲を終える前に異変に気付かれたなら、信長は内裏に飛び込んで主上を人質にするかも知れない。それだけは絶対に阻止しなければ、手も足も出せなくなる恐れがあった。

誠仁親王もご践祚の後には内裏におられると、光秀は思い込んでいた。

そのために二条御所の警固には頭が回らなかったが、この手落ちのために後に大きな問題に直面することになる。

妙覚寺の信忠が二条御所に飛び込み、宮さまを人質に取ったからである。

これを命賭けでお救い申し上げたのは、勧修寺晴豊と京都所司代の村井貞勝だった。

「ただ今、御所さまからのご使者がまいられました」

備後の鞆にいる足利義昭には、三日前に挙兵を告げる使者を送っている。

義昭は光秀の壮挙を喜び、重臣の細川摂津守を返礼の使者としてつかわしたのだった。

「御所さまも吉報あり次第、毛利輝元どのを従えてご上洛なされます。すでに四国の長宗我部どの、紀州の惣国一揆の衆にも使者をつかわし、時を移さず上洛せよと命じておられます」

「備中の羽柴筑前の動きはいかがでございましょうか」

近衛前久が秀吉に計略を告げていることを、光秀は知らない。この失策が悔やんでも悔やみきれない結果を招く一因となったのである。

「安国寺恵瓊という者が高松城救援の交渉をしておりますが、都での変事を知れば筑前とて毛利の軍門に下らざるをえなくなるでしょう」

信長が討たれたと知れば、秀吉に身方している備前や備中の将兵たちはなだれを打って足利義昭のもとに参じるにちがいない。

いかに秀吉とはいえ、一万ばかりの手勢ではどうしようもなくなるというのである。

「これは御所さまからの引出物でございます」
錦の袋に包んだ脇差を三方にのせて差し出した。
足利家重代の名刀鬼切り丸である。源頼光が大江山の鬼を討った時に用いたと伝えられる刀だった。
「幕府再興の後には、副将軍に任じるとのおおせでございます。それゆえ土岐氏の本家を相続し、このように名乗れとの思し召しでございます」
土岐美濃守光秀。
摂津守がかかげた書状には、義昭の直筆でそう記されていた。
「かたじけない。御所さまによしなにお伝え下されませ」
信長がにべもなく断わった副将軍の座を、光秀は緊張に身もすくむ思いで拝命した。
六月二日の丑の刻、軍勢は桂川の西岸に到着した。この川を渡れば、本能寺まではひと足である。
光秀は全軍に、足半をはき鉄砲の火縄に火を点じるように命じた。
渡河に備えて馬草鞋もすべて取りはずさせた。
「皆の者、よう聞け」
斎藤利三が馬上でかがり火をふり上げ、大音声に合戦の始まりを告げた。

「敵は本能寺にある。織田信長を討ち、上様は今日よりして天下さまにお成りなされる。手柄はぶん取り次第じゃ。心して励むがよい」
利三の計略通り、天下を取ると聞いて将兵の士気はにわかに高まっていく。
光秀は鬼切り丸を握りしめ、川向こうの闇を見据えていた。

二条御所の奥座敷で、勧修寺晴子は縛られたまま横たわっていた。
生まれて初めて辱めを受けた衝撃が過ぎると、深い諦めが晴子の全身を包んでいた。
こうなることは分っていながら道ならぬ恋に身を任せたのだから、自業自得と諦めるしかなかった。
それにしても後ろに回した手首ばかりか足首まで縛るとは、何と無慈悲なやり方だろう。
もしや解けはせぬかと身をもがいても、縄は肌にくい込むばかりだった。
晴子はふと『伊勢物語』に記された二条の后のことを思った。
清和天皇の皇后だった二条の后は、若い頃に在原業平と恋に落ちた。
絶世の美男子といわれた業平に迫られた后は、こばみきれずに深い仲になったのである。

何度かの逢瀬を重ねるうちに醜聞は帝のお耳にまで達し、業平は流罪となり、后は縛られて蔵に押し込められた。

その時我が身をはかなんで次のような歌を詠む。

あまの刈る藻にすむ虫のわれからと
　音をこそ泣かめ世をば恨みじ

海人が刈る藻にすむ「われから」という虫、その名と同じようにこのことは我が身ゆえと思って泣きましょう。あの方との仲を恨みはいたしますまい。そんな思いを込めたものだ。

晴子はその歌を小さく口ずさんだが、涙さえこみ上げてはこない。

この世の掟と我が身の不徳に対する重くよどんだ諦めがあるばかりだった。

遠くで雷の音がした。

空耳かと思ったが、少しずつ勢いを増しながら北の空から近づいて来る。

本栖湖のほとりで一夜を過ごした時、雷神は余の下部だと信長は言った。そのことが頭にあるせいか、雷鳴は信長の声のような気がした。

老ノ坂峠を越えて迫り来る一万三千の明智軍の足音のようでもあった。

こうしてはいられない。何としてでも本能寺に駆け込み、危機が迫っていることを

信長に伝えなければ……。

晴子は焦燥に急き立てられて手足をもがいたが、縄はまるで後宮の掟や仕来りのように晴子をつかんで離さなかった。

今何刻だろう。

夜明けまでにはあとどれくらいあるのか、晴子は耳を澄ませてあたりの気配をさぐろうとした。

宿直の者は一刻ごとに御所の中を巡回する。その足音なりとも聞こえないかと思ったが、雷の音のほかには何も聞こえなかった。

早くしなければ手遅れになる。明智軍が都に入る前にと気ばかり焦るが、身動きひとつ思うにまかせなかった。

脱出する手がかりはないかと、部屋の中を見回した。

だだっ広い奥座敷には、床の間に行灯がひとつ置かれているばかりである。

あの炎で縄を焼き切れば何とかなる。行灯を押し倒せば、火が燃え広がるはずだ。

晴子は横に転がったり、尺取虫のようにはいずったりしながら行灯に近づいていった。

やっとの思いで床の間までたどり着き、両足で押し倒そうとしていると、

「姫さま、おやめ下されませ」

房子が血相を変えて駆け込んで来た。
「火事にでもなったらどうなされますか。縄を切る前に焼け死んでしまいますよ」
「ならばこの縄を解いて下さい。こうしてはいられないのです」
「本能寺に行ってはなりません。行かないと約束して下さるのなら、この縄を切って差し上げます」
「行きません。ご不浄に行きたいだけです」
晴子は嘘をつき、こらえかねているふりをして身をよじった。
「まあ、大変」
房子はあわてて懐刀を取り出し、手首の縄を切ろうとした。
だが手首にきつくくい込んでいるので、晴子を傷つけることを恐れて二の足を踏んだ。
「ほんとに、何とむごい仕打ちをなされるのでございましょうね。いくら姫さまに罪があるとはいえ、こんなに厳しく縛ることはないじゃありませんか。宮さまだっていくつもの局を渡り歩いておられるのにねえ。女子ばかりがこんな目にあわされるとは、間尺にあわない話でございますよ」
「おしゃべりなんかしないで、早く切りなさい。少しくらい傷ついても構いませんから」

「とんでもない。玉のようなお体に、傷なんかつけられるものですか」
房子がようやく縄を解いた。
晴子はひったくるように懐刀を奪い、足首を縛った縄をばっさりと断ち切った。
自由になるなり、表に駆け出そうとした。
「姫さま、ご不浄はあちらでございます」
「いいのです。信長さまに危険が迫っていると知らせに行くのですから」
「とんでもない。そのようなことをなされては、宮さまのお立場はどうなるとお思いですか」
房子が両手を広げて立ちはだかった。
「ならばこの場で、わたくしを刺し殺して下さい。信長さまを見殺しにしなければ生きられないのなら、死んだ方がましです」
「そのように怖い目をなされて。少し落ち着いて下されませ」
「さあ、お前の手でこの胸をひと思いに刺しなさい。それができないのなら、邪魔だてしてはなりません」
房子に懐刀を握らせ、切っ先を自分の乳房の下に当てたまま、晴子はぐいぐいと前

に出た。

房子は壁ぎわまで押し詰められ、ついに折れた。

「分りました。そこまでのお覚悟ならば、何も申しますまい。でも表門にも裏門にも警固の者がいて、とても通してはくれませんよ」

そう言われて初めて、晴子は今が真夜中であることに気付いた。

気が動転しているので、闇の中にいながらそのことさえ失念していた。

「裏門の方が警固が手薄です。私が何とかしますから」

房子が行灯を抱えて裏門側の勝手口まで案内した。

門の内側には番所があり、二カ所にかがり火が焚かれている。

門扉が厳重に閉ざされ、二人の青侍が警固に当たっていた。

「勝手口に履物がありますから、それをはいて身をひそめていて下さい」

「どうするのですか」

「厨に火を放ちます。騒ぎを聞いて番所の者たちが駆けつけた隙に、外に忍び出て下さい。これをおかぶりになって」

打掛けを脱いで差し出した。

晴子は手早くかぶって顔を隠し、勝手口の戸の陰に身をひそめた。

房子は迷いのない足取りで厨に入り、行灯の火を障子戸に移した。火はたちまち薄い紙を燃え上がらせ、大きな炎となって闇の中に立ち上がった。

「火事でございます。お助け下されませ。火を消して下されませ」

房子が助けを求めに番所に走った。

警固に立っていた二人と番所で休んでいた二人が、あわてて厨に駆け込んだ。

ここぞとばかりに、晴子は勝手口から飛び出した。

裏門に向かって一散に走ろうとしたが、きつく縛られていたせいか足が萎えている。五、六歩走っただけで、ばったりと突っ伏した。

厨にいた青侍がこれに気付いて取り押さえようとした。

それより早く房子が青侍を突き飛ばし、晴子を助け起こした。

「おつかまり下さい。大事ございませぬか」

「早く。早く外に」

晴子は房子の腕に支えられながらあえいだ。

門扉は閉まっている。その横のくぐり戸には閂が差してあるばかりで、それを抜くと簡単に開いた。

「この場は私が引き受けます。その間に少しでも遠くへ行って身を隠して下されま

せ」

房子が晴子を外に押し出し、内側からくぐり戸を閉ざした。

中では青侍と房子の押し問答がつづき、短い悲鳴が上がったが、晴子の耳には届かなかった。

外堀にかかる橋を渡って烏丸通りに出ると、南に向かってひたすら走った。

履物の花緒が切れていつの間にか裸足になっていたが、小石を踏む痛みさえ感じなかった。

背後に松明の火が現われ、もの凄い速さで迫って来る。晴子は左右を見渡し、低い柵をまたいで神社の境内に逃げ込んだ。

あたりは松林に黒くおおわれ、地面には夏草が生い茂っている。

荊のとげに足が傷つき、小袖の裾が裂けるのも構わず、晴子は奥に走り込んで松の陰に隠れた。

松明をかかげた四人が、血相を変えて目の前を走り過ぎていく。一人は抜き身の刀をつかんだままで、袴が血に赤黒く汚れていた。

（まあ、房子が）

くぐり戸を押さえようとして斬られたにちがいない。晴子は胸のつぶれるような思

いをしながらじっと息をひそめていた。

このまま通りに出てはいつ引き返して来るか分らないので、境内を横切り西洞院通りに出て、本能寺に向かうことにした。

やっとの思いで藪を抜けたが、すぐ間近に木戸があった。

本能寺はすぐそこだというのに、通りは柵で仕切られ、木戸はぴたりと閉ざしてある。

（ああ、神さま）

晴子は天を仰いだ。

低く垂れこめた雲を薄紫色に染めて稲妻が走り、雷鳴がとどろいた。その音を合図に、どっと雨が降り始めた。

折悪しく松林の切れ目で、雨やどりする木陰もない。晴子はまたたく間にずぶぬれになり、その場にぺたりと座り込んだ。

胸の火を一度にかき消されたようで、立ち上がる気力さえ失っていた。

（もうあかん、どうにもならへん）

悔しさに地を叩き、やる瀬なさに夏草を引きむしった。

からっぽになった頭の中に、なぜか『伊勢物語』の一節が何度も何度も浮かび上が

ってきた。

「ゆく先おほく、夜もふけにければ、鬼あるところともしらで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ……」

第六段「芥河」の一節である。

恋しい男と駆け落ちした二条の后は、男に背負われて芥河のほとりまで逃げのびる。ところが夜もふけ、雷鳴がとどろき、雨まで降り出したので、男は鬼の棲み処とも知らずに后を粗末な倉に休ませて一夜を過ごそうとする。

「あばらなる倉に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡籙を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり」

男は倉の戸口に立って后を守ろうとしたが、中に棲む鬼が后を一口に食べてしまったのである。

これは二条の后がまだ従姉妹の女御のもとに仕えていた頃の話で、駆け落ちしようとした后を彼女の兄である堀河の大臣藤原基経らが奪い返した。

「それをかく鬼とはいふなりけり」

鬼に喰われた物語となって今に伝わっていると作者は言う。

(いやや。聞きとうない)

晴子は両手で耳をふさぎ、激しく頭をふった。

二条の后と同じように、お前も鬼に喰われてしまうのだ。いかに泣き叫ぼうとも、内裏に連れ戻されていけにえのような暮らしを強いられるのだよ。

何者かがそう言ってあざ笑っている気がした。

雨はすぐに上がったが、雷鳴はいつまでも鳴りやまなかった。

北から南へと天駆ける音は、ひづめの音を響かせて迫って来る明智の大軍のようである。

(鬼に食べられるのはうちやない。あのお方や)

自分を自由にしようとした信長が、近衛前久に喰われてしまう。

そんな連想に体がカッと熱くなり、総身が粟立つような怒りに駆られて、晴子は再び立ち上がった。

通りの向こうで水音がした。

どしゃ降りの雨に水かさを増した溝が、音を立てて流れていた。

(そうや)

通りは柵に閉ざされているが、水までせき止められてはいない。溝の中をはって行ったなら、柵をくぐり抜けられるのではないか。

晴子は境内から飛び出し、柵の根元を確かめてみた。
案の定、溝の底までは柵が達していないので、人が通り抜けられるくらいの隙間があった。
晴子は足を踏み入れて深さをはかった。
膝がしらまでつかるほど深く、どぶのような臭いがするが、ためらいなどしなかった。
目も口もきつく閉ざして頭からもぐり込み、溝の底をはって柵をくぐり抜けた。
立ち上がると、ずぶぬれになった小袖が体にぴったりと張りついた。
背後で何やらざわめく音がする。
明智の軍勢が迫って来る気配がひしひしと伝わってくる。
晴子はなりふり構わず走り出した。
本能寺までの三町ばかりの道を全力で走り、表門の警固の兵に取りすがった。
「信長さまに、信長さまに会わせて下さいまし」
息が上がってそう言うのがやっとだった。
物の具に身を固めた番兵は、汚ない物をさけるように身をそらした。
ぬれねずみのみすぼらしい姿をして、狂女のように目を吊り上げているのだから無

理もなかった。
「わたくしは……、信長さまにゆかりある者でございます。決して、怪しい者ではございませぬ」
そう言っても、警固番の中には晴子を見知っている者などいない。気味悪げに後ずさり、困惑した顔を見合わせていた。
「ならば森蘭丸さまを呼んで下されませ。二条の后が訪ねて来たと、お伝え下されませ」
二条の后とは尋常ではない。番兵の一人が半信半疑で奥に走り、蘭丸を連れて戻って来た。
なじみ深い顔を見ると、安堵のあまり力が抜けて立っていられなくなった。
「お方さま」
蘭丸が駆け寄り、くずおれそうな晴子を支えた。
「どうなされました。このような時刻に、いったい何事でございますか」
「信長さまに、会わせて下さい。早く、早く」
喉が渇き、舌が思うように動かない。胸は早鐘を打ち、今にも破裂しそうだった。
蘭丸は晴子を寺の中に案内し、新しい小袖に着替えるように言った。

清潔好きの信長に、どぶ臭い衣服のまま会わせるわけにはいかないからである。
「そのような暇はありません」
今にも明智の大軍が攻め寄せて来ると言おうとしたが、どうしたわけか声が出ない。ただ唇ばかりが魚のように動くばかりだった。
「承知しました。では、ここでお待ち下されませ」
蘭丸は晴子を自分の詰所に案内し、信長の寝所に取り次ぎに行った。
晴子は板の間に立ち尽くしたまま待っていた。
焦燥に足ずりしながら、無限とも思える時間の長さに耐えていた。
「鬼あるところともしらで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ」
さっきの一節が、執拗に頭にこびりついている。
「信長を討てと、明智日向に勅命を下した」
宮さまのお声が、ふいに耳底によみがえった。
やがて信長が現われた。
行灯の明かりに照らされて立つ晴子を見ると、驚きのあまり足を止めた。
「晴子、どうした」
その声を聞くなり、晴子は信長の胸に飛び込んだ。

幼な子が父に救いを求めるように、胸にしがみついて泣き出した。
「折檻でも受けたか。それで逃げ出してきたのであろう」
縄で縛られた晴子の手首には、青いあざが残っている。小袖の裾は裂け、荊を踏み分けてきた足は傷だらけである。
信長が折檻を受けたと思うのも無理はなかった。
「鬼が、鬼が……」
晴子は陰謀を告げようとしたが、またしても声が出ない。表門を怖ろしげに見やり、目を見開いたまま気を失った。
「よほど怖ろしい目にあったようじゃ。このまま寝かせるわけにもゆくまい。湯に入れるゆえ仕度をせよ」
いつぞや桑実寺でしたように、信長は晴子を軽々と抱きかかえて湯屋へ向かった。
その頃、先発隊から本能寺の包囲を終えたという知らせを受けた明智光秀は、八千の本隊をひきいて桂川の渡河にかかっていた。

（完）

あとがきにかえて

ほぼ一年九カ月にわたる新聞連載と、単行本化のための手直しを終えて、正直ほっとしている。

本能寺の変を公武の相剋という視点から描きたいという構想は、『関ヶ原連判状』を書いた頃から持っていた。

天下布武を目ざす織田信長と、朝廷の尊厳を守り抜こうとする近衛前久の対立を通して、日本人にとって朝廷とは何かという問題を考えてみたかったからだ。

ところが近衛前久や公家社会についての研究書は少なく、史上に論じられることもあまりないので、どう描いてよいのかまったく見当がつかなかった。

これを克服するには前久を主人公として書いてみるしかないと決意し、『神々に告ぐ』という作品に取り組んだ。

時代は弘治三年（一五五七）から永禄二年（一五五九）までの三年間で、若き関白前久は正親町天皇の即位の礼を行なうために奔走する。

初めて上洛した信長や長尾景虎に出会うのも、足利義輝や細川藤孝と公武一体となった復興を果たそうとするのも、この頃のことである。

この作品を書き上げたことによって、前久や公家社会のあり方を実感としてとらえたという手応えを得たので、いよいよ『信長燃ゆ』に取りかかることにしたわけである。

執筆にあたって三つの点に留意した。

ひとつは物語の時間を、天正九年（一五八一）の年明けから本能寺の変までの一年半に絞ったことである。

信長を扱った長編小説は一代記として描かれることが多いが、時間の幅を短くして信長や前久の政治的な動きや内面性を克明に描きたかった。

もうひとつは「たわけの清麿」という報告者を設定し、彼の目からこの時代と人物たちをとらえたことである。

ルポルタージュと三人称小説を組み合わせたこの手法は、若い頃に親しんだドストエフスキーの作品から学び、ミハイル・バフチンなどの評論によって認識を深めたもので、いつかは時代小説において試してみたいと思っていた。

ところがよく考えてみれば、この方法は千年も前に紫式部が『源氏物語』において用いている。『平家物語』も『太平記』もそうである。

この作品をとても楽なフォームで書きつづけられたのは、自分もそうした物語の系

譜を受け継いでいるからなのだろう。

三つ目は、物語の横糸として信長と勧修寺晴子の恋を織り込んだことである。

日本の文化的伝統の原流のひとつである王朝物語は、恋と歌によって成り立っている。

こうした物語を念頭に置いて二人の恋を描くことで、日本人にとって朝廷とは何かという問題を、文化的な面からとらえることができるのではないかと思ったのである。

近年、本能寺の変の原因については、史学界でもホットな論争が交わされている。その最大の争点は、明智光秀の謀叛が単独で突発的なものだったのか、それとも共謀者がいる計画的なものであったのかという点である。

本書では後者を取り、近衛前久を中心とした足利幕府再興計画に光秀が巻き込まれたという展開にした。

物語なので参考文献をあげることは控えるが、橋本政宣氏、今谷明氏、小和田哲男氏、立花京子氏、津田勇氏、藤田達生氏など多くの方々の研究を参考にさせていただいた。

新聞連載中には、安土城本丸跡において信長と朝廷との相剋を決定づける発見がなされた。

信長が天正十年正月に家臣たちに披露した本丸御殿は、内裏の清涼殿とそっくりの造りだったというのである。

しかも驚いたことに、間取りは同じだが東西の配置が逆になっていた。東側にあるべき御帳の間（帝の御座所）が西側に配されていたのである。

本文中にも記したが、これは信長が住んでいる天主が西側にあったからとしか考えられない。このことが朝廷を乗り越えようとした信長の意志を、明確に証しているのではないだろうか。

連載中には多くの方々から、励ましのお便りや史料についてのご教示をいただいた。阿弥陀寺や西山本門寺、安土城考古博物館など、取材にご協力いただいたところも多い。

また日本経済新聞社の方々には、言葉には尽くせぬほどお世話になった。

時代小説の傑作を数多く生み出した紙面に連載させていただいたことは、身に余る光栄である。

各方面からのご恩に感謝しつつ、上梓の報告をさせていただく次第である。

平成十三年五月吉日

安部龍太郎

解説

小和田哲男

光秀謀反の真相をめぐって

最初に『信長燃ゆ』というタイトルを目にしたとき、「何てすごいタイトルをつけるんだろう」と思ったが、本能寺の変をいい表すのに、これほどぴったりなタイトルもないように思えてきた。

実際、イエズス会宣教師として来日し、信長とも交流のあったルイス・フロイスが、『日本史』の中で、「その声だけでなく、その名だけで万人を戦慄せしめた人間が、毛髪といわず骨といわず、灰燼に帰さざるものは一つもなくなり、彼のものとしては地上になんら残存しなかった」（松田毅一・川崎桃太訳）と述べているように、信長は本能寺で燃えつきてしまったのである。

さて、その本能寺の変であるが、明智光秀がなぜ謀反におよんだのかという大問題

が横たわっている。もし、光秀がこの先、何年か生きていれば、光秀自身の口から謀反に至った理由なり心情が吐露されていたかもしれない。しかし、周知のように、光秀は本能寺の変から十一日目の天正十年（一五八二）六月十三日、山崎の戦いで敗れ、敗走中に殺されてしまっており、光秀の心の内は永遠にのぞくことができなくなってしまった。

そのため、光秀死後から現在に至るまで、光秀謀反の謎を解こうと、何人もの作家・研究者らが挑み続けているのである。

従来は、怨恨説といわれるものが主流だった。一時はそれが定説となった観があった。要するに、光秀は、信長からいまの言葉でいう〝いじめ〟にあっており、その恨みが積もり積もって爆発した、それが本能寺の変だというものである。

ところが、〝いじめ〟に該当することがらが書かれた史料はすべて江戸時代に成立したもので、そのままに信用できないものばかりだという点が指摘されるようになり、今日では、作家はともかく、怨恨説を主張する研究者はほとんどいない。

それに対し、従来からも一つの説としていわれていたものであるが、天下取りの野望説、省略して野望説なるものが相対的に浮上してきたように思われる。「光秀にも天下に号令したいという野望があり、わずかの供を連れただけの信長の様子を知り、

好機到来と考え、実行に移した」というものである。

怨恨説にしても、野望説にしても、光秀の単独犯行という点では共通する。そうした単独犯行説に対し、「あれだけの大事件を光秀一人でおこすのは無理だ」との考えから、裏で糸を引いていた黒幕がいたのではないかとするのが黒幕説である。

そして、さらに、その黒幕についても、足利義昭黒幕説、堺商人黒幕説、朝廷黒幕説などがあり、近年は、本能寺の変直前の信長と朝廷の確執の分析から、朝廷黒幕説がクローズ・アップされるようになってきた。本書『信長燃ゆ』は、まさに、そうした朝廷黒幕説に立脚した作品である。

光秀と公家たちとの人脈

信長が足利義昭を擁して上洛した永禄十一年（一五六八）九月以降、少しの間、柴田勝家・佐久間信盛らが京都の政務を担当していたが、翌年四月から、丹羽長秀・明智光秀・中川重政・木下秀吉の四人に代わっている。正式な名称ではないものの、役職からすると京都奉行であり、特に、この時期、光秀が足利義昭の近習的立場だったことも手伝って、朝廷との交渉では中心的な役割を担っており、公家たちと会う機会

も多かった。そのため、光秀は公家たちとの間に人脈を広げていったものと思われる。

また、光秀が信長から近江の志賀郡だけでなく、丹波国も所領として与えられたことも、朝廷との関係を深める一因となっていた。

実は、丹波国には以前から禁裏領、すなわち皇室領荘園が多く存在していた。しかし、近隣の国人や土豪たちによる荘園侵略の動きがはげしく、そこから年貢が入ってこなくなるような事態が続いていたのである。

天正七年（一五七九）、そうした禁裏領の一つである丹波国山国荘（現在、京都府北桑田郡京北町）が、光秀のはからいで回復されることになり、その時、正親町天皇が光秀に恩賞として、馬、鎧と香袋を下賜している。このような場合、ふつうは、信長を介して下賜されるわけであるが、このときは、直接、正親町天皇からこれらの品が下賜されており、それだけ、光秀と朝廷が近い関係にあったことを物語っているといってよい。光秀と天皇および公家たちとの親密さは、信長の他の部将たちとの比ではなかったのである。

具体的に、光秀と特に親交が深かった公家は、本書にもしばしば登場する近衛前久、勧修寺晴豊、吉田兼和（『兼見卿記』の筆者兼見のこと）らであり、光秀は、ただ、信長の命令を彼らに伝えたり、勅使として遣わされてきたときに接待をしたりするだけの

関係ではなく、個人的にも仲がよかったものと思われる。

『信長燃ゆ』で、安部龍太郎氏は、勧修寺晴豊の妹晴子（はれこ）との私的な男女の関係にまで筆をおよぼしている。晴子は正親町天皇の第一皇子誠仁（さねひと）親王の夫人で、常識的に考えれば、信長との間がそのような関係になるなど考えられないところであるが、本書では、二人の秘密の関係が一本のタテ糸となっている。いまのわれわれが思っている以上に、信長および光秀ら織田軍団の上層部と公家たちは親密な関係だったのかもしれない。

しかし、光秀に関していえば、そうした親密な関係を物語る史料は、山崎の戦いで、光秀が羽柴秀吉に敗れ、政権が秀吉の手に移っていったあと、保身をはかる公家たちによって廃棄されたり、書き換えられたりしていたのである。

『兼見卿記』が、本能寺の変のあった天正十年（一五八二）の分について二冊あり、一冊には、光秀との交流のことがそのまま書かれており、もう一冊の書き直されたと思われる方には、光秀との関係が削除されている。これは、秀吉に、光秀との仲を疑われることを心配した吉田兼和（兼見）が、秀吉からの捜査の手が入る前に大いそぎで書き直したからであろう。

本来なら、光秀との親密さをうかがわせる記述があった本来の日記の方は廃棄されるはずだったのが、どうしたわけか残ってしまったわけで、歴史家の立場からすると、この二冊の対比ができたおかげで、光秀と公家たちとの親交が深かった状況をつかむことができたことになる。そうした、わずかな手がかりを突破口にして、安部氏は、光秀謀反の背景に、近衛前久・勧修寺晴豊らの〝見えない手〟のあったことを描き出してゆく。

信長の朝廷に対する〝無理難題〟

さて、本能寺の変朝廷黒幕説が成立するためには、信長が朝廷に対し、圧力をかけていたことが論証されなければならない。そうでなければ、公家たちが、光秀を使嗾（しそう）して信長を殺させる必然性がないからである。

圧力の一つは、正親町天皇に対して譲位を迫ったというものであるが、これは、論者によって意見が分かれている。

二つ目として、信長が征夷（せい）大将軍への任官を求めた点があげられている。しかし、これも論者によって意見は分かれ、征夷大将軍に補任することは、朝廷にとって圧力でも何でもなかったとする解釈もある。

同じように、京都御所の隣りで馬揃えをやったことも、圧力とみる人もいれば、むしろ、天皇がそれを希望したとみる人もいて、意見は割れている。

では、本能寺の変の前に、信長から朝廷に対して圧力をかけるということはなかったのだろうか。譲位、将軍任官、馬揃えの解釈などでは不一致があるものの、暦問題をめぐっては大方の意見が一致し、信長が朝廷に対し、〝無理難題〟をかけてきたととらえられている。

暦、すなわち、いまのカレンダーは全世界共通で、国ごと、あるいは地方ごとに異なる暦があることなど考えられない。しかし、昔はいわゆる「地方暦」が存在した。朝廷の京暦は「宣明暦」を使ったが、信長の本拠地だった尾張では尾張暦が使われており、たとえば、天正十年前後でみると、京暦では、天正十一年の正月のつぎに閏正月を入れる予定だったのに対し、尾張暦は天正十年十二月のつぎに閏十二月を入れるようになっており、わずかではあるがちがいがあった。

注目されるのは、天正十年二月になって、信長が尾張暦を使うように要求しはじめたことである。朝廷では、「全国の暦は京暦で統一する」という思いがあった。つまり、土地と人民とともに、時も天皇の支配の下に置かれるという論理である。単に、閏月をいつ入れるかの小さな問題ではなく、天皇大権を犯す動きとみた。

勧修寺晴豊がその日記である『日々記』に、「十二月閏の事申し出、閏有るべきの由申され候。いはれざる事なり。これ信長むりなる事とおのおの申す事なり」と書きつけており、公家たちは、「信長が無理難題をふっかけてきた」との思いを強くもったのではないかと思われる。

私自身は、困惑した公家たちの思いを忖度して、自分の意思で信長を討った、つまり、光秀単独犯行説で考えているが、本書を読まれた方の多くは朝廷黒幕説に傾いていくのではないかと思われる。それだけ説得力のある物語の展開と人物描写である。

本書では、一九九九年に、安土城の本丸跡から、京都の清涼殿とそっくりな建物が発掘調査によって姿をあらわしたことについても触れている。この事実が「安土行幸」を意味するのか「安土遷都」を意味するのか確定はしていないが、信長が朝廷に対して何らかの圧力をかけていたことは事実で、こうした最新の研究状況に立脚している点も注目されるところである。

（平成十六年八月、静岡大学教授）

この作品は平成十三年六月、日本経済新聞社より刊行された。

新潮文庫最新刊

佐伯泰英著　八州探訪　新・古着屋総兵衛　第十一巻
田畑が荒廃し無宿者が跋扈するという関八州は上州高崎に総兵衛一行が潜入する。賭場の怒声の中、短筒の銃口が総兵衛に向けられた。

百田尚樹著　フォルトゥナの瞳
「他人の死の運命」が視える力を手に入れた男は、愛する女性を守れるのか――。生死を賭けた衝撃のラストに涙する、愛と運命の物語。

畠中恵著　たぶんねこ
大店の跡取り息子たちと、仕事の稼ぎを競うことになった若だんなだが……。一太郎と妖たちの成長がまぶしいシリーズ第12弾。

筒井康隆著　聖痕
あまりの美貌ゆえ性器を切り取られた少年は救い主となれるか？　現代文学の巨匠が小説技術の粋を尽して描く数奇極まる「聖人伝」。

池澤夏樹著　双頭の船
その船は、定員不明の不思議の「方舟」、そして傷つき奪われた人たちの希望――。被災地再生への祈りを込めた、痛快な航海記。

柚木麻子著　私にふさわしいホテル
元アイドルと同時に受賞したばっかりに……。文学史上もっとも不遇な新人作家・加代子が、ついに逆襲を決意する！　実録(!?)文壇小説。

朱川湊人著　**なごり歌**

あの頃、巨大団地は未来と希望の象徴だった。誰にも言えない思いを抱えた住民たちに七つの奇蹟が――。懐かしさ溢れる連作短編集。

天野純希著　**戊辰繚乱**

会津藩士にして新撰組隊士・山浦鉄四郎。彼が愛した美しき薙刀の達人・中野竹子。激動の幕末を生き抜いた若者達に心滾る歴史長編。

清水義範著　**考えすぎた人**
―お笑い哲学者列伝―

ソクラテス、プラトンからニーチェ、サルトルまで。哲学史に燦然と輝く十二の巨星を笑いのめし、叡智の扉へと誘うユーモア小説。

遠田潤子著　**月桃夜**
日本ファンタジーノベル大賞受賞

奄美の海で隻眼の大鷲が語る、この世の終わりを待つ理由。それは甘美な狂おしさに満ちた、兄妹の禁じられた恋物語だった――。

喜多喜久著　**創薬探偵から祝福を**

「もし、あなたの大切な人が、私たちの作った新薬で救えるとしたら――」。男女ペアの創薬チームが、奇病や難病に化学で挑む！

青柳碧人著　**恋よりブタカン！**
～池谷美咲の演劇部日誌～

地区大会出場を決意した演劇部。ところが立て続けに起きる事件に舞台監督は大忙し！大会はどうなる!?　人気青春ミステリ第2弾。

新潮文庫最新刊

阿刀田高著　**源氏物語を知っていますか**

原稿用紙二千四百枚以上、古典の中の古典。あの超大河小説『源氏物語』が読まずにわかる！　国民必読の「知っていますか」シリーズ。

玉村豊男著　**隠居志願**

信州の豊かな自然の中で、「健全なる農夫」として生きる著者の人生の納め方とは――著者自筆の美しい植物画53点をカラーで収録。

宮崎哲弥／呉智英著　**知的唯仏論**
―マンガから知の最前線まで　――ブッダの思想を現代に問う―

仏教とは釈迦の説いた思想であり、即ち「唯仏論」である。日本仏教、オカルト批判、愛、死――縦横無尽に語り合う、本格仏教対談。

岩崎夏海著　**もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら**

世界で一番読まれた経営学書『マネジメント』。その教えを実践し、甲子園出場をめざす高校生の青春物語。永遠のベストセラー！

高山正之著　**歪曲報道**
―巨大メディアの「騙しの手口」―

事実の歪曲や捏造を繰り返す巨大メディアは、日本人を貶め、日本の崩壊を企む、獅子身中の虫である。報道の欺瞞を暴く驚愕の書。

清水真人著　**消費税　政と官との「十年戦争」**

消費税増税が幾度もの政変に晒されながら潰えなかったのはなぜか。歴史的改革の舞台裏を綿密な取材で検証する緊迫のドキュメント。

信長燃ゆ（下）

新潮文庫　あ－35－7

平成十六年十月一日　発行
平成二十七年十二月十五日　五　刷

著者　安部龍太郎
発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六―五四四〇
読者係（〇三）三二六六―五一一一
http://www.shinchosha.co.jp

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Ryûtarô Abe　2001　Printed in Japan

ISBN978-4-10-130517-2　C0193